
仮面ライダーW / Eの復活 / 二人のA

マヒロ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

仮面ライダーW/Eの復活ノ二人のA

【Nコード】

N1049V

【作者名】

マヒロ

【あらすじ】

エコの街風都

一年経過したが街はいまだにガイアメモリ犯罪が発生していた。

そんな中、ある雨の日に「風森颯」と名乗る少年が現れる

怪人に鞆を引ったくられたと言う依頼を引っ提げた颯の為
事件を追うのだったが……。

この物語は一章が少し長いです。PCで閲覧するととても疲れます。
そのため、携帯で閲覧することをお勧めします。

お読みになる前に（前書き）

この小説を読むにあたる簡単なご説明です。

お読みになる前に

この作品は

- ・最終回後の設定。
- ・園咲文音が生存している。
- ・映画の設定は《Atoz》までを適応しCOREの設定は適応していません。

(ただし、園咲文音と鳴海荘吉の幼なじみ設定は使用していません。)
というような感じですよ。

・Vシネマに登場したアクセルブースターについては登場未定ですが登場する場合、翔太郎達の前で変身したことがある
という設定にいたします

4

また、オリジナルキャラクターやオリジナルガジェット、フォーム
が出ますが解説は話の後に
データファイルとして載せるため、此处では説明しません。

お読みになる前に（後書き）

未熟な腕ではありますが頑張りたいと思うのでよろしく願います
感想やレビューなどをいただけたら嬉しいです
では、お楽しみください。

登場人物（10/4UP）（前書き）

登場人物。

登場人物（10/4UP）

かぜもり ゆうき
風森勇樹

年齢18

誕生日 7月14日

イメージキャラクターボイス：下野紘（バカとテストと召喚獣：吉井明久 / SKET DANCE：椿佐介）

身長体重：172？ / 63？

髪型：黒のマッシュレイヤー短髪。

一人称：俺

服装：普段着は白いパーカージャケットにジーンズにスニーカー
仕事時は黄色いレザージャケットレザーパーパンツ

職業：ガイアメモリ犯罪特別捜査官（又の名を超常犯罪特別捜査官）

約2011年より20年後の2031年の風都に住む少年で仮面ライダーである。

「警察公認仮面ライダー」となつてドーパントを倒す代わりに超常犯罪捜査課が残した過去資料の閲覧許可と生活費を貰っている。警察ではあるが、正規に雇用されたわけではないので拳銃の所持は認められていない。

盗聴器、発信器、警察手帳、手錠の使用は許可されている。

基本、ドーパント絡みでないと事件に関与できない。

裏を返せばドーパント絡みであれば来賓の護衛から銀行強盗までを取り扱う。

ひささどだいすけ
久里大祐

年齢 18

身長 176 体重は秘密

髪型：ウルフのツンツン（bleachの一護さんのな）所々の金メッシュ

誕生日：12月25日

職業：マジシャン

イメージキャラクターボイス： 吉野裕行 （ヤッターマンノヤッターマン1号）

勇樹の8年来の親友

親の都合で転校し関西に引っ越し、友達を作るために関西弁を練習し、

口調が関西弁になった。

だが、もともとは風都暮らしの為、イントネーションや言葉の選び方は

テレビドラマ程度の知識。

幼い頃から芸人になるのが夢であり

リリイ白銀に弟子入りし、現在

「ダニー白銀」と言う名をリリイから貰い活動を始めた

白銀一門の三代目

しのめせい
東雲晴香

年齢：19

身長：162？

髪型：甘栗色の肩までのミディアムショートの髪

誕生日：5月7日

イメージキャラクターボイス：松井菜桜子（名探偵コナン：鈴木園子）

かつて園咲家と並んだ有数の財閥、「東雲家」の長女。

園咲が滅んだ為、風都1の財閥となった。

父親、母親の愛情を込められて育てられてきたが、現在、婚約者の事でモメている。

社交のパーティーの護衛として勇樹を雇い、その関係は今でも続いている。

蒲原洋一かほらひろし

敵組織「EXE」の首領。

勇樹の仇となる人物。

メデューサの記憶を秘めたメモリを持つ

イメージキャラクターボイス：檀臣幸（井坂深紅郎）

城ノ内政人

年齢27

身長178?

容姿：黒髪の肩までの長髪

イメージキャラクターボイス：未定

EXEの幹部であり蒲原の補佐

売人を指揮する者

幹部の証としてゴールドメモリ「ミノタウロス」を持つ

Bの依頼／雨の中の訪問者

この日は朝から豪雨と強風が事務所の窓を叩く最悪の天気だった。

『うつひゃああ!?!』

ぼたりぼたりと雨漏りもしている事務所の近くでぴしゃりと雷が鳴る。

その音にビビり亜樹子は本日何度目かの悲鳴をあげた。
事務所は最悪な天気でも営業中である。

『オイ亜樹子、雨漏りしてんだからお前も手伝えよ』

雷に悲鳴をあげる亜樹子へ雨漏りの箇所にバケツを置きながら翔太郎が言う

『なによ！か弱い女の子が怖がってんだから慰めの1つでも掛けてくれたっていいじゃない!』

バケツを抱えている翔太郎に近づき指をつきつけながら頬を膨らませながら言う

『か弱い女の子は自分から言わねえよ。なあ、フィリップ』

なんですって！と亜樹子の怒りを買いせまられる翔太郎。
その横で本を開いていたフィリップは溜め息を吐いた。

『でも翔太郎、雷は人間のおへそを奪っていくと言うよ？』

さつき雷を閲覧したんだが、人間のへそを奪っていくらしいんだ。
亜樹ちゃんはそれを恐れているのかも知れない』

『はア？そんなの迷信に決まってるだろ？

アレは雷が高いところに落ちるから身を低くしろ。ってことを教えるための――』

『えっ！？鬼みたいなのがへそを取りに来るんじゃないのかい！？』

そう言つてのけるフィリップの表情は輝いていた。

そんなフィリップに翔太郎は呆れる

『鬼なんていねえだろ？ありや、迷信だ。』

『なんだ。そうだったのか。もう興味がうせた。』

興味が無くなったフィリップは窓を叩く大量の雨粒を見あげる

その瞬間、ぴかりと青い光が事務所の窓を包む。

『亜樹ちゃん。怖いならしゃがんだ方が良いよ』

『えっ。』

その光を見てはフィリップが言う

その数十秒後。馬鹿でかい雷の音が事務所の近くに鳴響いた。

『ぎゃああっ！！鼓膜が裂けるう！！』

フィリップの言葉通りしゃがみ込んだ亜樹子は耳に指を入れる
ビリビリと窓を振動させた雷は数秒後収まった

『すげえ雷だったな・・・俺ちよつと様子見てくるわ。』

翔太郎が様子を見るために玄関から出ようとドアを開ける。

するとそこに15〜18くらいで、短髪のマツシユカットで、幼さ
の残る童顔であり、背の高い爽やかそうな少年がずぶ濡れで立っ
ていた。

『うおわあああ！？』

いきなりの訪問者に翔太郎は驚き、悲鳴を上げる

『わわっ！お客さん！！』

ずぶ濡れの少年を見ては亜樹子が慌ててタオルを探す。

その声にわれを取り戻した翔太郎はコホリと咳払いをし

『つと、失礼…』

ようこそ鳴海探偵事務所へ。ご依頼ですか？』

と言った。

少年は亜樹子からタオルを渡され赤いソファへと通される。

赤いソファに座った少年は頭を拭く。
亜樹子が依頼受付書を取り出しながら向かいに座ると少年は口を開いた。

『こんな雨の日にすみません。』

『…いや、俺達は雨風なんて気にしない。困ってることがあるなら相談に乗るぜ』

『それで―どうしたの?』

『実は僕、さつきスリに遭ったんです。』

豪雨と共に現れた少年の名前は
風森颯と言った

この3月から風都に越してきたらしく、アパート暮らしだという

彼は今日、傘を差し家に帰る途中

怪人にカバンをひったくられたらしい。

追いかけてよとした直後、怪人は雷を落とし消えたという

『さつきのでかい雷はそいつの仕業って事か。』

『颯君、カバンには何が入っていたの?』

『家の鍵に免許証、それから学生証に財布。貴重品は全部持っていかれました』

『お願いです。僕のカバン取り戻してください』

ペコリと颯が頭を下げると翔太郎はその肩を叩いた。

『安心しな。この街は俺の庭だ。アンタの大事な鞆は俺が取り返す。』

まずは調査だな。何かその怪人についての特徴を教えてください』

『特徴、ですか。傘を被っていたのでよく見えませんでした。真っ白いドーパントでした。』

『白い？』

『雷は全身から放出してました。』

『全身から？』

『はい。こう足の先からパチパチなって最後は手に。』

颯の言葉を受けて雨が小降りになった頃、翔太郎は調査を始め、事務所を出て行った。

『雨で雷雲が発生していたから大きな雷になったのかも知れないね。ヤツにとって今日は絶好の狩り日和だったと言うことだ。』

一方のフィリップは亜樹子に断りガレージに行き検索を始める

『キーワードは「雷」「電流」「白」……ふむ。いまひとつ絞れないな。』

『本当に雷だけなのだろうか』

キーワードを入れていくが颯から得たものでは本は絞れないようだった。

（電撃や雷が能力と言う記憶は多く存在するみたいだ。片端から見えていくしかないのか？）

フィリップがドーパントを検索している頃、亜樹子は颯と話をして

いた。貴重品を盗まれた彼には今後の家の事を聞いておくべきだと判断したからであった。

『颯君のアパートに大家さんは居る？大家さんに鍵を貸して貰えば入れるけど』

『実は、大屋さん今旅行中らしくて2、3日空けてるんです。ホテルとかも、とは思ったんですけど……お金が』

『じゃあ……この事務所でもよかつたら泊まる？』

『あ、いや……そんな申し訳ないですよ』

と2人が会話していると、

『所長、フィリップにけんさ……調べ物をしてほしいことがあるんだが。』

と赤いジャケットの男が入ってきた。

『あつ！竜くん！！一体どうしたの？』

あ・・こちらは風都署で超常犯罪捜査課って言うところに所属している刑事さん』

竜の登場に席を離れ駆け寄った亜樹子だが、颯のほうを振り返りその説明をする

『この少年は？』

『風森颯君。18歳。今回の依頼人なの。土砂降りときに貴重品を怪人にひったくられたって駆け込んできて。』

『なるほど、丁度良いな。その件で此処にきたんだ。』

3日前から雷撃を放つドーパントにカバンや貴重品を盗られるという事件が多発している。

風森颯、と言ったな。そのときの事詳しく話してもらえるか？』

竜は警察手帳を出しながら颯から事情を聞く

『僕が話せることはこれぐらいです。』

『助かった。此方も全力をあげて捜査する。』

ところで、鍵を奪われているが家に入れるのか？』

『あー探偵事務所にお世話になろうかと』

『それならば警察の寮を一部屋手配しよう。』

『えっ、警察のほうで面倒見てくるの?』

竜の手配の良さに亜樹子が眩く、

一方の颯も探偵事務所では場所が狭いと感じたか快く受け入れた

『えっ、いいんですか?じゃあお言葉に甘えさせていただきます』

(部屋が少ない事務所だ。預かるとなればフィリップが思うように動けないだろう?)

と小声で竜が亜樹子に言うとき亜樹子は「なるほど」と眩いた。

竜が手続きをし、颯は早めにその寮へと向かう事となった。

颯が竜に寮へと案内してもらったため事務所を後にする。

時を見計らい様子を伺っていたフィリップがガレージから出てきた。

『どう?メモリ特定できた?』

ガレージから姿を見せたフィリップに亜樹子が問いかけると
フィリップは首を横に振った。

『「雷撃」「白」では上手く絞り込めなかった。』

『颯君の話だと体中からパチパチと発電し始めて最終的に手に集めたのよね・・・』

うーん・・・電気と言えばウナギとかナマズもあるんだけどなあ・・・

』

『ウナギやナマズは「白」を入れた瞬間に外れた』

『残ってるのはどれなの？』

『残っているのは――』

『フィリップ！キーワードの追加だ。』

頭を悩ませていたフィリップの下に翔太郎が帰ってきた。
何かキーワードを掴んでいるらしく場所をガレージへと移した。

『こいつはウオッチャマンの目撃情報なんだが』

『準備はいいか？』

と翔太郎が言うとフィリップが地球の本棚へと入る

「電撃」「白」と加えた状態でフィリップは翔太郎へ合図を送った

『どござ。』

『キーワードは「綿飴」』

『綿飴？不思議なキーワードだね。』

翔太郎がキーワードを告げていくと本棚が移動をはじめ

『ああ。ウオッチャマンが言うには

そいつは体に綿飴のようなフワフワした物がついていた

らしい。』

『それで次は？』

なるほど、告げフィリップは次を促す

『二つ目のキーワードは「静電気」』

静電気 Static Electricity

そう本棚の前にキーワードが表示されると本棚は激しく動き
本は2つに絞ることができた。

『本が二つに絞れた。「CLOUD」雲の記憶』

「SHEEP」羊の記憶「これが今回の事件の犯人のメモリだ。』

フィリップがホワイトボードに情報を書き込むと翔太郎が首をかし
げる

『羊と雲？雲は分かるがなんで羊がヒットしてんだ？』

『シープメモリは精神干渉型で眠りに誘う能力なんだが

体についている毛は電気を溜め、放出する事が出来る。静電気並の
電気でも溜めれば雷に匹敵する。』

『でもさあ・・・シープは眠りに誘うんでしょ？竜くんの話じ
ゃそう言う被害は出てなさそうだけど・・・』

『だから1つに絞れない。人が眠るといふ事件があればいいんだけ
れど・・・』

フィリップは口元に手を当て眉間に皺を寄せる

『じゃあ、方向転換だ。その二つを購入または所持している男を検索してくれ。』

『なるほど。分かったやってみよう。』

翔太郎の言葉を受け検索した結果、

シープメモリを所持している男が居ることが判明した。

『その男の名前は御田和義――』

ミタ カズヨシだ。』

『御田和義……』

『御田和義、元ミュージアムのガイアメモリ販売員さ。』

場所をガレージに移して御田の情報をホワイトボードに書き出していく

『ミュージアムの！？』

『ああ。御田は販売員の頃、販売するはずのメモリを1つ奪っている。』

それがシープだ。』

『で、何でそいつが窃盗なんて真似をしてんだ？』

『数日前、彼はお金に困り引ったくり行為を行った。そのかばんの中にたまたまガイアメモリが入っていたんだ。』

ミュージアムの売人ならその価値を知っているから』

『味が忘れられず繰り返し返した……って事か。』

『ひ、酷っ！颯君、完全にとばっちりじゃない！』

『よし、フィリップ、その御田っつー奴の隠れ家は分かるか？』

『御田の隠れ家は風都に4箇所存在する。』

彼が昔繋いだパイプだ。』

『4箇所か……こりゃ順繰り回ってくしかねえな。』

そいつの住所書き改めてくれ』

『わ、私、途中経過報告してくるよ。竜くんにもこのこと伝えないと』

こうしてそれぞれがそれぞれの調査へと歩き出した。

『えっ……もう情報掴んだんですか？』

竜から寮の場所を聞き出した亜樹子は翌日、颯へ途中報告を行った

『うん。だから今日には犯人捕まるよ。うっん？捕まえちやる！だから安心して待っててね？』

そう亜樹子が力強く言うと颯は笑顔になった。

『ありがとうございます。とつても心強いです。』

あ、所長さんそれで依頼料なんですけど

取り戻したらちゃんと払いますから』

ご心配なく…と付け加える颯に亜樹子はあわわ、と慌てる

『えっ！？あ、む、無理しなくて良いよ！？』

あの御田つて男にお金盗られてるかも知れないし…』

『優しいんですね。ところで所長さん、翔太郎さんは一緒じゃないんですか？』

玄関で見送る際に周りを見渡すと亜樹子には誰も付き添いが居なかった

『翔太郎君は敵の隠れ家を探してるし、フィリップ君は中で仕事だから来てないよ』

『3人で切り盛りって大変ですね。』

あ、あの気をつけて帰ってくださいね？

怪人がウロウロしてるかも知れないですから。』

そう手を握り颯は話す

『ありがと。ちゃんと気をつけて帰るね。』

満面の笑みを浮かべて亜樹子は事務所に戻る道を歩き始める

(翔太郎君、居場所掴んだかなあ)

携帯に何か連絡は入って居ないか
そう亜樹子がカバンを探った瞬間、何かが俊足でぶつかつた。

『わわっぶ。』

前のめりに転んだ亜樹子は鼻を押さえながらすぐに立ち上がる
見ると目の前にカバンを持った白い綿毛のドーパントが居た

『ああああーっ！！ドーパントー！！！！』

指を指しながら亜樹子が大声をあげる

ドーパントは自分の身体の毛を擦り始める
バチバチと音がした後その手に電気がたまり
亜樹子の足元数センチに向けて雷撃を放出した。

『わっ！ひ、羊なら羊らしくしなさいよ！！この迷惑ドーパント！
』

羊なのに電撃放つなんて卑怯者！！
と亜樹子が叫ぶ

『羊らしく？おやおや、お嬢さんは俺の正体分かるのかい』

逃げようとしていたドーパントはピタリと足を止め亜樹子に向き直
つた

『し、知ってるわよ！御田和義なんでしょ！？大人しく盗んだ物返

しなさいよ!!」

指を突きつけながら言うどーパントは不適に笑った

『返せ、と言われて返す馬鹿は居ないと思うが?』

『むむっ・・・そりゃ!!』

携帯を盗られていて連絡できない亜樹子は

ぶつかった時に落ちたスリッパを握りスパン——と頭にお見舞いをした。

『お嬢さん、ソレは何の真似だい?』

携帯を衝撃で落とすかと思っていた亜樹子であったが相手は落とすことは無かった

『いいだろう。羊らしく…がお嬢さんの望みだったね?』

『ちよっ・・・何すんのよ!こっ、警察の寮の近くよ!!悲鳴上げれば警官が来るんだから』

シープドーナントは分身し亜樹子を取り囲み
まわり始めた

「羊が一匹

ひツジがにヒキ

羊がさんびき…」

まわり始めていた羊からはそう声が聞こえ始め

亜樹子は倒れた。

『おやすみ。お嬢さん』

翔太郎は御田のアジトを一通り巡った。

彼が最近隠れ家に使っていたのは行きつけのバーだった。

だが、入れ違いで会うことはできずこうして待機している

(そういや、亜樹子のヤツ、颯に情報提供したかな。)

バーで数時間待機しているとバーの中から黒服の男らがアタッシュケースを持ち何処かへ行くこうとしていた

《御田さんの取引は今日だよな》

《違うないっす。なんでも超レアなモンが入ったらしいっすか》
《5》

(おっ、ラッキー、今日取引の日かよ。ってことはコイツらを見つけりゃあ会えるって…)

とそこへスタックフォンが飛んできた。

『っと・・・んだ？こんな時に…って、照井？』

電話の主は竜でとても焦っていた。

《おい、左。そこに所長は居るか？》

『あ？亜樹子は依頼人ここに途中報告しにいったけど、どうかした

のか？』

《警察寮の警備員が眠り病にかかり運ばれた。つまり、シーブドーパントが警察寮近辺に出現したと言う事だ。所長の携帯がつかない。》

竜は警察病院から電話をかけていた。

『んだって警察寮に…』

けどこつちも今取り込んで。御田のヤローのガイアメモリの取引が今日みたいなんだ。』

《なんだと？》

『・・・亜樹子がただ単に携帯の電源切ってるって事は無いのか？』

《下で警備員が動かないと俺に通報してきたのは風森だ。

その時にさっきまで会って話をしていたと言った。

所長とドーパントが遭遇する確立は高い。

左、御田の取引場所が分かったら伝える

俺も行く》

『ああ。わかった。

ヤツが動く。またな。』

そう言い翔太郎は電話を切った。

その頃、亜樹子は御田により、拘束されていた。

シーブドーパントの能力により目覚めることは無いが

御田はその能力を解除し、亜樹子を目覚めさせた

『おはよう。イイ夢を見れたかい？』

『っ……アンタ！これ一体どういうことよ！！』

亜樹子が連れてこられた場所は製糸工場の跡地だった。

そして目に付いたのは自分が鎖で拘束されている状況よりアタッシユケースに並べられた10以上のガイアメモリだった。

『これは俺の仕事だよ。”元”だけどね。』

『っいっ……っ。』

『何事も続けてみるもんだ。たった一つのカバンに入っていたガイアメモリにツバを飲み

何度も何百も窃盗を繰り返した

そうしたら20は集まり、レアなものも手に入った

ははは、金の無い俺に神様ってヤツは微笑んでくれたのさ』

くたびれたスーツ姿でがははと狂喜に笑い

アタッシユケースから赤いベルトを取り出す

『ほらみるよ。コレが何か分かるか？』

『ロスト……ドライバー！！』

御田が手に取っていた物は翔太郎が変身するときに使ったドライバーだった

『こいつぁ毒素に縛られること無く、コネクタに縛られること無く
多種多様のメモリを使える優れものさ。』

アタツシケースの中のメモリを掴み、

ドライバーを巻き、御田はドライバーに挿し込む

【COCKROACH】

ドライバーは御田の姿を茶色く触角が長い
Wへと変化させた。

『どうだ？凄いだろっ？』

『ぎゃあああ！！そんなW私聞いてないいいーっ！！』

と、そこへ

御田の客がやってきた。

御田は変身を解くと執事のようにお辞儀をし招き入れる

『ようこそ。お客様』

『…御田さん。どれでも200万言つのは本当ですかい？』

『ああ。どれでも200万だ。能力のお試しはそのお嬢さんでど
うぞ。』

『そう、おさせてもらおうかね』

御田の客は2人だった。

スキンヘッドの男が灰色のメモリを握る

「SERPENT」 「ネクタ手術をし、男はそれを挿した

『ほほお…こりゃあいい。』

腕が鞭のようにしなり頭が蛇のような頭をした赤黒いドーパントに
スキンヘッドの男は姿を換える
そして、無精ひげの男は

「LIZARD」と言うメモリを取る

無精ひげの男が姿を換えたのはトカゲのような姿だった。

『ご購入、ありがとうございます。』

『んじゃ、あつちの部屋で試してもいいんだよな。
たっぷりと楽しませてもらうぜ…』

『嘘おー！私食べても美味しくないッス！！』

亜樹子がそう叫んだ瞬間、サーペントドーパントにスタッグがあたり
った

『そこまでだぜ、御田和義！！』

『ガイアメモリ不法所持の容疑でお前達を逮捕する
覚悟するんだな。』

スタッグが飛んできた方向には翔太郎、そして竜が立っていた

『翔太郎君！竜君！』

『やはり、所長は捕まっていたか。返してもらっぞ』

竜はドライバーを腰に巻きメモリを構える

「ACCEL」

『変…身ッ！！』

竜の姿はアクセルへと変化した。

その姿を見て御田は笑う

『仮面ライダーと言う訳か。お客様、ここはアフターサービスです。

仮面ライダーは俺がおとめします。同じ、仮面ライダーがね』

『なっ…』

アタッシュケースから御田が選んだメモリは

「HEAT」メモリだった

それをドライバーに挿すとWと酷似した真っ赤な戦士へと姿を換える

『随分と粋な格好すんじゃないか…』

『フィリップ、こっちも行くぜ？』

《ああ。》

【CYCLONE】

【JOKER】

『変身！』

翔太郎はWドライバーにメモリを差し込むとWへと変身する

《僕達と同じメモリ。興味深い。一体何処で手に入れたんだい？》

『照井、ヒートは俺達が止める。お前は悪いがあのだーパントの相手してくれるか？』

2体相手にさせて申し訳ないが、というWにアクセルは首を横に振った。

『いや、問題ない。そっちは任せたぞ』

軽いアイコンタクトを取ると
アクセルはヒートを突っ切りサーペントドーパント、リザードドーパントへ斬りかかった

『まあ、あいつらも実戦のほうで能力開発できるだろうな
ふふっ、同じ姿の半分こ怪人が俺の相手か』

『何が俺と同じ姿だ。全然違いえな。』

Wはヒートを工場外へと連れ出し、構えた。

Bの依頼／乱入少年は颯天のごとく

アクセルは二体のドーパントを相手に戦いを繰り広げていた。

蛇とトカゲと言ったようなドーパントを相手にアクセルは苦戦を強いられていた

特に一番厄介なのは、溶解球を口から吐き、ある一定のダメージを与える皮がはがれ

真新しい身体になるというサーペントドーパントのほうだった。

『恐ろしい再生能力だな…』

アクセルは膝をつき、目標をリザードドーパントへ変更する
トカゲと言っただけあり逃げ足は早く
ひらりとエンジンブレードをかわす。

『こっちは逃げ足か、なら！』

アクセルはトライアルメモリを取り出す

【TRIAL】

瞬き一つ黄色になりそれから青へと変化し
リザードドーパントへ行くと見せかけサーペントドーパントのほう
を狙う

『おぐっ…っ…』

96、97、98、99…
キックの回数は増えていき

9・9で数値は止まる

サーペントドーパントの回復能力はトリアルルの高速の蹴りを上回る事は出来なかった。

サーペントドーパントは爆発し

そしてエンジンブレードに切り替えリザードドーパントを高速で斬り付けていく

『9・9秒それがお前達の絶望までのタイムだ』

リザードドーパントは爆発した。

そして竜自身も手ごたえがあった

だが、そこにあったものはブレイクされた人間、ではなく尻尾だった。

『尻尾…だと！』

『このメモリはこんなことが出来るんだな』

切り離された尻尾はうねうね動き、ドーパントを形成する。

そしてそのドーパントは自ら尻尾を引き抜き

尻尾を地面に捨てた。

地面に乱暴に捨てられた尻尾はまたドーパントを形成する。

ソレを繰り返しあつと言う間に100体近くに増えた。

『仮面ライダーさんよ。残念だったな。安易に尻尾を斬れば俺達は

増えるようだ』

『ならば頭を斬るまでだ。』

『それが正しいが俺を見つけないければ意味がないぞ？本物の俺を倒さないと分身は消えないぜ』

100体近くのトカゲ分身がアクセルトライアルに一齐に襲い掛かってきた

『くそっ・・・力が足りないか。』

普通のトライアルの拳では倒すことが出来ずエンジンブレードで斬りつければ、分身はワザと尻尾を差し出す

尻尾を切れば増える――

竜は切っ先を止めるが止めた隙を狙ってトカゲ分身はトライアルを追い詰めていた

『っ・・・本物探さなくっちゃ!!』

ジェットで弾き飛ばし、苦戦を強いられるアクセルに加勢しようと亜樹子は目を凝らす

アクセルが苦戦を繰り広げている一方で仮面ライダーヒートとWの戦いが外では繰り広げられていた

『ぐっ・・・!!』

ヒートは指先から火球を生み出しWへと投げつける

それを避け、Wが近づこうとした瞬間、床から火が吹き上がる

『俺達の半分のスペックじゃなかったか…あいつ。』

その癖に強え―

と翔太郎は口元を拭う

《ドライバーが力を最大限に引き出しているんだ。
メモリチェンジをしよう。これでは分が悪い。》

『おう。』

翔太郎は「HEAT」「METAL」のメモリを差込み
ヒートメタルへと変化する

『メモリチェンジか。なら俺もだ』

御田はルナメモリを取り出しルナへと変化した

【LUNAR】

『ルナ…だと?!』

《僕達と同じメモリだ。ヒート、ルナ…。
何故君がそのメモリを持っているんだ?》

御田が使っていたメモリは全て純正化されたWのメモリだった
フィリップが問いかけると御田は「くくく…」と笑う

『盗んだカバンに入ってたんだ。メモリ5本とコレがな。』

つくく、本当に笑いが止まんないぜ。

なあ、見てみるよ。仮面ライダーはこうやって変身してんだぜ？
つまりこれからは仮面ライダーの姿で窃盗が出来るって事だ』

ルナで腕を伸ばしWのメタルシャフトを掴み受け流す

『仮面ライダーで悪事を働くだあ？させねえよ。

そいつで変身したってお前は仮面ライダーじゃねえさ
ただの怪物だ。

フィリップ、戻るぞ』

《戻る？って翔太郎！？何故メモリをサイクロンジョーカーに戻すんだ！

ルナ相手では圧倒的に不利だ》

サイクロンジョーカーへ戻る

翔太郎が出した提案にフィリップは意味が理解できないという反応を示す

そんなフィリップに翔太郎はいつもの調子で言った。

『例え不利な状況でも食らいつく。それが仮面ライダーってもんだ。
これ以上こいつには仮面ライダーを名乗らせねえ。俺たちがたつぷり教えてやらないとな
そうだろ？』

《やれやれ、付き合う身にもなってくれ。けれど僕も同じ意見だ。
この男にたつぷり教えてあげよう。》

翔太郎の言葉にフィリップはやれやれと肩を竦める。
が、その手にはサイクロンを握っていた。

【Cyclone】

【JOKER】

『御田和義、お前の野望はここで終わりだ。
さあ、お前の罪を数えろ！』

Wは手をスナップさせ、突き出した。

『罪を数える？』

神に愛された私に罪を数えろと？

面白い、そっちがそのつもりならば……』

【CYCLONE】

ルナはメモリをサイクロンに変えた。

『サイクロンメモリか。俺達に合わせてきやがって…
ま、俺たちにはかなわねえ
見せてやるうぜ？俺たちの力ってやつを』

《ああ、そうだね。いこう翔太郎》

そう会話を交わすとWは仮面ライダーサイクロンへ突っ込んでいっ

た。

工場内ではリザードドーパントとアクセルトライアルの戦いが繰り広げられていた。

たくさんの分身に紛れた本物を拘束された亜樹子は探そうとする本物を叩けば終わるのだ。

『うう…どれが本物かだなんてデンデンがなけりゃ分からないよお』

…』

トリアルがエンジンブレードを振り下ろす中、亜樹子はそうばやくすると

『俺の貸そっか？』

と横で声がした。

『えっ？持ってるの？なら貸して欲しいなあ…ってええっ！？』

亜樹子の横、亜樹子の鎖を解こうとしている少年が居たのだ。

『は、颯君…！』

その少年は警察寮で別れた颯だった

『ど、どうして此处に…むぐっ…！』

亜樹子が騒ごうとすると颯は口を押さえる

『静かに。あのトカゲが照井さんに気をとられてる隙を見計らってんだから』

鎖をカチャカチャと弄る颯は黄色いレザージャケットを羽織っていた

『めんどくさいな。人間の手で外すのは時間が掛かる…か。来い、アトラス』

そう小声で呼びかけると3本角のカブトムシのようなガジェットが飛んでくる

『そ、それ…なに!?!』

『アトラスフォン。アトラスオオカブトをモデルにして作られた俺の携帯。』

ガキンツ・・・

と金属を角が断ち切り亜樹子の鎖が外れる。

と、リザードドーパントがその光景に気が付いた

『おい、お前なにしてんだ?』

リザードドーパントが颯のほうを

向くと中心で戦っていたアクセルトリアルは

強制変身解除され倒れた。

ダメージが蓄積され装甲が耐え切れなかったらしい。

倒れた竜は意識は保っていたが体が動かさない状態だった。

『風森…』

何故、この場所にこの少年がいるのか

身体の自由が利くようになった亜樹子は倒れている竜へと駆け寄る

『竜くん！』

その後を追いかけ、颯が二人を庇うように立った

『ガキがいつちよまえに正義感を出しやがって

痛い目を見たいようだなあ…』

『痛い目見るのはそつちだろ？

仮面ライダーWがお前を放っておかない』

『ああ？仮面ライダーWは御田さんが相手してるぜ？』

工場外でサイクロンとサイクロンジョーカーが争っている姿が見えた

『おわーっ！似たもの同士！…』

亜樹子がそう叫ぶ中、

その光景を見て颯は舌打ちをした。

(…つたく、早く倒せよ…)

『お前が何処から来たのかはしらねえ。だが俺の姿を見たヤツはど
うなるか。分かるな？』

『颯君!!こいつはガイアメモリで変身したドーパントって言う怪物なの!!』

助けてくれたのは嬉しいけど逃げて!!』

『逃げろって、逃げられるワケないだろ。照井さんぶっ倒れてるのに…』

所長さん、もう少し冷静になってよ。

俺が”こいつ”を連れてるといふ事がどういふことか。』

アトラスが颯の周りを旋回し手に収まった。

『え・・颯君まさか』

亜樹子の驚いた表情に颯はにやりと笑った

『まあね。ちなみにコイツは俺の——』

と颯が言いかけた瞬間、颯は吹き飛ばされた。

吹き飛ばしたのはリザードドーパントの長い舌である。

『颯君!!』

亜樹子が思わず声を上げる。

颯は段ボールやら何やらが積まれている場所に吹っ飛ばされたらしい。

土煙が舞っていた。

『下手な正義感を出すからそうなるんだ。』

土煙はまだその後の様子を隠していた。

竜は目の前で起きた出来事に唇をかむ

『貴様つ…』

自分を助けに来た、しかも少年を守れなかった
竜が力を込めて立ち上がるうとすると土煙が晴れて
一つのシルエットが浮かび上がった。

颯である。

颯は髪がぼさぼさになり汚れてはいたもの大した怪我ではないの
か、きちんと立っていた。

その手にはホタテの貝殻のような白いガジェットが握られていた。

『なっ…俺の攻撃をかわしただど？』

自分の、怪人の攻撃を受けてケロリとしている颯の姿に
リザードドーパントは動揺を隠せなかった。

『人が喋ってるのに邪魔するなよ！』

この服、クリーニングから返ってきたばっかなんだぞ。何てことし
てくれんだ！』

颯はカンカンに怒っていた。

怒っている理由はなんとも小さいが「やる気」らしい。

ホタテ型のガジェットの後ろから銀色のメモリを抜き取るとホタテ
型のガジェットは

貝殻が開いた状態になりヘッドホン状に変化した。

『「本体は誰か」それを探せばいいんだな？それなら俺に任せてくれ』

ホタテ型ヘッドホンを耳に装着し

リザードドーパントが生み出した分身たちの輪に入ってしまった。

颯は蹴りと拳とアトラスフォンを使い、分身を怯ませる

そして中心に行くとヘッドホンをメモリを挿した

【SHELL/POP】

そう音声が響いたかと思うヘッドホンはホタテ貝の形に戻る

『行くぜ？必殺！！』

颯が勿体ぶってそう叫ぶとリザードドーパントは身構える。

その様子を見て颯はニヤリと笑った。

そしてそのままガジェットをカスタネットのように手で叩くと、クラッカーの破裂音のような音が辺りに一発響いた。

その音は銃声にも近く、手のひらサイズのガジェットから出ているとは思えないような広がりを見せた。

しばらくし、

『本物みつけ！照井さん、動ける？こいつが本物だ』

そう颯が言った

他の分身は棒立ちだったのだが

一匹だけ驚いたドーパントがいたのだ。

『ああ。動ける…さ。』

竜は足に力を入れ亜樹子に手を貸してもらいながら立ち上がる少年にここまでやってもらったのだ

あとは自分がやらねば、というプライドもあった。

竜が立ち上がったのを見ると颯は静かに後退した。

『あんな破裂音で俺を判別した？そんなもん分身に紛れちまえば…
なあ!?!?』

リザードドーパントは自分の尻尾に違和感を持つ

尻尾にホタテ貝が食らいついていたのだ。

リザードドーパントは慌てて尻尾をちぎろうとするが

ホタテガイが尻尾と本体が離れるのを許さなかった。

『無駄だよ。尻尾を切っても本体と繋がったままなら意味ないだろ？
このまま、大人しくお縄につくんだな。』

と颯が竜の後ろに隠れながら言った。

『きつさまああああ!?!』

リザードドーパントはその颯の態度にブチキレ突進するが

竜がアクセルメモリを手に立ちはだかる

『…観念するんだな。』

【ACCEL】

『変…身ッ!…!』

【ACCEL】

『さあ、振り切るぜ!…!』

尻尾をはまれたことによる動揺で冷静さを失いリザードドーパントは著しく動きが低下している。

そこに怒涛の攻撃をアクセルはくわえていった

『なっ…ぐっ…!』

【エンジンマキシマムドライブ】

蒸気の噴出すエンジンブレードを構えてアクセルはリザードドーパントを一刀両断した

『絶望がお前のゴールだ。』

リザードドーパントは爆発しメモリブレイクされた

『よっしやあああ、倒したああ!』

『やったあああ！倒したああ！』

颯と亜樹子の歓喜の音が背後で重なる。

その声に安堵の息をつき変身解除した瞬間、竜は膝から崩れた

アクセルとリザードドーパントの戦いの決着がついた頃、Wとサイクロンの戦いも大詰めを迎えていた。

御田とWサイクロンジョーカーの蹴り合いは長くに渡った

『っ・・・何故だ。何故、勝てない！！お前達と同じ格好のはずだ。』

『格好だけ同じでも意味ねえぜ。俺達のサイクロンメモリは苦樂を共にしてきた

アンタみたいな浮気野郎にや使いこなせないぜ。』

翔太郎は横のマキシマムスロットにジョーカーメモリを差し込む

【ジョーカーマキシマムドライブ】

の音声と共にWが割れサイクロンへと蹴りを繰り出す

サイクロンはその蹴りを食らい強制変身解除された。

メモリの副作用による衰弱は見られないもののダメージは大きかったようで御田は気絶した。

『ははん、終わったな』

Wは変身解除し御田の腹から砕けたサイクロンメモリとロストドライバー

その他

ヒート、ルナ、メタルを拾う

『サイクロンは砕けちまったか』

《翔太郎？》

変身は解除したがWドライバーは腰につけたままで翔太郎の残念そうなため息がガレージで目を覚ましたフィリップへと伝わる

『いや、どうせWと同じメモリならメモリがブレイクされた時ようにストックとして取って置こうかと思っただけだ。』

《なるほど、それは名案だねえ。

確かに盗難品とはいえガイアメモリは被害者に返すわけには行かないかといって僕たちのメモリなら逃す手は無い。

そういう事だね》

『そーいうこつた。照井の監視下なら取り合えずなんとかなっただろ？』

《そうだね。さあ、照井竜の様子を見に行こう

先ほどから争う音が聞こえない。終わったようだ》

翔太郎が工場内に行く

『よっ、左!!!』

と竜の肩を持ちながら颯が声をかけた

『おう、…って何でここに少年がいるんだ!』

『倒すのが遅いつての。照井さん死に掛けたんだからな』

『颯君がねドーパント退治を手伝ってくれたの。』

颯は事務所にいたときは翔太郎の事を「さん付け」で呼んでおり、敬語だったのだが、

目の前に居る颯は呼び捨てでタメ語だった。

『は？少年がドーパント退治の手伝い?』

ないない、と「ははっ」と軽く笑い受け入れない翔太郎に颯が言う

『少年、少年うるさいなあ…俺の名前は風森颯だつての。つたく、笑ってる暇があるなら俺の盗難品探してくれよ』

鍵と財布と…って

あゝ あゝあゝーッ!!!』

翔太郎の懐の袋にくだけたサイクロンメモリを見つけて颯は甲高い

声を上げた

『ん、あ？どうした。颯』

『あつ、いや…な、なんでもない。お前も仮面ライダーなんだなあ…って

て、照井さんもそれで変身してたから。』

『あつ、ドライバー出っっぱなしだった。

俺が風都を護る風と言う事は皆には内緒にしといてくれ』

『お、おう。い、いいぜ…？』

そう答える颯は少しきこちなかった。

『それでよ、照井、盗難品のガイアメモリなんだがヒートとメタルとルナは俺が所持してていいか？

さすがの警察もガイアメモリまでは返すわけにはいかないだろ？』

『まあ…いいが他はメモリブレイクの方向でいいんだな？』

颯に肩を貸してもらっていた竜はその後、「もう大丈夫だ」と1人で立ち犯人に手錠を掛け、やがてやってきた犯人を警察に引き渡していた。

その後、颯は盗難品を渡すと竜から言われ一緒にパトカーに乗った。

パトカーが去ってから翔太郎がアタッシュケースを持ちながら言う

『つか、本当になんで颯が此処に居たんだ？』

『それが私にも分からないのよ。でも…カブトムシガジェットと帆立貝連れてたよ。』

あれもシユラウドのやつかなあ…』

『カブトムシに帆立貝？！なんじゃそりゃ…まあいい、今は帰ろうぜ？』

このロストドライバーとかフィリップに色々検索や分析してもらわにゃいけない事が山積みだからよ。』

こうして怪人による窃盗事件は終わりを迎えた。

あの大量のガイアメモリは一部を残してメモリブレイクをした。それから2日が過ぎた。

現在、あの謎のロストドライバーはフィリップが分析している

『しかし、風都が平和になったのにあんな大きな事件が起きるなんてな。』

……ってオイ、亜樹子、さっきから何してんだ？』

翔太郎がコーヒーに舌鼓を打っていると亜樹子がいつもとは違いおしゃれをしていた

まあ、ミニスカートとマニキュアなのであるが

『なに、っってお洒落に決まってるじゃない。』

颯君ねアパートの鍵が無事に戻ったらしいから部屋には入れるんだ
って

招待されちゃった』

そう嬉しそうに言う亜樹子に翔太郎は面白くないという顔をした

亜樹子は「助けてくれたお礼」として依頼金を無料にしていたのだ
ちなみに今月は赤字すれすれらしい。

(まったく、自分だってただ働きはやらないって言ってるくせに)

『招待って大丈夫なのかよ。』

『うん、竜君も招待されてるよ？

そうじゃなくても竜君は事後処理とかで会ってるみたいだけど

じゃあ、留守番お願いね。』

手を振って事務所を出ていった亜樹子

それと同時にフィリップが出てくる

『どした、フィリップ』

『このロストドライバーの持ち主が分かったよ。

翔太郎』

この時俺は

このロストドライバーが

新たな風を巻き起こす事になるうとは
予想していなかった

『使用者の名前は_____』

Nのライダー／少年の頼みごと

風都 風見二丁目「松風ハウス」333号室」

それが風森颯の住処だった。

『此処か。普通のアパートのようだな』

見た目は学生っぽい颯、そんな颯の住むアパートはボロくもなく高級でもなく「普通」だった。

『でも、颯君なんで私達を呼んだんだろう…盗品に不備があったとかかな。』

『不備はないと言っていたぞ。きっと個人的な何かじゃないか？』

インターホンを押せば白いパーカーに身を包んだ颯が顔を出した。

『あ。所長さんに照井さん。こんにちは、あがってくれ』

呼びかた以外の敬語はなしのようだった。

通された部屋の中は物が少なく、折りたたみ式の机に一台のノートパソコンがあるだけで

他には必要最低限の家具が置いてあるだけの生活感が見られない部屋だった。

『あ、適当な場所に座って。コーヒー出すから。コーヒーでいいよね？』

颯はそういつと準備を始める

『ねえ、何で私たちを呼んだの?』

言われたとおりに座ると亜樹子が訊ねる

『何か、盗まれた物で返って来てないものでもあった?』

亜樹子がそう言うつと颯は言いにくそうにポリポリと頬をかいた

『いやあ…二日も音沙汰無かったからさ。』

?と颯の言葉に首をかしげる亜樹子

『普通さ、怪人が居るアジトに青少年が殴り込んで怪人に怯えないで戦ってたら怪しまない?』

颯が言いにくそうに言うつと

『ああ〜颯君そんな事やってたね。』

と亜樹子は「忘れてた」と言うような反応を返した。

『それをわざわざ説明する為に呼んだのか?』

『あ、いやあ…その、だって…』

つてというか照井さんが無視してるのおかしいなあ…って。

ガイアメモリを取り締まる側なのに堂々使っている少年を見逃すとか』

『お前が所持していたのはガジェットだろう。ガジェットは Gizme モリ、怪物にはならないぞ。』

それに助けてもらった礼もある、敢えてスルーしていたんだが』

かえって不安にさせたか？

と竜が聞くと颯は「20%」と答えた。

聞く話によれば、いつ竜が来てもいいように身構えていたらしい

『だからスルーされてたのか、納得した。』

あ、でも二人を呼んだのは別の話もあるからだよ』

そう颯が言う

『じ、実はあの半熟探偵から取り返してほしい物があるんだよね』

颯は棚からコーヒーカップを出しながら言った。

『ヒートとメタルは諦めるからルナだけは返して欲しいというか…
うーあーそのー』

ど、ドド、ドライバーをですね。取り返してほしいなあ…なん
て』

二人の顔色を窺いつつ言いにくそうに言葉を続ければ当然のことながら二人は驚いていた。

『あのドライバーはお前の物なのか？』

『えっ、颯君、仮面ライダーなの！？』

そんな驚く二人にコーヒを差し出して目の前に正座し、頷いた。

『一応ね。とある男の人から貰ったんだよ。

サイクロン、アクセル、ヒート、ルナ、メタル、ジョーカー、トリガー

計7本のメモリとロストドライバーってやつを』

颯がそう言えば亜樹子は大声をだし驚いた。

颯が仮面ライダーということを知られた上、メモリは7本

そしてWとアクセルと同じ

驚きの玉手箱を開けたような感じだった。

『どうしてWとアクセルのメモリなの…？』

『なんで七本あるかは俺も知らないけど、男の人が差し出したアタツシユケースに入ってたんだよ。

なあ、頼むよ。左からドライバーだけでも取り返してくれガジェットだけじゃ俺、死んじゃう』

「この通り」と颯が頭を下げる。

『言いたい事は分かったが、左に盗られる前になんとか出来なかったのか？』

『やろうと思ったよ。

窃盗に遭った瞬間も探偵事務所に依頼して

調べた情報をこのアトラスで盗み見して現場に先回りして左達が来る前に取り返そうと思った。』

本当に穩便に済ませるはずだったんだ…と颯は大きく溜息を吐いた。

『盗み見をして先回りしようと思っていたらシープドローパントが現れ、所長を攫い、計画が台無しになり左にメモリとドライバーを奪われた…と?』

竜が言つとコクリと颯が頷く

『しかもサイクロンブレイク済み。』

あの時の叫びは「嘆き」だったのか

左からドライバーを取り返してくれ、と言つ颯に竜が悩んでいると横に座つてコーヒーを飲んでいた亜樹子が言つ

『うわぁ…なんか颯君可哀相。ねえ、竜くん私は渡してあげてもいいと思うな。』

颯君、悪い事しなさそうだよ?』

腰の低い低姿勢な颯を見る限り「悪いことには使わない」と亜樹子が言つ

竜はふーむ、と顎に手をやり考える。

目の前の颯の様子を見る限りでは悪用はしないだろう。だが、七本もとなると渋るものがあった。

とそこへ

インターホンが鳴った。

『ん、おかしいな。新聞は取ってないし、近所付き合いは並以下だから訪問者なんて…
ちよっと待っててね。』

と颯は引き出しからデジデジを取り出すと玄関の方向を見る

『んげっ！？左だ。』

颯は思い切り嫌そうな顔をした。

『へ？翔太郎君？』

『良かったな。カモがネギをしょってきたぞ』

と竜がコーヒーを飲みながら言う

『あまり気が乗らないんだよなあ…左の相手は』

とぶつくさボヤキながら扉を開けると竜は飲んでいたコーヒーを机に置いて

亜樹子と大きなクローゼットのなかに身を隠した。

《な、何で隠れる必要があるの》

《左はドライバーの事で来たんだ。

風森の反応を見る。

猫かぶりかどうかのな。》

《なるほど、私たちがいれば猫をかぶる、か。つまりここが渡すかどうか、なんだね？》

亜樹子が言えば「だからおとなしくしてくれ」と竜は言った。

『颯、このドライバーに見覚えはあるか？』

翔太郎は入るなり単刀直入にドライバーを見せる。

そんな翔太郎の態度に颯も隠そうとはせず素直に呟いた

『あるよ。つてかそれ俺のだし』

『ああ。相棒が分析した結果、使用者はお前らしいな。誰から貰ったんだ？』

『白服の男だ。4年前に貰った。』

『白服・・・？』

『その男の名前は知らない。俺が13のとき俺の家族は石化能力を持つドーパントによって石像になった。』

それから1年経って白い服の男が家にやってきてくれたんだ。悪用なんて考えていない。渡してくれないか?』

颯が手を差し出すが翔太郎は首を横に振った

『人を石像に換えるドーパントなんてこの風都に存在していたら俺のところには誰かが依頼に来るはずだ』

。または、照井が事件として担当しているはずだ。嘘はやめろよ?』

『…確かに、そうだろうな。けれど俺の言った事は事実だ。』

左、俺の目的を妨げるなら俺にだって考えがある。』

『考え…?』

『ああ…。』

颯はクローゼットを確認してニヤリと笑った。

『左翔太郎、お前、”H”な本をベッドの下に隠しているだろ? それも相当な数。』

『は・・・？Hな本！？んなもんもってねえよ
俺はそう言う本には靡かない主義だ。』

『先日モインターネットの通販で経費でその本を購入した。所長が
今月は赤字だ、と切り詰めていた時に・・・』

『随分と言い切ってくれたな。いいぜ？お前が決定的な証拠を見せ
てくれたらドライバーを返す。』

『言つたな？左。少し待っている』

と颯はホタテ型ガジェットとアトラスフォン
を繋げ、ホタテに銀色のメモリを挿す。

【SHELL/SPEAKER】

とアトラスフォンで録音したとみられる音声
がホタテから拡声ささり流れ始めた

《フィリップ、亜樹子はいねえよな。》

《亜樹ちゃんはコーヒー豆を買いに行ったはずさ。
つて…またそれかい？亜樹ちゃんに知られたら大変だよ？》

《んな冷たい事言つなよ。アイツが来てから一冊も買
ってないんだからよ。》

おおっ、新訳版出てるじゃねえか

初回限定版と通常版があんのか。
はっ、ハードボイルドな男は通常版、初回限定版なんてものにゃ動じねえ。

両方購入するぜ。チャンドラー先生！》

《やれやれ、僕は知らないよ？》

《んな固い事言つなよフィリップ。お前の好きな物も買ってやるからよ》

『ああああーっ！！』

ホタテ型ガジェットからの再生は途絶えた

『左、約2万ものハードボイルド小説を購入しベットの下に隠している
どうだ？認めるか？』

ばっちり音声に撮られていた翔太郎は慌て始める

『ちょっと待て。これ、明らかに盗撮じゃねえか。こんな物で俺を強請ろつってのか？』

『証拠見せろって言っただろ？俺は観察してたんだよ。この風都における仮面ライダーとはいかなる人物か』と。

それなのに…アトラスが撮ってきた映像は
所長さんが一生懸命やりくりしてるのにHな本を通販で買ってニヤニヤして

女の依頼人にデレデレしてる変な探偵。

アクセルはかつこ良くて優しい人なのに』

『Hな本って言うんじゃないよ！！ハードボイルド小説は俺の人生の――あつたあ！』

翔太郎が突然頭を押えて屈む。

背後で亜樹子が思い切りスリッパで叩いた。

『依頼の件数の割には収入が少ないからおかしいおかしい思ってたら
アంతの仕業かアア！！』

『んげっ…亜樹子何で此処にいんだよ！』

『何が「んげっ！？」よ！此処に行くって言ったじゃない！
それよりいつからそのハードボイルド小説買ったの！？

所長様にきつちり説明しなさい！！』

『いだだだ…耳を引っ張んな！』

来るなら来やがれ…でもな。
チャンドラー先生はわたさねえぞ』

『要らないわよ！そんなもの！』

亜樹子が翔太郎の耳を引つ張り外へと連れ出す。

『おわあ…怖っ』

事の引き金になった颯は身震いをし、その光景を眺めていた

『随分前から観察していたんだな。』

そんな颯に背後から竜が声を掛ける。

声のほうに振り向くと

『同業者の事は観察しとこうと思って。』

と言った。

『盗撮だけど逮捕されないよね？俺。』

『仮面ライダーの観察目的であれば特別に見逃そう。
左の悪行も暴かれたようだしな』

竜はすっかり冷め切ったコーヒーを口にしながら言う

『入れ替えようか？』

『いや、いい。冷めてもいいける味だ。』

…ところで風森。さっきお前が言った事は本当なのか？』

『ドーパントの事？』

家族が石像になった。それから1年経過して男がドライバーを持ってきた。

こんな事になってしまったが、翔太郎の言うこともある。

そんな事件が起きているなら警察で

特に自分が居る超常犯罪捜査課で取り扱わないワケがない過去だとしても過去資料が残っているはずだった。

自分がかつて復讐に燃えていた頃、一通りそんな資料に目を通した覚えがあるが

石化能力を持つドーパントの資料はなかった。

颯は少し躊躇うもゆっくり頷いた。

『…本当だよ。家に怪物がやってきて——ね。』

そのときの事はあまり思い出したくないけど。怖かったよ。』

『…お前は家族の復讐の為に戦っているのか?』

そう竜が訊ねた。

『えっ…、復讐?』

「そのときの状況を詳しく聞かせてもらえないか」

そんな質問が来るであろうと思っていた颯は思い切り聞き返した。
そして少し考えてから口を開く

『いや。俺の家族はまだ命がある。』

石みたいに固まってしまっただけだ。

体温もよく分からないし息もしてるか分からないけど
生きてる——って

俺にドライバーをくれた男の人は言っていた。

だから俺はその家族を取り戻すために
戦ってる。復讐なんて考えてないよ』

『そうか。』

竜は少し安堵したように言う。
だが、颯は次にこう話した。

『でも、俺は街を護る「仮面ライダー」ってヤツにはなる気はないよ。』

安堵していた竜はその言葉にピクリと反応した。

この男にならドライバーを渡してもいいだろうか、そう考えていた矢先の言葉だったからだ

『何故だ。』

竜が少し早口で理由を訊ねると

『答えは簡単。』

俺がこの街を愛してないから。
大嫌いだから。』

そう颯は答えた。

『街が嫌い…？』

竜が聞き返すと少し投げやりに溜め息を吐き

颯は答えた。

『そ。俺はこの風都が大嫌い。

だから、って街に危害は加えるつもりは無いけど

左のように自分から進んで街の困ってる人を助けようとは思わない。

』

きっぱり意志を込めた真剣な表情でそう颯は言う。

『あ。でも道歩いててドーパントが人を襲ってたら助けるよ？ちやんと。

あとは頼まれたりした時とか』

『……そうか。』

竜はそう相槌を打った。

ドライバーを渡すか、渡さないか

颯は嘘をつけないタイプらしい。

それは「自分を捕まえに来ないので呼んだ」と言う事からも伺うことが
とができる

すなわち今話したことは真実

もしもドライバーを渡さなかったら颯は家族を救えない

2人で話をしているとやがて亜樹子、翔太郎が戻ってくる。

亜樹子はいまだ膨れ面で翔太郎を颯の前につれてきては

『ほら翔太郎君、ドライバー渡して。』

と言う。

「颯にドライバーを渡すこと」それが小説の罪を償う方法なのか翔太郎はロストドライバーを渋々取り出し渡そうとする。

『ほらよ。』

そうならばそれでいい——
竜はそう結論を出した。

ドライバーを差し出す翔太郎のその顔は物凄く嫌そうな表情をしているのだが——
道を誤る場合があるなら自分が正してやればすむだろう
それでいい——

颯がそれを有り難く受け取ろうとするときふと翔太郎が訊ねた

『一つ聞いていいか。』

『…いいけど。』

受け取ろうと思ったのに翔太郎は手を離してはくれなかった。
その事に若干イラついた颯はぶつきら棒に答える

『お前家族を失ってるだろ？その…復讐で仮面ライダーに手を出したのか？』

翔太郎の問いかけに颯は答えた。

『失っていないから復讐の目的がない。家族を救うためになった。つてか石像になってから死んでたと思ってた1年間も蝉の抜け殻みたいになってたから俺に復讐は無理だよ。』

これでいい？』

そう言っ取ろうとするが翔太郎がドライバーを離す事はなかった。

『ちょっと、翔太郎君！！話が違うじゃない！渡すって約束でしょ？』

と亜樹子が思わず言う

黙って成り行きを見守ってはいるが竜も同じことを思っていた

『もう1つ質問だ。』

『…いいけど最後にしろよ』

颯の声が低くなる。

堪忍袋の緒がだんだん細くなってきているようだった。

『お前は4年前から仮面ライダーをやっていると聞いたな。』

どうして俺達より前から活動してるのにお前は噂になってない。なんでミュージアムはお前の事をマークしてなかったんだ？』

『はあ？博物館がなんで俺をマークする必要があんの俺、美術品盗んでないんですけど』

「なに言ってるんだコイツ」

と言つようなあからさまな反応を見せる颯

『仮面ライダーをしてるなら当然知ってるだろ？敵の中枢を』

『博物館が敵の中枢ってワケ？』

いや、俺、アンタの相棒みたいな収集能力ないから知らないけど？』

颯はイラついた口調で答える

それが仇になったのか、違うのか

『……やっぱり駄目だ。お前にはこのドライバーは渡せねえわ。』

翔太郎は思い切りドライバーから颯の手を振り払う。

『お前は嘘をついてる。』

石化能力に囚われた家族を救うために仮面ライダーになった？

ガジェットで前から観察してたなら依頼に来るはずだ。
そして親の仇のミュージアムを知らないはずがねえ
照井と亜樹子に取り入るうとしてたようだが残念だったな……」

翔太郎が言つと颯の目つきが鋭いものになる

「…左、もう一度だけ言っぞ。ドライバーを渡せ。」

「は、颯くん……？」

思わず亜樹子の声が震える

目の前の颯の緒が極限にまで細くなっているようだった

「やなこった。返して欲しいなら本当のことを言え。
白い服の男から何故、渡されたのか本当の事をな。」

「本当の事ならもう言っただぞ。」

俺にはそのドライバーが必要だ。仕事が出来ない。」

「仕事？」

翔太郎が首をかしげた瞬間、颯は勢いよく亜樹子を背後に立って黙
つて様子を伺っていた竜側へと
引っ張る

『うわわっ!!』

勢いよくぶつかってきた亜樹子を竜が受け止めると颯の手にホタテ型ガジェットが握られていたのがみえた。

メモリを挿入しているが、ちゃんと奥深くまで入っていないようだった。

なにをしようとしているか、なんとなくだが理解できた竜は最後の忠告をした。

『左、そいつにドライバーを渡したほうが身の為だぞ。』

『照井、お前までなにを言ってんだ?こいつは——』

颯は太ももでホタテ型ガジェットをパンと叩いてメモリを挿入する

【ENGINE/ELECTRIC】

そして翔太郎めがけて発射させた。

ホタテ型ガジェットはロケット花火のように勢いよく翔太郎の鳩尾に直撃し壁にぶち当たった

『仏の顔も三度までだぞ、左。』

誰が嘘だつて?俺がそのミュージアムとやらを知ってれば何かあるのか?

あの日、俺がどれだけ怖かったか分かるのか!?

俺の心の叫びまで分かるのかよ!!

分かった口たたくな!!」

そう怒鳴りホタテ型ガジェットを回収した颯は足元に落ちたドライバーを拾う

「異常なし、だな。

さて、と・ルナとメタルとヒートも返してもらおうか」

デンデンで翔太郎を映し、ルナメモリとメタルメモリヒートメモリを奪う

反撃しようと立ちあがろうと足に力ををれるが翔太郎は立つ事が出来なかった。

「身体が、痺れて動け…ねえ」

颯の剣幕に押され言葉を失っていた亜樹子が翔太郎に駆け寄る

「しよ、翔太郎君！大丈夫!？」

「シエルスピーカーにエンジンのギジメモリを挿し込みエレクトリックを発動させ鳩尾を打ったんだ。

動けないのは当たり前だ。」

ホタテ型ガジェットを見せては颯が言う

「ん…やるじ」

身体に力が入らない翔太郎は颯を睨む

『…俺は謝らないよ。結構我慢したほうなんだ。コレでも。』

つと、そうだ。』

颯はタンスから依頼料と書かれた茶封筒を取り出し自分の財布から数札お札を入れた後、
亜樹子に渡した。

『こ、これは…？』

『依頼料。ドライバーとメモリは俺の手に戻ったし、貴重品が全部戻った。』

だから渡す。

左も2日くらいまともに働けないだろうし。治療費とか慰謝料とかの分少しかさ増ししておいた』

『え、あ…ありがと。』

少し分厚い茶封筒を受け取りながら竜と共に翔太郎の肩を担ぎ亜樹子はアパートを後にする

アパートから離れていく亜樹子達を窓から見ながら
颯は呟いた。

「エンジンはやりすぎたな。」

『つたく、しつかり貰いやがって』

颯のアパートから離れて、肩を持たれなんとか歩行している翔太郎が言う

『なによ。翔太郎くんがさっさと渡さないから颯君がキレたんでしょ！？』

『誰だって嘘だと思っただろ！？だってあいつミュージアムの事知らなかったんだぞ？』

『それはそうだけどやっぱり翔太郎くんが悪いよ。』

と亜樹子が言うと

『……そーかよ。』

と投げやりに答えては翔太郎は不貞腐れた。

鳴海探偵事務所に戻り、竜と亜樹子が翔太郎をガレージのソファへと寝かせる

『その様子だとかなり酷い目に合ったようだね翔太郎。』

『うるせーよ。それより「風森颯」の事について検索頼む。』

ソファに横になりながら翔太郎が言うとフィリップは躊躇いがちに言う

『それなんだが翔太郎…もう少し待ってくれないか？』

実はドライバーの所持者が風森颯だとわかった瞬間に地球の本棚で彼の事を検索したんだ』

だが、…とフィリップは顔を伏せる

その様子に壁に寄りかかっていた竜が聞く

『何かあったのか？』

『「風森颯」の単語と依頼状の情報を入れても彼の本が地球の本棚に出てこなかったんだ。』

とフィリップはかなり動揺を隠せない様子だった

『それって風森颯って名前が偽名だから…とかじゃなくて？』

亜樹子が言うとフィリップは首を横に振る

『偽名でも、ちゃんと本出るさ。本名は だ——とね。』

だが風森颯の場合それがなく、

真っ白い空間なんだ。

何か特殊なキーワードが必要なのかも知れない。

何か聞いてないかい？」

フィリップの言葉に亜樹子と竜は顔を見合わせ首を横に振る

『…俺達と同じロストドライバーを使ってホタテ型の変なガジエツトを持ってて

地球の本棚では検索できない。

一体何なんだ…？アイツ。

妙にいけ好かない性格だし…』

翔太郎が眉間に皺を寄せると亜樹子が呟く

『…ってことは…颯君は宇宙人ってこと？』

『は？』

『そう、颯君はきつと宇宙人よ！！ほら、見てこの大量の札束。

茶封筒に入ってた金額はざっと20万。未成年が稼げる金額じゃないわ！』

亜樹子のこのぶつ飛んだ発言に翔太郎が啞然とした顔をする

『おい、亜樹子…真面目に考える』

『だって地球の本棚で検索できないなら宇宙からやって来たって考

えるしかないじゃん。』

そう反発する亜樹子

『だからって宇宙——』 『なるほど』

翔太郎が言い返そうとした瞬間、フィリップが目の輝きを取り戻した

『亜樹ちゃん、君は相変わらず天才かもしれない。』

その可能性を見落としていた。』

『私、また何か凄いこと言っちゃったあ？』

えへへと自分の頭を撫でる亜樹子に爛々と輝いた目を向けてフィリップは頷く

『地球の本棚に本が存在しないのならば、彼がこの地球に生まれて居ない事を前提として検索をすれば引つかかるかも知れない、さあ、検索を始めよう』

フィリップは地球本棚へと入っていった

『日本語喋ってるし人型だよなあ……って事は人間なのは間違いねえ。』

『風森颯のこれまでの情報は

僕達と同じメモリを持ち

僕達と同じガジェットとそして僕達が知らないガジェットを使いミュージアムを知らない。

彼は5年前家族を石化ドールパントに襲われ、その1年後白い服の男に僕達と同じメモリとドライバーを受け取り仮面ライダーになった。

4年前と言えば鳴海荘吉が生きている時代。

そして母さんが父さんを憎んでいた時代でもある。』

とフィリップは地球の本棚内で言う

『あのドライバー、ガジェットは母さんの製作したものに間違いない。

もし、風森颯の絶望感に目をつけ渡したのならば

「仇は園咲琉兵衛である。」と唆すはずだ。

それなのに、風森颯はミュージアムの存在を知らなかった。

母さんが父さんの憎しみから解放されたのは1年前。』

『でも渡したのは4年前…ううんやっぱりおかしい。合わないっ』

と亜樹子が言うとフィリップが続ける。

『4年前でも風森颯はただ「4年前」と口にし「誰から見て」とは言っていない

もし、これが僕達から見た4年前ではなく、風森颯から見た4年前だったら…？

そして、彼はこの地球に生まれていない。

つまり、「未来」だ。』

フィリップの前に「Future」と言う文字が現れる。すると本の無い本棚が急速に動き始める。

『未来…か。なるほどな。未来ならミュージアムは滅んでる。ヤツが存在を知らねえってのも頷ける。』

けど未来ならどうやって此処に来たんだ？』

『メモリじゃないか？ガイアメモリの能力は俺達の想像を遥かに超える。』

対象者の昨日を繰り返すメモリがあるくらいだ。時に関係するメモリもあるんじゃないか？』

翔太郎の呟きに竜が答えると本棚に入っていたフィリップが本を探し当てた。

『…ビンゴだ。』

地球の本棚、フィリップの目の前に一冊の本が浮かび上がる。透過性が高い黄緑色をしたページの少ない薄い本だった。

Nのライダー／少年はシエルボイルド

『ほ、本当にそのキーワードで本出てきちゃったよ。私、聞いてない…』

亜樹子が思わず呟く。
するとフィリップもそれに同意した。

『まさか、僕も出てくるとは思わなかったよ。……』

フィリップは風森颯の本を閲覧し始める。
閲覧最中、フィリップの顔からは冷や汗が流れ出て、眉間にしわが寄る

そして数分後、フィリップは本を閉じ、目を少し泳がせつ

『閲覧は終了した』

と言った。

『どうした、フィリップ。顔色が悪いぞ』

フィリップの目が泳いでるのを見て翔太郎が声を掛ける

『いや、大丈夫だ。問題ない。』

それより、風森颯の情報を伝えるよ。』

動揺を悟られないようにフィリップはホワイトボードへと向き直った

『風森颯、本名は……風森勇樹。年齢18歳
今から約20年後の風都から特別に改造されたタイムメモリを使い
やってきている。』

『に、にじゅうねん!?!』

未来といえど4、5年だろうと考えていた亜樹子が思わず声を上げ
た。

『生い立ちは12歳まではごく普通。』

13歳で家族を石像にされ、その1年後、白い服の男にメモリとド
ライバーを貰い

16歳後半のとき、ガイアメモリ犯罪特別捜査官として警察に就職。

ちなみに「颯」とはその中の捜査で使う彼のお気に入り偽名だ。』

『ほええ…颯君、警察官なんだあ…ってことは竜くんの部下?』

亜樹子が感心しながら言うといリップは首を横に振る

『ガイアメモリ犯罪特別捜査官は、超常犯罪捜査課とは別々。』

簡単に言えばココでは照井竜「アクセルと言う事を警察は知らないが

アチラでは警察は風森勇樹「仮面ライダーと言う事を知っている。
そういう事だ。』

仮面ライダーとしてドーパントを倒す代わりに過去資料の閲覧や情
報の横流しを要求したギブアンドテイクだろう。』

『警察に身を売って情報を得て…か。4年も戦ってるなら俺達のとくらい小耳に挟んでそうだけだな。』

警察なら照井や刃さんやマッキーが居るんだ。紹介してもらってそうだが、

いや、照井が居るなら俺達が…』

翔太郎の言葉にフィリップは表情を曇らせた

『…確かに事務所を頼ることが出来れば短縮出来たかもしれない。けれど彼はこうするしか道が無かった。』

『道が無かった？』

翔太郎と竜が首をかしげるとフィリップは目を逸らす

『翔太郎、彼は未来から来た。彼のことを知ると言う事は未来の情報を知ることになる。』

そして本来ならば未来の事なんて知ることが出来ない今こうして僕が彼の本を読むのは、彼がこの時代の地球に存在し活動しているからだ。

もう、僕の口からは彼の情報は語れない
いや…語ることは出来ない。』

『どづいつ事だよ…急に渋りやがって』

『これ以上、彼の情報を求めるならば君達は』

覚悟が必要なんだ。』

『覚悟…って、何を覚悟するの?』

亜樹子が聞くと真剣な眼差しでフィリップは言う

『未来を受け止める覚悟さ。』

『未来を受け止める覚悟?これは颯の情報なんだろう?
何で俺達がそんな覚悟をするんだ?』

『…風森は本当ならきつと俺の指揮下に入るはずだ。
そして事情を知ったら必ず此処を紹介する。』

だが俺はしていない…。
そっか…なるほど…』

竜は何かを悟ったようで、静かに目を瞑った

『竜くん何か分かったの!?』

『照井?』

『いつからだ。』

亜樹子と翔太郎の言葉を無視し竜が言うとフィリップはそれを理解

し答える

『彼の年で言う5年前だ。僕達は邪魔な存在だったんだよヤツラにとつて』

『…だから来たんだな。風森は』

『かも知れない。』

『ちよ、おい！どういう事だよ、邪魔な存在とか、だから来た…とか。俺達にも分かるように説明しやが—』 『自分で考える。俺に質問するな』

竜が冷たく跳ね除けると翔太郎は「あーそうかよ」と不貞腐れる

『なら、俺は本人から直接聞くぜ。』

と翔太郎はスタッグを取り出す

その様子を見たフリリップが一言「無駄だ」と言った。

『あア？』

『無駄だよ翔太郎。彼に訊ねた所で彼がしゃべることは無い。』

風森勇樹は殻に籠り感情を押し込めることだけに閉じては天才的な男だ。

言うなればシエルボイルド――』

『シエルボイルド？つてなに。』

『彼の生い立ちを読み、僕が命名した彼の信条さ。

どんな自体が起きてても自分の心を貝殻のように硬く閉ざし、自分の心中は決して相手に見せず戦い抜く男』

『それってハードボイルドってヤツと一緒にじゃないの？』

『一見そう見えるが、自分が心を許した人物には熱を加えられた貝が口を開けるように簡単に心中を見せる。』

亜樹ちゃんも感じただろう？

君と照井竜に対する態度と翔太郎へ対する態度の温度差を。

だから彼のようなモノを僕はシエルボイルドと呼ぶ事にした。』

『…でも、俺は知りてえ。』

フィリップが亜樹子に説明したなかで
スタッグを持ちながら翔太郎が言う

『知ってどうなるって言うのさ。まさか君、場合によって彼の事を助けようとか考えてないよね?』

『……………』

『図星かい?やはり君はハーフボイルドだ。せめてシエルボイルドになりたまえ。』

彼は君のように情に流されやすいが自分の心は見せないよ?

彼がいるのは遥か彼方の未来だ

行く手段は別とし、今の風都はどうするんだい?』

『ああ。場合によっちゃ俺は未来に行ってアイツを助ける。』

例え未来でも街の人間なんだ。

涙を流しているなら俺が殻を割って……』

『無理さ。例え、風森勇樹が君に事情を話したとしても』

君に彼の涙は拭うことはできない』

『んだと……?どういうことだ!』

翔太郎が怒鳴るとフィリップは静かに言う

『貝殻を開くために必要なのは熱だからさ』

そう言うと翔太郎は完全に布団を被って黙ってしまった

『……………いいの？』

そんな翔太郎を見て亜樹子が言うと

『……………現在いまはこれでいいのさ。翔太郎がこのことを知ったら飛び出していきそつだ。』

とフィリップは言った。

『ふーん…俺の本、地球の本棚にあったんだ。未来だから現れないと思っただけ』

その翌日、竜は単独で勇樹の家に行ってきていた。勇樹に軽い生い立ちを知ったと竜が告げるが特に驚いた様子は見られなかった。

『お前がこの時代に来て「存在した」事になっているからだろう。そうフィリップは言っていた。』

『なるほど、…で？何処まで知った？』

コーヒーを差し出ししながら勇樹が問いかける

『お前の職業。仮面ライダーとして活躍した時期、本当の名前だ。』

フリーリップはそれ以降の事は

「俺達の未来に関わる」未来を受け止める覚悟がなければ打ち明けられないと話さなかった。』

『…家族構成とか言わなかったんだ。生い立ちなら載ってるかも知れないのに

ってか大袈裟だなあ…』

「喋ってもいいのに」とポリポリたるそくに頭をかく勇樹に竜が言う

92

『そう大袈裟でも無いぞ。』

左達のメンタルを思つての事だろう。

「風森勇樹の時代の風都には仮面ライダーが居ない倒された。」

と知ったら所長や左はショックを受ける。

フリーリップでさえも少し目が泳いで居たからな』

『…そつちの事か。』

ぼそりと勇樹が呟く

『なんだ？』

『いや、まあ…確かにな。でも照井さんはあんましショック受けてないんだ。』

『20年後だぞ。ショックはショックだが実感がわからない』

『あつそ。』

『それより、聞かせてくれ。お前の時代の風都はどんな状況にある。』

『どんな状況？うーん…ガイアメモリ犯罪が増えてるよ。俺が11歳の時に「泉」ってのが発掘されてそこから怪人が現れて…都市伝説だった仮面ライダーが街に現われるようになった。』

そんな状況。

20年後の風都は現在いまより仮面ライダーが浸透してるんだ。アクセルやWのぬいぐるみとか変身グッズとか玩具で販売されてたりW派かアクセル派か。で喧嘩してる子供達を見かけるし。

教科書にだって載ってる。

街を護る仮面の戦士だ」って。

そして鳴海探偵事務所も知らない人は居ないくらいだ。

「困ったことがあったら鳴海探偵事務所を頼れ」って言われるくらいね。」

事務所ごと街の希望になってたんだ。と勇樹が言う

左が聞いたら喜ぶだろうな。所長の父から受け継いだ事務所が街の希望になった。か。」

嬉しそうに口元を緩める竜と代わり勇樹は表情を曇らせた

「だから、消されたんだ。

街にガイアメモリをばら撒き、俺の家族を石像にした怪人によって。

表向きは探偵事務所が強盗に入られてそれを助けに入った照井さんごと死んだって事になってる。」

「…表向き、か。」

「ああ。表向きはね。

仮面ライダーが居なくなつた街は酷かった。

街の希望、鳴海探偵事務所の消失。怪人が現れてるのに助けに来ない仮面ライダー

街の人は不安と絶望感に襲われたんだ。

警察も照井さんが居ないからドーパントに対処できなかつたし
街の希望の消失の絶望感から犯罪に手を染める奴も現れたから大変
でさ』

一通り話せば言葉を失っている竜のほうを見て勇樹が訊く。

『べらべら話したけど平気?』

『…大丈夫だ。気にしなくて良い。』

『そ、ならいいんだ。』

『…そんな状態の風都をお前はずっと守ってきたんだな。』

溜め息と共に出る呟きに勇樹は苦笑し答える。

『「仮面ライダー」だから一応はな。』

でも俺は「仮面ライダー」じゃないのかも知れない。』

竜がその言葉に首を傾げると勇樹は続けた。

『敵は仮面ライダーを葬った事で悠々ガイアメモリを製造してる。』

だから俺が「仮面ライダー」を名乗って戦い続けてたらリアクションがあると思った。

一生懸命、仮面ライダーになろうとした。

最初は戦えなくて怪我したりして、それでも伝説の通り最後まで敵に食らいついて勝利したりでも、なんか違った。」

『どづいうことだ?』

『左達を観察してて思ったけど

本物は俺なんかより100倍カッコいいんだ。

街の人を守る為に一生懸命戦ってボロボロになってどんなに傷ついてもそれは愛する街を守る為に戦ってる証で表情に後悔が無い。』

『お前も仮面ライダーだろう。』

そう呟く勇樹に竜が投げかける

『何処がだよ。俺は今の生活が嫌でガジェットを使って逃げてきたんだぞ?。』

仮面ライダーはいかなる時も逃げない。そうだと?

こうしてる間にも街が危機に晒されるかもしれないこの状況に俺は部屋を借りてのんびり「普通」を満喫してる

あの風都には俺しか居ないのに俺は逃げてきた
大切な家族も投げ出して
コレの何処が仮面ライダーだ？」

力なく笑っては疲れ切ったように勇樹は溜め息を吐く

「…なら、1つ聞くが、お前は一生此処で生活するつもりだったか
？」

竜の突然の質問に勇樹は反射的に首を横に振った

「んなワケないじゃん！帰るつもりだったよ…。
俺が居なくなったら風都ドーパントだらけになるだろ？」

「…戦うつもりだったのか？」

「……………」

勇樹は視線を下に移す。

口を真横に結び、かみ締め、恐る恐る口を開き言った

「…ドーパントの魔の手から守らなきゃ街の人は死んでしまう可能性があるんだ。」

まして、俺の時代は此処に比べて治安が悪い

1日、1日

俺が逃げたことで救えたはずの命が消えてる

そう考えたら急に怖くなってきた。
だから戻ろうとは思ってる。』

苦笑しながら勇樹が言つと竜は少し低い声を出し訊ねた。

『…怖くなってきた？お前は街が嫌いなんだろう？

街の連中死んでもお前には関係ないんじゃないのか？』

竜は何気なく、その言葉を吐いた。どう返事が返ってくるか、
勇樹がどう答えるか、それによって竜は態度を変化させようとして
いた。

勇樹はどう答えるだろうか——そう考えていた瞬間

『…はっ！俺、なんで逃げてきたんだ？

こうしてる間にもドーパントになってる子供が居るかもしれないっ
てのに…俺は何を…そうだ、こうしてる場合じゃない！』

勇樹が突然目を見開いてそわそわとし始めた。

そして机の引き出しからエクストリームメモリのような鳥型のガジ
エットを取り出す。

『…行くのか？』

啞然とした竜がそう言つと

『今行かないでどーすんだよ！！え〜つと今がにせん…さんがつ…

』

鳥型ガジェットの背中のダイヤルをカレンダーをみながら勇樹は回しながら言う

『ま、待て。アパートはどうするんだ。解約しなきゃいけないんじゃないか？』

『アパート？照井さんが大家さんに話しつけてといてじゃ、俺、行くか——』待て、風森！ガジェットと荷物はどうする！——』

メモリをセットしようとした勇樹の肩を押さえ竜が言う

『あ。忘れてた……。さすがに荷物は整理しないとな』

クローゼットを開け旅行カバンを取り出し荷物を詰める勇樹その様子をみて竜はこめかみを指で押さえたため息を吐いた

一体、彼に何が起こったのか——
思い返してみても全然見当がつかない

『よし！準備完了、後は大家さんに話を……つけてくるかな。』

ただ、目に見える彼は吹っ切れた肩の荷が降りたような顔をしていた。

『というワケで風森は突然未来に帰った。』

勇樹がガジェットを手にし未来に帰ったのを見送った後、竜はその足で鳴海探偵事務所に向かい、未来の事務所の事は話さずにさつきまでの事を話した。

『ぶつつ！？何だそりゃ！！』

話を聞いた翔太郎は飲んでいたコーヒーを嘔き、フィリップは「興味深い」とニヤニヤ笑って、亜樹子はシャープペンシルの芯を折った。

『恐ろしいまでの行動力だね…』

本が閲覧できなくなるのが惜しいよ。とフィリップが言う

『でも勇樹君、肩の荷が降りたあゝって感じだったならいいんじゃない？私達と話してた時って暗かったし』

『正直、「誰だお前は」と言いたくなる。』

『それが本来の風森勇樹…と言う事なら君は彼の殻を破る熱量を持っていた、そういう事だね。凄いよ君は』

『…あの様子だと俺は関係ないんじゃないか？』

竜は苦笑しながら言う

『んで、お前の目からみての勇樹はどうなんだよ。「仮面ライダー」だったか?』

デスクの椅子でぐるりと回りながら気だるそうに翔太郎が言う

竜は一度口元を緩め

『…俺に質問するな』

と言った。

そんな日常が流れる鳴海探偵事務所に
再び風森勇樹がやってくるのは一カ月後の事である。

Cは動く／その行為に意味があるならば…

風森勇樹が未来に帰ってから一ヶ月が過ぎた

季節は桜の花が咲き始める4月。

一か月前の偽仮面ライダー事件以来、ドーパント事件は奇跡的に起こっていないかった

その事を心の底で喜びながらコーヒーを啜っているのだが、現実、そううまくいかないものである。

「コーヒー飲んでいる暇があるなら働きなさいよ！今月も火の車なの」

と亜樹子にそんな優雅な（ハードボイルドともいう）時間を邪魔され、

反論をしようと立ち上がったその時、

事務所のインターホンが鳴った。

『あ、はい。どうぞ』

亜樹子の声に導かれるようにドアノブを捻ったのは20代前後の清楚な女性だった。

『あの、依頼…いいですか？』

そう呟いた女性の名前は「宮村 皐月」「ミヤムラサツキ」
風都の小さな企業でOLをしている女性らしい

『宮村さんですね？それでどういった依頼を？』

そうペンを持ちながら亜樹子が訊ねると臯月は言った。

『私の御爺ちゃんが動かないんです!』

臯月は身を乗り出して興奮気味に言った。

彼女はおじいさんと二人暮らしなのだが、今朝、早起きのはずの祖父が

起きて来ないので様子を見に行ったらお爺さんが固まっていた。

と言うのだ。

『おじいさんが固まっていたって単純にしぼっ…』

「死亡してたんじゃないのかい?」横にいたフィリップが何のけなしに咳こうとしたのをフィリップの口を亜樹子が慌ててふさぐ

《ちょっとフィリップ君、何言ってるのよ。》

デリカシーなさすぎ。と亜樹子

《いや、だけれど「固まっていた」と言う事は死後硬直という可能性も…》

《いや、それなら臯月さんは病院に行くだろ?こりゃきつと…》

『この事務所がそういつ奇怪な事柄も聞いてくれるっていつので…』

お願いです。警察は話を聞いてくれなかつたんです。祖父を助けてください。』

臯月に頭を下げられ、翔太郎たちは臯月の依頼を引き受けることとした。

まず、翔太郎と亜樹子が行ったのは現地の調べである。

依頼人、宮村臯月の家はごく普通の一軒家だった。

『ここが私の家です』

そう、臯月は扉を開けて家の中へ翔太郎達を通した。

『家自体は普通だね』

亜樹子はバットショットで現場の写真を撮る

ここでそんな爺さんが固まるなんて事件が起きないだろう
そう思えるほどに部屋もごく普通。何ら変わりはないかった。

『ここが祖父の部屋です。』

そう臯月がゆっくり扉を開く。

祖父が居る部屋、と言うだけあり畳が敷いてある和風な部屋だった。

部屋に入ると布団が敷かれており、そこに一人の白髪交じりの男が
目を見開き、手を伸ばしたまま

文字通り固まっていた。

『わわっ！？』

固まるとは話に聞いていたが目を見開いて死んでいるかのような姿に亜樹子はびびる。

『…予想してたより凄いなこりゃ。』

『今朝からこうなんです。し、死んでないですよ？』

脈拍もありますから…

と皐月が言う

翔太郎は御爺さんへ近づき首筋の脈を確かめる。

皐月の言うとおり脈はある。

そして体温が感じられた。

『脈もあつて体温も感じられるのに固まっている…か。』

こりゃ確かに怪しいな。』

皐月は俯き、震えていた。それに気が付いた翔太郎は考えることを止めて

皐月の肩にぼんと触れる

『心配しなくてもいい。アンタの御爺さんは俺達が必ず助ける。』

大丈夫だ。と言えば皐月は少しだけ安堵の表情を見せる。

『探偵さん…』

そこへ亜樹子がおじいさんの写真も撮りながら自分の胸をたたいた。

『うん！この依頼、しっかり私達が受けますから、臯月さんは安心してください。』

こう見えても翔太郎君はやる男ですから！』

バットショットで御爺さんの写真を撮った後、翔太郎は臯月を亜樹子に任せてスタッグフォンで現状をフィリップに報告する
ガレージで報告待ちをしていたフィリップは「待っていました」と言わんばかりだった。

《遅いよ翔太郎。それで宮村臯月の御爺さんはどんな状態で固まっているんだい？》

『それが、石像や人形とかなったような感じじゃねえんだ。』

《…脈拍もあり、息もして、体温が感じられ、生命活動を確認できるのに硬直したように動かない。なるほど、それは興味深い。》

『バットで撮った写真を送る。検索を頼めるか？』

翔太郎が言うとフィリップは「ああ」と返事を返した。

亜樹子と翔太郎が事務所に戻ってきたのはそれから数時間後の事である。

フィリップからの検索の報告を聞くため真っ先にガレージへ行くと、竜が先に入っていた。

『例の事件で検索か？』

翔太郎がそう言うと竜は静かに頷いた

『ああ、ここ2、3日、人間が動かなくなった——』という事件が相次いで起きている
左達にも依頼が来たようだな』

『それで、お前たち側の情報はどうなんだよ。俺たちは被害者の様子見てきただけで
前後関係わかんねえんだ。』

『今、フィリップには言ったが、謎の硬直事件は左達の依頼の件以外に4件発生している。

被害を受けたものには長い針と短い針の痣ができる。

そして被害者の共通点は全員が悪質な地上げ屋や暴力団の人員だった。と言う事だ』

『つまり、その犯人は街を汚すものを片端から成敗してるっつー事か。』

翔太郎がなるほどと言えば亜樹子は慌てて否定をする

『でも、臯月さんのお爺さんはそういう道の人じゃなかったよ?!』

『今回襲われたのは市民なのか。そうとなれば早く犯人を見つけないとな。』

その行動に移れるのは目の前のフィリップが検索してからののであるが

今までは正義のために使っていたかもしれないが、毒素に吞まれてしまっているのかも知れない
急いだほうがいいと呟く

その後、フィリップが本を閉じた

『検索が完了したよ。一気に二つの項目を調べ上げたから時間がかってしまったが』

「すまない」と述べた後フィリップはホワイトボードに情報を書き込む

『まず、メモリの特定だけれど、犯人が使っているメモリは「clock」時計の記憶を秘めたガイアメモリだ。』

『クロック？時計って…どういうことだ？』

翔太郎が呟くと「それを今から説明する」とフィリップはペンを滑らせた

『最初翔太郎から話を聞く前僕は人形路線で検索を独自に進めていたけれど、

翔太郎からの情報と送られてきた写真を見てキーワードを変更したんだ。

人が人形のようになるならば鼓動は感じられても体温は感じない。
また石化したら鼓動すら感じられない

人形以外で人が固まるという現象はどういった場合起こりうるか

翔太郎からスタッグを通し送られてきた写真を見てふと思い浮かんだんだ

「時が止まればその人の行動も静止するんじゃないか」って

『それが当たりだった。そういう事か。』

と竜が言う

『かなりこのメモリは厄介だよ

クロックの能力は直接的な時間は変えられないけど

「物体の時間を止めたり早くできたり」する事ができる。

分かりやすく言うなら

「朝」と言う時間に対し能力を使っても「夜」になるけど

咲いている花に能力を使えば能力を解除するまでその花は咲いている。

もっと言えば、トライアルが遅くなったり、ルナの追尾弾が遅くなったり

ガラスの破片が落ちてくるのが遅くなったりする。そういう能力だ

フィリップの説明に亜樹子が口をいれる

『つてことは翔太郎君と竜君が攻撃を受けて時間を止められたら
終わりつて事？』

竜君にもその能力効くの？』

亜樹子が言うとフィリップはうなずく

『クロックドールパントが扱うのは「物体の行動の時間」

照井竜が効かない精神干渉は「人の心」に作用する能力。だから今
回のは違う』

『ど、どーしよう・・・それならもし、二人が固まっちゃったら勝
ち目無いじゃん！』いのしようしや

事の重大さに亜樹子はネガティブな発言をする

『心配すんな亜樹子、そんなへま、絶対しねえよ。

なあ、照井』

『ああ。そんな間抜けなことにはならない。安心してくれ所長』

自分たちも少しばかり危機感を感じていたが、自分たちがやらねば
ならぬという正義感が

彼ら突き動かしていた。

『それで、メモリの犯人なんだが、さっき照井竜からの被害者の情
報を検索し

一人だけ人物が浮かび上がったよ。

ここ一か月、被害者に強制的な地上げを迫られた男が居る。』

クロックメモリの使用者その名は

「廻里伸也」メグリシヤ

そう、フィリップはホワイトボードに書き込んだ

『廻里、伸也』

翔太郎が名前を繰り返すとフィリップはそのまま説明を始める

『廻里伸也は風都、風花西区の3丁目でからくり時計、柱時計と言ったたくさんの時計やアンティークな家具を店に配置し、お客様に楽しんでもらう「時計喫茶」と言うものを営んでいた。

マスターは時計の修理なんかもやっていたからそれなりにお金が入っていた。』

『それを妬んだ地上げ屋が店にやってきて立ち退きを命じた。』

『そして、廻里さんはガイアメモリを何処かで入手し、復讐した。

そういう事か？』

竜と翔太郎がフィリップの説明に補足的に付け足すとフィリップは頷く

『でも、じゃあなんで臯月さんのお爺さんを襲ったりしたの？お爺さんは全然関係ないじゃない』

それがそうなら、と亜樹子が言うとフィリップは本のページをめくる

『それがね、そうでもないんだ。宮村臯月の祖父は廻里伸也とトラブルを起こしている。』

『トラブル…？』

と三人が反応をする

『宮村皐月の祖父は猫を被った地上げ屋に

「時計の音がうるさいから近所迷惑だ」と訴えてほしいと頼まれて店にクレームをつけた。

時計には決まった時間に音楽の奏でるからくり時計とかあるからお爺さんは怪しまなかつたんだろっね』

『じゃあ、お爺さんは利用されて？』

『お爺さんは穩便に済ませたかったようだけど、廻里伸也は連日のように脅してくる地上げ屋に参ってしまっていた。』

『な、なら、その廻里さんを脅してる悪質な地上げ屋をとっ捕まえてメモリから解放してあげようよ』

ほら、今すぐ！と亜樹子はやる気を見せたがフィリップは首を横に振る

『それはまだ不可能だ。』

『ど、どうしてよ！その嫌がらせが止めば廻里さんがメモリを使う理由なんてないじゃない

そうしたら簡単にメモリを…』

『その地上げ屋を仮に逮捕したとしても、「お礼参り」と言うものがある

その地上げ屋のバックが大きなものであった場合、口封じに「廻里

伸也を殺す」なんてこともあるかもしれない。

だからその前後関係がハッキリするまでは彼をメモリから救うことができてモ地上げ屋――』

『なによそれ!』

フィリップの言葉に亜樹子が声を荒げた

『前後関係とか気にしてる場合じゃないじゃん! こうしてる間にも廻里さんは苦しんでるんだよ?』

逮捕ができないとか

それじゃあ、またメモリに手を出しちゃうよ!!』

亜樹子が泣きそうな顔で訴えると竜が一つ深いため息を吐いた。

興奮気味の亜樹子であるが、言っていることは正論だった。

その元凶を絶たねば、また同じことになるであろう

彼を助けたいのであれば元凶を絶つ。これが最善である。

『わかった、所長。俺が何とかバツクを洗ってみよう。左達は先に店に行っていてくれ。』

と竜はガレージを出ようとした。

『ちょっと、待てよ。調べんならフィリップの検索でもいいだろ?』

『廻里がドーパントになったらフィリップは戦うだろう。』

そうなつてはるくに調べられないんじゃない。それに署のほつがどれくらい勢力なのか分かる

何かあったら連絡をくれればいい』

「そういわれてもな。」と腑に落ちない様子の翔太郎だが

『ほら、翔太郎君、竜君が調べてくれるって言うんだから行くわよ
!!!』

亜樹子が半ば強引に腕を引っ張りガレージを出て事務所を後にした。

『ま、待て亜樹子、店の場所わかんのか？オイ亜樹子!』

風都風花西区3丁目

時計喫茶「アンティーククロック」

フィリップから店の場所を聞いた亜樹子と翔太郎は店の中に入った。

洋風な物静かな雰囲気の大人数びた内装に

柱時計から壁掛け時計まで種類は少ないがおかれている。

今は午後3時

昼を過ぎた時間帯だが、1人、お客さんがカウンターにいた。

『いらっしやい。席、空いてるよ』

店に仕掛けはないか、と目を凝らしていた翔太郎に

マスター廻里が声をかけた。

『いや、俺たちは——』

客じゃなく

そう言おうとした瞬間、亜樹子が人形が踊っている装飾がついた柱時計の傍に行っていた

『うわ、この時計可愛い〜』

本格的なからくり時計を見るのは初めてなのだろうか、亜樹子は目的を忘れて時計に魅入った。

『綺麗な時計だろう？その時計はシンデレラをモチーフにしたからくり時計なんだよ？』

廻里が亜樹子の様子に「ふふっ」と嬉しそうな笑みを浮かべて時計をいじり12時になると

オルゴールが鳴りガラスの靴が鳩時計のように飛び出した

『が、ガラスの靴が飛び出してきた。すごい。』

感心して手を叩いた亜樹子を翔太郎は呼び止め、小声で言う

『何感心してんだよ。俺たちの目的は——』

『なにって、すごいじゃない！こんなにたくさん時計私見たことないよ。』

廻里さんはいつからこういった時計を集めてるんですか？

あ。コーヒーください。』

当初の目的をすっかり忘れた様子の亜樹子に翔太郎は米神を押さえ

て頭を抱えた。

(まったく亜樹子のやつ何やってんだよ……)

こうなりや俺が――

と翔太郎が意を決し、亜樹子用のコーヒーを用意しようとしていたとき、

喫茶の扉が乱暴に開かれた。

『どうもこんにちはマスター廻里さん。』

扉を叩いたのは

絵に描いたような黒いスーツ姿にこつい指輪や金ぴかのアクセサリをつけて小太りな男だった。

それを見て廻里は溜息を吐いた。

『やれやれ、困ったものだねえ…せつかくお客さんが時計を鑑賞しているのに』

『困るのはどちらでしょうね、廻里さん。無許可で店を出して、客だのなんだの言ってもらっちゃ』

小太りな男は堂々偉そうに言った。

『営業許可書なら10年前に出してますよ。貴方たちこそ何べん言えば分ってもらえるのですか』

『ほほお・・・？俺らにそんな口たたいていいと思ってんのか？』

小太りな男が挑発すると亜樹子がスリッパでその男の頭を思い切り叩いた。

『アンタいったいなに様よ！営業許可書あるって言ってるならおとなしく引き下がらなさい！！』

貴方たちなんかね逮捕してやるんだから！…竜君が。』

『そういうこつた、照井がお前を逮捕する。おとなしく引き下がらな——』

翔太郎は亜樹子を背に庇い言い放つ
すると小太りな男は豪快に笑った

『廻里さん、アンタボディガード雇ったのかい？』

随分とひよろいボディガードだなあ
そんなに店を手放したくないのか？』

『その人たちはただのお客様ですよ。とつても…お優しい心を持った
お客さん、すみませんね。今日は終わりです。』

帰っていただけますか？

そう廻里が言つと小太りな男はまた笑う

『素直に俺が客を帰すと？』

パチンと男が指を鳴らすとどこからか現れた男たちが翔太郎達を取り囲んでいた

『うわわっ！？しょ、翔太郎君…』

『ちっ…亜樹子、下がって——』

翔太郎が身構えた瞬間

【CLOCK】

と言うガイアメモリの始動音が鳴り
時計の針が腹に描かれており、手に目覚まし時計のような小型の時
計を持ったドーパントが姿を現した

『ははっ、着ぐるみを着たって無駄だぜ？』

『黙れ。』

そうドーパントが言う和小太りな男達に光を飛ばす
その光は時計の長針、短針の痣となり
ドーパントが手に持っていた時計の秒針を止めると、男たちは静止
したように動かなくなった

『さあ、お客さん、今のうち外へ！』

そう呼びかけたクロックドーパント、廻里は今度こそ外へと促した。
店に一人の客もいることからおとなしく指示に従った翔太郎達は
ふとここで思った

(廻里さんは毒素に吞まれていないのか?)

1人のお客が走って遠ざかるのを見守っていると
向こう側から黒いスーツの男がやってきた。

『喫茶の店主が怪物になるって言う噂は本当だったか
まあ、仕方ないでしょうね。怪物が相手じゃ…でも我々は遂行しな
ければならない
もう一か月も待った。強制退去に移らせてもらおう』

【CANNON】

『地上げの方にもドーパントがいんのかよ!』

「下がってる亜樹子」と亜樹子に翔太郎が言うと

「言われなくても下がるわよ」

と亜樹子は物影に隠れた。

それを見送った後、翔太郎はWドライバーを腰につけた

『フィリップ、変身だ』

《ああ。

まさか地上げ屋にもドーパントが居たとはね……

事態は僕たちが思っていたものより深刻らしい。気を引き締めてい
くよ。》

【CYCLONE】

【JOKER】

『変身!』

電子音の後、翔太郎はWへと変身する

その様子をクロックドーパーント、キャノンドーパーントは見ていた。

『仮面ライダーだったんですね。その帽子のかた…』

クロックドーパーントはドーパーント態のまま物影に隠れていた

『仮面ライダーか。仮面ライダーさんが俺たちになんのようにだ?』

Wと対峙したキャノンドーパーントもWを見て反応する

それぞれの反応の中、Wは口を開いた。

『…「なんのよう」だと?』

そいつは最初から決まってる。

風都を泣かせるアンタ達を倒しに来たんだ。特に…アンタをな。』

Wはキャノンドーパーントを指差す

『なぜ俺を?そこの廻里も怪物だろう。』

と鼻で笑ったキャノンドーパーントへWが続けて言う。

『廻里さんに強制的な地上げを迫り、怪物にしたのはアンタだろ?』

『はっ、何を言うかと思えば、それが俺の仕事なんだ仕方がないだろっっ。』

キャノンドーパントは悪そびれた様子もなくそう言うと口の先についた砲台から鉛の弾丸を撃ち出した。

『おわっ！？』

Wが間一髪で避け、その砲弾が当たった場所を目で追う。砲弾が当たった壁は深く抉れていた。

『あんなの食らったらお陀仏だな…』

引き気味の翔太郎へフィリップが能力分析をしよう。

《奴はキャノン——砲台の記憶を秘めたガイアメモリを使っている。口や手から大小、そして弾丸の硬さを自由に变化させて撃ち出すことのできる能力がある。遠距離型パワータイプだ。

ここはサイクロンジョーカーでは明らかに不利だよ。メモリを変えよう》

『なるほどな。なら、一気にこいつで攻めるか。』

Wはヒートメモリとメタルメモリを取りだしフォームチェンジするメタルシャフトを振り回したWにキャノンドーパントは弾丸を撃ち出す。

それを避けながらキャノンドーパントへとWは向かっていった。

風都を救う仮面ライダーの存在を廻里伸也はラジオで知っていた。ラジオはお客との話題にも繋がるし店の雰囲気にも合って居たからである

風都を守る仮面ライダーがまさか本当に存在しているとは廻里は想像もできなかった。

そして何より、事情を知っていた

『何故、仮面ライダーは私を攻撃しない？』

店の近く、ドーパント態のまま戦いの様子を伺っている廻里は呟いた。

別に二対一を望んでいるわけではない

ただ、

「アンタが廻里さんを怪物にしたんだ——」

彼の言葉が胸に残っていた。

客が居る前でも振る舞いを変えない地上げ屋のせいで客足は遠のいた。

自分がいくら権利を主張してもそれを受け付けないそいつらをほんの少し懲らしめてやろうと偶然手に取ったガイアメモリと言う代物

「CLOCK」それは時計の記憶——

1からくり時計に魅せられてから、時計を眺められるような喫茶が開きたいと願い
夢を叶えた自分にとっては運命だったのかもしれない。

交渉と言う名の脅迫をぶら下げてきた男を片端から静止状態にし、
大好きなこの店の時間を守ろうとした。

そんなすべての事情を仮面ライダーが分かるはずもない
けれども彼はそう言った

『お嬢さん。何故、仮面ライダーは私を攻撃しないんだ？
私は例え店を守るためとはいえ人を…』

物陰に隠れて様子を見ていた亜樹子へ廻里は語りかける

『えっ……？』

突然のことに亜樹子は驚いた
廻里はドーパントになっているにも拘らず、毒素に吞まれているよ
うな症状が見られなかったのだ
毒素に蝕まれているならば自分の行いをこつも振り返ることなどは
できない。

『そ、それは…しよ、翔太郎君、…ううん。仮面ライダーが情に脆
い半熟だから』

なんんと言えはいいのだろうか、自分の発言が毒素の進行を助長し
てしまうのでは？

と亜樹子は曖昧な答えを返す。

ドーパント態の廻里は「そうか…」と短く答えた

『あ、でで、でも！』

ガイアメモリから貴方を助けたいって気持ちがあります！

ガイアメモリは大きな力があって、じよ、徐々に吞まれていくんです。麻薬みたいに

今ここで貴方を倒しても、何もならない。

仮面ライダーは貴方に心からガイアメモリの依存を断ち切ってほしい！

だから…』

仮面ライダーとしての意志なのか亜樹子の思いなのか

ごちゃ混ぜになったその言葉を聞いて廻里は暖かいものを感じた。

『私に心から依存を断ち切る為に…』

廻里は亜樹子の言葉を聞いてメモリの能力を解除するべきか、そう悩む心が生まれ始めていた。

その頃、展開していたWとキャノンドーパントの戦いはWが追い詰められると言う形になっていた。

メタルシャフトを振りかざし戦ったキャノンドーパントの身体はとても硬いのだ。

『メタルで傷がつかないなんてなんて硬さだ…』

メタルシャフトを持つ手を緩めながら翔太郎側が眩く

『おらおら、どーした？俺を倒して廻里のヤローを助けるんだろ？
助けてみるよ。』

『調子に乗りやがってちくしょう！』

《翔太郎、熱くなつては駄目だ。冷静に行かないと》

こいつを倒さなければ…

フィリップは段々、キャノンの挑発的発言に気が短くなっていく翔太郎を宥めながら策を考える

『もう、いい加減にしてくれよ。此処の店をつぶして俺のノルマは
終わりなんだ——』

からよっ！

といつまでも続くWのしつこい攻撃にしびれを切らしたキャノンは
街一面に小さめの無数の砲弾を口と手から吐き出した。

『なっ…！？』

《まずい！これじゃあ街が！》

Wはルナとトリガーにメモリを入れ替え、砲弾に向かって銃弾を撃ち込む

だが、ルナの追尾弾はキャノンドーパントの砲弾をを全て打ち砕くことは出来なかった

『つくそ、手が足りねえ！』

撃ち出すスピードと落下スピードが折り合わなくなり翔太郎が思わず呟く。

そのときだった。

落下していた砲弾がゆるりと動き始め、動きを停止した。

Wはその現象に目を疑った。

そして瞬時に理解した。廻里がやったのだ——と。

彼が何故援護してくれるのか、二人には不明だが

『…助かった！』

Wはこの機を逃すことはなかった。

即座にトリガーにルナを挿しこみマキシマムドライブを発動させる。

【ルナマキシマムドライブ】

『トリガーフルバースト！！』

浮いている砲弾をすべて撃ち抜いた。

『…廻里い…貴様アああ！！』

終わりにするはずだった渾身の攻撃を横やりで潰された事に
ブチ切れたキャノンドーパントは店へと標的を変えた。

無数の大小様々な砲弾を店へ降るように仕向けたのだ。

『なっ、てめっ……』

当然のことながら廻里はその能力をフルに発揮し店に降りかかる前
に砲弾を止めた

こう、メモリを使つては毒素に吞まれてしまう――

この能力を無効にしようかとマグナムを構えたWの背後、亜樹子の悲
鳴が聞こえた。

廻里が自分の首を押さえ、突然苦しみだしたのだ。

『廻里さんっ……!』

Wが駆け寄ろうとした時、クロツクドーパントに火花が走り、小爆
発を起こし、廻里のメモリが強制的に体外へ排出され、廻里は人間
の姿へと戻った。

メモリブレイクとはならなかったが地面に転がったメモリからは煙
が吹き上がっていた。

『廻里さんツツ……! 一体なにがあつたつて言うんだ。』

翔太郎が呟くとフィリップが説明をする。

『力を使いすぎたんだ。彼の体力ではもう限界だった。そういう事
だ』

メモリブレイクは行われていないが衰弱状態の廻里は煙をあげるメモリを手に握る

そう——たった今、「CLOCK」のすべての能力が解除されたのだ。

Cは動く／流れゆく時間の中で…

【CLOCK】

壊れたような鈍い始動音がメモリから響いた。

廻里は再び自らの肉体にメモリを挿そうとしていた。

『め、廻里さんッ！！これ以上メモリを出しちゃダメ！！』

その行動に気が付いた亜樹子が身体を張って掴み掛り止めようとする当初の目的を持って、怒りや憎しみと言った強い感情で見境なく人を傷つける。

それがガイアメモリの毒素の特徴、そう考えていた。

『止めるな！私には…っ…わた、には…の店…が

あの、…せに…は思い出が…るんだ。』

『でも、これ以上やったら死んじゃうよ！』

『止めたいんだ。止めさせてくれ！』

廻里は亜樹子を興奮したように振り払う

すでに砲弾は店を貫いていた

その現状を理解しながらも廻里は足掻いていた。

『っ…安祐美「アユミ」』

廻里はそう呟き、砲弾の雨で崩壊していく店を眺めていた。

『てめえ…なんてことしやがる。』

廻里が崩れたのを見てWはキャノンを睨んだ

『俺は俺の仕事をしたまでだ。』

キャノンは堂々とやってのけた

『あの店にはアンタの仲間も居ただろ！？それを…』

きつとあの様子じゃ全員助からない

そう翔太郎はキャノンへ怒りをぶつけた

するとキャノンは何が面白いのか「ふふっ…」と笑った

『仲間ア？はっ、あんなのただの同業者だ。不慮の事故とかで死んでもらったほうが
逆に助かる。』

このヤマは俺が全部手柄を取れるからな。

っはは…しかし、廻里の奴も哀れだな。肝心な時にメモリが壊れるとはよ
』

腹が痛い。とわざとらしく大げさに腹を抱え笑う仕草を取るキャノ

ンに
翔太郎はわなわなとこぶしを震わせキャノンドーパントを殴り飛ばした

手からは「ミシッ…」と言っ音が響いた

『今ので、拳イッたんじゃないの？』

『何、笑ってやがる…あの店は廻里さんの大切な物だった。怪物になってまで守りたいと思った大切な店なんだ！それをよくも…よくも！』

『俺が悪いのか？いや、違うな。俺を早く倒せなかった
「仮面ライダー」アンタが悪いんだよ。

《翔太郎、もうコイツに好き勝手させちゃいけない。エクストリームで勝負だ！》

感情的にフィリップが叫び

Wはエクストリームメモリを呼び、

サイクロンジョーカーエクストリームへとフォームチェンジする

プリズムソードを構えてエクストリームはキャノンドーパントへと対峙した。

『お前は絶対、俺達が許さない。
さあ、お前の罪を数えろ。』

「ねえ、貴方、また時計を見ているの？貴方って本当に時計が好きなのね」

廻りは崩壊していく建物を見つめていた

支える亜樹子の声も体温も何も感じない、すべてが喪失した感覚の中、

昔の記憶が蘇っていた

自分には妻が居た。

自分の趣味に没頭ばかりしている己を好いてくれる物好きな女

惚れたのは自分でプロポーズも

「一緒の時間、トキを刻んでください」なんて言うてみたりして

彼女のが喫茶店を経営していて自分は冴えない時計技師。

婚約するなら自分はその喫茶を手伝わなければならない
そう感じていた。

だが、妻は「一緒の時間を刻むんでしよう？」と二つを一つにした。

自分の趣味と妻の稼業、二つが一つになって生まれた店は細やかな
がらも幸せだった

けれど妻は3年前に交通事故で帰らぬ人となった。

妻と山へ行った時だった

登山コースを歩いていて懐中時計を落としそれを追いかけて、足を滑らせたのだ。

すぐに病院に運んだが打ち所が悪く亡くなった。

彼は落ち込んだ。

そして、喫茶店を一人で経営していくことを決めたのだ

『安祐美っ・・・安祐美ッ・・・』

この街の仮面ライダーが拭うべき涙が地面に落ちた

『廻里さん・・・』

亜樹子はその背を擦っていた。

『私は・・・だ、守りたかった、だけなのに・・・』

大切な

思い出を留めたかった

廻里が涙を流していると一人の黄色いパーカーに身を包んだ男がや

ってきた

『そんなに、泣かないでください』

パーカーを深くかぶり顔を見せないようにしている男は廻里の前にしゃがむといきなりそう呟いた。

ヘッドホンを付け、アクセサリーも派手なものを身に着けた男はこの場に相応しくない身なりで、空気の読めない発言をした。

『君は、誰だ。』

『今、貴方が時を止めても、あの店が潰れるのが遅くなるだけだ。そのこと事態は無くなりはありませんよ。』

男はそう言うと言葉を続ける

『止めたって貴方の店は潰れるのが遅くなるだけだ。完全に無くなるわけじゃない。

時間は止まらない。

ずっと流れて、流れ続ける。残酷と思えるくらい』

『もう、ほっておいてくれ…』

全て分かっている』

廻里は自身を抱きしめ呟いた。
そんな廻里に男は続けた。

『それでも歩いて行かなきゃいけないんだ。立ち止まっちゃいけない
…起きた出来事（過去）を変えることは許されない。』

「現在「イマ」を永遠に留ることも適わない。」

それでもどうして時間が流れるか、分かりますか？』

男が問いかけると廻里は首を横に振った

『それは、「未来」へ歩くため、進むためです。』

同じ過ちを繰り返さないように…「現在「イマ」を作っていくため
です。』

『それが本当なら…私の未来は絶望だよ。何を糧に生きればいい？』

自嘲げに廻里は呟いた

『いいえ、違います。』

男は廻里の言葉を一蹴した。

『貴方の未来は絶望なんかじゃない』

『っ、さっきから黙って聞いてれば何様なのよアンタ！ただの野次

馬がそんな無責任なことを言っ
て…廻里さんをこれ以上苦しめないで！」

そう言い切った男へ亜樹子が我慢がなくなり怒鳴った。

『大丈夫、この人の未来は俺が変える』

この俺がこの風都にいる限り、この人のゴールは絶望にならない
いや、俺がさせない。』

男は背を向けるとパーカーを脱ぎ捨てるとロストドライバーを取り
出す

そして懐から赤いメモリを取り出し、始動させた

【ACCEL】

『アクセル！？ちょっと、アクセルってどういつこ——』

メモリとドライバーを構えた驚きで目を見開いていた亜樹子が驚き
の声を上げ、立ち上がり近寄ろうとする。

『来るな！時間が無いんだ…。』

男は大声をだし亜樹子を止めるとメモリをドライバーに挿した。

【ACCEL】

『変身っ！』

電子音の後、青年の体は粒子に包まれ赤いアクセルを形成した。全身が赤に包まれ変身完了かと思われたが、赤いアクセル姿も粒子となり破裂し

Wのような細いフォルムにアクセルの特徴が強い（トリアルに似たような）黄色いアクセルが姿を現した。

『黄色いアクセルって、えええ！？』

亜樹子が知っているアクセルは真っ赤なボディである。

だが、目の前のアクセルは少し細めで黄色。

口をあんぐり開けているとそんな黄色いアクセルはメモリを抜き取り信号機のメモリを取り出す

【TRIAL】

黄色いアクセルがそのままメモリを挿すとピッ…ピッ、というトリアル特有の電子音がする。

男がトリアルを挿すと再び赤い粒子が身体を包み黄色へ変化する、そして青を形成しようとした瞬間

ビビッー！！

と言う耳をつんざくような音と共に黄色いアクセルを包んでいた青い粒子が破裂しアクセルトリアルは一気に赤へと逆戻りし、定着した

『ええええっ』

真っ赤なアクセルトリアル

ちなみに瞳（シールド部分）は青である
つまり、ただの細いアクセルである

『なにコレ…私聞いてない。』

赤いトリアルは何も言わずにそのまま店へと突っ込んでいった。

一方、Wとキャノンドーパントの戦いは終幕に近づいていた。
エクストリームと言う最大の力もあるが翔太郎、フィリップの正義
の心がエクストリームの力を増大させていた

『ぐっ…、貴様、いきなり強く』

『いきなり、だア？俺はもともとから強いぜ、特にこの街を泣かせたやつにはな！』

「そろそろ観念しな」

とエクストリームはプリズムビッカーに「ヒート、ジョーカー、ルナ、サイクロン」を挿し込む
それを見たキャノンは逃げようと踵を返した

『待て逃げんな…！』

【ビッカーファイナルイリユージョン】

プリズムの盾から光線が発生し、キャノンドーパントは逃げる
ことができずにそれを食らった

キャノンドーパントはメモリブレイクされ、男が一人地面へ伏した

『…こいつは組織がどうであれ、逮捕してもらわなきゃな。』

スタッグを弄り、竜に報告をしていると亜樹子がこちらに向かって走ってきた

『しょ、翔太郎くーん!!!』

『亜樹子、お前、廻里さんは――？』
『そ、それどころじゃないよ！
！あ、アクセル！！アクセルが黄色くなって青くなって赤くなって
!!!』

興奮状態の亜樹子は早口で訴える

『は？アクセル？照井の奴が来てるのか？』

『そ、そうじゃなくて、赤くて黄色くて、速いの!!!』

《あ、亜樹ちゃん、落ち着いて？照井竜が来ているのかい》

『と、とにかく来てよ!!!』

そう言ってWをただの瓦礫の山と化した引っ張ってきた。

『じりゃ、ひびえ』

『じ、ここに赤いトライアルが…』

亜樹子の興奮が一気に冷めた

『嘘……』

『亜樹子、大丈夫か？廻里さんの事は俺達に任せて先に事務所に……』
妙に自信たっぷりの赤いトライアルも瓦礫の下なのか、亜樹子は目の前の光景に言葉を失っていた

《翔太郎の言うとおり今日は先に――》

そう、フィリップも続けた直後、瓦礫の一部が動き、中から黄色いアクセルが現れた。

『ああーっ！黄色いアクセル！アレだよ翔太郎君！』

『なあああーっ！？何で黄色いアクセルが此処にいたんだよ！』

《黄色いアクセル、照井竜は今ここに向かっていて。となればアレは別人がなったアクセル
そういうことだね。何故黄色なのか分からないけれど》

Wが驚いていると黄色いアクセルは地上げ屋の人々を乱暴に引っ張り出し、

次に3つの柱時計を引っ張り出した

そして廻里とWのもとに足を踏み出した

『……大口叩きましたが、ごめんなさい。他の時計は間に合いませんでした。』

『…………』

廻里は無言で変わり果てた店を見ると瞳が大きく揺らいだ

『あの、時計は——』

廻里が見つけたのはシンデレラをモチーフに作られたからくり時計だった

その時計を目にした途端、廻里は「十分だ。」「十分だよ」と呟いた。

それを見て黄色いアクセルは深く頭を下げた

そして横にいたWへと目を向ける

『仮面ライダーW、あとは頼んだよ。残念ながらあの男たちは全員命を取り留めてる。』

きつちりこの罪を償わせてやってくれ』

パトカーの音が聞こえるとアクセルは後ろを向き歩き始めた

『おい、アンタ……いつたい。』

翔太郎の声にふと、アクセルは足を止める

『俺？俺は——』

『左！フィリップー！』

パトカーの音がやみ、竜がこちらに向かって走ってくる

それを見てアクセルは逃げ出すように走って去って行った。

この後、地上げ屋は警察病院へと搬送され廻里さんも病院へ搬送された

怪我が治り次第、地上げ屋は正式に逮捕され後にそのバツクの組織も近々逮捕に踏み切るらしい。

そして廻里さんは、依頼人のお爺さんも元に戻ったことから被害者と判断され

再犯はしないようにと形だけの注意を行った。

店を失った廻里は心を止んだかに思えたが、病室でクロックメモリを亜樹子に自分の手で手渡した

メモリの毒素から解放された彼は今は警察の倉庫で保管されている三つの柱時計と共に

また喫茶を始めると言った

「そうだったら、今度は美味しいコーヒーをご馳走するよ。」

時刻は夕方。

竜は事件現場の後処理があると言い警察病院を離れた

廻里の病室を後にした翔太郎、亜樹子、フィリップは探偵事務所へ戻るため病院の廊下を歩いていた。

『廻里さん、心が壊れなくて良かったな』

『そうだね。ちゃんと自分からメモリを渡してくれたし。』

でも、あの黄色いアクセル誰なんだろっ…』

『なんでまた警察病院なんか…』

『現場の重要参考人として聴取する、とか言ってたけどな。今は怪我の具合もあるから警察の上位以外面会禁止だ。なんだ、お前らの知り合いか？』

『いや、知り合いってか…なあ、フィリップ』

翔太郎はフィリップに顔を合わせると

『まあ、顔見知りではあるよね。』

そうさりとフィリップが言う

『は？顔見知り？アイツのこと知ってるのか？』

『ああ、知ってるよ。僕の友達さ、』

フィリップ君の友達か。と納得した刃野の横、翔太郎と亜樹子は「ええええ」っとなっていた。

『なんだいその反応は…君達だって顔を合わせたことがあるだろう？』

『顔を合わせただとお！？い、いつ俺が合わせた？』

『なんだ翔太郎、知り合いを忘れちゃったのか？しょうがない奴だなまあまあ、とりあえず、今日は病室に寄るんじゃないぞ？』

刃野が「じゃあな」とツボ押し器を肩に押し当てながら消えた後、
翔太郎は頭を抱えていた

『俺、あんな黄色いのに会った覚えねえぞ？本当に顔知ってるのか？』

『うん、私も竜君以外でアクセル見たことないよ。ハッ！まさか竜君の隠し子！？私聞いてない！』

『おいおい、隠し子って…そりゃねえだろ。16、17はいつてる風貌だったぜ？』

『少なくとも大体6〜7歳くらいでガキ作らなきゃ計算合わないだろ。』

『りゅ、竜君の事だから6〜7歳でもモテモテで…好奇心で当時16歳くらいをガバツと！とか。』

(駄目だ。今日の亜樹ちゃん達、疲れすぎている。)

『翔太郎、亜樹ちゃん、隠し子説はそこまでにして事務所に帰らないかい？』

照井竜に聞かれたら不味いだろう。』

「貴方は隠し子が居るんですか？」なんて聞いたら亜樹子は攻撃しないだろうが

自分は半殺しになる

怒った竜は鬼よりも怖い
我を取り戻した翔太郎は咳払いをした後

『そ、そう・・・だな』

と言い、病室を後にした。

そんな翔太郎達が謎のアクセルの正体を知るまであと少しである。

Ｃは動く／流れゆく時間の中で…（後書き）

と言う事で時計編、いかがでしたでしょうか。

ベタでくさい話となりましたが

楽しんでもらえたら嬉しいです。

それでは次章。

Yの加速／ひき逃げ犯は語る

3人が鳴海探偵事務所へ帰った翌日、再び、亜樹子と翔太郎、そしてフィリップは警察病院へ足を運ぶ。すると1階のロビーの自販機に金を入れている竜が居た。

『よお、照井』

間髪いれず翔太郎は竜に声を掛ける

『廻里伸也の見舞いか？』

自販機の「ふうとくんサイダー」のボタンを指で押しながら竜は言う

『いや、今日はそっちじゃねえよ。昨日、お前が発見した男にちよつと用事だな。』

部屋の番号知ってるんだろ？』

ガコン、と出てきたふうとくんサイダーを取りながら

『知ってるが、何か用事でもあるのか？』

と竜が言う

『まあ、ちよつとな。』

と言葉を濁らせる翔太郎を押しつけ、亜樹子が割り込んだ

『その男の人、昨日私の前で黄色いアクセルに変身したの。だからその話を聞きたくて』

『アクセルに？』

竜が聞き返す

『ああ、その男が本当にアクセルなのかと言われたら曖昧だけれど、真つ赤なトライアルになって崩壊するお店へ走って行った。

その後黄色いアクセルとなり姿を現した彼は何処かに消えていった。その数十分後、君は店からそう遠くないところで満身創痕の男を発見し警察病院へ搬送した。

偶然にしては面白いほど出来すぎていると思わないかい？』

フィリップは竜へ、面白そうなものを発見したかのように目を大きく開け言う

『確かに、出来すぎているな。俺達が現場へ入った時、あの店は地上げ屋が助かったのが不思議なくらい

酷い有り様だった

なるほど、アイツが助けに入ってたのか』

竜の口が少しだけ弧を描いた事に亜樹子は問いかけた

『竜くんその人の正体知ってるの？』

『何処の家の者かを探るために免許を探したからな。名前もばっち

りだ。

だが所長、左、お前らも一度会ったことがある男だぞ。』

『私たちが会った事がある人で、「アクセル」使う人、って言うか仮面ライダー居たっけ?』

『左は腹に覚えがある人物だ。』

クイズ形式のように竜がヒントを出しているとビートルフォンが竜のもとに飛んできた
病院の中でビートルフォンで通話していいのか、と言う事は置いて
いて
竜は通話ボタンを押す

《じゅ、ジューズ…風都君サイダーまだ、ですか?》

亜樹子、翔太郎がビートルフォンに耳を近づける。

弱弱しい、情けなく細い男の声がビートルフォン越しに聞こえた。

どうやら竜が冒頭で買っていた「ふうとくんサイダー」は彼のものらしい

『ああ、すまん。買ったんだが左達に捕まって話し込んでいた
今から戻る。もう少しだけ待っていてくれ』

《左?左がそこにいるの?ああ、マスターのお見舞い?》

左

そう電話の主は口にした

どうやら本当に自分達が忘れていただけらしい。

『いや、お前に会いたいと言っている。』

《俺に会いたいわって…左、まだアレ、根に持ってんの？アレはさあ…カッとしてやったって言うか
つい、…ひよつとしてまだ後遺症あるの？》

『いや、元気だ。会いたい理由は昨日お前がしたことについてらしいぞ。そのことについては俺も詳しく聞きたい。
今から連れて行くが、大丈夫か？』

《来てるのは左だけなの？左だけなら、昨日の傷が開く予定だから無理って言うておいて。》

『いや、所長もい——《所長さん！？所長さんが来てるの？マジで！？お、おれ、正座して待ってるから！》
そう言うて電話はぶつりと切れた。

こちらが発言を返す前に一方的に切られたことに竜は溜息を吐くと「許可が出たから行くか？」

と言った。

警察病院377号室、名前のプレートは存在しないがそのドアを竜は軽く2、3度ノックし、開く。

中の病室は大部屋のように広いがベットはただ一つでありそのベットのリクライニングを起こして一人の少年が「風都新聞」を手にしていた。

『あ、どうも。所長さん、フィリップ、あと…左。お久しぶり』

リクライニングベットのボタンを操作体を起こしている少年は軽く会釈をした。

その姿に

『ミミミ、ミイラ男おおお…！』

亜樹子が思わず叫んだ。

少年はシュラウド程ではないがミイラ男のように顔以外の全身に包帯を巻き

その唯一の顔には絆創膏やガーゼが張られていた。

『みみ、ミイラ男・所長さん酷い…。俺の事忘れちゃった？』

『ミイラが仮面ライダーなんてああ、あたし聞いてない…！』

「顔は包帯巻いてないよ、落ち着いて！ほら、この顔よく見て！」と顔を近づけようとすれば全力で拒絶され、少年がショックを受けて落ち込んだころ、

事態を見かねたフィリップが深いため息を吐き切り出した

『やあ、風森勇樹、調子はどうだい？』

その言葉に慌てていた亜樹子が反応する

『ゆ、勇樹君？』

『勇樹？』

絆創膏やガーゼなどで多少輪郭が変わっている勇樹はベリベリと絆創膏をはぎ始める

『そーだけど？』

擦り傷だらけの顔を見せては勇樹は不貞腐れたように呟いた。

風森勇樹

一か月前にドーパントにドライバーを盗まれ探偵事務所に駆け込んだ20年後の未来の風都に住む仮面ライダーである竜の話によると自分の時代に戻り、活動を続けている…はずなのだが、目の前にいる人物は風森勇樹本人だった。

『う、ごめんね！？あ、あの・悪気はなかったんだよ？。』

いきなりのミイラ発言に傷ついた勇樹は不貞腐れているのか顔をそむけている

相当傷ついたのかはペコペコ頭を下げる亜樹子をからかっているのか定かではないが

翔太郎は勇樹の顔を見て無意識にそつとお腹に手を当てた

一か月前、彼を挑発しすぎて怒りの鉄槌を食らって二日ばかり動けなかったのだ

『で・・何でここに勇樹がいるんだ？』

気分もその時を思い出してか若干下がり気味でぶつきら棒に呟けば

『それを今から聞く。』

風森は夜中に目が覚めたらしいが、自分が敵のドーパントの施設に誘拐されたと思っただらしく

大暴れして強力な麻酔で眠らされ1時間くらい前に目が覚めたばかりでまだ何も聞いていないんだ。』

此処の部屋は本来は大部屋だが俺の手配で個室扱いにしてもらったからな。

と竜は応えた。

『何でまた大部屋に？普通の個室で良かったんじゃないか？』

『凄い怪我をしたからな。未来で敵の組織に殺されそうになって逃げてきたのかと考えた。

だから追手が来てもいいように警察病院に搬送し大部屋にしたんだが、かえって仇になったようだ。』

『医者白衣がマッドサイエンティストに見えた、そういう事かい？』

丁度、夜の見回りの看護師と目があつたのだろうか――

その時の状況こそ見てはいないが、夜中に知らぬ白衣が居れば驚くだろう

三人は苦笑した。

『ん？何の話？』

亜樹子との話の決着は「亜樹子が新しく顔に絆創膏を張ること」で

落ち着いたらしい。

「痛くない？」と言われつつ顔を一度蒸しタオルで清潔にしてから張りなおす作業を行われ嬉しそうにしながら、隅のほうで少し騒がしい三人へ声を掛ける。

当然、真意は言えない。

『いや、今お前が如何してここにいるか。って話を聞こうって話を
しててな』

何でお前此処にいるんだ？』

『んー？それ知りたい？聞いたってつまんないよ？』

蒸しタオルが気持ちよくて今はとても機嫌がいいのか、物腰が柔らかかった。

『いや、つまんねえとかじゃなくてだな…。こう——ほら、』

『未来で何かあった。とかじゃないんだろ？』

とフィリップが問いかける

ちなみにフィリップと勇樹は袖を触れ合うだけの出会いでこの4人の中で一番交流が少ないのだが

『あー・・・そーじゃないから安心して。』

と普通にスルーだったりする。

きつと勇樹はアトラスで確認済みなのだろう。

そのまま自己紹介に発展することなく話は続いた。

『警察からお休みを貰ったんだ。休日を買ってもすることがないからこの風都に遊びに来た。』

新しい絆創膏を亜樹子に張ってもらえばニコニコとしたまま勇樹は言った。

『遊びに来たってなんで時を超えてくんだよ。友達とゲーセンとか行った方が楽しいだろ?』

まだ18なんだしよ。と翔太郎が言えば勇樹は「気晴らしには遠くがいいんだよ」と言った。

『で、俺、散歩してたんだけど、途中いい匂いがしたからあの店に寄ったんだ。

コーヒー飲んでマスターの時計のうんちく聞いてたら左達が来て地上げ屋が来て

マスターがドーパントになったんだ。』

机に置かれたサイダーの蓋を開け喉へ流し込みながら勇樹が言った。

『えっ……?あの時勇樹君居たの!?!?』

勇樹の発言を受けて亜樹子が思わず声を上げる。

店にそれらしい人物はいただろうか――

『居たよ。ほら。一人居ただろ?』

そう勇樹に言われ翔太郎と亜樹子は記憶を探る

『あつ！思い出したぜ。確か一人客が居たな。』

『うん、アレ。』

けろりと勇樹は答えた。

『普通の客は怖い地上げ屋やマスターがドーパントになったら叫んで逃げるだろ？』

そういえば、その客は廻里がドーパントになるまで一步も動かずにコーヒーを飲んでいたような気がした。

なるほど確かに、マスターが怪物になれば一般の人は逃げるだろう。その場合にげないと言う事はどちらかの関係者ということになる。

『んでマスターが逃げる。って言ったから俺は物陰に隠れて様子を見てたんだ。』

ちようどもう一体ドーパントが現れて左達が戦い始めたから戦闘に参考になるかと思って。』

本当は様子を見守るつもりだったんだけどね。

未来から来た人間が過去に起きた出来事の結末を変えるのは一番のタブーだし。』

過去を変えれば後々の自分の未来にも影響があるかもしれない。だからどんな悲しい出来事を見つめることになったとしても

この瞬間を受け入れ、未来を歩んでいくこと。

時を渡るうえで自分の決めた”絶対ルール”なのだ。と勇樹は語った。

『そこまで言うなら何故、君はアクセルになって助けたんだい？
絶対ルールとやらをへし折って。』

そのことを受けてフィリップが聞くと勇樹は苦笑しながら答えた。

『それ、聞いてちょう？』

理由なんてないよ。

黙って見守ろうと思ってたけどいつのまにか体が動いててさ。

だから無理やり理由付けるならアレは予期せぬ「事故」かな。

偶々通りかかった少年Yがアクセルとブレーキを踏み間違えて
廻り伸也と言う人間と地上げ屋数名の運命を引きずって逃走を計る
うとしたって言う感じの』

本当に理由はないのだろう

これが一番しっくりくるのだ、と勇樹が言つと

『んで、そのひき逃げ犯は数十分後に警察官につかまっちゃったわけだ。』

と亜樹子が呟いた。

『んじゃ今は取り調べ中？』

その発言に「所長さん上手いこと言っね」と勇樹が手を叩く

「かつ井の代わりが「ふうとくんサイダー」か。ほら、さっさと知ってること全部洗いざらい吐いちまえよ。」

「けっ、誰がお前なんかに話すかよ！偉い奴呼んで来い、えらい奴」！

翔太郎の発言にノリノリで発言した勇樹に

「俺が偉い奴だが？」

と竜が被せた。

「おおお・・なんかドラマが出来てる…この後竜君が一生懸命に更生させるんだよね」

悪乗りが止まらず一本の刑事もののストーリーが出来上がったことに亜樹子は素直に感心していた。するとすかさず翔太郎が口を挟んだ。

「あ？主人公はこの俺だろ？更生は俺がさせんだよ。」

少年Yに殴られても罵られてもハードボイルド探偵Sは見捨てずに全力でぶつかる

そして心通ってだな・・

最後は社会復帰させて涙の別れだよ。

「左のおやつさん！！アンタの恩は一生忘れねえ・・俺はあんたの意志を受け継いだ

仮面ライダーになる

アンタと同じ仮面ライダージョーカーに」

「っ・勇樹。ああ、お前ならなれるさ——俺の意志を継いだジヨ

——『えー俺、アクセルがいい』

翔太郎は上を向き完全に自分の世界へ入り込んでいた。

その妄想は妙に力のこもった勇樹の発言によって破壊された

『んだとお！？今なんつった？ジョーカーが嫌だつて？』

現実に引き戻された翔太郎は顔を突出し牙を向く

妄想の中では少年Yは次代の仮面ライダージョーカーだった。

だが、本人による中断に翔太郎はイラつとしたらしい

そんな翔太郎を見て勇樹は一つ溜息を吐いた。

「相手をするのも億劫だ」とでも言いたげな表情をし

『嫌いじゃないよ。ルナとかサイクロンとか楽しかったし。ジョーカ

ーそんな使った覚えはないけど

サイクロンとルナは使い勝手良かったし』

と言っ。

『だろ？なんだ話の分かるや——』でも俺はアクセル派だな。』

フォローになってるのか、そうでないのかはともかく

勇樹はきっぱり言い切った

『攻撃力高いし、エンジンメモリも使い勝手いいからな』

『へえ・・・、だからアクセルを使ってたのかい？』

勇樹の言葉にフィリップが聞くと勇樹はフルフル首を振った。

『いや、ドーパントの種類やその時の状況に合わせて使い分けてたよ？』

でもまあ、アクセルが多いかな。』

『でもさ、でもさ、なんで勇樹君は黄色いアクセルなの？』

と亜樹子が質問すると勇樹はお手上げだと言わんばかりに肩を竦めた

『それは俺が知りたいよ。通常のアクセルは赤いはずなのに。何でおれは黄色なのか。』

なんでだろうな。

と勇樹が首をかしげるとフィリップは自分の唇をなでてこういった

『一度ためしに変身してみたまえ』

『あ、それいいかも…変身するだけなら座っても出来るよね？』

実際見てみないことには何もわかりはしないよ
とフィリップが言う

『わ、分かった。じゃあ、俺の上着とって？』

病室のカーテンレールに黄色いパーカーと黄色いレザージャケット
が掛かっており

どっちだ？と竜が言えばレザージャケットと言った

ロストドライバーとアクセルメモリを竜が手渡すと勇樹は顔を真っ赤にした。

『手が痛いのか？』

差し出してるのにいつまで経っても受け取らない勇樹に竜が首をかしげる

『あ、いや、…そんなつもりは』

(でも、モノホンのアクセルの前でへ、変身とか…
き、緊張してきた。は、吐きそう)

【ACCEL】

勇樹はガチガチと緊張したままメモリとドライバーを受け取るとドライバーを腰に巻き、メモリを始動させる
だが、メモリに挿し込む様子は見られなかった

『オイ、どうした勇樹、早く変身しろよ』

と翔太郎が急かすと

『ばば、ばっ！？せ、急かすんじゃないよ…！
せ、せ世紀の瞬間だぞ！』

『はあ？何でお前そんなに緊張してんだ？』

ワケわからんと言う反応を見せる翔太郎を余所に勇樹は
やっとメモリをドライバーに挿しこんだ

(今なら、風都タワーの展望室からダイブできる気がする)

『へ、へへ、へ、変身！！』

声が見事に裏返ったが勇樹は黄色いアクセルへ変身する

【ACCEL】

バイクのホイールが体を包み赤い粒子を纏い一旦赤いアクセルを形
成する

だが、その赤い姿も粒子となりガラスが割れるかのようにWのフォ
ームにアクセルのタイヤや顔の特徴の強い黄色いアクセルが誕生し
た。

『……こ、こんな感じ？』

幾分か身体能力が向上しているため自力で起き上がり勇樹はフィリ
ップらの反応を見る

『興味深いね。ロストドライバーに挿せばWに近いような姿になる
のに』

目は青で一つ。角、背中のタイヤ。ここまでアクセルの特徴を詰め
込んでいて細いとは

照井竜、君も変身して見てくれ

風森勇樹、ロストドライバーを照井竜へ』

黄色いアクセルは一瞬だけの出番であり
勇樹はロストドライバーを竜へと渡す。

フリリップの好奇心に火が付いたのか、別の理由か
いつになく真剣な表情で分析をしていた。

ちなみに照井竜がロストドライバーで変身すると真っ赤な青い目の
Wの姿になった

それは風森勇樹のアクセルを使っても同じだった

ただ、勇樹の場合は照井竜のアクセルメモリ×ロストドライバーの
組み合わせ

自分のアクセル×アクセルドライバーの組み合わせでは体に電流が
走り、変身することが出来なかった

『…どういうことだ？同じアクセルなのにこいつも出来ないって』

すべての実験を見て翔太郎が呟いた

『……おかしいね。適合しているはずなのに照井竜のドライバーで
は変身出来ない

照井竜のメモリと自分のドライバーの組み合わせで変身出来ないな
んて』

現在、実験の疲れが出たか勇樹は眠りについていて
竜を病室に残しフリリップ達は病室の外へと出た

『竜君は全部ばっちしだったのね。』

何かあるのかな。シユラウドが細工した。とか？』

亜樹子が呟くとフィリップはそれを否定する。

『適合率までは細工できないよ。人とメモリは惹かれあう。決意や
思いで適合率は上下する』

せめて風森勇樹の未来をもっと知ることが出来たら
とフィリップは呟いた

転じて病室

竜は椅子に座り、新聞を読んでいた
すると眠りについていたはずの勇樹が喋りだした。

『同じアクセスメモリなはずなのに何でおれだけ照井さんのアクセ
ス使えないんだ？』

ドライバーもメモリも

照井さんは俺のメモリも使えたのに
と呟く

『さあな…』

竜はその呟きに相槌を打った。

『…俺、あんな反応されたの久しぶりだよ。』

と勇樹は呟く

何を言っても愚痴みたいなのであると受け流す姿勢を取っていた

竜は身を起こした。

『久しぶり・・・だと?』

『そ。俺さ、Wとアクセルのメモリで臨機応変にメモリチェンジして戦ってたって言っただろ?』

あれ、昔の話なんだよ。

2年前、俺は突然に……って言うてもなんとなく今は理由の見当がつくけど

全部のメモリが使えなくなった。

それまで「仮面ライダーレインボー」「七色のライダーとか自分で言うてた。

「さあ、虹色に包まれな!」とか言う決め台詞使って

「レインボーサイクロンスパイカー」とかただの蹴りに名前つけて見たり。

あ。「ヒートとアクセルは赤だから6色じゃないか?」って言うツッコミは無しだぞ?』

『…全部の?だが今はアクセルが使えるだろう。』

『だから落ち込んでるんだよ。』

俺のアクセルメモリは俺が死にそうになった時に助けてくれたから、てっきり俺はアクセルメモリに高く適合してるもんだと思ってた。でも、適合してるなら俺は照井さんのアクセルも黄色だろうが使えるはずなんだ

けど、使えなかった。一体なんなんだろうな。』

勇樹は苦笑した

『…俺に質問するな。今日はもう寝ろ、疲れるぞ？俺が見張りをする。』

『警視殿直々に？暇だなあ…事件とかあるんじゃないの？』

『此処でやるに決まっている。』

此処は警察病院だしな。と軽く言えば「なるほど」と勇樹は納得する
そして「じゃ、お言葉に甘えて」と眠りに落ちた。

Yの加速ノアクセルプログラム

シユ、シユ、シユ、

見張りの為、病室に残っていた竜はいつのまにか眠りについていたようである。

時刻は朝の6時

自分の腕時計が時間を知らせていた。

目が覚めたら風を切るような音がした。

視界が晴れてくるとその音の正体が判明する。

「入院着のまま勇樹が素振りをしていた。

空に向かい拳を突きだし、静かに黙々と取り組んでいる

その形はケンカのようながむしゃらなものではなく、空手が合気道か拳法がよく分からないが動きはキレがある

『朝から精が出るな。』

怪我をし今日を含めて3日でそこまで動けるか。

と呟くと勇樹は素振りをやめ、「これぐらい何てことないさ」と言った。

『傷、開くぞ?』

『仮面ライダーにはお休みなんてないだろ？
傷とか気にしてる暇なんてないよ目が覚めたらリハビリ。これ基本。
出勤要請掛かったときに戦えなかったらお金入らないしな』

ふい〜

と息を吐きながら勇樹は首に巻いたタオルで額の汗を握る

『お腹空いた。なんか食べようかな

照井さん、俺の上着とって？

売店でなんか買ってくる』

ご飯の配膳は8時からである。

先に早起きし動き回っていた勇樹はその2時間は待てないらしい。

上着のポケットから長財布を取りだし渡すと勇樹はすたすた出ていった。

その数十分後、勇樹はコーヒート小麦粉、使い切りのソースを買ってきた。

『おにぎりは無かったのか？』

ならサンドイッチくらい…あったらどうに何故、小麦粉と使い切りのソースなのか

『いや、売店やってなかったからコンビニ行ってきた。』

地下にコンビニあるってハイテクな構造してるよな』

風都署警察病院の地下には小さなコンビニや食堂がある

「便利だ、便利だ」と機嫌良さそうに水に溶いた小麦粉をコップに入れてくるくるかき混ぜていた。

コンビニに行ったなら尚更彼の行動が理解不能である。

『何を作るか分からんがここは火気厳禁だぞ？』

と竜が言えば「大丈夫、大丈夫」と返した。

かき混ぜ終わったら勇樹は鼻唄を歌い、ガジェットを入れている手提げカバンから

フロッグより一回り大きいてんとう虫型ガジェットを取り出す。

てんとう虫の丸い黒い模様の蓋を外し、勇樹はその中に先ほど溶いたものを流し込んだ

見たところ、コンセントもない。

火もつける様子もない

一体何をするのか…竜は遠目で観察していると勇樹はヒートメモリを取り出して

そのてんとう虫型ガジェットに挿しこんだ。

【ヒートマキシマムドライブ！】

ヒートメモリが始動すると

てんとう虫からジューツつとその液が焼ける音がした

ヒートのマキシマムドライブで料理を作る。

開いた口がふさがらない。

おそらくフィリップや亜樹子は好奇心の目で「興味深い」と称賛するだろうが

翔太郎が見たら絶句して半泣きしキレるだろう。

それを竹串でひっくり返し

できた丸いものにソースをかける。

お分かりの通り、たこ焼きである。

いや、厳密に言えばたこ無し焼きなのであるが、竜が小麦粉だと思っていたソレは

たこ焼きの素だったらしい。

おそらく謎のてんとう虫型ホットプレートもシュラウド制作であろう

(シュラウドはいつたい何を考えているんだ？野宿用か？)

本人は出来たたこ焼きをアフアフと熱そうにしながら口に含んでいた。

何から質問すればいいのか、突っ込みどころが有りすぎて「質問するな」状態の勇樹に米神を押さえると

勇樹のもとに病院のご飯が届いた。

もうそんな時間らしい。

勇樹はおばさんからご飯を受けると
たこ焼き？とご飯と一緒に食べていた

育ち盛りの18歳。普通の人がNOサインを出しそうなボリュームになっているが平然と箸を進めている

途中、生卵をしばらく見つめて

てんとう虫の鉄板に卵を器用に落としては目玉焼き

(ちなみに余熱で半熟風味)を作っていた。

『ふあゝ満足したあ

やっぱり人間って食わなきゃ戦は無理だよなあ』

綺麗に食べ終えた勇樹は満足そうにお腹を撫でる

『警察病院って飯こんなに美味しいんだな

俺感激したよ！鮭に味噌汁にご飯に漬け物

そしてそこに加わるたこ焼き！

たこ焼きとの相性いい入院食なんて他にはないね』

『…たこ焼き、好きなのか？』

やっと口が言葉を発したと思ったたらガジェットの意味よりもそっちが口から出ていた。

『大好きだよ。粉とソースとホットプレートあれば簡単に作れるしよほど焦げなきゃ美味しいし』

『たこ焼きが好きなら後で所長に作ってもらえ。』

フィリップの話じゃ美味しいぞ。』

竜がそう話すと勇樹は笑みを浮かべた

『…機会があったら言ってみるよ。』

……さて、今9時か。左と会いたくないしそろそろ俺、帰ろっかなあ………』

病室の時計を確認し勇樹は呟く

『帰る？傷は全治一週間だぞ？まだ今日で3日だ。休んだ方がいい。』

『…3日でこのぐらい動けたら上々よ。仮面ライダーなれば身体能力UPするし』

へらへら笑って準備を始めようとする勇樹を竜が止める

『もう少し様子を見る。』

傷が塞がりかけた時に動けば傷が開きバイ菌が入れば取り返しがつかなくなるぞ。』

『それ、そのままバットで打ち返したいね。』

ドーパントが出れば大怪我しても無理矢理戦いに出るくせに』

離してくれ

と勇樹は竜の手を振り払った

『…機会があつたらまた遊びに来るよ。』

そう呟きながら準備をしている勇樹の元に

「まちたまえ」と制止がかかった。

『君に大事な事を伝えに来たよ。』

声をかけたのはフィリップであり、その横に亜樹子、翔太郎が立っていた。

『大事なこと？早くしてくれよ』

3日もこっちに滞在しちゃったから早く戻らないとならない。』

Tシャツを着ながら勇樹が言うとフィリップは口を開いた

『なら、単刀直入に言おう。』

もう、君はメモリを使うのは控えた方がいい』

勇樹の手がハタと止まった。

『メモリを…？』

『僕の本棚にある君の本は君がこの時代に滞在する日数によってページが増えていくんだ』

君は2年前からWのメモリでは変身できずに居るよね
そして唯一変身できるアクセルも照井竜のように赤ではない。

昨日僕は君とその7本のメモリの適合率を閲覧することができた。』

『調べた…？』

昨日、事務所へ帰った直後、フィリップは地球の本棚へと入ったら
しい

そこで見えたのは――

『ジョーカメモリ： - 22 %

メタルメモリ： 2 %

トリガーメモリ： 1 %

ルナメモリ： 23 %

ヒートメモリ： 10 %

アクセルメモリ： 18 %』

という異常なまでに低い適合率だった。

――
それを伝えると勇樹は目を見開いていた

『は！？アクセルがルナよりも低いのかよ！』

『君と7本のメモリは異常なまでに釣り合っていないのさ
だからこのまま仮面ライダーを続けたら君は死んでしまうかもしれ
ない。』

ドライバーを介していても適合率が低ければ死んでしまうケースも
ある

とフィリップは宣告した

『待てフィリップ、アクセルよりルナが高いならば
なぜ風森はルナで変身が出来ず、アクセルで変身ができる？』

竜はフィリップに問いかける
するとフィリップは顎に手を当てて自分の唇の撫でる。

『そこはまだ検索できていないが
おそらく僕の母さんがファングのようなプログラムをアクセルに仕
込んでおいたんだろう』

彼は幼少の時から

「仮面ライダーアクセル」
に憧れを抱いていたようだったから

彼のアクセルメモリにそういったプログラムをつけたんだ。
とフィリップは告げた

『適合率関係なしに変身できるようなプログラムが本当にあるのか、

それは20年と言う技術の進歩具合もあるからあってもおかしくはない。』

すると今まで発言していなかった勇樹が声を震わせ絞り出した

『適合率関係なしに変身できるようなプログラム…だって？
何、恐ろしいことさうりと言ってんだよ。』

お、おれは…Wのメモリは使え、ないさ？

け、けど…アクセルで変身できるのは俺がアクセルと相性がいいから…だろ？』

『アクセルと相性がいい、と言うけど君は照井竜のアクセルでは変身できなかっただろう？』

適合してるなら同じメモリだ。変身できるはずさ。

過去の事例を検索したら翔太郎はタイプ2のジョーカに

仮面ライダーエターナル大道克己はタイプ1、タイプ2どちらでも変身できていた。

さらに財団Xの加頭と言う男はタイプ1のエターナルメモリを使っ
たが

拒絶された

また、変身しても通常のエターナルが青なのに対し赤だったそうだ

事例を見る限り

適合率が高ければ同じ記憶を秘めた違うメモリでも変身できるのさ』

あの黄色い姿は自分が適合しきれしていない証拠であろう。
フィリップの言葉を聞き、勇樹はそう悟った。

他のメモリとは違って
今まで変身する力をくれた
アクセルメモリ

幾度も自分の窮地を救ってくれたアクセルは
自分、風森勇樹に共感したワケではなかった。

仕組みまれたプログラムだから従っていた。
フィリップの本棚の正確さは観察をしたからよく知っている

シユラウドはそういう妙に優しいところがあるところがあるのは
勇樹自身も感じていた

ポストに宅配便として入っていたてんとう虫、本来は髪飾りサイズの
の小型のてんとう虫と対になった無線機である。
羽を開けばトランシーバーのような役割を果たすのだが、それには
ホットプレート機能が備わっていた

シエルスピーカーも一般で売られている小型ラジオやi podのよ
うな音楽再生プレイヤーとの連動も可能になっていた。

そんな彼女のガジェットを使っているからこそ、そのプログラムの
存在を否定できなかった。

『適合率の低いガイアメモリを使うのは危険だよ
残念だけど・・・君はもうそのメモリで戦わない方がいい』

『…勇樹君…』

フィリップの発言はキツイものかも知れないが彼の命を重んじてである。

それを感じていた亜樹子は居た堪れない気持ちになっていた。

勇樹は拳を握りフィリップらを見据えた

『やめる…だ？』

簡単に言いやがって！！お前は俺の風都の状況知ってるんだろ！？

俺の時代の仮面ライダーWとアクセルは組織に消されてもういない。その状況に嬉々として組織のボスがメモリを作ってる。

俺は家族を救うために仮面ライダーになったけど

「メモリが適合しませんでした」って言って辞めたら誰が風都を救う？

誰が、父さんと母さんを助けてくれる？

あの時代は仮面ライダーは俺だけなんだよ

2人で一人で仲間が居る感覚を俺にまで強要すんな！！』

勇樹の怒りを聞いてフィリップは静かに言う

『誰もそんなことまで言っていない。シュラウドに適合率が高いメモリを渡してもらうんだ。』

そうすれば・・・『嫌だ！俺はアクセルを手放すもんか、他のメモリなんて有り得ない』

『なら、君は・・・』それにシュラウドのプログラムが組み込まれてんだろ？適合率が関係なくても変身できるプログラムってやつを。そんなプログラムを組み込んでるなら、死ぬ危険性とか除外されてんじゃないの？

つか、改めて考えるとすごいプログラムだな。

ま、それも一つの運命ってことで良いや。こいつはそのプログラムで俺に従ってるんだから

そのプログラムがあるってことは俺に力を貸してくれるんだろっしも、どーでもいい。考えるのやめた。』

勇樹はバカらしくなったのか、開き直る姿勢を見せると「一人にしてほしい」と

病室を後にした。

『シュラウドも変なプログラムを付けたな』

勇樹が去って、竜が呟いた

『彼を守るため、一本だけ特殊にしていたんだろっね』

『けど、2年前は7本で変身できてたんでしょ？なんでまたWのメモリは裏切っちゃったの？

『それはまだ閲覧してないからよくわからない。けれど何かがあったんだろっね』

『その何か、っていや、フィリップ・・・、勇樹の時代に俺達、仮面ライダーがいないって、あれ、どっという話だ？』

翔太郎は真面目な顔をしフィリップに問いかける

フィリップが勇樹の本を閲覧した時に、「覚悟が必要だ」と理由をつけて翔太郎、亜樹子には話すことを拒んでいた情報である。

『・・・分かった。話すよ』

こうなった以上、亜樹子も翔太郎も引きはしないだろう
諦めたようにフィリップは口を開いた

その一方、勇樹は警察病院から飛び出して外をブラブラ歩いていた
開き直り、割り切ったような態度を見せたが、フィリップの「プロ
グラム」と言う言葉が頭に木霊していた。

（早く振り切らんと仕事に支障出るな。）

思ったように自分でも振り切り、割り切れずにいることに軽いイラ
立ちを感じ舌打ちをする

（川でも飛び込むか？）

この季節の川はまだ冷たいから気も引き締まるだろうか――
などと考えて川を探して歩いていると公園に差し掛かる
子供たちは遊び、老人やカップルは日向ぼっこをし、平和な姿を見
せているが、その公園、一人の小太りの貧相な男がその光景を見て
いた

『ふふつ、みーんな幸せそうだあ〜今日はここにしよう。』

その男はそう叫ぶと紫のメモリを取り出す

【SEA URCHIN】

シーアーチン

そう始動音が鳴り男の姿はみるみるうちに黒いトゲトゲに全身を包まれたような姿になった

そのドーパントは公園の中に入ると激しく暴れまわった

この時代に起きることにには関わらない

そう決めている勇樹はアトラスフォンを手に物陰に隠れて竜に連絡を入れようとする

だが、その手は止まった

自分は今、あの4人に会いたくはなかった

このまま、見捨てるのも一つの道である

後日事件を起こしたシーアーチンドーパントを照井が捜査するか被害者が翔太郎の事務所を訪れるかでアレは倒される

これで決まりだ

その「後日」という選択肢でいいか。と勇樹は懐にアトラスをしまおうとする

ジャングルジムに逃げていた女の子がシーアーチンドーパントに振り落とされたのだ

女の子は激しく背中を打ち動けなくなった

それでも意識はあり、トゲトゲの拳を持ちじりじり近づいてくる化け物が見えて泣いていた。

（あの子はここで化け物に殺される運命か――
可哀想に――）

物陰で見っていた勇樹はこの事により殺人事件と認定され照井竜が捜査するんだな
と考えていた。

それでもわんわん泣いている女の子を見て、「竜を呼んでやろう」とアトラスを起動させたとき、

大変な事に気がついた

照井竜、左翔太郎は現在イレギュラーな自分の怪我の為に病院にいる本来であれば竜は風都署待機か、事務所。翔太郎も依頼を受けて調査に行っている可能性があるのだ。

そして、調査の折に通りがかった翔太郎があの子を助けているかもしれない

『だーくそ！気づくの遅い！！俺、』

幸い帰る準備をしていたため、ドライバーとメモリは懐に入っていたアトラスにヒートメモリを挿しこんでマキシマムドライブを発動させる

恐怖を堪能するためかじりじり迫っていたシーアーチンドーパントは横っ腹を炎を纏ったアトラスに突き飛ばされた。

(間に、あ・・・った。)

『大丈夫かい？ごめんよ？』

即座に女の子を抱き上げては大きな大樹の陰に寄せる

『痛いなあ・・・なにすんだあ?』

『知るか!俺今、心臓バクバクしてんだ!さっさと終わらせてもらう!』

【ACCEL】

『変身!』

【ACCEL】

勇樹は黄色いアクセルとなると構えた

『仮面ライダーあ?』

起き上がったシーアーチンドーパントはトゲだらけの手のひらを振りながら言う

『「一応」な。』

アクセルはシーアーチンドーパントに近づき膝蹴りを腹部に食らわせようと懐に潜り込む
使用者がどんくさいのか、懐に潜り込むことには成功したが足を引込めざるおえなかった

シーアーチンとはウニの事

そのドーパントはウニのように全身がびっしりトゲに覆われているのだ

同じトゲ類ならばひっくり返し針のない中を突けばいいのだがウニハリネズミはそうはいかない。

さらに勇樹は銃での攻撃は苦手、
メタルシャフトのような長い棒は扱えず、
唯一のエンジンブレードは自分から使うことを拒否していた。

(相性悪っ……)

バク転し距離を取りながら勇樹はどう攻撃するか悩んでいた

方法は3つ

A：足を一本犠牲するの覚悟での特攻

B：とげを割る方法をひたすら考える

C：翔太郎、竜を呼ぶ

(Cは絶対嫌だな。Bは…シャフトかエンブレがない限り無理だろうな。ってことは)

プランA

勇樹は刺さるのを覚悟で突撃、を選んだのか
ミサイルのように飛んでくるトゲをかわし顔を横から蹴り上げようとする

とげは規則正しく真っ直ぐ生えているものであり、それはシーアーチンも変わらなかった。

つまり横から顔面を守るために真っ直ぐ生えているトゲと人間でいう耳のあたりを守るために生えているトゲの隙間。

そこを狙って顔面のとげを横から蹴り飛ばす。

そうすれば顔面のトゲは生え変わるだろうがその隙に強い打撃を与えられる。

そう考えた。

『横からとげを狙おうって？無駄無駄よぉ〜？』

アクセルが飛び上がってその作戦を実行しようとした瞬間、とげの隙間の間隔が狭くなり、まち針のように鋭くなった

『え、嘘っ…』

元から何本か刺さるだろうと予測していたが針の密集は計算外であった。

針の密集により予想を超えるトゲが足に刺さり、蹴りの勢いは消された。

『君はバカなのかな？身の危険を感じると動物は針をとがらせるんだ。』

僕の身体も同じだよぉ〜？』

そうだった。

ハリネズミといい、タコといい、外敵に襲われた時の””としておき””が

動物はある

右足の脹脛から下が動かなくなったアクセルは木に捕まりながら立ち上がる

『つくそ・・・ミスった!』

『まったく・・・よわっちいくせに僕の幸せを邪魔しないでくれよ武器を使わない限りい、僕には勝てないよお?』

調子こいておしりぺんぺんとしているシーアーチンドーパント
顔は見えないがあかんべもしてるだろう。

『・・・使えるもんなら使いてえよエンブレ。

けど、ぶき、使えば・・・アクセル・・・だからな。』

シーアーチンドーパントは完全に勇樹をナメているらしい。

攻撃しようとはせず（いや、鉄壁の守りがあるからこそ、動かなくていいのかもしれない）
ケタケタ笑っていた

『何を言ってるの？意味が分からない。さて・・・そろそろ僕に幸せを与えてよ』

シーアーチンがじりじりを近寄っていく

『・・・お前、「叫びの記憶——スクリーム」

とかのほうがあってんじゃね？ウニって柄じゃないよ。』

『いいじゃないか。トゲだらけで天敵はいないんだ。さあ、嘆きの声を聞かせてくれよ』

『ぜってえ、ウニじゃねえって、てか、ドーパントのくせに決め台詞作るなよな。』

天敵、いないって?』

じりじり、エセウニが近寄ってきたところでアクセルは足にハンカチでホタテ型ガジェットを巻いた

『ウニにも天敵いるよ?』

一定距離に近づいたと見るや否や

ガンツ：とアクセルはガジェットを巻いたほうの足を馬が蹴るように木に蹴りつける
すると

【エンジンノジェット!】

と言う音声が響き足が自動的に前に繰り出され、それを軸にもう片方の足で地面を強く蹴り上げ宙に舞う。

ハンカチを解き、

シエルスピーカーを手に構え、メタルメモリを挿しこむ

【メタルマキシマムドライブ!】

貝の扇の要のほうを持ち、扇のほうを敵に剣をかざすように向けると勢いよくトゲを叩いた

『ぐああああ!ば、僕の・・・とげがあああ!』

とげはメタルで強化されたシエルスピーカーの打撃に耐えきれなかつたらしい

『痛い痛い!』

再生能力があるだろうに・・・と地面に降り立ったアクセルは観察し

ていたが

どうやらウニは絶対的な自信を砕かれたおかげで取り乱して右往左往していた

『ぬおおおおお！！許さんぞおおお！！僕のとげをよくもおおお！！』

全身のとげを尖らせて発射しては高笑いをするウニへ

再びメタルを発動させたシエルスピーカーでとげ叩き落とす

『こいつ、いきなり、強く・・・なりやがっ・・・』

『いきなり強く？失礼だな！俺は頭の回転は良い方なんだよ。』

アクセルメモリを横のマキシマムスロットに差し込むと黄色い炎がアクセルの身体を包んだ

【アクセルマキシマムドライブ！】

『今日は蹴る足がやられてるから、特別仕様だ』

足のあの後ろにシエルスピーカーを待機させ

再び「エンジンノジェット」を発動し足を大きく振りかぶる

そして軸足を左にひねり、強烈な蹴りを叩きこんだ

『アクセルジェットターグランツァー！！』

ジェットの力もあってかシーアーチンドーパントは川に石を投げたように跳ねて土管へめり込んだ

『すげえぶつ飛んだ・・・』

ちなみに、ただのジェットのためツインではないが、お分かりの通り変身を解除すると猛烈な痛みが勇樹を襲った

『痛っ・・・ヤバいな。足、全然動かねえ』

木の枝を二本折って一本は足に巻き、二本は松葉杖のようにし倒れている使用者の所に行き手錠を掛ける

『でもまあ、左が居ない分の修正できたわけだし。さて、警察に電話すっ・・・い、いや照井さん来そうで怖いな。』

自分の惨状を見られるのが非常に嫌だった
何を言われるか分かったものじゃない。

病院に戻ることは困難だ

かといってこのまま自分の時代に帰って出勤要請が来ても動けない

困ったなあ・・・と頭を掻いていると背後からトントンと肩を叩かれた

『んーなんですか？俺今忙し・・・』

振り返って勇樹は顔を青ざめる

『俺ならここにいるが？』

そこには涼しい顔で竜が立っていたのだ

『つぎやあああああ——！！出たああああ！！』

Yの加速ノアクセルプログラム（後書き）

ウニの天敵は何か分かりましたでしょうか？
あえて書かないようにしてみましたのですが

Yのお話、もうひとつ続きます

感想お待ちしております

Yの加速／普通が不通。

つぎゃあああ——！！

まるで化け物に遭遇したかのような声を勇樹は上げた
病院にいる、そう思っていた 人物がここにいるのだ。当たり前で
ある

『まるで化け物に遭ったような反応だな。』

心外だ。と竜は呟き自分が連れていた制服警官に犯人を引き渡すと
勇樹に向き直った

『あ、あの・・・なんで此処にいるんですか？』

敬語になってしまふのは、緊張してるからであり、混乱してるから
であり・・・

おどおどしていると竜は頭上を指さした。

頭上には竜のガジェット、ビートルフォンが飛んでいた

『お前が居なくなっただけにフィリップと所長と左が話し込んで暇
になった

だから追いかけてきた。』

『どのあたりから・・・？』

『それを聞きたいか？
その前に足を見せる。ちゃんと止血しないと一生使い物にならな
くなるぞ。』

竜は何処からか包帯を取り出すと丁寧に巻き始めた

『あ、あの・・何で包帯があるんですか？』

『…俺に質問するな。』

答えは至極簡単。動けば傷が開くだろう、と一本くすねてきたのだ。木に寄りかかり応急処置を受けた勇樹はその手つきを黙ってみていたすると突然

『お前はいつもあんな無茶な戦い方をしているのか？』

と訊ねられた

今度が特別凄かっただけだ。と言いたい所ではあるが
実際、戦闘スタイルは「肉を斬らせて骨を断つ」なのは変わらない

『…大体、そんな感じ。』

と答えると竜は呆れたように溜息を吐いた

『よく今まで死ななかったな。こんな戦い方続けてたら死ぬぞ。』

『確実にドーパントを仕留める為には迷ってられないっての。「
確実に」「迅速に」。

俺に必要なのはどんな策を用いてもドーパントを駆逐する。撃破
能力

警察に求められてんのもそれだし、俺はそれで満足してるから、
いいの。』

『だが、あの戦い方は——！何故エンジンブレードを使わない？』

お前がアクセルだというならばシユラウドからもらっているだろう？
今回の敵はエンジンブレードがあればこんな怪我をせずともやれたはずだ。』

『何故って…言われても「俺のこだわりだからだよ。」

ポリシーってやつ？ほらよくあるじゃん

てか、プログラムなんかで変身してるやつを「アクセル」って認めるの？

色も黄色いのに？』

『…何が言いたい。』

応急処置を終えた竜は静かに一言呟いた

その声には怒りが込められていた

それに気が付いた勇樹はめんどくさそうに頭を掻きながら答えた

『だから、こんな適合率が低くて他人の仕組んだプログラムでしか変身出来ないような男を「アクセル」って認めるのかって言っただよ』

そう言い切った勇樹に竜は呆れたと言わんばかりの表情をした

『認めるも何もお前はアクセルじゃないのか？』

『出来るだけその名前は使いたくない。世間じゃ何て呼ばれてるか知らないけどさ

俺は「アクセル」って極力自分からは名乗らないようにしてる』

『何故だ。』

勇樹の言葉に竜は即座に言葉を返す

「何故だ」と返されては勇樹は突然照れたように頭を掻いて目を合
わせなくなった

『そ、そりゃあ…だ、だってさ…この先15年間この風都を守っ
ていく

仮面ライダーアクセルは照井さんだし…

そのどこの馬の骨とも知らない奴が「アクセル」名乗っちゃ悪い気
がするってか…』

『だからエンジンブレード使わないのか？』

言葉に怒りも何の感情も含まれていないが突き刺すように竜が言う

『エンブレ使ったら疑われるだろ？風都のアクセルは照井竜なんだ
よ。

だから死んでも使わない』

ふざけているのかと思ったら本気でそう思っているらしく

竜は深く呆れた様に溜息を吐いた。

『昔、アクセルに会った事があるのか？』

幼少のころの憧れの対象だったアクセル

普通の男の子ならば「自分がアクセルになりたい」と思うはずなの
だが

この少年は違った。

ならば会った事があるのか？

そう、竜が問いかけるとビンゴらしい。

「聞きたい？」と目を輝かせてきた

『うん。来たよ。2回。一回目は俺が6歳の時。遠足のバスがドーパントにジャックされて、俺が人質として攫われちゃったワケそーしたらさ来たんだよ！憧れのアクセルが！！

「大丈夫か？勇樹君！！」って！サンタクロースみたいな伝説だと思っただからマジビックリ！

あの時のアクセルね、めちゃくちゃカッコ良かった！！』

勇樹の幼少のころの体験談は後半は「アクセルカッコいい！」「アクセル強い！」「名前呼んだ！」

の繰り返しで変身する本人としては照れるというより、軽く引いたのだが

未来の自分は道を誤らず仮面ライダーとしてやっていっている。と言う確証は得た。

一通り話すと竜が呼んだ救急車の音が間近で聞こえ始めた。それを機にか、勇樹は興奮状態が収まる。

『あの時俺は本当に怖かった。

その時に俺の為に駆けつけてくれたアクセルはカッコよくて優しくて俺の永遠のヒーローなんだ。

だから俺は「アクセル」だと名乗らないし、エンブレも使わない。』

『矛盾してないか？お前は仮面ライダーとして名を轟かせたいんだろ？

ただ仮面ライダーが居る。ではなく「アクセルが居る」とすればいいんじゃないか？』

『だから、「お前」アクセルか!』って言われるのが嫌なんだつてば!』

そりゃー名乗れたら嬉しいさ。けどさ?目が覚めたときに自分が5年間守ってきた街の人たちは自分ではなく他人を「アクセル」って見てたら嫌じゃない?俺は嫌だよ。ぽっと出の若造にとられる何ぞ耐えられないね』

鼻を鳴らして堂々と言う勇樹に竜はまた溜息を吐いた

『…そう言うものか?』

確かにトンでもない性格だったなら許さんが…』

そいつの性格がiiiって分かってるなら別に…
と言ったところで

、竜が呼んだであろう救急車が到着した。

救急隊によりストレッチャーに乗せられ、医師から軽い説教を受け、救急車は再び警察病院へと向かっていき竜は同席しなかった

『照井よお。。。付いてんならなんで加勢してやらなかったんだ?』

警察病院の待合室(個室)三人はこれまでの事を竜から聞いていた
勇樹は集中治療室での治療を受けている

その個室で

怪我が悪化したことにした事について翔太郎が詰め寄ると

『俺に質問するな』

いつものセリフを吐いた

『それで、君から見て風森勇樹の戦い方はどうだったんだい？』

フィリップが訊ねる

『「肉を切らせて骨を断つ」と言うスタイルだ。』

ドーパントを倒すためならば足の一本や二本犠牲にしても構わない
怖い戦い方だ。

と竜は言った

『敵がウニのドーパントだったんだが、エンブレ・いや、エンジンブレードを使わず素手で挑んでいた』

『はあ！？』どうしてそんな無茶をしたんだい？ウニと言う事は全身トゲだらけだろう？どんなふうに戦ったのか詳しく聞かせてくれ
たまえ！』

エンジンブレードを使わない戦闘スタイルでどう挑んだのか、フィリップの琴線に触れたらしい
事細かく質問してくるフィリップに

『んなもん興味持たな！先すすまねえだろ！！』

と翔太郎が一喝しフィリップはおとなしくなる

だが瞳はいまだに輝いているフィリップは「待て」状態の犬のよう

な反応をしていた
そんなフィリップに竜はビートルを投げる

『知りたいなら確認しろ。録画はしてある。途中からだか』

『さすが照井竜。僕に分析をさせる為に録画したんだね？』

フィリップは映像を確認する

せっかくの映像だから——と亜樹子も横から覗くが

『ひいひい！こんな戦い方私聞いてない！！！』

と絶叫を上げた。一方その傍らのフィリップは唇に指を当て

「興味深い。」「こんな戦い方は初めてだ」とニヤニヤしながら見ている

この二人の温度差はさておき、翔太郎は竜に問いかけた

『エンジンブレード使わなかったって、無いのか？』

『いや、あるみたいだが、それを使わない拳の戦闘がポリシーらしい』

腕を組み壁に寄りかかった体勢で竜が言うと翔太郎は口元を緩める

『素手で戦うアクセルなあ……つまり、アクセルメモリは使うが、戦闘術からして俺扮するジョーカーに憧れてた。ってことか。』

『たく……素直じゃねえなあ……』

帽子を深くかぶり照れたようにしている翔太郎に竜は鼻で笑った

『全然違う。』

『へ？』

『あいつは「風都のアクセルは照井竜だ」と言う事を守る為にエンジンブレードを使っていないんだ
風森の憧れはアクセルだ。残念だったな左。』

『何嬉しそうに言ってるんだコラ。ニヤニヤしゃがって』

『そう、見えるか？それはすまなかった。極力隠してはいたんだが
——』

からかうように笑いながら挑発すると翔太郎はその挑発に乗る

『結局、なんだ？お前は——勇樹の情報話すとかいっておいて自慢か？』

『情報は話した。嘘は言っていない。
自慢もしてないぞ？ただ、お前の話が正しく無いから修正しただけだ。』

『だ——！何様だお前！フィリップ！こいつをたたきだ——』翔太郎、うるさいよ。今僕は風森勇樹の足技を見るのに忙しいんだ。後にしてくれたまえ。』

《ジェットグランツァー——！！》

フィリップは動かない足をシエルスピーカーの力で押し上げた蹴り「ジェットグランツァー」がお気に入りなのか、何回も繰り返し再

生して、自分のスタッグにコピーしていた

『フィリップ！もうそのセリフ聞き飽きたってんだよ。』

『翔太郎、君も一度風森勇樹の戦い方を見るべきだ。彼は素晴らしいよ。』

足が動けなくなったらシエルスピーカーの噴出能力で足を動かすという機転…

ほら、此処の部分だ。

追い込まれてこの発想ができる人間はそういない。』

『のなあ・・・そういう発想力なら俺も負けてねえだろ？相棒。』

『やだ、翔太郎君、勇樹君に嫉妬してんの？』

わざとらしく口元を押さえる真似をする亜樹子にフィリップが否定をする

『いいや、違うよ亜樹ちゃん。照井竜が先に後継者を見つけて悔しただけさ。』

僕たちだって（僕はどうか分からないけれど）不老不死じゃないいつかは年老いて戦えなくなる日が訪れる。いつまでも風都を守る為に戦えるわけじゃない

そういつたときに、遺志を継いだ後継者がいないと困るだろう？

『つまり、竜君は勇樹君を自分の後継者にしようとしてるの？』

『怪我人の戦いなんか普段の照井竜なら気絶させてでも引かせる。』

それなのに彼は黙ってみていた。

と、言う事は風森勇樹の仮面ライダーとしての力量を見ていたと言う事じゃないかい?』

とフィリップが話していると車いすを操り勇樹が入ってきた。

『あ、勇樹君どうだった?』

車椅子を慣れない手つきで操る勇樹を亜樹子が手伝う

『入院は2日延びた。怪我は見た目よりそんなに酷くはなかったって軽く捻挫みたいな症状があるよ。って。仮面ライダーの装甲のおかげで刺し傷は軽減されてたみたいだ。』

「念のため3日は車椅子生活で歩くな」だってさ。と伝えた。

『そっか、怪我が軽くて良かったね。』

『うん。まあ、伸びたのが二日程度で良かったと思ってるよ。そうじゃないと』

上司がうるさいから。』

上司?と亜樹子が首をかしげる

『そういえば、勇樹君ってガイアメモリ犯罪特別捜査官なんだよね。どんな仕事してるの?』

竜くんみたいに上司が居てくみたいな?』

と問われると勇樹は首を横に振った

『違うけど、えっ・・・フィリップから聞いてないの?』

『うっん、私たちが聞いているのは勇樹君が「警察公認仮面ライダー」って事くらいだよ?』

『確かに、僕は軽く浅く伝えただけだ。検索しようと思えばできるけれど、いい機会だし君の口から話してもらえるかい?』

君の職業について――

とフィリップが言うと、「対して面白くないよ?」と言った後、話題にはいいか。と話し始めた

『どっから話せばいいかなあ……。まあ、とりあえず。此処から始めるか。』

未来では照井警視は警視正。警視の上だったかその上だったか、です。

クールでカッコよくドーパント犯罪検挙率90%の警視正殿は警察としても誇りだった。

けれど、警視正殿は凶弾に倒れた。ガイアメモリ犯罪が復活していた風都署のお偉いさん方はその英雄を失ったことで警察の下っ端とも土気が下がることおそれ、

超常犯罪捜査課、真倉警部補（当時）刃野幹夫警部（当時）を「照井竜と共にロス市警に異動」と言う形で飛ばしちゃったわけです』

『刃さんたちをロスに?』

翔太郎がピクリと眉を動かした

『唯一ガイアメモリに詳しい人まで飛ばしちゃったもんだから、警察はドーパント犯罪を防げなくなった。』

当時ガイアメモリの知識が乏しかった俺はそこに目を付け、2年前、情報の掲示と引き換えにドーパントの沈静化を約束し活動をした。

俺はドーパント退治専門だから、風都署の科とか所属して事件の捜査をしたりはしない。

そして、正規に警察学校で学び、卒業したワケじゃないから

手錠、警察手帳、発信器、盗聴器の使用の所持は認められてるけど拳銃は認められていない。

基本、その事件の担当者が上司であり、制服警官は命令で動かせるようになってるけど

その事件の担当者、つまり上司？には絶対服従を強いられる』

『…基本課せられるのは警察の掟か。その場合どうなるんだ？』

未成年は深夜の労働は法律で禁じられている。』

竜が腕を組み壁に寄りかかりながら言葉を発する

『呼ばれたら出るよ？24時間。それ俺には適応されないみたいだ。』

俺の仕事は、まあ、基本として、ドーパントの沈静化。銀行強盗とか、呼び出されたら現場に駆けつけてボカーンとやる。

その他、トップアイドルとか大統領とか要人の護衛。特別なイベントでの警備とか？』

『結構本格的なんだな、で、一か月何件くらい担当してんだ？』

『んー・・・54件ぐらい?』

翔太郎の問いかけに勇樹が答えると翔太郎は身を乗り出した

『はア!?ご、54件だと!?なんで月よりも多いんだよ!』

『いや、実際の怪物事件って13件とか多くて約21くらいなんだけどさ。』

市民からの「化け物が出た!!!」ってな通報も対処したり、警察側の「風森君、犯人がガイアメモリを所持しているかもしれない」って言う

「カモシレナイ」って言う呪文でお騒がせ動物の捕獲とか、ブツの密売組織の潜入捜査の付き添いだとか普通の事件も普通にやってるっていうか』

『マジかよ...』

翔太郎が呆れ口調で言う

『まあ、断れば食い扶ちがなくなるし、ガイアメモリの過去資料の閲覧や情報提供——（された時ないけど）ができ無くなっちゃうから

選択肢はYESかハイしかないけど・・・

本当にガイアメモリは危険で怖いんだ・まったくの無知じゃ戦えないからさ』

『…君、過剰適合者がいるって知ってるかい？』

遠い目で言った勇樹にフィリップが唐突に投げかけた。その問いかけにビクリとするが勇樹は普通に答える。

『知ってるよ。メモリとの相性が良すぎてブレイクすれば死ぬってやつだろ？』

ちゃんとその時はエンブレのエレクトリックで助けてる。過去の資料に載ってた。』

『警察になる前は遭遇しなかったのかい？』

風都署に超常犯罪捜査課があるのを何故、君が知ってるのか。

そこに資料があると言う事を何故君が分かる？』

『それは、俺の父さんが警察官だからだよ。』

父さんに会いたくて署内探検して、刃さんにガイドさんになってもらってたから』

『だから、知ってるのかい？超常犯罪捜査課がガイアメモリを扱ってるって』

勇樹は「まあな」と答えては車椅子を操り「病室に戻るよ」と戻っていった

『なあ、フィリップ、20年だし警官なんだから超常犯罪捜査課くらい知ってんじゃないのか？』

勇樹が病室に帰って翔太郎はフィリップに向かって言う

『・・・』

『フィリップ君？ど、どうしたの？小難しい顔して』

『いや、少しおかしいとは思わないかい？』

『何処がおかしいのよ。勇樹君のお父さんが警察官だから刃野刑事に遊んでもらってるなら課に呼んでジューズくらいおごってるって
いう可能性も…』

『そこじゃないよ。どうして彼は過剰適合者のメモリの抽出方法を的確に答えられたんだ？』

メモリに死んだと認識させ排出させた後でアクセルのエンジンブレ
ードで再び心臓を動かす

その方法を行えるのはアクセルだけ

『そりゃ、お前・・・過去の資料が』

『あるわけないだろう？照井竜はリリイ白金を井坂深紅郎の被害者
と判断し、逮捕しなかった。

よって詳しい報告書なんて残ってるわけないし、例えあったとして
も照井竜が「エンジンブレードで」なんて自分をアクセルを匂わせ
るようなことを打ち込むと思うかい？』

『ねえな・・・ってことは。まさか――』

翔太郎は一つの答えにたどり着いた

それが正しいなら」とても悲しいものになるであろうその理由。

『そう、僕のかあさんが教えたんだろっね』

だがフィリップの口から出たのは「シュラウド」だった。

『シュラウドかよ!』

『考え得るだろう?僕の母さんが、彼に超常犯罪捜査課の事と過剰適合者の事を吹き込んだ』

照井竜の事も見守ってたワケだし、とフィリップが言う

『んだよ、俺はてつきり勇樹が——』

『照井警視いいい——っ!!!』

翔太郎が言いかけたとき、警備員が部屋に向かって走ってきた

『どうした?そんなに慌てて』

竜が振り向き声を掛けると

『か、風森勇樹が消えました!』

警備員は息を切らせてそう言った。

Yの加速／普通が不通。(後書き)

こんな話になる予定ではなかったんですが…

警察の愚痴言つてアハハハつてなって、竜が勇樹アクセルに名前を
与えて送り出すはずだったんですが

どうしてこうなったんだろう？

楽しんでいただけただけなら嬉しいです。

ご感想お待ちしています

Eの襲撃／幕引きは納得した形で

風森勇樹は自分の時代へと帰っていた。

フィリップから問われた「過剰適合者の認知」とつさに「資料を見たらわかる」

と言ってしまったがフィリップならば自分の嘘などお見通しであろう

超常犯罪捜査課の過去資料には「過剰適合者」の資料など存在しない。

そして自分は誰にその対処方法を聞いたのでもない。

その事を深く問われるのが嫌で、勇樹は逃げ帰ってきたのだ

そして今日。逃げ帰って一週間目を迎えた。

足の怪我はすっかりよくなり、出勤命令をこなせるようになった
そして、一週間目の今日の今しがたも、市民の通報で善良なるマダムの自宅に出た茶色い虫に殺虫剤を振りまいてきたところである

自宅に帰ってきては冷蔵庫からゼリーを取り出しカレンダーに目を止める

カレンダーは月方式で、現在は4月。桜のイラストにランドセルに黄色い帽子の小学生が描かれたイラストがまぶしい。

勇樹はゼリーを食べながら、次いつ過去へ飛ぶか、を考えていた。

シユラウドから「賢く使いなさい」と言われた

時渡りの白いエクストリームに似たガジェットは

「化け物が出た」と出勤要請が出て結局、それが誤報だった。と言う
結末に嫌気がさしていた勇樹にとっては癒しの存在だった

あの過去の鳴海探偵事務所の人たちは優しい
だからまた会いたい。

明日にでもあいたい

でも今回はやらかしたので2か月おいてみよう

あのしつこいフィリップでも2か月おけば忘れてるだろう。

そう踏んだ勇樹はカレンダーをめくり6月の所に丸を付ける

カレンダーを見つめる表情が自然にニヤ付いていることに気が付き
フルフルと首を振る。

そして、機嫌が少し良くなった勇樹はベッドの下から誇りまみれの
エンジンブレードを取り出しては

それを両手で「よっこらせ」と持ち上げてソファに移動するとタオル
で刃をふき始めた。

タオルで刃を磨いているとインターフォンが鳴った

家族を失ってからはろくに近所付き合いはしていないので
来ると言ったら勧誘である

『新聞ですか？新聞なら俺間に合ってますよ』

急そつに扉を開けるとそこには

目の下にクマ、ひよろりと不健康に細い体でガリガリの骨ばった顔
の40〜45歳のスーツの男と

それに似合わないスラリとした長身で茶色い長髪を束ねた髪型にメ
ガネ。そして燕尾服をきた

25〜28歳くらいの男が立っていた

こいつらは新聞勧誘じゃないな

なんかヤバい宗教へのお誘いだろうか――

そう二人の醸し出す怪しさに身構えた勇樹にスーツの男が言った

『おやおや、すっかり見ないうちに大きくなりましたね。』

『はあ・・・、父と母のお知り合いですか？』

スーツの男は自分を見るなりそう言った。

自慢じゃないが、父と母は交友関係が広い。表向き死んだ（石になつたがまだ生きているから）とされた今でも、訃報を知らない遠くの友人らが「近くに寄つたから」とやつてくる時がある。

父と母の友人なのだから自分は知らないが相手が知っているというケースはよくあるのだ。

今回もそのパターンなのだろう

『あの、父と母は5年前に不慮の事故で亡くなりました。』

ぺこりと頭を下げ、申し訳なさそうに告げる

こういう場合、本当にどんな顔で伝えたら正解なのか、よく分からない

その場で泣き崩れる人も中にはいる。

頭を下げていると男の人は「そうですか・・・」と言った。

そして

『そのことに関してなら、知ってますよ』

そう言った。

『ち、父と母の訃報をご存知だったんですか??』

一応の命日はまだ先、なら、本当に子ども自分の顔を見に来たんだらうか――

そう考えて対応に困っていると

『ええ、よく知ってますよ。なんせ、この私が彼らを石に変えたのですから――』

そうスーツの男が声色に感情を持たせず普通に呟いた。

『はい……?』

勇樹は思わず聞き返した

『私が彼らを5年前石に変えた。と言ってるんです。初めまして、そして5年ぶりですね。本当に大きくなった』

今度のは聞き返す必要はなかった

目の前で怪しげに笑みを浮かべる男こそ、5年前自分から父と母と兄を奪った張本人なのだ

途端に勇樹の身体に汗が噴き出し、心臓の鼓動が強くなるような感覚が襲った

喉が渴き、舌が回らない中

『お前が・・・？』

緊張と若干の恐怖から勇樹の発した声は上ずった腰も引けているが、頭の中は混乱していた。

何故、自宅の場所が割れているのだろうか…

いや、自宅の場所はそれほど問題ではない。

何故、今なのだろうか――

大分前から家の場所を知っていたのか？

『いえ、此処まで来たのは用事があるからですよ。その前に礼儀として自己紹介をしましょう。』

私の名前は蒲原洋一と言います。

7年前からガイアメモリの流通を行っている組織「EXE」の首領です。

こちらは私のSPの城ノ内政人君です。』

『エグゼ…？』

『ええ。EXEでエグゼ。ご存じないですか？』

『あ、あるわけ、ないだろう…』

『そうですか…。結構、冷静なんですねえ…。君は親の仇を見てもすぐに飛びかかってこないなんて』

『冷静じゃ、ない！』

『そんなに私の用事が知りたいのですか？面白い子ですね』

『っ……言うな！』

飛び掛かるといふ選択肢は勇樹にはなかった

その男の言葉から伺える余裕に体を縛られたような感覚に陥ったからである

『まあ、さっさと言いましょう。』

貴方が持つ「時渡りの白い鳥」それを私に譲ってください。』

『なっ……！？』

勇樹の目は極限にまで見開かれた

「驚き」なんて形容詞で済まされるようなものではなかった。

『持っているんでしょう？「時渡りの白い鳥」を』

どうして、この男がソレを知っているのか

『っ……どうして……それを。』

勇樹は無意識に後ずさった。

その様子を見て蒲原は表情を変えずに言った。

『どうして……？それは貴方の事を監視していたからですよ？』
私たちがせっかく販売したガイアメモリが何者かに破壊されている

「コレを調べないバカはいないでしょう?」

「前から知ってた——?」

「ならどうしてさっさと殺しに来ない?」

「時渡りがあることを知っているなら、一番怪我しているときにも襲撃してさっさと奪えばいい。」

「そんなに怯えないでください。貴方がおとなしく「時渡り」を渡してくれると言うのなら」

「私たちは貴方に危害は加えませんよ。」

「なんで今、なんだ。」

「なんで、今なんだよ。俺が時渡りを貰ったのは一年前だ。」

「俺のこと監視してたって言うならそれ以降ならいつでも機会はあったはずだ!」

「それに俺はガイアメモリを流通するうえでもっとも邪魔な「仮面ライダー」だ!」

「本当にガジェットが欲しいなら怪我をして動けない時を襲撃すればアンタらは悠々自適にメモリを作れる!」

「そうじゃないのか?」

「勇樹は拳を握り震えながら怒鳴った。」

「すると蒲原はちゅちゅちゅ、と人差し指を横に動かした。」

「確かに、仮面ライダーはガイアメモリを流通する我々にとっては邪魔ですよ。ですが、ガイアメモリの流通はただ作るだけじゃないのです。お客様により多く買っていただけるようには”改良”も必要なのでですよ。」

そのメモリが使用者をどう侵食していくか、その末路はどうなるか能力は何処まで拡がるか…

そのデータを集めて踏まえたくて改良し、さらにより良いモノを販売する。

ただ、使用者に「具合はどうですか？」と問いかけるのは非常に面倒だね…。」

設立当時は頭を悩ませたものでしたが、そこに風森勇樹、貴方が現れた。」

「俺に敢えてドーパントを倒させてデータを採集した？」

勇樹が言うところ「その通り」と蒲原は頷いた。

「そうでなければ、仮面ライダーなんて邪魔以外の何者でもない。実に貴方はいい仕事をしてくれましたよ？」

例を挙げるならば、そう――マスカレイド。

仮面舞踏会の記憶を秘めたメモリなんですが、

コネクタ無しでドーパントへの肉体変化が可能であり、副作用は起こらないという利点があるメモリですがその代償として使用者は死

んでしまっていた。

まあ、主にミュージアムのSP共が使うメモリだ。証拠隠滅のためにそういう仕組みだとは思いますが

私はコレを街の血気盛んな若者へ提供しなかった。

そして我々は研究を重ね、命が救われるマスカレイドメモリに作り上げることに成功したのです。

ただ、仮面ライダーのメモリブレイク処置を受けなければ、メモリに焦がれ、手に入れなければやがて気が狂って死ぬ——と言うオマケ付きだね。』

素晴らしい発見をどうもありがとう。と笑顔を向けた蒲原の顔はぞつとするものだった。

『ま、待てよ、データ収集のために仮面ライダーを使うならどうしてダブルとアクセルを消したりしたんだ。』

二人ならば効率も良くデータも集まりやすい、そう訴えた勇樹に蒲原は答えた。

『何故、ダブルとアクセルを消したか？』

当時、我々は技術力も無く一週間で1つのメモリがやっとだった。だから、15年の英雄に復帰されては非常に困ったから——』

自分が推測した通りの理由か…

そう勇樹が安堵した時だった

『と、言うと思いませんか？』

仮面ライダーWの右側、フィリップ。彼が欲しかったからですよ。彼は脳内に地球の本棚と呼ばれる無限のデータベースがある。つまり、彼を捕えてデータ化しガイアメモリ製造の補助プログラムにすれば、鶏が卵を産むように簡単にガイアメモリが大量に生まれると私は考えた。』

『最初からフィリップを狙って襲撃してきたのか！？』

『ええ、彼は今、補助回路として立派に役立ってますよ。』

さあ、あなたの疑問は晴れましたね？”もう一人”頂きます。』

怒涛の質問に涼しい顔で当たり前のように答えた蒲原に
勇樹は悲しみと怒りと驚きが混ざったような気持ち悪い感覚に襲われた。

質問に答えたのは動揺させ、折れるのを待ったためだろうか
無意識に後ずさりを続ける勇樹を余裕の表情で見っていた。

彼はまだ人生経験の浅い18（こども）である。

『つつつ．．．』

蒲原が話してる途中で後ろに無意識に後ずさっていた勇樹はソファに足が当たった。

逃げ場は無く、ただ、目の前の男が怖かった。

刃物が目に近づいてくるような物理的恐怖ではなく、背中に悪寒が走り、心臓があのおに握りつぶされそうな感覚の恐怖

親の仇がいて

ソイツに立ち向かえば、立ち向かって勝つことが出来れば家族が戻ってくる

けれど今の勇樹には立ち向かえる気力は無かった

ただ、戸惑い、怯える

そんな羊を追い詰めて楽しんでいる蒲原の横、初めて城ノ内が口を開いた

『じれったいですね。そろそろ取ってきましょうか。』

『そうですね。お願いします。時間も押しているので』

蒲原が言つと城ノ内は勇樹の前へ一歩一歩近づく。

『風森君、いい加減したまえ。怯えているなら渡した方が身のためだ。』

『渡したら、お前らは過去中のフィリップを攫う。そんなの耐えきれるかッ！』

『けれど君はもう、我々に立ち向かえないほど恐怖を抱いている。もう無理だろっ？』

『誰が渡すかよ！！渡すくらいなら——渡すくらいなら——』

勇樹はソファの上のエンジンブレードを手に取った

『二度と使えないようにぶっ壊してやる！！！』

そういつと時渡りを床に落とし思い切りエンジンブレードを振りかぶった

勇樹の振るエンジンブレードから時渡りを救おうと城ノ内が前に飛び出す

バキヤ——

つと床がぶち抜ける音と共に時渡りは真っ二つに砕ける

『つ・・・はあ・・・はあ・・・』

20キロもあるエンジンブレードを勢いよく振り降ろした所為か、手首から腕へ痺れるような痛みが走った

『何てことを...！』

蒲原は驚いたような顔を向けていた。

勇樹のあの行動は計算外であつたらしい。

勇樹自身も何をしたか覚えていない。

ただ、身体から恐怖心は消え
真っ直ぐに蒲原らを見据えられるようになっていた。

『よくも私の計画を台無しにしてくれましたね。

…全く、ばか真似を…

4年の恩から命ばかりは…とと思っていましたが、

城ノ内君、予定は変更です。この世から消してしまいなさい。』

私は戻りますから。と淡々と告げて自宅を去っていった。

『待て！』

勇樹はエンジンブレードを捨て、即座にメモリをドライバーに挿し
走りながらアクセルに変身し追いかけてようとしますが

その瞬間、

城ノ内がアクセルの行く手を塞いだ。

『本当にビックリだよ風森君。ガクガクだったのに。』

白い手袋を外し

懐から金色のメモリを取り出しながら城ノ内は言う

『俺もビックリだ。』

『怖くない？これでもか？』

「MINOTAUROS」

そう電子音が告げた瞬間、城ノ内は銀色の見た目はなんか古くさそうなドライバーを手首に巻き、それを押し当てた。

押し当てると城ノ内の体は棍棒を持ち、二本の鋭い金色の角が生えた筋肉隆々の牛頭人身の怪物へと変化した

『ミノタウロス…って神話の…？』

ツてか、ドライバー通したのに何でドーパントになってんだよ。』

ドライバーらしきものを通したのに目の前の城ノ内はドーパントのそれだった。

驚いているアクセルを見るとミノタウロスは言う

『警察に居た割にガイアメモリのことなにも知らないんだな。』

ガイアメモリには神話上の架空の生物の記憶を秘めたメモリが存在するんだ。

そしてこれは毒素から身を守るフィルターさ。

「P1メモリ」は毒素が強めだから吞まれないためには必要なんだ。

『

ミノタウロスドーパントとなった城ノ内は凶太くなつた声で言う。

『…「P1メモリ」それがお前らが作ってるメモリの総称か。4年間戦ってきたけど初めて聞いた。』

本当に俺は何も知らないな。情報を漏らしたってことは…』

『蒲原様の計画を台無しにしたお前は殺す。だからその情報は墓まで持っていくと良い。』 労いだ。』

『そんな辛いなら、家族を返して欲しいな。』

『そんなの無理に決まってる。死ぬ覚悟はできたかい？』

ミノタウロスが棍棒を手で叩く

『…ばつちりだ。先手はもらったぞ！』

先手を取ったのはアクセルだった。

がたいの良い体つきミノタウロスドーパントであるが、この間のように全身にトゲがあるわけではない

このようなタイプは筋肉がガードの役割を果たし皮膚が固い。

(こういった硬そうな生物を怯ませるにや、急所付きが一番だな。)

持ち前の体術スキルを生かして懐に潜り込み、ミノタウロスドーパントの喉をつま先で蹴る。

『いつ・・・！？』

つま先に痛みが走った

『確かに僕のこのミノタウロスの身体の皮膚は硬い。だから急所の喉を突く……。いいセンスだが残念だ。その程度の蹴りは痛くもかゆくもない』

ミノタウロスはアクセルの突きだしていた足をつかむと横にはり倒した。

『つぶ・・・！？』

脛脛を平手打ちされバランスを崩し横にアクセルは崩れる

（力強ええな。

人間なら喉を狙って足を狙うのがベストだけど足も堅そうかなら、あの角を折る。）

金色の二本の角

アレを折れば少なからず怯むだろう。そこにマキシマムドライブを喉に叩き込めば勝てる

そう確信したアクセルは、ノロリと棍棒を振り上げる前でシェルスピーカーとバットメモリにルナを差し込んで同時に放り投げる。

【ルナマキシマムドライブ】

【エンジンノスチーム】

光と蒸気のカーテンでミノタウロスの注意をそらす。

『生意気な…』

光なら対抗できたが蒸気までとなると困難をきした。

そこに

《こつちだ！》

と声がする

ミノタウロスはその方向に棍棒を振り上げるが

《こつちだ！こつちだ！》

振り上げた先に見えたのは勇樹の声で喋る蛙だった。

『どつちの方向向いてんだよ。こつちだって言ってんだ。』

蛙に気を取られたその背後、とび膝蹴りを食らわそうとアクセルは床蹴り上げ飛び上がる

【アクセルマキシマムドライブ】

つま先に黄色い炎を集中させミノタウロスの角めがけ足を振り下ろすが

ミノタウロスは横に避けた

がたいの良さから考えられない速さで横にずれたミノタウロスは滞空しているアクセルの横っ腹を棍棒で殴打した。

『ぐあああッ!?!』

アクセルは壁に激突し横っ腹を押さえる

『がはっ——』

『前に居ないなら後ろに居る。お約束みたいなものだな。』

装甲こそ解けていないが横っ腹への一撃は強烈なものだった

立ち上がるうとしてしていると頭を掴まれそのまま力任せに床に叩きつけられる。

その勢いでアクセルの変身は解けた。

かしゅん……と言う音を立ててドライバーは転がる

勇樹は立ち上がる力を失くし、床に這いつくばっていた。

(っ……ここまで強いのか……幹部クラス)

力を入れても立ち上がれない勇樹はミノタウロスを見上げる
ミノタウロスはドライバーのスロットに刺さりっぱなしのからアクセルメモリを取り出した

『端子は金色、箱は赤に近いオレンジ。純正化されている。
なるほど、これがミュージアムの裏切り者、園咲文音の作ったメモ
リか。』

壊してしまうのは勿体ないだろうか…

とミノタウロスはアクセルメモリを見つめる

『やめる…そいつに触るな！それは俺のアクセルメモリだ！』

動けない身体を無理に引きずって勇樹はミノタウロスの足元までくる

『返して欲しそうだな？お前はそれでなければ変身が出来ないから当然か？』

『つつ…返せ！！俺のメモリを…返…せ。』

勇樹はエンジンブレードを支えに立ち上がり、手を伸ばす

『いいだろう。』

ミノタウロスはドライバーも拾い上げメモリと一緒に渡すが
アクセルメモリを懐へ仕舞いこんだ。

『何のつもりだ…？』

『俺に、質問するなあぁー！ーッ！』

懐へしまい込んだ行為に驚き隙を見せたところを勇樹はエンジンブレードを振りかぶった

予想もしない反撃だったが、足腰が立っておらずそれは不発に終わった。

支えを失った勇樹は倒れ込むが、そのまえにミノタウロスは首を掴

み持ち上げる

首を掴む力はそんなに強くはなかった。

首をへし折るつもりでは無いらしい。

『さつさと・・・やってくれよ。』

首を掴まれる勇樹から声が漏れる

『ドライバーを渡したのに生身で突っ込んでくるなんて…諦めたのか？』

『変身しても俺の身体能力は下がってる。

がたいに合わないスピードを持つアンタの攻撃は避けられないし、俺の攻撃も当たらない

俺はお前に勝てない。今度こそ戦えばアクセルメモリがブレイクされる。

俺はアクセルを失いたくない。だから止めた。』

勇樹は淡々と答えた。

『…たかが1つのメモリと命を天秤に掛けてメモリが大事とは…変わってるな。』

『俺もそう思うよ。でも、殺されるよりもメモリ失う方が嫌だから仕方ない。』

勇樹は苦しそくに苦笑しながら答えた。

『最後に…言い残しておくことはあるか？』

ミノタウロスは角を一本折り、それを勇樹の心臓へと定める
それを見ては勇樹はゆっくり口を開いた

『父さん、母さん、兄さん……。またいつか何処かで会おう。』

『伝えておくよ』

ミノタウロスはそう呟くと角を勇樹の腹へと突き刺した。
腹を刺された勇樹は口から血を吐き、動かなくなった。

『……………』

ミノタウロスは勇樹を壁に寄りかからせるとシエルスピーカー、ア
トラスフォン、その他ガジェットをその手で破壊し、勇樹のジャケ
ットのポケットに入っていた
ルナ、ヒート、メタルのメモリを握りつぶした。

その後、変身を解くと床に転がっているロストドライバーを拾い上
げる。

(これから研究が滞るだろうがまあ、その時は僕が変わればいい。
問題は無いな。)

『これは貰っていくよ』

ロストドライバーを手に城ノ内は去って行った

風森勇樹はその後、異臭がする。と覗いた近所の人によって病院へと運ばれる

刺されたのは腹とあり、奇跡的に命は救われた。

だが、事件発生から今日で13日が経とうとしている今でも目を覚ます気配はなかった。

集中治療室の前、女と一人の男が話をしていた。

『…来たぞ。状況を説明しろ。』

男は渋めの声で女に言う。言葉にはトゲがあるものの、どこか柔らかい口調だった

『来てくれたのか・・・？』

『馴染みの頼みだ。話だけは聞いてやる。』

『組織に…襲われた。』

『それで…俺に何を頼む。』

男は低いトーンで言う

『…』

女は俯き言葉を詰まらせる

だが男はそれでも理解したようだった。

『お前の口から話して欲しいが…仕方がない。考えれば分からない内容でもないからな。その依頼、引き受ける。』

『…すま、ない。私はここにいる。』

女は男の背中へ頭を下げる

それに気が付いたが男は振り向かず懐から透明のクリア色のメモリを取り出し、始動させた

【TIME】

運命はこれより加速していく。

Eの襲撃／決断のアクセル（前書き）

はい。えーっと、前回の章で1部終わり。みたいな話してましたがこの話で1部は完結です。

Eの襲撃／決断のアクセル

勇樹が病院に入院していると同時刻現代。

風都署、超常犯罪捜査課では照井竜が書類と格闘していた。一年前に比べると超常犯罪は少ないのでこういった書類と格闘する場面が多くなっている

だが、竜の手は思うように進まなかった。この書類の当たるのが徹夜明けと言つのもあるが、何か小さな胸騒ぎがするのだ。

『課長、少し休んだらどうですか？我々に仮眠を進めても眠ってないでしょ？』

これぐらいの書類なら俺達がやりますんで一度自宅に』

そついうのは超常犯罪捜査課の同僚、刃野である。彼はもう一人の同僚に比べると空気が読める

『いや、・・・眠れないんだ。』

能率は格段に下がっているのだが、どうもここを離れたくない

『我慢できなかつたら言ってくださいよ？』

『たく真倉の奴、どこまで昆布茶を買いに行つたんだ？』

刃野はキャスター付きの椅子を移動させながら茶の筒を覗く彼が愛飲している「こぶ茶」は現在無い。

今朝飲んだのが最後である。

その為、（刃野より）空気の読めない真倉が買い出しに出されたのであるが、小一時間経った今でも戻ってこなかった

『コーヒーならあるぞ。刃野刑事』

『いや、課長のコーヒーは絶品ですけどどーもアレが無きゃ駄目なんです。』

それより課長、サインする場所間違えてますよ。』

『なに・・・?!』

刃野の行動を目で追いながら作業していた所為か、大事な書類のサインをミスしてしまった。

『貰ってきましようか?』

ツボ押し器を押しながら刃野が問いかけると竜はおとなしく頷いた。刃野が書類を取りに戻ると入れ替わるように真倉がお使いを終えて戻ってきた

『刃野刑事、買ってきましたよ。ってアレ、刃野刑事はどこツすか?』

まさか、エスケープ!? 一人だけずる—— 『彼は書類を取りにいった。それより遅かったな。何かあったのか?』

『いえ、ただちよつと署の前で面倒事があっただけです。』

マフィアみたいな渋い男が「超常犯罪捜査課は何処だ」って警官ともめてて…』

『マフィア? 此処を探してるとはどういうことだ?』

『なんでも照井課長に用事があるのかなんと――』

ふと真倉が入口に目を向けると

《此処が超常犯罪捜査課です。照井課長はあの赤い人物。今書類をやっていますが、話は聞いてくれると思いますよ》

刃野がその男を連れてきていた

『なにを連れてきてんだあああゝゝゝ！！』

『ちよつと待て！お前、照井課長に何の用だ！止まれ！止まらないと撃つぞ！！』

真倉が横で手を銃のように構え威嚇するが男は無視をし、机の前までくる

『待てって言う――』
『まあまあ、俺達は今のうちにブレイクタイムといこうや。照井課長、そういうわけでちよつと出てきます。何かあったらご連絡を。』

見かねた刃野が真倉を引っ張り超常犯罪捜査課を後にする

『良い刑事になったな。』

男はそれを見て一言呟いた。

『俺が超常犯罪捜査課の照井だ。何かお困りごとも？』

一応の来客の為、敬語を使う竜に男は一枚の写真を取り出し、机に広げた

『…この男を知っているな？』

広げた写真には一人の少年が写っていた。

『風森：か？』

それは風森勇樹に似ている少年の写真だった。

竜は思わず口にした

目の前の男はそれを聞くなり次へと進んだ。

『この男が誰か知っているなら話は早いな。照井竜、お前はこの男に命を懸けられるか？』

竜とその男が話したのは30分程度だった
男は

《決断したなら、三日後、東風都駅に來い》

と言い去って行った

「勇樹が通り魔に刺された」

男は簡単にしか話さなかった

だが、竜は考えていた。

通り魔に刺されたくらいで、此処へ来るだろうか
勇樹は実際戦う上で何度も怪我をしている

失礼かもしれないが人間如きの怪我は慣れっこなはずだ。

あの男が誰なのか、名前を聞くのを忘れたが、勇樹を知ることから
未来の人間なのだろう。

それがわざわざこの時代へやってきたと言う事は
事は一刻を争うのだ。

期限は3日。

3日のうちに答えを出さねばならなかった。

『へ？竜くん、警視庁に異動になっちゃうの？！』

竜の決断はわずか3時間程度で固まった。

未来に行き、勇樹を助ける。

決断が早いのは最初から何処か心の内で決めていたからかもしれない。
い。

現在竜は鳴海探偵事務所に行き、風都を離れることを説明していた。

『ああ、警視庁に召集され、警視正となることになった。』

素直に「勇樹が危なくなつた」と言えば半熟探偵もこの街から消えるだろう。

だから適当な理由を考えた。

コーヒーを飲みながら伝えると話を聞いた亜樹子は戸惑っていた

『いつ、戻ってくるの？』

警察関係に詳しくない亜樹子は素直に疑わずに切り返してくれた。

疑われないと言う事はとても助かる。

『何年になるか分からないが、必ず戻って来る。』

そう伝えるが

デスクに座り聞いていた半熟は反発した

『納得いかねえな。』

『何がだ。』

『お前ならそういう話が出た場合、「風都守る」って蹴飛ばすだろ？
ガイアメモリの犯罪はまだ消えてねえ。何で異動なんだ？風都署も
お前が必要なんじゃないのか？』

亜樹子が疑わず納得してくれたから安心していたが
半熟は納得しなかったらしい。

まあ、半熟のほづが自分自身の答え方も知っているのであるが

(この男はどうしてこういう時だけ勘が働くんのだ…)

『さあな。上の考えてる事は分らん。』

検挙率90%の俺が邪魔になったのかもな。

と竜はさらりと言う

『お前は俺達とずっと風都を守っていくんじゃないのか?』

『も、もしかしたら東京にドーパントが出た。とか?風都から持ち去られて…とか。』

そ、そうかも!と横で言う亜樹子だが、翔太郎に睨まれ大人しくなった。

『残念ながら、過去ガイアメモリが風都の外に出た前例はないよ。照井竜、君は仮面ライダーとして戦っていく道より、出世を選ぶんだね。』

フィリップは本のページをめくりながら言う

『優秀なエリートさんも考えもんだな。ったくさつさとどっか行っちゃまえよ!』

ずっと一緒に風都を守るものだと思っていた翔太郎は裏切られた、と言うような気持ちでいっぱいだった。

竜ならばそういう話が出ても蹴飛ばすと信じていたのだ。

一方のフィリップは「ああ、世話になったな。」

と踵を返した竜の後ろ姿を見て本のページをめくる

(異動の話は嘘のようだね。照井竜が僕らにこんな嘘を吐くなんて珍しい…。)

『ねえ、ちょっと！あんな言い方無いんじゃないの?!』

竜君は上から命令されて警視庁に行くんだよ!?!』

竜が去った後、翔太郎の態度に亜樹子が怒鳴った

『上から命令されようが、照井ならそんな話断るだろうが!』

『そんなこと言われても、もしかしたら弱みとか握られて脅されてるかも知れないじゃん!』

とにかく私、こんな別れ方、嫌だからね!?!』

亜樹子はそう訴えると財布を持って出て行った。

『まったく…弱みとか握られたり脅されてんなら昔の照井じゃあるまいし話すつての』

亜樹子のやつ、と翔太郎は不貞腐れる

その横でフィリップは呟いた

『照井竜の弱み。嘘の異動…』

異動「風都を離れる

弱みのために、照井竜は風都を離れる』

『ん、どうしたフィリップ、なんだよさっきからブツブツ』

『照井竜は弱みの為に風都を離れる』

弱みが亜樹ちゃんや、仲間や友達の場合、彼は風都を離れずこっそりと僕に検索を頼み、アジトを聞きだし単独で乗り込み潰すはずだ。

彼が風都を離れると決意するほどの弱み、いや・・・人物

っ
——そうか!!』

竜が風都を離れるまであと1日となった。

未だに亜樹子は異動の話信じ、竜のお別れパーティーを開いていた

『所長、俺はこんなパーティーはいいと...』

罪悪感から戸惑っている

『だって竜君、帰ってくるの何年になるか分からないんでしょ？
それなら、たくさん思い出作ろうよ！竜君があっちでも頑張れるよ
うなでっかい思い出!』

腕を大きく広げては「ね？」と笑い竜にジュースを手渡す。

部屋に風船とか、リボンとか折り紙とかで可愛らしくデコレーションされた事務所。

弾幕には「竜君、昇進おめでとう」と書かれている。

(フィリップの時も確かこんなパーティーをしていたな)

と竜は思い出していた。

翔太郎がフィリップが消えるという事実を受け止めきれず逃げ出した時

フィリップも自分も言葉では言い表せないような悲しみに襲われた。なんと声を掛けていいか分からない

そんな中、

『そうだ！お別れパーティーやろ！』

と「パンっ」と手を叩いてその場の空気に似合わないような明るい笑顔で言った。

「たくさん思い出作ろう？」

その時のフィリップは楽しそうで、みんなが笑っていて思い出として残っている

『所長、その…』

パーティーが始まる中、竜は1つの決心

亜樹子にだけは真実を言おう」と肩を叩こうとしたとき

『竜ちゃん、竜ちゃん！暗い、暗い！もっと楽しくいなくなっちゃ！主権が暗い顔してちゃダメ』

とウオツチャマンがジュースを持って話しかけてくる。

『そうそう、晴れの門出はドンガラガッシャンピューンっと元気にいなくなっちゃね！』

そしてそれに被せるようにサンタちゃん。

『そう・・・ですね。』

軽く相槌を打っているとその横では

『あゝあ。これから私と竜さんのラブロマンスが始まると思ったのになあ。』

『ちよつとなにそれ！私聞いてない！いつからそんな話になってるのよー！』

『えーと、私の心が逮捕されてから？えへっ』

『えへっ　じゃなーいーい！』

リリィ白金と亜樹子が話している。

『じゃあ、私、マジックやります！』

『おおー待ってましたあー！！』

リリイは盛り上げ担当なのか主役の自分より目立っているような気がした。

だが、そんなパーティーに探偵二人の姿は見えなかった。

そしてその翌日

風都駅に眠たい目をこすって見送りに来たのは亜樹子、刃野、真倉だった。

竜の仕事の大半は刃野へ受け継がれることとなった

騙され上手な彼は、自分が言った事に疑問を持たずに真倉を従え敬礼をする

『それじゃあ、その・・・自分が定年を迎えるまでに戻ってきてくださいよ?』

『そうそう、戻ってきたら俺の分の仕事も頼みましたよ!』

そう言つて二人は仕事があると戻って行った。

そして自分と亜樹子の二人となった。

『ごめんね。翔太郎君たち、「ぜってえーいかねー」って聞かなくて。風都は心配しなくても私達がしっかり守るから!』

拳を握りどんと胸を叩く亜樹子

『昨日はありがとう……。とても楽しかった。』

君は凄いな。』

『え？なにが？』

無自覚とは恐れいる。

『いや、こつちの話だ。』

それより、所長、今更なんだが…君にだけ伝えておきたい話がある』

ある一種の勇気である。

自分のために嘘のパーティーを開かさせてしまった。

『お、俺の異動の話は——』 『うん、知ってるよ？嘘、なんでしょ？』

正直、心臓がひっくり返りそうになった。

亜樹子は嘘を見抜いていたのだ。

『翔太郎君の言うとおり竜君は風都に残ると思ったから嘘かなあ』
つて』

『そ、それで何も言わず、パーティーを開いたのか?!』

『何年も離れるのは同じなんですよ？なら思い出作りたいな…』
つて
思つて

思い出作れないで離れるのは寂しいから。

心配しなくても風都は翔太郎君たちが守るから安心して行ってきて
ね？』

ブルルルル・・・と発車のベルが鳴る

《風都へ東京行へ快速「かざぐるま」まもなく発車いたします。
黄色い線までへへ》

電車発車のアナウンスが聞こえ始めた。

『ちょっと竜君、もうすぐ発車だからドア挟まっちゃうよ?』

気が付けば自分はドアのギリギリに立っていた。

『ねえ、聞いているの?』

『——い。』

ふと、竜が何かを言った。

『へ?今なんて言っ——』

その声を聞こうと足を黄色い線の外側に踏み出すと同時に

竜は亜樹子の手を引っ張り車内へと引き入れた。

その直後、電車のドアは閉まり動き出す。

その反動で亜樹子は竜の胸に顔を寄せ抱きついていてる形になり

その数秒後、自分が置かれている状況に気がついては

『わ、わわ…私聞いてなーーーーーい!』

と絶叫した

まるでその光景はドラマのようだった。

竜が乗っていた車両にはそんなに人は乗車していなかったが亜樹子は顔から発火しそうなくらい恥ずかしさでいっぱいだった。離してくれればいいのに電車が動き出して2〜3分経過した今でもそのままの格好なのだ

『…風森が危機的状况にさらされている。

だから俺は風都を離れ、未来に行く。すまないが君も一緒に来てくれないか?』

竜はその体勢のまま呟いた。

『は?へ?えええっ!?!』

真っ赤なのがさらに真っ赤になった

『駄目なら、次のさざ波公園前駅で降りてくれて構わない。

ただ…』

『ただ…?』

『…ただ…』 『やーっばそういう事がよ』

竜が言いかけた瞬間、横の車両から声がした
その声を聴いた途端竜は顔を顰める

『やあ、照井竜、おはよう。何してるんだい？』

フィリップの言葉で竜は今の状況を理解し、亜樹子を離す。

『左、フィリップ…居たのか。』

『居たのか、ってもう少し驚けっの。なんで亜樹子は自分から誘って俺達はガン無視なんだ？』

勇樹を救うなら俺達に声を掛ける方が先だろ？』

『フィリップの検索は便利だな。俺の行動はお見通しか』

『いや、検索は降りる駅と乗る列車の番号だけだぜ？人の心は検索できないからなあ。』

な。フィリップ』

『そう。検索は君が乗る列車と気味の嘘についてだけだよ。少し頭を捻って考えたら分かったんだ。』

君が風森勇樹を救おうとしていることがね。』

そこまで言うと竜は観念した様に真実を話し始めた。

『…3日前に風都署に男がやってきた。』

男は勇樹が通り魔に襲われた。と話したが、通り魔如きで来るはずがない。時は一刻を争うと見たんだ。』

そして俺は勇樹を救う決断をした。』

お前達まで来てしまったら俺達の風都を守る人が居なくなる。だから言わなかった。』

『の割に亜樹ちゃんは連れて行くのかい。手まで引つ張っちゃって、
どついう事だい？君は亜樹ちゃんに恋愛感情は無いはずなのに』

『っ・・・無いが、所長の不思議な力は風森にも必要だ。』

『なんにしても、俺達は引かねえ。その未来の従者に俺たちも会わせろ』

此処は電車内

問い詰められた竜は分かった。とだけ言い残し

待ち合わせの場所の東風都駅へと揺られた

東風都駅に着くとその男は竜を待っていた

『あ、あの人・・・？』

白いスーツの男は帽子を深くかぶり「ついてこい」と言わんばかりに歩き出す。

着いた先は人気のない場所だった

『…来たか竜、随分と仲間を連れてきたな、見送りか？』

竜の後ろの翔太郎らを見て男が言う

『あの男二人は勝手についてきただけだ。』

俺が連れて行きたいのはこの女性だ。彼女は風森に必要なだからな。』

『う、うん・私も勇樹君が危ないって言うなら助けてあげたい。だから着いていく』

『連れて行く前にもう一度言っぞ。』

お前が旅立つのは未来だ。

自分がそこで死ねば風森勇樹の現在が消えるかもしれない
死なない覚悟と戦い抜く覚悟はあるか？』

『俺に質問するな。俺は、死なない』

言い切った竜に男は「そうか・・・」と呟いては灰色のエクストリームのようなガジェットを取り出した。

『貴方も、持っているのか？』

当たり前であるがまったく同じ形状であることに竜が言つと男は小さくコクリと頷いた。

『これは、俺の依頼人の借り物だ。』

「じゃあ、行くぞ」と男がそのガジェットに透明なメモリを挿し使用しようとした瞬間、翔太郎が呟いた

『ちよつと待つてくれよ！！何でおれたちは無視なんだ？俺達だつて勇樹を救いてえ。』

『そうさ。僕は調べ物が得意だ。だから連れて行ってくれても損は

ない。』

そう訴える二人に男が言う

『・・・お前らは見送りに来たんじゃないのか？』

『見送りだなんてトンでもねえ！俺達も付いていくぜ』

『・・・お前たちは二人で一人の仮面ライダー、だったな。

竜と二人でこの風都を守ってきた

竜が旅立ちお前達まで風都を旅立ったらその間の風都は誰が守る？』

男の言葉は威圧感あふれるもので、翔太郎が一步下がった

『け、けど！勇樹は今ヤバイ状況なんだろう？！勇樹は俺達の仲間だ。俺はアイツに泣いていて欲しく無いんだ。俺達もつれてってくれよ』

そう訴える翔太郎を男は頑なに拒んだ。

『断る・・・』

お前たちダブルはこの街を守れ。』

『何でだ！何でアンタにそういう・・・』

翔太郎が躍起になって男に近づき言いかけた瞬間、出た言葉は止まった

『・・・おや、っ・・・さん？』

『えっ？お、お父さん！？』

翔太郎が反応し、それぞれが反応する

目の前にいた白いスーツの男はかつて翔太郎が師と崇め、凶弾に倒れた

鳴海荘吉だったのだ。

『なんで、おやっさんが…』

こんなところに――

まさか「生きてたのか？

遺体は見つかっていない。だから生きているという可能性も無くは無
い

目の前の人物が生存している鳴海荘吉であるのか、と小さい希望を胸に抱いていると

荘吉は言う

『いいか、翔太郎。感情的に動くのは無しだ。出来ることやれ。』

『なんで照井なんだよ。俺達に直接言えば照井が…』

『俺の依頼人からの指名だ。それに俺が依頼したらお前は前が見え

なくなる』

おやつさんからの託された仕事だ。と張り切り盲目になり
命を失うかもしれない
だから照井だけに会ったのだ。と

フィリップは感じ取っていた

『わかったよ、鳴海荘吉…そういう事なら僕らはこの時代の街を守る。』

『なっ・・・フィリップお前』

フィリップの決断に翔太郎は驚くがフィリップは言葉を続けた

『ただ、お願いがある。僕らも風森勇樹を助けたい。彼は僕らにと
って大事な仲間なんだ。』

僕たちは照井竜のようにずっと付き従う事はしない。ちゃんとこの
街を守る為に戦う。
だから、少しの間だけ代わりにこの街を貴方が守ってくれないだろ
うか。』

フィリップはそう訴えた

荘吉はその答えを待っていたかのように頷いた

『それで、いいのか？』

『ああ、構わない・・・よね？翔太郎』

相棒の助け舟に翔太郎は感謝した

『ああ。ありがとうな、フィリップ。』

莊吉はそんな二人を見て安堵のような表情を見せたかと思うと
竜と亜樹子に向き直る

『貴方が所長の父親の鳴海莊吉。左の師匠…』

『畏まった言い方は好かない。』

ただ俺は依頼人の依頼を遂行しにやってきただけだ
お前はその手伝いだ。

俺の依頼人が待っている。事の様子はそいつから聞け』

竜はコクリと頷く

横の亜樹子は言葉に詰まっているらしく黙って莊吉を見ていた

そして、莊吉、翔太郎、フィリップ、亜樹子、竜の5人は風森勇樹
の待つ未来へと旅立った。

Eの襲撃／決断のアクセル（後書き）

はい、この話にて、1部が完結です。

当初は照井さんは黙って旅立って

当日に「置いていくなああああ」と事務所メンバーが雪崩れ込むようなイメージで書いていました。

そして、おやつさんは最初から依頼人の名前を明かして展開を進めようと

。ですが、おやつさんはそう易々と口にしないだろうなあ…と思いますまして

止めてみました。

楽しんでいただけたら嬉しいです。

それでは。

（駅でのシーンは自分でも直視できません。）

データファイル？（前書き）

1部の簡単な設定。

データファイル？

風森勇樹（18）

容姿：マッシュレイヤー／黒

二重。

風森から数えての5年前の8月（13歳）に父、兄、母をドーパン
トに襲われ石像にされる

その1年後白い服の男からアタッシュケースに入ったWとアクセル
のメモリを貰い

家族を助ける為、仮面ライダーになる決意をする

そして七本のガイアメモリを使い活動していたが
とあることをきっかけにWのメモリが使えなくなる

その後、紆余曲折ありドーパント沈静に協力する代わりに

お金と過去のガイアメモリ犯罪の閲覧を許可すると言う条件で

「警察公認ライダー」ガイアメモリ犯罪特別捜査官となる。

警察学校には通ったがバイクの免許、体術、武術を本格的に習った
めであり、法律関係は勉強していない

ので普通の殺人事件などには関与しないが
ドーパントが絡むと来賓の護衛から銀行強盗まで幅広い分野を任さ
れる。

【迅速かつ、確実に犠牲者を出さず沈静せよ】が警察の掲げた条件
なので

ライダーとしての戦闘スタイルは「肉を切らせて骨を断つ」である。

基本、ドーパント事件のみの担当だが

最近では口車に乗せられてお騒がせ動物の確保や普通の銀行強盗、ゴキブリ退治などもやっている

自分のルール（絶対ルール）があり、これを破るのがすごく嫌である

- 1：ほかの時代の出来事には干渉しない
- 2：エンジンブレードは使わない（でも例外もある）

警察としては正規雇用ではないので職業柄の無線、盗聴器、手錠の所持および使用は可能だが

拳銃の所持は認められていない。

そのため銃の射撃が下手

ガジェット

バット、スパイダー、
デンデン、フロッグ

アトラスフォン

アトラスオオカブトをモデルに作られた
風森勇樹、専用携帯ガジェット

通信、録画、写真撮影機能がある。

シェルスピーカー

ホタテ型ガジェット

ライブモード：ヘッドホン&立体スピーカー

ギジメモリ「SHELL」を差し込むと

カスタネットのように叩いて銃声からクラッカーの破裂音までを出すことができる

また、ライブモードのヘッドホンは外部の音を遮断出来たりアトラスやバットで得た【音】をより細かく採集できる。

また、エンジンメモリ、メタルメモリとの相性がよくドーパント退治の相棒である。

レディシーバー

てんとう虫型ガジェットでフロッグより一回り大きい手のひらサイズである。

主に他との通信をリアルタイムでとる無線機、である。背中の羽を開くと小型の髪飾りサイズの子てんとう虫があり、それを付けていれば多少なり離れていても通信可能である。

が、シュラウドが付けたギミックのヒートメモリで始動するてんとう虫の黒い○の模様を利用した

「ホットプレート機能」により
本来の使い方は忘れ去られ、たこ焼き器と化している。

ライダーズペック

仮面ライダーイエローアクセル（仮）

シュラウドが施した（？）特殊プログラムにより適合率の悪いアクセルメモリで

ロストドライバーを使い変身する姿。

通常のアクセルが真っ赤なのに対し、黄色い姿で、Wのような細かいフォルムにアクセルのタイヤや青い一つ目など色濃くアクセルの特徴がある。

フィリップ曰く、ロストドライバーでは赤い体の青目のWになるはずらしいのだが
定かではない

主な戦闘スタイルとしては銃撃の命中率は悪く、棍術は使えずにいるが、頭の回転はよく
突発的な思い付きで敵を倒す傾向にあり、

ドーパントの確実に迅速な対応を求められるためか「肉を切らせて骨を断つ」
と言う少々危ないスタイルをとっている。

勇樹のポリシーにより

エンジンブレードは使用せず、拳より蹴り派である。

体術系アクセルである。

また、トリアルメモリもあるが、
変身姿は赤（でも高速移動は青い正常なトリアル）で
変身前にエラー音が鳴ることからアップロードが出来ていないもの
と思われる

その為、変身時間は約20秒であり、敵を撃破するというよりは
とっさの人命救助にむいている。

ビギンズナイト&年表

13歳の夏休みに事件が発生。
父と母と兄を石像にされる

そのショックから立ち直れずにいたところを1年後
白い服の男からW、アクセルのメモリが入ったアタッシュケースを
受け取り
家族を取り戻すため仮面ライダーになることを決意

16歳9月：とある事件を境にW、アクセルのメモリが使用不可能
になる。

16歳後半：警察と契約を結び活動する。

18歳：現在に至る。

いとYOUU物語ノシユラウドの想い(前書き)

2部スタートします。

IとYOU物語／シユラウドの想い

5人が降り立ったのはまっ白い部屋だった。

『ここ・・・何処？』

真っ先に口を開いたのは亜樹子で、その問いに荘吉が答えた

『ここがお前たちの住んでいる風都の20年後。

そして、勇樹が入院している風都病院だ。

俺の依頼人は勇樹の病室にいる。

照井、お前は先にそいつと会ってこい。

俺は翔太郎と今後の話をしなくちゃならない。何日交代にするか…
をな。』

『ああ、分かった。…』

俺は荘吉から部屋の番号を聞くと走って行った

亜樹子は戸惑っていた

どういっわけが存在している鳴海荘吉

時を渡るメモリを使いやってきた事から見るに過去の人間なんだろう

勇樹の容体も気になるがせつかくの奇跡をしつかり目に刻みたかった

『それで、どうするの？』

言いたいことは山ほどあった。

けれど何から言っていていいか分からない
だから、普段の自分を見せることを選んだ

何日交代？

とニコニコしながら亜樹子は双方に問いかけた

それと同時に

竜は集中治療室へとやってきた。

小さな窓から勇樹の姿が見える。

勇樹は酸素マスクや点滴を付けられていた

3週間前はあれほど元気だったのに――

変わり果てた姿の勇樹に言葉を失くしていると

『来てくれたのね…』

と声がした。

その声は、鳴海荘吉が言う依頼人、

シユラウドだった。

20年、月日が経つものにも関わらず自分が会った姿のまま登場した。

何故姿が変わらないのかは別とし、竜は問いかけた

『風森に一体何があった』

シユラウドは竜の隣へ行くと俯いて言う

『勇樹は己の家族を奪った組織、「EXE」に襲撃を受けた』

『エグゼ・・・？』

その名前は確か心当たりがある

確かミュージアムを継ぐ者とか言うストリートギャングの名前がそうだったような気がする

だが、それは倒したはずだ。

『どうかしたか？』

『いや・・・。だが、何故今動いた？』

俺達を消すような行動をとるならば仮面ライダーになった風森は邪魔な存在だ。

それを4年も泳がせておいて、何故襲撃を？』

『……分からない。何故、今なのか…それは調べられなかった。

おそらく勇樹の行動を逆手にデータを採集していたが、』

『用済みになった、と言う事が。』

シユラウドはおそらくそうであろう

と頷いた。

本当に今回の事件で頭角を見せた組織らしい。シユラウドは情報がないと言ったような様子だった

竜が呟いてから長い沈黙が続いた

その沈黙を竜が破る

『何故、風森を仮面ライダーにしようと思った？フィリップがEX

Eの手により、石にされたからか？
だから同じ境遇にある風森を利用しようかと？』

彼女は母親。母親の愛は理屈ではない
自分の時のように目星を付けたからなのか、
そう問いかけるとシユラウドは首を横に振り視線を落とし否定をし
た。

『じゃあ、何故だ。』

竜は責めるような口調になっていた。
その竜の様子にシユラウドは俯いたまま口を開いた。

『私は…あの子を、風森勇樹を助けたかった。』

風森勇樹を助けたかった
そう言ったシユラウドからは嘘は見えなかった

『仮面ライダーが消えた風都はドーパントに溢れるのが目に見えて
いた。

あの子が憎しみに堕ちてくれていれば、私はお前の時のように演じ
ることが出来た。

けれど、あの子は絶望に堕ちてしまった。

私は、勇樹を死なせたくはなかった。
だから私は4年前、時を渡るメモリを開発して莊吉にメモリとドラ
イバーを渡すように頼んだ。

ドーパントと戦えば死ぬかもしれない。

発達前の少年の心では耐えきれない事態が起こるかもしれない
軽率だと思っている。

でも、私にはこれしか方法がなかった。

許して欲しい……』

シユラウドは竜に謝罪をした

『何故、俺に謝る。謝れる理由が分からない。

それにそんなに気に病む必要はない。

貴方は風森を守りたかった。それだけなんだろう……？』

たくさんのがジエツト

メモリのプログラムを見るからにシユラウドは必死で守ろうとして
いたのだ

鳴海莊吉もそれを分かっていたから依頼を引き受けたのだろう

自責の念に駆られるシユラウドの肩に手を置き語りかけると

シユラウドは再度「ごめんなさい」と謝った

どうして守りたかったのか、それを聞きたい所であるが

竜は敢えて口を閉ざした。

人を守りたくなるのに理由なんて無い

『これからは俺達が風森勇樹を助けていく、だから安心してくれ』

『あり、がとつ……』

シユラウドは礼を言った後懐から黄緑色の「M」のアルファベットのメモリを取り出した

『これを…お前に…』

『これは…？』

黄緑色の「M」のメモリを受け取り問いかける

『メモリーメモリ。――思い出の記憶を秘めたガイアメモリだ』

『思い出の記憶？』

『ドーパントに変身することはないが、対象者や場所に関する思い出―記憶を追体験できるそう言った能力を持つメモリだ。』

『つまり、風森に何が起こったのか、見ることが出来る。そういうメモリなんだな？』

『ああ、鳴海探偵事務所で始動させればお前たちの襲撃の様子も見ることが出来るだろう』

だが、コレを使うときは全てを覚悟してほしい。

どんな事が起きても未来を変えないで欲しい』

シユラウドの言葉に竜は頷いた

『ああ、俺達が買えた未来によっては風森が消えるかも知れないからな』

分かっている。

俺も、未来でアイツに出会いたい。変えないさ』

『それと、これを…』

シユラウドは懐からアクセルメモリを取り出した

『もし、勇樹が再び戦う決意をしているのなら、お前の手から渡して欲しい。』

勇樹の懐にあったものだ。』

『わかった。』

竜が頷くとシユラウドは踵を返した。

『待ってくれ、1つ問いたい。』

『どうした…？』

『このアクセルメモリには適合率が変わっても変身できるようなプログラムが施してあるらしいがそれを設定したのは貴方か？』

『違う。その人物の危機を察知し守ることが出来るAIはあるが、適合率に関係なく変身できるメモリはこの世に存在しない。』

『貴方じゃ…無いのか？風森はダブルのメモリでは変身出来ず、アクセルでは出来る』

それは貴方がそういうプログラムをしたからじゃ…』

『違う、私ではない』

『なら、何故、風森はアクセルだけ変身できる？』

竜がそういうとそれには答えずシュラウドは消えた。

風森が変身できているのはシュラウドのプログラムではない？
本人が言うのなら間違いないだろう。

ならばなぜ？

その疑問を胸に抱きながら竜はシュラウドからもらったメモリーメモリを見つめる。

(これを風森に近づけビギンズナイトを見れば解明するかも知れないな。)

そのメモリが全ての鍵である。

しばらくメモリを眺めているといつの間にか集中治療室の前に亜樹子が来ていたのが見えた

彼女の登場にしては静かすぎる。

『所長……？』

竜はそんな失礼なことを考えつつも目の前の亜樹子に声を掛けた。

竜が声をかけると亜樹子は振り向いた。

『あ。竜くん…』

『鳴海荘吉は良い、のか？』

過去からシュラウドの依頼を受けてやってきた鳴海荘吉

せっかく父親と対面したのなら話したい事が山ほどあるだろうに

と竜が遠慮がちに呟くと

亜樹子は苦笑した。

『うん、良いの。なんだかその…どういつ反応していいか分からなくて

逃げてきちゃった。』

私が居ても翔太郎君たちと「何日交代か」とか忙しく話してたし』

『…風森は敵の組織に刺されたそうさ。』

シュラウドが依頼人だった』

亜樹子の表情を見て竜は無理やり話題を変えた

『シュラウドが？』

『彼女は風森を守りたくて仮面ライダーにしたそうさ。』

鳴海荘吉に頼んでドライバーを渡してもらって

そしてこんな状況になった今、シュラウドは鳴海荘吉に頼り、俺達を…いや、正確には俺に助けを求めた

それが全てらしい』

『フィリップ君を助けてほしいって依頼も確かシュラウドがしたんだよね？』

昔から交友関係があったんだね

そっか・・・だからお父さんが力を貸したんだ。』

『そう考えると君のお父さんは凄い人だな。』

未来から来たシュラウドの依頼を疑うことなく引き受けて遂行する

『それって、竜君も同じじゃない？過去（？）から来たお父さんに勇樹君の名前出されて「通り魔」に刺された。って情報だけで此処に来る決意しちゃうんだもん。』

『同じか？』

『うん！同じ』

ニコリと笑った亜樹子に竜が一言いう

『なら君もだろう。強引に引き込んでしまったが来ることを決意したのは君だ。』

『ただ、だって…勇樹君には私が必要。って竜君が言うから…。それで私、何すればいいの？』

亜樹子が問いかけると竜は答える

『風森は「たこ焼き」が好きなんだ。フィリップから聞いたが君は

得意なんだろう？だから食べさせてやりたいと思っ……！

パコーン

とスリッパの軽快な音が響いた

『呼んだ理由、それかい！』

『い、いや……それだけでは無いんだが……』

『でも、それなんですよ？』

『あ、ああ、そのとお……痛っ！？』

再びスパコーンとスリッパの鉄槌が下る

ちなみにここは集中治療室前の廊下、である。

『どないやねん！！』

『いや、……俺は……たこ焼きだけで選んだワケでは……』

『んじゃあ、言ってみなさいよ！！たこ焼き以外に何かあるの？』

『え……と、その……お、俺に質問する『竜君のバカ！私を「たこ焼き製造マシン」か何かと勘違いしてるのね？そうなのね！？うっ……うっ……うええーん』

『！？　しよ、所長……俺は決してだ、断じて』

もう一度言おう、ここは集中治療室前の廊下である

『お前ら、何、話してんだ？』

『亜樹ちゃん、照井竜、君たちは漫才でもしているのかい？
すごく面白いけれど、場所を考えた方が良いでしょう？』

冷やかなフィリップの言葉に「んん」と竜は咳払いをする

『いや、漫才じゃない。それより、話は終わったのか？』

『ああ。今しがた終わったぜ？たく・おやっさんも人が良すぎるよな。』

「2週間交代」だつてよ。』

『そう。鳴海荘吉と話し合った結果、君はずっと滞在するけれど僕は2週間したら一旦風都に戻り、また2週間後にやってくるというサイクルで進めることになったんだ。』

『それで鳴海荘吉は帰ったのか？』

『俺達の風都にな。それでお前は依頼人とやりに会えたのか？』

『ああ、依頼人はシユラウドだった。彼女は風森を守りたかったらしい』

それで時を渡るガジェットを作り出して4年前――

『ってことは……シユラウドは勇樹に個人的な何かがある。って事か？』

『あの様子だと、そうだろう……。』

竜の言葉に翔太郎はガリガリ頭を掻いた

『あーったく、勇樹っていったい何者なんだ？？シユラウドは守ってるわ、おやつさんは動いちまうわ』

『

『その事なんだけれど』

とフィリップは口を挟んだ。

自前の本の白いページを捲りながらわなわな震えて居た

『フィリップ君？』

その様子に亜樹子が首をかしげると

『彼は素晴らしいよ！！』

フィリップが目を輝かせ叫んだ

『さつき地球の本棚で彼の本の完全版を閲覧した。地球の本棚を使えるかの試しで検索したけれど

風森勇樹の本の完全版がやっと読めたんだ！！』

興奮気味にフィリップは語る

『そんなにすげえ内容だったのか？』

『凄いだつて・・・？凄いなんで形容詞で片づけられなよ！！一種の奇跡さ！！』

そう、奇跡！

いいかい？彼は不死身なんだよ？

この襲撃事件も刺されたのはナイフではなく太い牛の角なんだ。

普通は刺されたら死んでしまうような太い角で刺されて生きているなんてすごいと思わないかい？

それに彼は、彼は…』

『お、落ち着けてフィリップ！凄いの分かった。

分かったからおとなしくしろ、照井の事言えねえぞ』

『と、ととにかく・・・すべてを話すから、いったん事務所に行かないかい？』

『事務所…。』

僕らは襲撃されて居ないんだし、使っても文句は言われないうよとフィリップは促し、4人は一旦事務所へ向かう事になった。

IとYOU物語／シユラウドの想い（後書き）

2部の始めです

未来にやってきて、依頼人はシユラウドだった。
と言うお話

おやっさん出したのはよろしかったのですが

亜樹子をどうしよう…と悩みました。

絡ませ辛いなあ…と。

なのでこうしてみました。

楽しんでいただければ嬉しいです

それでは！

ⅠとⅡ物語／私と貴方を繋ぐメモリー（前書き）

Ⅱ部Ⅱ章始まります。

IとYOU物語／私と貴方を繋ぐメモリー

メンバーは鳴海探偵事務所へとやってきていた。

幸い、中には鍵がかかっておらず、中に入ると蜘蛛の巣が張り巡らされて長い間、人の出入りが無いと言う事は明白だった。

『・・・誰もいないんだな』

埃まみれの事務所に足を踏み入れ、ぽつりと翔太郎が呟いた。

『当たり前じゃないか。僕たちは襲撃されてるんだよ?』

それにフィリップが答え、

亜樹子が窓を開け、日光を入れ換気をする

『かび臭いけどなんにも変わってないね。』

タイプライターもカップも壁の装飾の配置も何もかも変わってない。

と亜樹子と言う

一方のフィリップはガレージの方に手を伸ばしていた。

ガレージの扉を開くと埃が吹き出した。

『っーげほっ。酷い』

僕のへや。
とフィリップが言い中をみる

『こりゃ、1回大掃除が必要だな。
お？ガレージか。ガレージもやっぱりかび臭いか？』

溜息を吐きながら
翔太郎がガレージに近づこうとするが、それをフィリップが止めた。

『駄目だ！翔太…』なんだよ。コレ』

『遅かったか…』

その声に竜と亜樹子も合流する

翔太郎が絶句している視線の先は
血まきが壁に飛び散っていて、ホワイトボードがズレて落ちていて
壁がポロポロ。

そんな凄惨な光景だった。

『なに、コレ…』

亜樹子が思わず口許を抑える

『これ、私達が襲撃された跡なの？』

目を覆いたくなるような情景に亜樹子は呟く。

竜はそっと亜樹子の横にいて、亜樹子の言葉への返答を待った。

『いや、違うよ。』

竜が待っていた返答は本のページを捲りながらのフィリップがした。

『これは僕らが襲撃された跡ではない』

『じゃあ、この荒らされ具合はなんだよ…』

翔太郎が言うとフィリップは答えた。

282

『この跡は、風森勇樹が殺されそうになった跡
風森勇樹の二つ目のビギズナイトの跡だよ。』

『二つ目のビギズナイト？』

竜、そして翔太郎が首をかしげる

『まあ、僕が勝手にそうやって2つに分けているだけだけれど

1つは家族を失い仮面ライダーになった始まりの日

2つめはダブルのメモリが使用不可能になり、黄色いアクセルとなった、始まりの日。

この酷い光景は2つめ。ダブルのメモリが使用不可能になり、黄色

いアクセルとなった時の傷跡だ。』

『なんで勇樹君が此处で戦ってるの?』

『それは——』

フィリップが本をなぞると。

『これで、みてみるか?』

竜が黄緑色のメモリを取り出した。

『なんだ、そのメモリ』

翔太郎が問うと竜が答える

『これはシユラウドから貰ったものだ。

メモリーメモリ。思い出の記憶を秘めたメモリで

対象者や対象場所の付近で始動させるとそこで起こったことを覗く
ことが出来るメモリらしい。

おそらく、風森の過去を知るうえで必要なものだと思うが、此处で
起こった出来事ならば
見られるはずだ。

ただ、シユラウドは、すべてを受け止める覚悟が必要だ。と言って
いた。

起きたことを受け止めてほしいと』

『事務所で起こった記憶なら、風森勇樹が襲撃される2つ目のビギンズナイトではなく

僕らが襲撃される記憶まで映し出されるかもしれない。

それは僕らに関する未来。変えてはならない。そういう事だね?』

『そんな事いちいち気にしていたら大変だろ?いいから早く覗いてみようぜ?』

慎重な姿勢に痺れを切らしたか翔太郎が呟くとフィリップが言う

『そうは言っけれど、日常風景も映し出されるかも知れないよ?風森勇樹に近づけて始動するんじゃない事務所という「場所」で始動させるんだ

思ったような記憶は覗けないかもしれない』

『だからってよ、んなビクビクしてたら進まねーだろ?』

『わかったよ、何が映し出されても君はビックリしないんだね?』

とフィリップはくぎを刺すと亜樹子に向き直る

『……亜樹ちゃん、非常に残念だけれど、君は覗かない方が良い。』

『何いってんの!一緒に勇樹君を助けるんだよ?私もみるに決まってるじゃない!』

『あ、いや。亜樹ちゃんは風森勇樹の傍に居てくれないかな。僕たちは医者連絡先を知らない。だから風森勇樹が組織の人間に襲われたり容体が急変したりしたとき伝えてくれる人が居ないんだ。頼める…かな？』

フィリップがそういうと亜樹子は顎に手を当てて数秒悩む。

『確かに油断ならない容態だし…敵もまた命を狙ってくるって言えば何も言えないけど。』

『もー…分かったわよ。ちゃんと何が起きてたのか報告してよね』

『ああ、報告するよ。ごめんね。』

そう言うとき亜樹子はガレージを出ては病院へ戻っていった。

『亜樹子には見せないのか？』

『まあ、もしも亜樹ちゃんに婚約者とかが居た場合、僕らの時代に戻って妙にテンションが上がってアタックし過ぎて失敗しちゃったり、なんてあったら困るだろう？』

『なるほどな、亜樹子ならやりかねえ。』

亜樹子がフラれてピーピー泣いてるのが目に浮かぶようだが、と翔太郎がしみじみ納得する

『だから翔太郎、君は覚悟はあるんだろうね？
慎重なのはそういう事だよ？』

使命感で結婚するのは嫌だろう?。」

『シユラウドが言う、覚悟はそういう事だな。左、お前は覚悟があるのか?。』

『ったく、偉そうに言いやがって、お前はあるのかよ?。』

『風森を救うと決断した。何があっても受け止めてやるさ。例え俺に婚約者がいたとしてもな。』

『そーかい、まあ、俺も同じ気持ちだ。何があつたとしても受け止めてやる——』

『じゃあ、決まりだね。亜樹ちゃんからの連絡が来ないうちにさっさと見てしまおう』

フィリップの言葉を合図に竜はメモリを始動させた。

【memory】

緑色のデータが三人を包み、ふとした瞬間、場所は鳴海探偵事務所にうつっていた。

事務所にはいつものデスクでコーヒークップを手にしている帽子の男。その横のベットに座って読書をしている男。

言わずもなが、年代は不明だが、未来の探偵二人がいた。

《相手から見えないんだな》

翔太郎はわざと自分の前に立って手を振るが、未来の翔太郎はなんのリアクションも起こさない

《記憶を見てるからね》

まるで映像の中に入り込んだような――
そんな感覚がみてとれる。

《これは、どうやら…2つ目のビギンズナイトではなく、日常風景のようだね。》

いつまでたっても緊迫した情景にならないことからフィリップが口元に手をあてながら言う

《いきなり外れかよ…。やっぱり勇樹に近づけて始動した方が良かったか？》

《勇樹は眠っているから不可能だよ。それにこの風景もある種ではアタリだよ。》

フィリップが含ませるような言い方をすると
それに首をかしげていると

『ちょっと、翔太郎君！ペット探しはどうしたのよ！』

とスリッパを持った女性がコーヒーを飲んでいた翔太郎へ話しかける
童顔だった顔が幾分か大人びており、軽い化粧もしている為か美人

だった

《あ、亜樹子お！？》

翔太郎は思わず2度見をする。

《そつだよ、翔太郎、これが未来の亜樹ちゃんだ。》

《ま、マジかよ・・・超美人じゃねえか。》

《もう女子中学生なんて呼べないよねえ・・・？》

フィリップがニヤニヤしていると事務所の扉が開いた。

『ただいま！』

そう元気な声を響かせたのは
ランドセルを背負った黒髪で真ん丸お目目が愛らしい男の子であつた。

《子供…》

《おつ、子供か、事務所に帰宅って事は俺らのうち誰かの子供か。》

誰の子供だ？

とテンションが上がった翔太郎はまじまじとその男の子を見つめる

『おかえり!』

フィリップ、翔太郎。そして亜樹子が返事を返すと

『うん!ただいま、ひだり、フィリップ、しよちよー!』

と元気よく言い、にかっ、と男の子が笑うとソファに座った。

《しよ、しよちよう?アイツ今・亜樹子の事、所長って言ったか?
?》

《言ったねえ・・・》

フィリップはニヤニヤしながら言う

すると記憶の中の男の子はフィリップのほうに歩いていく

『はい!フィリップがおべんきよ教えてくれたから100点獲ったの!...!』

『へええ、すげーなあ...ゆづき、100点じゃねえか。』

『ほらほら、しよちよーも見て!』

鼻高々にしている男の子は亜樹子にテストを見せる

『凄いじゃない!やっぱり、ゆづきは天才ね。』

でも、ゆづき?何で私の事「しよちよう」って言うの??

「ママ」「か」「お母さん」「って呼んでって言うてるでしょ？」

「ゆうき」と呼ばれた男の子の頭を撫でながら亜樹子が言うと「ゆうき」が反論する

『んーとね。照井さんにどーしてママの事をひだりやフィリップみたいの名前で呼ばないのか、って聞いたたら

照井さんは自分がおまわりさんだから名前で呼んだら悪い人にママがイジメられるかも知れないって言ったの

だから僕もママを「しよちよー」「って呼ぶ！」

『も〜・・・竜くんだったら…子供に何言ってるのよ〜

ママって言われたいのにい…
帰ってきたら一発叩かなくちゃ。』

「ゆうき」の表情はキラキラしていて強く叱れなかった亜樹子はスリッパを持ち呟く

『ねーねー！僕間違ってるないよね？フィリップ』

『ああ、間違っていないよ。さあ、次のテストに向けてお勉強しようか。』

確か次は国語のテストだったよね？

検索を始める。知りたい項目は「次のテスト範囲」
キーワードは？」

『うん！んーとねーキーワードはねえー」「こくこ一年生」「34ページ

ージから38ページ。』

「ゆうき」はフィリップにそう告げる

フィリップはゆうきのキーワードを入れ地球の本棚から本を絞る

「Test」と言う白い本が地球の本棚へ現れた。

『絞れたよ。次のテスト国語の範囲は今教科書でやっている範囲、
「100万回生きたねこ」が重点的に出る。』

さらに君の先生の過去の出題形式を見る限り、その単元で現れた漢
字や漢字の読み仮名は全体の30%

語句の意味が20%。

そして「何故、彼は100万回にして蘇らなかったのか?」と言っ
たような文章問題が50%だ。

意地悪問題を作るような先生でもないから、何回も読み返して、漢
字の書き取りや読み方の練習などをしていれば100点だよ。』

『ふおおお…フィリップって何でも分かるんだね。すっげー』

素直に感心している「ゆうき」のキラキラした瞳を見てフィリップ
は笑う

『お勉強したら、ノート持ってきて?僕が見てあげるから』

『うん!ありがとう!』

ランドセルを背負ったまま「ゆうき」はガレージの扉を開けて入っ
て行った。

どうやらガレージが彼のお勉強のお部屋らしい。

その様子を見ていた翔太郎は呟いた。

《い、今…あいつ勇樹って言わなかったか？つか、ママって…亜樹子の事》

《ああ、言ったね。だから亜樹ちゃんに見せるのには気が引けたんだよ。

あの子の名前は「鳴海勇樹」亜樹ちゃんの息子で

後の風森勇樹さ。

この頃を見るとどうやら小学校入りたてみたいだね》

フィリップがニヤニヤしながら説明するがその言葉は誰も聞いていなかった。

そして数分後

《ゆ、勇樹が亜樹子の息子だとおおおおお！？》

遅れて翔太郎が絶叫した。

《遅いよ翔太郎。》

《だってお前、…ってことはあれだろ？おやつさんの孫だろ？有り得ねええええええ！！》

翔太郎は立ちくらみがしたのか壁に寄りかかった。

《全ツ然似てねえ!!》

亜樹子の息子ならもう少し天真爛漫でそれでいておやっさんの根性を受け継いでる

そんな子供だ。と翔太郎は主張する。

《そうだろうか・・・？言われてみれば、な部分が多いぞ？》

《そう、この頃の勇樹は亜樹ちゃん80%だよ。父兄参加の遠足でバスが4〜5人の集団にジャックされて

その犯人が担任の頬を張り飛ばしたからと上履きを脱いで犯人の膝を叩いて

「女の人をイジメちゃダメなんだぞ！」って啖呵をきったというエピソードが本にあった。》

《はあ！？なんだそのリトル亜樹子!》

《だから彼は亜樹ちゃんjrなんだよ。》

《で？父親は誰なんだ？風森って名字の男か？》

その割にやなんか俺達が面倒見ているみたいけど・・・と翔太郎が呟くと

《いや、父親は居ない・・・と言うかそもそもそういう概念がない。》

フィリップが告げた

《確かに生みの親はいるけれど、僕や翔太郎、照井竜、僕らが3人が勇樹の父親であり、兄でもあるのさ。》

《俺ら3人が父親…、で兄？》

《ああ、三人寄れば文殊の知恵とよく言うだろう？

例えば勇樹が他人を守って無茶をしたとして翔太郎が頭ごなしに怒鳴るとする。

つい感情的になり必要以上に怒鳴ってしまった場合、勇樹は良い事までやめてしまつかもしれない

だから僕らが口を挟みちゃんと何がいけないのか何が良いのかを教える。

1人くらいは冷静に見ているからね。

だから僕らは3人で1人の父親なのさ。》

フィリップが自分の唇を撫でて笑みながら言う

一方記憶では

『勇樹、お勉強頑張ってるねえ』

ガレージの扉を開いて亜樹子がジュースなどを運んでいた。

『そつえば、アクセルからお手紙のお返事届いたわよ？』

机に向かい鉛筆を動かしていた勇樹の手が止まる

『えっ、本当！？アクセルさんからお手紙のお返事が来たの！？』

『うん、ちゃんと勇樹のお手紙届いたみた——あ、ちょっと!』

勇樹は手紙を受け取るとびよんびよん跳ねまわり翔太郎の所へとやってきた。

『ひだり、ひだりー! アクセルからお手紙のお返事来た!! みて! これ!』

仮面ライダーはこの時代では有名、子供のヒーロー
そんなことがうかがえる一面である

《勇樹は俺達が仮面ライダーって事、知らないんだな》

ぽつりと翔太郎が言う

《この頃、ガイアメモリ犯罪はほぼ根絶していると言える状態になっている。だから僕たちは探偵の依頼以外に動くことはないし怪我はしないから伝える必要がないんだよ。

それに亜樹ちゃんも「自分の息子は仮面ライダーになってほしくない」と言っている。
だから言わない。》

《仮面ライダーになってほしくない?》

フィリップの言葉に引っかけた翔太郎が聞き返す。

《だが、結局なっちゃったな。風森は》

目の前の光景は勇樹がアクセルから手紙を貰った。と有頂天で翔太

郎に話して聞かせている

目の前の翔太郎は「いや、ダブルだって手紙貰えば書くぜ？」とダブルについて話し始めていた。

そしてそこで記憶の再生は途切れ、3人はもとのガレージへと戻ってきた。

『風森勇樹は鳴海亜樹子の息子だ。これで分かっただろう？』

フィリップが本のページをなぞりながら言う

どうしてこの風都に仮面ライダーが居ないのか

そして、風森勇樹が4年間ずっと助けたいと思っている相手は誰か。

『俺達の襲撃と勇樹の家族の襲撃は同じって事か。』

『そついう事になる。』

だからこの事務所の何処かに僕らの石像あるかも知れないね』

とフィリップはふと思いつきでリボルギヤリーの中を開いた。

リボルギヤリーの中にはフィリップが睨んだ通り、左翔太郎、鳴海亜樹子、照井竜の石像があった。

翔太郎は固まるときにカッコをつけたかったのか帽子を押さええている形

照井竜は亜樹子の肩を抱き寄せ密着し、亜樹子の右腕と自身の左手に何かを持っていた形跡を持たせて固まっていた

人が固まったと言っただけあり、石から削り出された石像とは違い何処か生々しい姿がある

『これが…俺達』

どうして竜が亜樹子と密着しているか、そんな事は気にはならなかった

ただ、目の前の三体の石像の姿に唾然となった。

『この石像にメモリを近づければ恐らく、僕らの襲撃の様子を追体験出来るだろう。』

勇樹の1つ目のビギズナイトに繋がる記憶だ。』

『……なあ、フィリップ、石像はどうして3体なんだ？お前は何処に行った……？』

さっさと確認してしまおう、としていたフィリップに翔太郎が訊ねる

『その理由は残念ながら載っていない。』

（僕と言う存在をガイアメモリ流通組織がどう思っているか……。それを考えれば自ずと見えてくるけれどまあ、言う事でも無いだろう。今は……。）

『なら、さっさと見てしまおう。敵のガイアメモリが分かるかも知れない。』

竜が促すとフィリップは「ああ」と頷き石像に近づけメモリを始動させた。

【MEMORY】

ガイアメモリの始動音がすると再び三人の身体は緑色のデータに包まれる。

降り立った先は鳴海探偵事務所。

部屋に飾ってあるカレンダーが8月を指しており、ベージュの半袖のジャケットに身を包んだ骨ばった顔の男が麦茶を飲み翔太郎と話し込んでいた。

どうやら、この男は依頼人らしい。

ふと、すると勇樹がお客の茶菓子を戸棚から出していた。

日差しの強い真昼間にこの場所にいるのは彼が現在夏休みを迎えているからである。

季節は8月と言う事もあるのか白地に英文字がたくさんついているTシャツに短Gパンとラフな格好なのではあるが、

クールビズと言う事と学生と言う事で許されるだろう。

現に翔太郎もいつものスーツは脱ぎ、アロハシャツである。

《おい、コレが襲撃の様子か？》

いわゆる1つの日常風景が繰り広げられている為、翔太郎は思わず呟いた。

《コレで間違いないよ、この後だ》

『初めまして、どうぞごゆっくり。所長、翔太郎さん、僕はガレージに行ってますよ。何かあったら呼んでください』

茶菓子を置いて敬語で翔太郎に向けて話すと勇樹はガレージへと入っていく

此処は事務所であるから一応お客の前では敬語らしい。

亜樹子が翔太郎の横で書類をだしメモを取る体勢に入る

『で、お客さん、アンタの依頼は？』

『私の名前は、蒲原洋一です。実はその、人探しをお願いしたいのです。』

その男は「かばらよういち」と名乗っていた

『人探しですか？任せてください！翔太郎君はこの街を庭としてみんですぐ見つけられますよ』

亜樹子がドンと胸を張る

『それでどのような人ですか？』

『ええ、私の会社の人間なんですが、年は18歳くらいですかね』
と麦茶を啜りながら蒲原が言う

『新人社員なんですね。それで特徴は？』

翔太郎が次の質問を蒲原へ投げかけようとしたとき、フィリップがガレージから顔を出した。

『翔太郎、亜樹ちゃん、依頼人が来たのかい？』

『ああ、蒲原さんだ。自分の会社の人を探して欲しいらしい。』

『なるほど・・・じゃあ早くその人物の特徴を聞き出してくれ、』

フィリップがそう告げた瞬間、男は不気味に笑った

『いや、特徴を言うつもりはありませんよ。』

翔太郎がその事に首をかしげると

男が懐からピンク色のメモリを取り出した

『なっ・・・ガイアメモリ！？何処でそれを！！』

フィリップが動揺していると蒲原が首筋にそのメモリを挿した

【

ガイアメモリの始動音が鳴ると蒲原はドーパントとなった。

『逃げる亜樹子！』

目の前で変貌を遂げた蒲原を驚きが隠せない様子で見つめつつ亜樹子に逃げるように訴える

亜樹子は勇樹が居る手前それに従った

『どうしたの？なんかあつ——』逃げるわよ、勇樹！！』

亜樹子はガレージに走るとリボルギャリーを動かすガレージの床が一部変形し、車（？）になった。

『えっ、これ…な、何の撮影？って言うか左達は！？一体何があつたんだよ母さん！！』

ぼ、僕聞いてないツツ！！』

『ちゃんと掴まってなさい！トップスピードで行くわよ！！』

『母さん、ちょっとせつめーあぎゃあつ！？』

リボルギャリーは勇樹と亜樹子を乗せ、急発進した。

その頃の探偵事務所では
蒲原が変身した人型のドーパントと翔太郎、フィリップが対峙していた。

『てめえ・・・いったいどういふつもりだ。』

『人探しをお願いしました。結果、私の探している人物はすぐに見つかった。』

地球の記憶をその身に宿すデータ人間「園咲来人」またの名をフィリップ。

私は彼をずっと探していました。』

ドーパント姿の蒲原の表情は読めなかったが恍惚の表情を浮かべているように見えた

『何のために、僕を……って聞くまでもないね。勇樹が戻ってくる前にケリをつけよう
翔太郎、僕にやらせてくれるね?』

フィリップが手のひらを突きだすとそこにファングがやってくる

『ああ、さっさと終わらせようぜ』

【FANG】

【JOKER】

『変身!』

そうフィリップが言うと翔太郎が倒れ、フィリップは白と黒の粒子に包まれ
ファングジョーカーが誕生した。

『さあ、お前の罪を数えろ!』

一方の亜樹子、勇樹らはリボルギャリーに乗り逃走していた。

が、突如としてリボルギヤリーの動きが止まった。

『い、一体なに!?!?』

タイヤがパンクしたのか、とリボルギヤリーを開くと

マスカレイドを引き連れた露出の激しいドレスを着た女が立っていた

『っ、……アンタ達、一体なんなのよ!』

亜樹子が後ろに勇樹をかばいながら女を睨む

『あら、ターゲットが乗り込んでるものと思って止めたけれど貧相な女と可愛い坊やお車だったのね。』

語尾にハートの記号が付きそうな鼻につく喋り方をする女はクスクスと笑う。

『ターゲット?ターゲットって何よ。』

スリッパを構え臨戦態勢を敷く亜樹子を余裕と言った表情で見つめながら女は言う

『それは貴方には関係ないわ。あのお方が望んでいることだからあたくしはそれを支えていくだけ。』

貴方がたには申し訳ないけれど…此処で死んでくださらないかしら。

』

【MERMAID】

マーメイド―人魚の記憶

を発動させた女は上半身が人
下半身が鱗の生えた人間の足と言うドーパントと姿を変えた。

『うわっ・・・ば、化け物っ!』

勇樹は亜樹子の背後、そう叫んだ。

『あら、酷いわ。あたくしは化け物じゃなくってよ?』

マーメイド・ドーパントはその華麗な指先を自身の唇に当てると投げキスをする動作をし大量のシャボン玉生み出す。

シャボン玉は亜樹子と勇樹の周りをフワフワ舞い
パチンと弾ける。

シャボンの弾ける音ではなく爆竹の破裂音がし
それを合図にリボルギャリーの死角に隠れていたマスカレイドが亜
樹子、勇樹を別々に捕らえた。

『きゃっ、』

『母さん!??っ・・・離せよ!この骨の化け物!』

亜樹子はそのままの位置で掴まれていたがマーメイドにより勇樹がマーメイドの前へと移動させられた。

『ちょっと！私の息子に何するつもり！？離してよっ！』

亜樹子は抵抗を試みるがマスカレイドの力は振り解けず、マーメイドのすることを見ているしかなかった

『母さんを離せ。』

勇樹は言う

その幼い顔立ちが怒りに震えてもマーメイド・ドーパントには子犬が噛みついた程度にしか見えないのか、
勇樹の顎を指でなぞる

『近くで見ればいい男ね……。可愛い坊や。』

『僕は坊やじゃない。』

透き通るような声色が勇樹の耳に届けば思い切り不快感を露わにし眉間にしわを寄せる

『んふふ、その表情、とっても素敵よ。
ねえ、名前はなんていうのかしら……。』

『鳴海勇樹。』

『そう、勇樹って言う名前なの。
気に入ったわ……。』

ねえ私のペットにならない？貴方可愛いからペットとして飼ってあげる』

勇樹の頬を掴みながらマーメイドは妖艶な声を出し誘う

『ちよつと！なに人の大事な息子ペット扱いしてんのよ！ふざけないで！この人面魚！！』

と亜樹子が叫ぶ

『人面魚ですって！？綺麗な人魚なあたくしに向かってよくも…。その耳障りな不快な声…潰してやる！』

マーメイド・ドーパントが亜樹子に向かって手を向けると亜樹子の喉元から

黄色い光の球みたいなものが抜けマーメイド・ドーパントの手に収まった

『——！！』

亜樹子はすぐさま声を出そうとするが声が出なかった。

『あーっはっはっはっは！お探し物はこれかい？』

黄色い球になっているものを自身の喉にあてるとマーメイド・ドーパントは亜樹子の声で喋りだす

『あたくしの能力は水を操り、女の声を奪う事。この耳障りな声で

喋るのは不本意だけど

どう？これであたくしのペットになる気になったでしょう？

お母さんの声はこのあたくしが握っている——』

『き、汚いぞ！』

口パクで「いいから逃げなさい！」と亜樹子が言っているのだが目の前のマーメイドに対峙している勇樹には届かない

『つつ……』

どうすればいいのだろう

『ねえ、勇樹……。私のペットになって体の火照りを冷まして？』

『つつ……わ、わかっ——』 『その必要はない。』

勇樹が決断をしようとしたとき

背後から男の声がした

そして「ぎゃああ」と言う断末魔が聞こえ勇樹が振り返ると
マスカレイド達をなぎ倒しその背後に赤い仮面ライダー

勇樹のヒーロー、アクセルが立っていた。

アクセルはエンジンブレードにメモリを挿しこむと【ジェット】を
発動させ、勇樹を押さえていたマスカレイドを弾き飛ばす。

『お、お前は！アクセル！？』

マーメイド・ドーパントが口を押さえ息を呑む

まさか都合よくここにアクセルが現れるとは思ってなかったのだらう。

『勇樹！……くん。しよ、亜樹子さんにいったい何があった。』

まだ竜は自身がライダーであることは勇樹に知らせていないらしい。口調はとてもぎこちなかった。

『アク、アクセアクセ…あくせるがたすけにききき……』

勇樹はアクセルの登場に舌が回らないようだった。当然である

ピンチに自分のヒーローが駆けつけてくれたのだ。

その興奮（緊張？）は尋常ではなかった。

そんな勇樹を苦笑しながら見ては亜樹子は竜にボディランゲージで状況を説明する。

いつもは真っ先に声を出して慌てながらも状況説明を試みる亜樹子がまったく声を発しない。

『どうした。何故喋らない？』

その事にアクセルが疑問に思い問いかける。

『喋らないんじゃない…。喋れないのさ。このあたくしが”声”を奪ってしまったからね。』

亜樹子の声でマーメイド・ドーパントが高らかに堂々と喋るとアクセルは思い切り不快感を出した。

『なるほど・・・そういう事か。よく分かった』

アクセルはエンジンブレードを構える

『勇樹くん、亜樹子さんと物陰に隠れているんだ。』

『は、はははいつつ！！了解であります！！』

アクセルの指示になぜか勇樹は敬礼して近くの木の陰に亜樹子を引っ張っていく

『仮面ライダーアクセル。良い男だとは聞いていたけれど…
本当にいい男ね…。』

『声だけは所長……。正直、気が引けるが仕方がない。
よくも俺の友達をペット扱いしてくれたな。』

覚悟はできてるのか？』

遠くに逃がせばよかった
少しアクセルは後悔をした。

『覚悟？何の覚悟だい？』

そう問いかけたマーメイド・ドーパントにアクセルはエンジンブレードで腹めがけて容赦なく斬りつけた。

『俺に質問するな!』

『きゃっ、・・痛いっ、やめてえ!』

わざとらしく亜樹子の声でマーメイドが叫ぶとアクセルの手が止まった。

(フン、どうやら関係は知り合い以上のようだね。手が止まってる)

ここだ――

と言わんばかりにマーメイド・ドーパントが手に水の針を作りそれを投げる

『はっ!』

だがそれはいとも簡単にエンジンブレードではじかれる

『なっ・・。』

(同情していたんじゃないのか!?)

マーメイド・ドーパントは攻撃をしてきたことに驚いていた。

『…所長の声で貴様の感情を表現されるのは非常に不愉快だ。早々に決着をつけさせてもらおう』

アクセルは強い嫌悪を現しながらトリアルメモリを取り出す。

【TRIAL】

そしてアクセルはトライアルへ変身を遂げる。

木陰で戦いを見ていた勇樹が思わず身を乗り出す。

「ちょっと、危ないッたら！」

亜樹子の唇がそう動く

『と、トライアルだ!!!い、色変わった!か、カッコいい...』

勇樹はその青のフォームにうつとりする。

13歳の少年の黄色い歓声が後ろであがっている戦いの場

『はっ、色が変わったくらい何さ!』

マーメイド・ドーパントは言う

その言葉にアクセルは余裕の表情で答える。

『ただ色が変わった。そう思ってるなら間違いだ。』

トライアルは高速でマーメイドドーパントの腹に潜り込みけりを何発も食らわせる。

『なっ・・・速い!??っ・・・くそっ!負けるものか!』

だが、相手もバカでなかった。

手から水分を集め水の盾を作り出す

『残念だね、仮面ライダー。力が足りないだろうか？』

『ああ、”蹴り”だと。だから戦法を変える』

トリアルは手元にあるエンジンブレードを握り攻撃をエンジンブレードでの高速の斬撃に切り換えた。
エンジンブレードにはそれなりの重さがあるため力不足はある程度補えるらしい。

【トリアルマキシマムドライブ】

『9・6秒それがお前の絶望までのタイムだ。』

アクセルがストップウォッチを止め、そう言うとマーメイド・ドーパントは爆発した。

マーメイドドーパントの身体から金色のメモリが排出され、床で碎ける。

変身の解けた衰弱した女は声を発した。

『綺麗な玉のような美しい声…ほし…かった…。』

『ごめんなさい…蒲原様…。』

男のようなハスキーボイスだった。

『あ、アアアアアクセル！！』

倒した、と同時に勇樹が傍まで寄ってきた

『どどどど……どうもありがとう。7年ぶりだね。』

『あ、ああ……』

(しまった、これでは手錠が掛けられん……)

勇樹が出てきてしまったては変身を解くことが出来ない竜は小さく後悔した。

『アクセル?』

俯いていた顔を勇樹が覗き込んだので「んん」と咳払いをし話題を変える

『ところで君たちはどうしてドーパントに襲われていた?』

気を取り直してアクセルが問いかけると亜樹子が答える

『あ、あのね、事務所にドーパントが現れたの、それで今……』

『そ、そうなんだよ!いつも手紙に書いてる左とフィリップが時間を稼いでるんだ!』

は、早く助けてあげてくれ!』

『なに、左達が?』

『うん!僕の勉強してる部屋に変な車があつて……それで逃げてきたんだ』

そうしたらこの人に襲われた』

『そうか、なら勇樹くん、君はこのまま――』

逃げるんだ――

そう言いかけた瞬間、足元に無数の小型の緑色の蛇が湧いて出た。

『わわっ！？へ、蛇っ！！』

亜樹子、勇樹が足をわたわたと動かす

『蛇、だと・・・！？亜樹子さん、勇樹君動くな。』

【エンジン／スチーム】

アクセルはエンジンブレードから蒸気を出し蛇を追い払う

いったいなんだ――？

そうアクセルが思っていると

『こら、子供たち。指示もしていないのにおイタはだめですよ』

その声と共に群がっていた蛇がその声のもとに集まる
集まった蛇はドーパントの頭や腕、足などに引っ付き
全身が緑色のドーパントを形成する

子供たち―

と言つのはそのドーパントの「蛇」らしい。

腕に巻きついた一匹を愛おしそうに撫でてはアクセルのほうに歩みだす

『初めまして、仮面ライダーアクセル。やはり仮面ライダー（れき
せんのえいゆう）

ゴールドメモリの所持者を簡単に倒してしまつとは、いやはや驚き
ですよ。』

パチパチパチ

と拍手をしドーパントは言う

『事務所を襲つたと言つのはお前か。左やフィリップは無事なんだ
ろくな。』

アクセルは自分の話に注意を逸らさせ勇樹を逃がそうと試みる
その合図を読み取つたのが亜樹子だった。

「勇樹、今のうちに―」

『あ、そこ気を付けてください？』

とドーパントが逃げようとする亜樹子へと声を掛ける

アスファルトの道路の一部が動いたかと思つと亜樹子の足首に噛み
ついた

『あっ・・・』

その痛みで亜樹子は転ぶ

『か、母さん!?!』

アクセルがその声に振り返るが道路に何ら異変は無い

『所長!?!』

亜樹子は足首を押さえ顔を苦痛にゆがませる

『大丈夫か!?! 貴様、一体何を…!』

『いやいや、一匹、反抗期の子供が居まして。道路とまったく同じ配色をしているので…多分その子かと

あ、でも安心してください? その子は毒蛇ではありませんから!』

あああつ…

と苦しみ出した亜樹子に勇樹は混乱した

『か、…母さん!?! ど、どうしよう。どうしようアクセル! そ、そ
うだ、風都病院!』

母さん、今連れて行くから――

ア、アクセル! お願いだ。あの怖い怪物の注意を――!』

『ああ、言われなくてもやってやる。早く所長を病院へ!』

リボルギャリーを見て勇樹は亜樹子を背負い逃げることを決意した。

道路には蛇が潜んでいる為、亜樹子の足が道路につかないようにしているが

13歳の勇樹の身体は年の割に少し小柄で、成人女性を背負い普通のスピードで歩くことは不可能だった。

それでもなんとかアクセルが注意を引いてくれたおかげでリボルギヤリーの所まで到着する

『す、スイッチは？』

亜樹子をリボルギヤリーの出口付近に座らせて奥深く、発進スイッチを探す。

ボタンと言うボタンが見つからない為、ウロウロしていると急に扉が閉まった

『っ・・・え！？か、母さん！？』

そしてお約束のように亜樹子の姿は無い。

『母さん！何してんだよ！！早く病院に行かなくちゃ！』

ドンドンとリボルギヤリーの内装を叩いては勇樹は叫ぶ

『何をしている所長……。君も早くっ……。』

リボルギヤリーがまだ発進しておらず外で座り込んでいた亜樹子にアクセルが怒鳴る。

『ごめんね・・・竜君。私、乗れそうにない。』

亜樹子は悲しそうに勇樹には聞こえない声で言った。
アクセルはその原因を見てしまった。

亜樹子の噛まれた個所が石のような色に変わり始め、それが広がっていたのだ。

『所長！？その足——ッ——』
勇樹くん・・・亜樹子さんは俺が病院に届けるから。先に逃げてくれ』

アクセルは断腸の思いでリボルギヤリーに向かって口を開いた。

「なにいつてんだよ・・・ってそうか！トライアルのほうが早い！」

『そう、だ。トライアルがある...だから——』

「ちゃんと、母さんの事助けてくれるよな？」

勇樹が小さく問いかけた。

恐らく亜樹子はもう助からないだろう——
だが、ここは勇樹を安心させるしかなかった。

あのドーパントの魔の手から逃がすためにはそれしかなかった。

『ああ、お前も所長も何があっても守ってやる。約束だ。』

その言葉の後、

リボルギャリーは発進した。

リボルギャリーが見事に逃走できたのを見てドーパントはまた、手を叩いていた

『泣かせる演出でしたね。』

『まったくだな。俺の妻を石にするつもりか？』

アクセルはエンジンブレードを構えて殺気立つ
亜樹子はその近くの木陰に足を引きずり隠れた。

『いや、そんなつもりは……まあ、噛んだ蛇がたまたま石化能力を持つ蛇だっただけですよ。』

なに、大丈夫です。貴方の可愛い奥さんは死にやしません。

何百年もの間石像になったまま過ごし自らの身体が風化で朽ちていくのを待つだけです。』

つまり……

何百年も自分が朽ち果てるまでそこに立ち続ける

それは死よりも残酷な事だった。

ギリッ

アクセルはエンジンブレードを握りしめた

『貴様：っ、どの口がっ——！！』

『良かったですねえ。貴方のお子様と同じ目に合わずによくてさて、私は帰りますよ』

貴方は妻と最期の会話でも楽しんでください。

それを邪魔するほど私は無粋な人間ではありませんから』

ドーパントはそういうと踵を返す

と、そこへ

【エンジン/ジェット】

エンジンブレードから「A」と言う文字をアクセルは放ちドーパントの行く手を遮った

『ふざけるな。今ここで俺は貴様を討つ！これ以上犠牲者を出させる訳にはいかん！！』

アクセルはエンジンブレードを手にドーパントに向かい斬りかかる

その刃は妻を悠久へと奪われた憎しみか、
はたまた、未来の希望の為か――

その刃に宿った本当の意志は彼自身しか知らない。

『らああアアアアっ！！』

そうドーパントへエンジンブレードを突き立てんとするアクセルを見て

ドーパントは滑稽なものを見るかのような視線を送る

『やれやれ、昨今は若者でなくても血の気が多い。』

さほど困っていないように言えば
ドーパントはアクセルの肩を両手でつかんだ。

『っ！！？』

『せっかく、夫婦の時間をあげたと言うのに棒に振るおつもりですか…。
なるほど。ならばお望み通り貴方も固まらせてあげましょう。』

チカリ

とドーパントの黄色い目玉が赤く光った

肩を両手でしっかりと掴まれたアクセルはその赤い光を目に入れてしまった。

『うつっ……うつあ、アアアっ————！！』

途端に頭を突きぬけるような痛みが走り、ドーパントが手を離すとそのままアクセルは地面に倒れ込む

『冥土の土産に教えて差し上げましょう。私のメモリは「メデューサ」

彼女は私の子供に噛まれたので「死」は免れますが、貴方は私の「眼」を見た。

私の「眼」を直接見たものは石になると同時に命が尽きます。

いやはや、あの時夫婦の時間を大事にしていれば死ななかったものを非常に残念です。

それでは悠久の時をお楽しみください。』

床をのたうち回って苦しんでいるアクセルへ告げては

メデューサーパンツは変身を解き何事もなかったかのように去って行った。

全てが終わって

亜樹子が重い足を引きずってアクセルの所へやってくる

『だ、大丈夫!?!』

『しょ、ちょう・・・おれ、は大丈夫だ。それ、より場所を移動しよう。』

アクセルは足が固まる前に、とトリアルで亜樹子を探偵事務所に

連れて行った

探偵事務所内では

翔太郎がカツコを付けた状態で首まで固まっていた

『よう、照井…』

お前らも食らっちゃったか

と翔太郎はトライアルの姿と亜樹子の姿を見て苦笑していた。

『余裕だな。ポーズ決められる暇があったのか』

取り乱してもいいはずなのに妙に冷静で「お前の罪を数えろ」ポーズをとっている翔太郎に

トリアルは良くも悪くも苦笑した。

『俺の恐怖心煽りたいのか知らないが浸食がゆっくりだったからな。どうせ固まるならポーズとりたいてって思っちゃまってよ。』

『…フィリップはどうした？』

そう苦笑をしている翔太郎の横にはフィリップの存在は無い。すると翔太郎は答えた。

『フィリップは攫われちゃったぜ？ヤツの狙いは最初からフィリップだった。』

フィリップを使ってガイアメモリを作り風都をドーパントが住む都市に変えたいんだとよ。

「まったく、仮面ライダーが二人共こうなっちまうなんてな…メモリもブレイクされちまったし情けねえ…。」

「…勇樹は逃がせたのか？」

「「一応」は無事だ。俺は大ウソをついてしまったがな。」

「嘘？嘘ってなんだよ…。」

「俺に質問するな。それより左、大事な話がある。単刀直入に言うぞ。」

俺はどうやらヤツの目を直接見たから石になった時、命が尽きるらしい。」

トリアルはつきりそう告げた。

それに対し翔太郎は肩を竦めながら言う

「そうかい。なら俺に話しかけてんじゃねえよ。」

「もっと大事な奴がいんだろーが。そいつと話せよ。」

「と、俺は…そろそろヤバいみたいだな。」

「じゃあ、…な。」

翔太郎はゆっくり目を閉じた。

口に浸食が進み喋れなくなったただけだが、もう彼は覚悟はできてい

るらしい。

一方、トライアルの隣に立つ亜樹子の浸食は下半身を包み込で来ていた。

二人だけになった空間でそれを見たトライアルは口を開いた。

『……所長。今日はすまなかった。俺がもう少し早く来ていれば』

『竜君、メモリ抜いていい？その姿で石になるの嫌だから……』

そう申し訳なさそうに訴えるトライアルの様子を見て
亜樹子が遠慮がちに言う。

勇樹の為にはトライアルの状態でいなければならないのだが、最期にもなるかも知れない時
顔が見たいのだと目で訴えていた。

そんな亜樹子にコクリと頷くと

亜樹子は体重を掛けて左側にぶつかる勢いでもたれ掛ると
器用にトライアルメモリを抜き取り壁の隅っこに放った。

『すまない……』

『うつん……』

ねえ……。勇樹これからどうなっちゃうのかな』

竜に戻った姿に寄りかかりながらぼつりと亜樹子が呟いた。

これから先、ガイアメモリ犯罪は激増するだろう

そんな時、仮面ライダーは消失してしまう。

残された愛息子は何を想うのか、どんな道を歩むのか
それが心残りだった。

『こんな事になるなら仮面ライダーや

ガイアメモリやドーパントの事詳しく教えておけばよかった。』

最近ガイアメモリの事件はちらほら出始めていたけれど
すぐおさまるだろうと思ってたのに

『…すまない。』

亜樹子の言葉に申し訳なさがいっぱいになった竜はまた謝った。

『勇樹もまた仮面ライダーになるのかな』

『…きつかけがあればなるだろうな。俺のように…』

家族を失った俺は

シユラウドに出会い力を得た。

『…所長、もし勇樹が仮面ライダーになったらとしたら、どの理由で
戦うと思う。』

少し間を開けて竜は問いかけた。

『どっち、って?』

『復讐の道に走ると思うか?』

竜は不安げな表情をしていた。

彼が憎しみに染まりライダーの能力を使っても

それが正しくないと諭す人間が居ない。

『そんなの分からないよ。』

でも私の希望としては自分の身を守る為に仮面ライダーになっても
らいたいな』

亜樹子は言った

『勇樹はまだ子供だから、何も考えずに自分の身を守る為に戦って
ほしい。』

駄目かな？と亜樹子は竜を見上げる
すると竜は小さく笑った。

『確かに、そうだな。所長、体動かせるか？』

腰付近まで固まっていた亜樹子へそういうと

「なんとか。」

と答える

その答えを聞くと竜は亜樹子の肩を自分へと引き寄せた。

『ふえ！？いいい、一体何！？』

突然の行為に亜樹子は「私、聞いてない！」と絶叫した。

『

亜樹子を引き寄せたおかげで亜樹子の浸食も竜の身体に広がり胸の辺りまでになった。

そんな竜を見て亜樹子は悲鳴にも近い声をあげた。

『りゅ、竜くん！抱きついちゃダメだよ！離れて…じゃないと』

必死で離れようとするも二人の身体はくっついたまま離れなかった。

竜は目を直接見た為に固まりきったその瞬間、命を落とす。

ただでさえ命が縮まっているのにそれを早める行為をする。

亜樹子が止めるのは当たり前だ。

だが、当の竜は幸せそうな表情をしていた

『所長、傍に居てくれ…』

暴れる亜樹子に竜は小さく呟いた。

『君がどんな道を辿るのか分からない。

朽ちるのか、目覚めるのか…。』

だが、その日が来るときまで俺に君を守らせて欲しい

そして勇樹との約束を守らせて欲しい』

切実な竜の言葉に亜樹子は

『なんだからゆうくん　ズルいね』

とぼつり呟いた。

『ズル？　どういう意味だ？』

『ダメ。教えてあげない。』

亜樹子がそういうと

竜は亜樹子の耳に唇を寄せ囁いた

『所長、愛してる。』

そういつて米神の部分に触れるだけのキスをし

照井竜は完全な石像になった。

その姿を見て亜樹子は

『やっぱりズルい。』

と呟いた。

そして少し時間が経ち亜樹子が完全に固まったのち、

勇樹はリボルギャリーの機能によりガレージにやって来ることになる。

軽くリボルギャリーの運転に酔いながら勇樹はガレージと事務所を繋ぐ扉を開いた。

『か、母さん？と、とと…父さん？左？な、なんで石に…？』

家族を象った石像などこの世に存在しない

これは本物の家族なのだ…そう、勇樹は本能的に悟った。

『なんで母さんがいるんだよ！？なんで父さんがいるんだよ！』

はっ、アクセルはアクセルは！？フィリップはどこだよ！何がいったいどうなって…

うわぁあああッ！』

風森勇樹の絶叫。

そこでメモリーの記憶の再生は終わりを告げた。

これが自分達に降りかかる悲劇のすべて。

まるで一本の映画を見ているような感覚だった。その壮絶さに誰も言葉を発しなかった。

重苦しい空気が漂うなか竜は石像に目を向けた。未来の自分はもう、死んでいる。

その体は彼が未来で愛する妻、亜樹子の隣で幸せそうにしている。

そして現在進行形で彼女を守り続けている。

それが影響してか、竜はその人生を悪くないと考えていた

通常なら受け止められない現実だが
自分らしい最期だと感じた

『これで石像から見れる記憶は終わりか。』

長い沈黙を竜自身が切り裂いた。

『俺は病院に行ってこようと思うが、左、フィリップ。お前達は来るか？』

正直すげえ

そう翔太郎は竜の事を評価した。

自分が死ぬと知り、婚約者が分かったのにも関わらず、彼がこの沈黙を打ち破ったのだ。

『どうした、何をかたまっている』

そう投げかける竜にフィリップは問いかけた

『君、あの記憶を見ても平然としてられるってどういう神経だい？』

彼の神経は大樹のように太いのか

とフィリップが呟くと竜は答える

『動揺する点は何も見当たらないが？ただ、所長と風森と俺が家族だった。そういう話だ。』

そして今も現在進行形で約束を守っている

素敵な幕引きだと俺は思う』

妻を失う羽目になるよりは

誰かが死ぬのをこの目で見るよりは100倍マシだ。

と竜がさらりと言う

『それで、行かないのか？』

『お、俺達は少し経ったら外に出る。先行つててくれ』

(あんな凄いことがあって許容範囲とは恐るべき神経だ。)

竜はガレージを出て事務所の外に出ると大きく息を吸う

自分が将来、愛を誓い合う女性は鳴海亜樹子

息子は風森勇樹

そして、それを守り殉職。

あそこまで見て、自分は一つの拒絶反応も起こさなかった

それどころか

どんどん自分に力が湧いてきた

未来の家族を守ろう――
そう考えることが出来たのが、あの事実を受け止められた大きな要因である
ことはあの二人は知らない。
遠くはるかな出来事よりも

竜は現在いまに強い目標を見出していたのだ。

病院に到着すると

集中治療室の廊下、亜樹子はずっと勇樹を眺めていた。

『あ、竜君…翔太郎君は？』

『後から来るそつだ。それより所長、ずっとそこで見てたのか？』

『うん、だって中に入れないうし。』

と亜樹子は苦笑する。

『疲れるだろう。』

『椅子があるから平気だよ。で、勇樹君の話どうだった？』

勇樹君って風都に来た直後の竜君になんとか似てるよね。
もしかしたら竜君の息子だったりして！』

ビクツと竜の肩が震える

さすがは名探偵の娘、洞察力が鋭い

その問いかけに素直に答えようか、はぐらかそうかと考えていると

集中治療室内で大きな動きがあった。

勇樹のベットの付近の

医師や看護師の動きが盛んになっている

『どうか、したのかな。』

亜樹子が不安そうに呟く

そしてその数分後、

医師が集中治療室から出てきた。

『風森さんの親族の方ですか？』

『は、はいっ！』

窓から見る限りの慌ただしさから良からぬことが起きたのかと亜樹子はビクリとなり声が上ずる

『風森君頑張りましたね。意識を取り戻しましたよ』

医師が運んできたのは
この上ない吉報だった。

IとYOU物語／私と貴方を繋ぐメモリー（後書き）

どうもマヒロです。

勇樹君の正体、やっと明かすことが出来ました。

この作品で竜と亜樹子が婚約して居ないのはこの為です。

亜樹子が妻だと分かった竜の今後

飛んだ先の二人が婚約して居ないと知った時の

勇樹の心情や想い

その他もろもろをギャグも交えて描けていたらいいなあ・・・と思います。

そして、今回のお話ですが、

事務所の襲撃（勇樹の家族の襲撃）

と言う事で、

全体的に長かったなあ…と反省しています。

パソコンで読まれる方には拷問並みの長さだったと思われれます。

すみません。

すぐに襲撃に移れば良かったのですが

勇樹が自分の家族を仮面ライダーとは知らない。

アクセルとの交流があったと言う部分を書きたくて

日常風景を導入してみました。

反省する点は

ちよつと竜と亜樹子の最後の部分がクサイ。

見終わった後の竜の異常なポジティブ思考。

【現時点で】自分がもう死んでいると分かった人間がそれを受け止められるのか

と考えてもポジティブ過ぎたかなあ…と

長い本編ではありましたが

楽しんでいただけたらな嬉しいです。

ありがとうございます。

それでは。

いとYOU物語／子の心親しらず、親の心、子しらず。(前書き)

2部の3章めスタート。

いとYOU物語／子の心親しらず、親の心、子しらず。

酸素マスクに心電図に点滴といったような器具が取り付けられてる
勇樹は

目が覚めて見知らぬ、だが見慣れた天井を見ていた。

(…病院)

ぼんやりとする頭で体に来る傷の痛みから「生」を感じ取ると

『風森さん、おはようございます。』

ピンクのナース服に身を包んだアラサーっぽい看護師が声を掛けてきた

『おは——い——す。』

口から水分を長いこと取っていなかったためか声は小さく掠れていた

『はい。おはようございます。』

それでも看護師は慣れてるらしく聞き取ってくれた

『ここは風都病院です。貴方は2週間前も眠っていたんですよ？』

それだけの大怪我を負い生還を果たせた人は珍しいらしく
看護師はとても嬉しそうにしていた。

『風森さん、貴方に会いたって言う人が来ているんだけど、体調の方とか平気かしら』

見舞い？

見舞いに来る人なんか居ただろうか

警察か？

せつかく目が覚めたばかりなのに、もう復帰の話をしなければなら
ないのか

そう窓を見ると4人の人間がこちらを見ていた

1人は帽子をかぶり

1人は本を片手に

1人はこちらを凝視して

1人は軽く泣いている

その4人の人間の姿を見ると

ドクリと心臓が鳴った

その人間は今ここに居るはずのない人間だったからだ

幻覚だろうか――

瞬きを大きくゆっくりしてみるがその人間たちは消えなかった

『あ・・・の・・・』

『あの人たち、今朝来てずっと見てたんですよ？』

『——とお、して。』

看護師のこの言葉に勇樹は告げる

すると看護師は「はい」と頷き4人を通した

近くに招き入れても消えることのない人間は
口々に

「良かった」

「よく頑張った」

「さすがだな」

と口々に自分を見て言っている

ここまで立体的な幻覚があるのか…

『良かったあ…勇樹君の目が覚めてくれて』

頭を優しくなでる女の人言う

『しかしタフだよなあ…医者が褒めてたぜ？「生きようとすることが半端ない」って。』

『彼が負った傷の中では一番大きな傷で、即死やそうでなくとも2、3日が限界と言われている状態から此処まで粘るなんて死神は彼に鎌を振り切れなかったようだね。』

くすくすと笑いながら本の少年が言う

『しかし、これだけ喋っても勇樹、全然反応ねえな…』

『目が覚めてまだ1時間も経って居ない、長く寝ていたんだ。当たり前じゃないか？』

竜の言葉に「確かに」とみんなが納得していると

看護師がやってきた。どうやら勇樹の本人の意識がまだ思っていたより定まっていならしく

これ以上の面会は体に障ると言う事だった。

そう言われては

一応、目が覚めた勇樹の確認が出来た。と言う事で納得し帰って行った

それから、再び面会が許されたのは2日後

4人が未来へやってきて3日目の朝だった。

面会開始の時間はAM8:00からであり、2日たった今ではベットのリクライニング機能で起き上がれるほどまでに回復していると言う。

『2日でそこまで回復かよ…』

面会が儘ならない時でも情報を聞いていた亜樹子が告げた言葉に翔太郎はあんぐりと口を開けた。

個体差はあるが2日と言うとやっと意識がはっきりし、時間の流れが体で把握出来る様になる頃になり、酸素マスクが鼻の穴にさすモノへと変わるようなそんな感じである

なのにリクライニングを自由に操りご飯を食べられるようになっていたと言うのだから驚きである。

(さすが、照井の息子…)

翔太郎は病院へ行く準備をしていた竜を見つめる

『人の顔を見る暇があるなら準備をしる。』

『わあってるよ』

竜に促され翔太郎は重い腰を上げた。

その頃、集中治療室では勇樹が遅めの朝食をとっていた。

(またお粥かぁ・・・)

目が覚めての1日は目覚めたばかりだからと言う理由で微量の氷のみ。

目が覚めて数時間たってから空腹に悩まされていた勇樹の待望の2

日目は身体がこなれてきたと言う医師の判断で朝・昼・夜、お粥であつた。

現在3日目。4回目の粥になる。

集中治療室とは言え、食事の選択権利はあり、粥のほかうどんも選べるらしいのだが、

勇樹は腹を刺されている為、胃が落ち着くまでは味の薄い流動食そして、柑橘系、スパイス系、炭酸飲料水は流動食が解除されてもしばらくは禁止だと言う。

目が覚めるまでに時間がかかった身体であるが、日に日に順調に回復に向かっている少年にとって

三食お粥は拷問に近いものだった。

ちなみに今日の朝の献立は枝豆のスープ、すりおろしリンゴ、極限まで煮込まれてドロドロの具なしお粥。

（食べてるのにお腹がいつぱいにならないって不思議体験だよなあ…）

死の淵から生還した男は「ずずつ・・・」と味の薄い枝豆スープをすすする。

（豆クサイ…。）

とそこに看護師が顔を覗かせた。

『風森さん、面会の時間になりましたよ。』

『あ、そうですね。誰か来てるんですか？』

『ええ、4人来てますよ。通しても大丈夫ですか？』

『はい、お願いします。』

最初の1日目も誰か来たような記憶はあるのであるが、それはぼんやりとしたものだった。

以来1日ぶりの来客である。

多分、警察関係者だろう
そう勇樹は思っていた。

（抜糸終わってるみたいだし、傷は塞がってつから一般病棟移った
らりハビリして
復帰は10日の間かなあ・・・）

と呑気にポーッと枝豆スープを口に含んでると

看護師が自分に許可を貰ってから数分、
4人の人間が笑顔でやってきた。

『ブフツ——！！』

勇樹は思わず枝豆スープを噴射する。

意識がはつきりしている今だから分かった

その人物は此処に居ない、居るはずの無い人物。

鳴海探偵事務所のメンバーだった。

『勇樹君、おはよう…随分と元気になったね…ってぎゃーっ！勇樹君の口から緑の液体が出たあああ！私聞いてないッッ！！』

出会い頭で口に含んでいた枝豆スープを噴いた現場を見たのは亜樹子だった。

即座に芸人並みの大きなリアクションをとる。

『えっ！？風森勇樹の口から緑の液体だって！？彼は生物学上は人間だけど…』

彼の血の色はみど——『っげほっ…げほっ…げほ、これ、枝豆スープ！！』

枝豆スープが鼻へ入り込んだのか鼻を押さえては顔を歪めている勇樹は

強めに主張した。

『枝豆スープ？なんだ、20年後の医療の影響で血が緑になったのかと一瞬ゾクゾクしたんだが…』

『俺、一応生物学上人間だから血は真っ赤だよ…』

ちり紙で鼻をかんでは勇樹が言う

『食事中だったのか？』

机の上に並んだ皿を見て竜が聞く

緑の液体、白い液体（粥）茶色い液体の3種類の液体の皿が並んでるお盆を見て

すると勇樹は静かに頷いた。

『そ、コレ、俺のご飯。』

『げっ・・・全部液体じゃねえか。食えるのか？』

スプーンですくっては「くんくん」と翔太郎は匂いを嗅ぐ
そして一口口に入れると苦々しい顔をした

『不味ツ・・・！全然味ねえじゃねえか、』

『なに人の勝手に奪って食ってたんだよ！
やめろよ！これ食わなかつたら俺12時までご飯来ないんだぞ！？
つか、何で左達が此処にいんのさ。』

目の前に居る人物は2週間前に別れた此処に居るはずのないはずの
人々。

思い切り不信感を露わにすれば翔太郎が代表して答える

『俺達か？「おやつさん」が俺達の時代にお前が刺されたと言う事
を伝えに来た。』

だから俺らはお前を助ける為に此処に来たんだ。

これから俺達はお前のサポートに回る。よろしくな。』

翔太郎がそう言い握手しようとして手を伸ばすと勇樹はその手をパンッ
と叩いた

『なに偉そうにしてんだか。』

『んなつ！！？』

友好の証として伸ばした手は小馬鹿にしたような態度によって返される。

「…お前、親に習わなかったのか？」

「知らない人についていくな」って

おやっさんだか何だか知らないけど、俺の名前を知ってる怪しい男にノコノコ付いてきて

「助けに来た」ってなに堂々と主張してんだよ。

敵の畏だって警戒するのが普通だろ？」

やれやれ、と勇樹は肩を竦める

「普通ならそうだが、「おやっさん」は俺の師匠だ。知らない人じやねえ」

知らない人じゃない

と勇樹の態度に力チンときた翔太郎が顔を近づけ吠えるがそれとは真逆の温度差で「はあ…」とため息をつく

「その師匠の面の皮被ったドーパントって言う可能性が無きにしもあらず。

ちっとは疑う事を知れよハーフボイルド」

「てめっ……人がせつかく」

「俺はお前らに助けると頼んだ覚えは無い。アンタらが勝手に此処に来た。そつだろ？」

俺の安否を確認しに来たなら俺はこの通り無事だ。あと7日後には病院を抜け出して仕事を始める。問題ない。さっさと帰ってくれ。』

きつぱりと言い切った勇樹はすっかり酸化しきつたすりおろしリンゴに手を伸ばす…が、それを亜樹子に奪われる

『どーしてそういうこと言うの?! 私達、本気で心配したんだよ?』

『あ・・俺の。』

『返して欲しかったら謝りなさい!』

『あ、謝るって…、何を謝るんだよ…俺は間違っちゃいないよ。』

勝手に来られて「助ける」とか兄貴風吹かされても困惑するだけだ。』

睨んでは、淡々と告げる勇樹に翔太郎の堪忍袋の緒が切れかけていた

『迷惑だあ? お前、どれだけみんなが心配したと思っただ! 照井なんてな、俺達に嘘ついてまで此処に来ようとしたんだぞ! ?』

お前のために命を懸ける覚悟をした。

それも困惑する。迷惑だっけ言いてえのか! ?』

『…ああ、迷惑だね! 何勝手に決めてんだよ。他人の時代に命かける?』

それよりも仮面ライダーとしてやることあんだろ! ?』

無駄に兄貴風吹かせてる暇があるなら自分の仕事を全うしろよ!』

勇樹が感情に任せ肩を竦めながらぶちまけると翔太郎の目が見開かれ
そして次の瞬間、勇樹の頬に拳が飛んできた。

勇樹の身体はベットにあつたため、殴った反動が机に届き粥らの皿
がお盆ごと床に落下した。

勇樹自身は身体が傾いたものの幸い亜樹子がすぐに駆け寄り支えた
ため

心電図や点滴言ったような機械に影響はなかった。

『ちよつとなにすんのよ！勇樹君は怪我して——』お前、いい加減
にしるよ！仮にも照井は親だろうが！

自分の親に向かってどうしてそんな酷い口叩けんだ！』

『なにふざけた事言つてんだよ！親だ？はん、お得意のフィリップ
の検索か。時代が時代。読める様になつたんだな。俺の本。
あのな・・確かに、俺は照井竜の息子だよ。だから家族はアンタら
さ。』

親だからこそこんな風に言つてんだろうが！』

勇樹は亜樹子に支えられたまま赤くなつた頬を触り思い切り睨みつ
けた。

その怒鳴り声に看護師が何事か…とやってくる。

看護師は床に散らばつたお粥や怒鳴り声などを聞いて即座に翔太郎
らを追い返した。

そして集中治療室内への出入りを禁止された。

強制的に追い出された後も翔太郎は不機嫌だった

『君がけが人まで殴るなんて思わなかったよ。』

確かに勇樹の態度には腹は立ったけれど、抑えるべきだったんじゃないのかい？

出入り禁止になってしまったじゃないか。これじゃあ、勇樹に真実は問えない。

それに、亜樹ちゃんに勇樹が照井竜の息子だ。ってバレってしまったじゃないか。

君、今後の恋愛発展に責任持てるんだろっかね？』

『知るかよ……たく、もう少し可愛げのあるやつだと思ってたのによ。』

トンだ不良息子だ。と翔太郎は言う

『それに比べ、照井竜、君は大人しかつたけれど……腹は立たなかったのかい？』

『…左の気持ちはありがたいが、アレがああいう性格だと言う事は知っている。許容の範囲だが？』

（それに俺も、左や所長やフィリップの心配が迷惑だと感じた時あるしな。）

復讐の相手、井坂の遭った瞬間、

「心配してるやつがいる」と言われ自分はそれを迷惑以外の何物でもないと感じていた

襲われたばかりでフラッシュバックやらで気持ちが高ぶっているのもあるだろう。

と竜はざるのように話を聞き流していたのだ。

場所は鳴海探偵事務所、戻ってきた翔太郎らはガレージ、勇樹が言った言葉を思い出していた。

《親にだから言えんだよ》

ガレージにはいつてからフィリップは検索をする。こんな真似はモラルに反するが、四人揃って病院に出入り禁止になってしまった為、本人に確認がとれなくなってしまった。

その本の名は「a f f e c t i o n」

愛だった。

『彼があそこまで捲し立てた理由は僕らに対する愛だ。』

フィリップは本を広げながら言う

『…愛？』

翔太郎が聞き返すとフィリップは頷く

『風森勇樹、いや、照井勇樹は敵の組織に時渡りのガジェットが存在がバレて襲われた。』

その理由は過去の僕を捕らえ利用するため。

照井勇樹はそれをガジェットを壊すことで防いだ。

壊すことで敵の首領はしばらくは仕掛けて来ないであろうとふんでいた所に

僕らはノコノコ現れてしまった。』

『・・・そう言うことか…』

竜は短く呟いた

『僕らが存在していれば敵はまた僕らを狙ってくる。』

敵の能力をメモリーメモリで確認したとはいえ、ロストドライバーを持ってきていないから

「僕」を奪われてしまったら翔太郎は丸腰だ。

確実に負ける。

依頼人がドーパントに変わり襲われた彼はビギンズナイト以降、人へ必要以上の警戒を抱いて生活している。

だから僕らの単純な行動に腹を立てた。

そして彼は何とか追い払おうと僕らのイラ立ちを誘った。』

『イラだち…？』

亜樹子が首をかしげるとフィリップは頷く

『暴言を吐き他人を遠ざける。彼の十八番の行為だ。』

大半の人間は自分やその大切な人が必要以上に貶されると怒りがこみ上げる。

その心理を利用したトリックさ。』

彼は僕らを不必要に怒らせることで愛想を尽かさせ、帰らせようとした。

もつとも、僕らに帰るガジェットは無いけれど、助けるのを拒絶する気持ち、みたいなものは生まれただろう。』

『それ、何回も繰り返してるの？』

『いや、彼がこの方法を使うようになったのはビギンズナイト以降、』

10年の付き合いの親友を16歳の時に断ち切っている。そこからだ。』

『親友との縁断ち切った！？なんでまた、そんな変なことを…』

『彼が「仮面ライダー」だからだよ。照井竜、僕が長々説明しても

いいけれど

この事は直接「視る」方が良いだろう。

メモリーメモリ、あるよね？」

フィリップが言うと竜は頷いて懐からメモリーメモリを取り出す

『あるがどうするんだ？勇樹の記憶を見るんだろう？勇樹に近づけなければ意味がないんじゃないか？』

『ああ、だから今から病院に向かうよ。「近づければ」いいんだ。集中治療室の窓越しに照井勇樹へ近づければ記憶を視る事が出来る。

』

フィリップはそこまで言うと亜樹子を振り返る。

(照井竜の息子だと知ったのはいいけど、まだ危険だね)

『亜樹ちゃん、記憶を覗いてる時は僕らは魂が抜けた状態で気絶するんだ。病院だし、その色々と大変なことになると思う。

僕たちの身体お願いできるかなあ』

『また私、仲間外れかいッ！！』

フィリップの頭をスリッパが掠った

『す、すまない・・・でも・・・亜樹ちゃんに体を預けないと大変なことになるから』

フィリップが頼み込めば亜樹子は大きなため息を吐いた

『わかったわよ！私がみてればいいんでしょ？』

『さすが亜樹ちゃん！』

そして集中治療室の前、4人が再びやって来た。

どうやら周りに看護師は居ないらしいが、勇樹は目をさまして気配を感じたのか窓の方を向いた

《はいつてくれば？》

勇樹はドアノブを捻る仕草をする

その動作をみてはフィリップが扉を開ける

『フィリップ、お前、今俺達出入り禁止だろ！？いいのかよ』

『照井勇樹がああ言ってることだ。大丈夫なんじゃないかな。それに本人を無視して強行と言うのも気が引ける。』

そついいフィリップはずがと中へ入って行った。

『やあ、』

『まだなんかよう？』

左ほほを思いつきり腫らしては氷を当てが立っている勇樹は不機嫌そうにつぶやく

『俺、お腹空いて不機嫌なんだけど、まだなんか文句あるの？』

『いや、君の考えを閲覧させてもらったから、その謝罪と感謝を伝えに来たんだ。』

君の行為を骨折り損にしてすまない。けれど僕達も決して君を苦しめようと思ってきたわけじゃない
それだけは分かってくれないかな。』

『知ってるよ、そんなつもりで来たんじゃないことぐらい。俺も言い過ぎた。ちょっと頭に血が昇って前が見えなくなってた。』

いつまで滞在予定？』

《えらく丸くなってんな。》

《頭が冷えたんじゃないか？それより、本気で殴ったんだな。頬が酷いぞ》

《まーな。不良を更正させるにや拳が一番だろ？》

《勝手に人の息子を不良扱いするな。やんちゃな子供と言え》

《やんちゃ！？どう見たって不良息子だろーが。》

《いいや、ただのやんちゃ息子だ。甘えベタのな。》

『だから君のビギンズナイトを見ておきたいと思う。いいかい？』
翔太郎と竜が小声で会話してる間に話は本題に移っていた

『…嫌だつてもこうなった以上、いずれ伝えなきゃいけないことだしな…フィリップが説明すんだろ？
俺は正直、語りたくないからパスね。』

『僕も語らないよ。メモリーメモリというメモリで君の記憶を覗き、追体験する。そして亜樹ちゃんは見ない。』

『……いいけど、それで俺への態度変わったりしないかな？
みた後、正直左に殴られそいで怖いんだけど。』

人差し指と人差し指を突き合わせては不安そうに尋ねる勇樹に亜樹子が答える。

『全ッ然そんな事ないわよ！？そんな翔太郎君が居たら私がこのス

リップで制裁加えちやる!』

『本当・・・?』

『うん、本当!』

(さっきまでの般若顔が嘘みたいだわ…)

『なら・・・いいよ。俺も覚悟決めた。どうぞ。』

勇樹はシートを握るとメモリが挿し込まれる瞬間を待った

フィリップは勇樹の覚悟が揺らがないうちにメモリーメモリを近づけては

三人は勇樹の過去へと意識を転送させた。

「IとYOU物語／子の心親しらず、親の心、子しらず。」（後書き）

3章めは勇樹が目を覚ますところからスタートしました。

とりあえず、翔太郎がカツコ悪くなっちゃいました。

翔太郎は意外と短気なイメージがあるのでこうなっちゃいました。

何気にこの章は迷った回でした。

勇樹が素直に受け入れるか、又、竜自身に留まる理由を喋らせるか結果的に亜樹子にバレる形になりました。

バラさずに「これは恋か、母性か」と言うのもやりたかったんですがただ、亜樹子の場合、分かっても世話を焼くかなあ・・・と。

次回はビギンズナイトになります。

風森勇樹が仮面ライダーになり何故、Wのメモリが使えなくなったのか。

少し話の運びが強引だったと思いますが、行っていきたいと思います

面白いと思ってくれれば嬉しいです

それではまた！

ありがとうございました。

いとYOU物語ノヒーローが不在のこの街で（前書き）

勇樹のビギンズナイトです。

IとYOU物語／ヒーローが不在のこの街で

2026年 8月

そこに照井竜らは記憶を閲覧する側として降り立った。

降り立ったのは真夜中の鳴海探偵事務所だった。

窓が割れて居る為、月光が差し込み、美しく周りを照らす

《ここは探偵事務所か？》

竜があたりを見回し呟く

《ああ、ここは襲撃の1年後、2026年 8月だ。》

《勇樹はいないんだな》

翔太郎があたりを見回すが勇樹の存在は無かった

《勇樹は未成年だから施設へと送られた。身寄りがほかに無いからね。》

《じゃあ、どうしてこの場所なんだ？》

《それは――》

とフィリップが言いかけた時だった。

割れた窓ガラスに梯子をかけて勇樹と思われる少年が土足で入ってきた。

『ただいま、帰って来たよ。』

手を擦り剥いては石像に笑顔を向けタオルを取り出し石像を磨き始める

と、ドンドンと扉を激しくたたく音がする

「勇樹君！どうして君は脱走するんだがね！」

『うるさい、ダサメガネ！僕の家はここだ。家に帰ってきちゃんか悪い事あんのかよッ！』

「勇樹君！君の兄や両親を亡くした気持ちは痛いほど分かるガネ。だが、だが・前を向いて生きていかなきゃ駄目だガネ！」

『僕は前向きだ！！帰れダサメガネ！！』

そう暴言を吐き捨てると「ダサメガネ」そう呼ばれた男が遠ざかっていく

その様子をしっかりと窓から見送ると勇樹はタオルで石像を拭きはじめた。

家族を失った勇樹は警察の意向により施設へとその身を移されたが、勇樹は夜な夜な脱走しては家族の石像があるこの鳴海探偵事務所へ帰ってきていたのだった。

人は言う

家族を失ったショックでおかしくなってしまった」と。

それゆえに腫れ物に触るような扱いである。

無理な発言は青少年の発達を妨げる危険性があるからだ

人により無理やり施設へ引きずられるケースがあるが

今回のダサメガネは尊重してくれているので結構、楽である

この1年間、勇樹は中学校へ通うのを止めていた

ただ隙をみては脱走し、探偵事務所へ入り浸る。そんなプチ引きこもり生活をしていた

敵が憎い

そんな感情は持たなかった

ただ、虚無が生まれて立ち尽くした。石像を拭くというイタイ姿勢を見せてはいるがこれでも回復した方である。

この頃の治安は照井竜が凶弾に倒れたことにより、ドーパントへ立ち向かえなくなり

ガイアメモリ犯罪が急増し、そしてそれに便乗する犯罪も増え悪化していた

『父さん、母さん…左

もう一年になるな。僕はとりあえず元気だよ。』

そう呟きバケツを片付けているとそこへ

1人の男が音もなく入ってきた。

白いスーツの男、鳴海荘吉である。

《おやっさん！》

翔太郎はその人物の登場に無意識に声のトーンが上がる

『夜な夜な施設を抜け出す悪ガキがいると聞いてきてみれば随分と背が低いな。』

『おじさん施設の人？』

『お前が、鳴海勇樹、いや、照井勇樹か？』

『そうだよ。ちなみに背は159？だけど、これでも伸びた。おじさんは警察？』

『いや、これをお前に渡しに来た』

莊吉は持っていたアタッシュケースを差し出した
そのアタッシュケースを見るなり勇樹の顔はひきつる

『おじさんマフィアかなんか？あいにく僕は白い粉なんて運ぶつもりはないんだけど。』

発想が面白いな。と莊吉は腹で呟きながら言う

『違う。こいつはガイアメモリだ。』

お前も「仮面ライダー」の伝説くらいは知っているだろう。』

『知ってる。「アクセル」と友達だった。って、ガイアメモリ？ガイアメモリって人間を超人に変えるUSBだろ？それで仮面ライダーの変身道具って言われてるやつ。』

『それを7本とドライバーをお前にやろう。お前の父さんと母さん達はまだ死んでいない。身体が風化しひび割れない限り命がある。』

『なんで僕に渡すの？おじさんは僕に仮面ライダーの代わりになつてほしいの？』

仮面ライダーがこの一年間姿を消しているから？』

仮面ライダーはぱたりと居なくなった。

だから己になれと言っているのか、と勇樹が問いかけると莊吉は首を横に振った。

『違う。代わりになれとは言っていない。』

ただ俺は道を持ってきただけだ。

お前の家族はまだ生きている、その希望にかけてこの力を使い仮面ライダーになって戦いに身を投じるか

このままひび割れるまで親の石像を磨いて平凡な一生を迎えるか。

どっちに舵を切ろうがお前の自由だ。だが、決断をしろ。

お前はとうしたい？』

莊吉が言つと勇樹はアタツシケースを眺める。

『……父さんと母さんたちはまだ生きてるんだな？』

なら、僕はこの街を守る「仮面ライダー」になるよ。助かる可能性があるんなら俺は戦うよ。

これを受け取る。』

勇樹はアタツシユケースを受け取ると中を開く

サイクロン、ルナ、ヒート

ジョーカー、メタル、トリガー

アクセル

アタツシユケースの中には計七本のメモリとロストドライバーが入っていた。

『アクセルだ！おじさん、これ、アクセルってどういう……』

中身を眺めてはアクセルメモリに目が止まり勇樹は手に取る。

どうしてアクセルメモリがあるの？と問いかけた声は虚空に響いた。

鳴海探偵事務所前、荘吉はかもめビリヤードの前、黒いロングコート
の女性に会う。

『あれでいいんだな？文音。勇樹は受け取ったぞ。』

『そう。なら、私はガジェット制作をするわ。ありがとつ荘吉。
私はあの子を死なせてはならない。』

『馴染の頼みだ。受けるのは普通だ。感謝は要らない。』

荘吉と文音は夜の闇にまぎれて消えた。

それから時空は移動する。

記憶を視ている為、急に場面が変わるのだ。

再び映し出された情景は

勇樹の身長が169?であり、ブレザーを着てトーストをくわえながら鳴海探偵事務所を出ていく場面だった。

《ここはいつの時代だ?》

《ここは2028年 4月21日。勇樹が風都西高校に入学して少しの時の記憶だ。

この頃勇樹は施設を出ている。大量のお金の入った貯金通帳が彼の家の前に置かれていたらしい》

遅咲きの桜が舞い散る中、勇樹はパンを加え走る
その耳にはイヤホンをしている

『やばっ、遅刻するっ……』

《学生だなあ……勇樹の奴》

今よりも表情が朗らかでパタパタと走っている勇樹は
道の曲がり角でサラリーマンとぶつかる。

『痛っ……どこ見て歩いてんだよ!』

『そつちこそ、どこを見てるんだ!』

そのサラリーマンと乙女的出会いを果たしたのもつかの間、勇樹の表情が変わる

サラリーマンはぶつかった拍子にガイアメモリを落としたのだ。

『しまった・・・』

そのサラリーマンはそう呟くと踵を返し脱兎のごとく逃げ出した

『まあてゴルアアアア!』

勇樹はトーストを拾い上げ泥を払うと一番泥がついた部分を取り除き口に加わえると

学校とは反対方向のそのサラリーマンを追う

『ひいひいひいひい!』

そのサラリーマンは身軽なのか、看板などの障害物の多いほうへと逃げていく

勇樹は障害物を飛び越えながらサラリーマンを路地裏へと追いつめた

『ぬぬ、こうなったら仕方がない!』

男が群青のメモリを構え始動させた。

【balloon】

バルーン、と始動音がなると腹の膨らんだ風船のようなドーパント

へと変わる

『うおおおおおお！！』

勇樹はロストドライバーを腰に巻くとサイクロンメモリを構える

『丸い球体。なるほどお前は2日前から起きてる下着ドロの犯人だな。』

その行為、虹の橋と共に消してやるっ』

【CYCLONE】

『変身っ！！』

【CYCLONE】

勇樹の姿は緑の粒子が包み込み、ダブルのような、だがセンターラインがない緑一色の赤めの複眼
仮面ライダーサイクロンへと姿を変えた

『貴様、仮面ライダーか！』

『その通り、俺の名前は仮面ライダーレインボー。7つの力を持つ戦士だ！とお！』

とお！

と恥ずかしげもなくバルーン・ドーパントに勇樹が立ち向かっていく

《名前、ダサ…っ！か、こいつ誰だよ。自分の事仮面ライダーって

言ったぞ。》

勇樹が説明するときには「一応」と語頭につく。だが記憶の勇樹は高々と主張しているのだった

『ちつ、浮力を自由に変えられるのか：なら、こいつだ。』

勇樹はヒートメモリをドライバーに挿しこむ

『ほら！熱いだろ？破裂しな！』

『あちいいいい！くそつ、此处で朽ちてなるものかああ！』

『8時30分だし、遅刻しちゃうからトドメをさすな？』

メモリをアクセルに変えると

ダブルの複眼が青で赤い体のダブルが姿を現す

【アクセル マキシマムドライブ】

『アクセルレインボースパイカー！ツ！！』

勇樹はそう叫ぶと逃げ惑うバルーン・ドーパントに蹴りの一撃を食らわせる。

技の名前がダサイのは仕様らしい。

メモリはブレイクされ砕け散り男の横に落ちた

そして普通の携帯で警察に通報すると「遅刻！！」と学校へ走って行った。

《この頃はWのメモリ使えたんだな。アクセルもダブルみてえな姿してたし。》

《そうだね。この頃は使えていたようだ。》

走っていく勇樹を眺めながらフィリップは頷いた。

再び場面は急激に動く

風都西高校の1年A組の教室の中に3人は降り立った。

時刻は8：40分ホームルーム開始のチャイムが鳴る
それに合わせて

『待ったああ——ッッ！！ギリギリセーフ！！』

全速力で走り席に勢いよくぶつかりながら勇樹が言う

『ははっ、鳴海いゝお前いつもぎりぎり間に合うなあ〜』

隣の席の男子がケタケタと笑う

『まあね——』『でも先生来てるぞ?』

『んげっ！あの「生え際ヤバス」もう来てんのか!?!』

『くおら鳴海いいい！！誰が「生え際ヤバス」だ！私の名前は 神

賀 茂「カミガシゲルだと言つとろおが!！」

メガネの30代の七三分けの男は叫ぶ

担任 神賀茂(34) 妻子持ち。勇樹の言つとおり生え際が後退してきている悲しい数学教師兼1-A組担任である。

《あだ名好きなのか? ダサメガネとか》

《本当に特徴掴むの上手いよね。技名はセンス悪いけれど。後で彼に名前を付けられた哀れな人間を検索してみよう。これは面白い検索内容だ。ゾクゾクするねえ》

フリリップは1人輝いていた。

記憶の中の勇樹は「ぎゃはは」と馬鹿笑いをし、人を惹きつけるムードメーカー的な存在だった。

《所長の血だな。》

《だよなあ・・・すっげえ楽しそうだぜ。》

気が付くとカレンダーは5月を指していた。

教室内の出来事で変化はないがカレンダーの表示が時間の経過を知らせていた。

窓側の一番後ろ。

それが勇樹の席で、数学の数式を黙ってノートに写していた。

……が耳にはイヤホンを片耳にし、片方の手で小型ラジオをいじっていた。

よくも悪くも今時の子だ。と翔太郎が苦笑していると勇樹が突然席から立ち上がった。

『先生！僕、具合悪くなりました。早退します。』

拳手しては勇樹は帰り支度を始める

『…またか、お前今月何度目だと思ってるんだ？』

神賀の言葉に悪そびれた様子もなく勇樹は教室を出ていった。

そして早退した勇樹が向かった先は銀行だった。

銀行で金品を盗んでいたドーパントへと立塞がるとドライバーを構える

どうやら彼はラジオで仕入れたドーパント情報を聞き、授業を抜け出し

退治しているらしい。

ルナメモリで早々に決着をつけた勇樹は警察に犯人を引き渡すと事務所に帰っていく

《学校早退してドーパント退治か。感心しねえなあ・・・》

翔太郎はボリボリ頭を掻く

《けれど、勇樹のこの行為で街の人への被害は最小限に食い止められているよ。》

翔太郎の発言にフィリップは静かに呟いた。

再び場面が変わる。

《移り変わりが激しいな。》

と言っても学校周辺だが、と竜
教室内のカレンダーは9月を指していた。

『先生。具合が悪いので抜けます』

勇樹の態度は変わらなかった。

ラジオを聞き速報が入ったら学校を抜け出しドーパントを無力化させ通報する。

いつもの彼の日常。

さすがに4ヶ月も経つと早退はやめたらしい

ドーパントを無力化させ、怪我に適当に絆創膏を張り再び出席。

夏休み明けと言う事もあつてか周りの男子や女子らのテンションは高く4月と何ら変わりはなかった。

だが、ムードメーカーの彼の周りには誰も寄り付かなくなっていた。

彼が授業中に抜け出していく理由は
喧嘩をしに行くためだ。

だから鳴海勇樹は怪我をしている

校内でそんな噂が広まってしまった勇樹は1人だった。

5月に馬鹿話をしていた友人らしい男子も勇樹には構おうとしなかつた。

休み時間になると勇樹は馬鹿話をしている男子の輪をちらちらと見
ては溜息を吐いた。

そして我慢できなくなったのか

『あ、あの…なんの話して、んだ？』

勇樹は一番盛り上がっている輪に思い切って入り込む

『あ。鳴海君。』

この間修学旅行の班決めてたんだ。

この学校クラス変わらないらしくて——』

気弱そうな男子が答えると、ガキ大将な男子が気弱そうな男子の頭
を叩く

『バカっ！言うなよ。』

『修学旅行の班決め？俺聞いてないよ。』

『聞いてないってお前、その時仮病使って抜け出して喧嘩してたん
だろ？知るわけないじゃん』

ガキ大将な男子が言う。
ストリートに言われれば勇樹は躍起になる。

『け、喧嘩！？お、俺、知らないよ！！』

『恍けんなよ。知ってんだぜ？2日前の帰り道に、お前がサラリーマンカツアゲしてたの』

『サラリーマン？…あつ！！』

勇樹は大げさな声を上げる。

2日前偶然見かけたサラリーマンがガイアメモリを所持していてそれを隠そうとしたから追い詰めた

「出せ、出せよ！！」とハッキリ言った記憶があるので何も言えなくなった。

自分が仮面ライダーであると学校周辺者にはバラしたくない。

『ま、とりあえずお前の入る班はねえよ。』

また仮病で抜け出されても困るからなあ。

ほら、近寄んなよ、俺達まで不良だって見られんたる？』

『っ…それ…は、悪かったな。』

勇樹は席に戻った。

そして大音量で音楽を聴き始めた。

自分が戦いを初めて2年と1か月になる。

自分がどんなに戦っても仮面ライダーは現れなかった。

あの石化のドーパントにやられたのだろうか…

その窓の外を憂鬱に眺めては一つ溜息を吐いた。

勇樹が学校周辺の人物に明かしていない以上、孤立は仕方がないものだと思えたが

4月とのギャップに翔太郎らは胸を痛めた。

そして再び場面は変わる。

この現象にすっかり翔太郎らは慣れてきていた。

ただ、今回の場所は学校ではなく路地裏だった。

2028年 9月26日

勇樹は路地裏にサボテンのようなドーパントを追い詰め
マキシマムドライブを発動する。

サボテンのようなドーパントは勇樹が変身したヒートによりメモリ
ブレイクされた。

使用者は若い女でその女は床に倒れる

『さてと警察に電話して———』

警察を普通の携帯で呼んでいると、ふと勇樹は女の様子がおかしい事に気が付いた。
いつもならば、眉が動いたり、何かしらの反応があったりするが反応がないのだ

『も、もしもし…？大丈夫ですか？』

その女に勇樹は呼びかけたが返事は無い。

勇樹は気つけとして頬を何発か叩いてみるが糸の切れた人形のように彼女は動くことはなかった。

それどころか呼吸も感じられなかった

『つつつ！？』

彼女は死んでいた。

『なつ…なあ！？おい！！オイっ！！』

勇樹は気が動転し心臓のあたりを押す。

人工呼吸のつもりらしいが、気道を確保しなければ意味がない

『ああ…あああ』

やがて自分が呼んだ警察のパトカーのサイレンが響く

その音に勇樹は女性を見捨てて脱兎のごとく逃げ出した。

鳴海勇樹 16歳 メモリとの異常適合者との初めての出会いだった。

警官があゝの遺体を見つけるまでそう時間は掛からなかった。そして現場から逃げた唯一の人物、勇樹は警官隊に追われ捕まった。

『君は被害者に恨みでもあったのか？』

鳴海勇樹君、いや、照井竜の息子の照井勇樹君』

小太りの男で茶色いスーツの男、「檜柴 兼光」ナラシバ カネミツ」警部が言う

薄暗い取調室の中、まだ勇樹の気持ちは動転していたままだった。

あの方法で人の命を奪ってしまった事は過去一度もない。

猫や犬もドーパントになったことはあるが、それでさえも無事だったのに

自分はやってない

勇樹にそう言い逃れできる舌は無かった。

仮面ライダーとして人の命を奪った感触が肌にあったのだ。

『俺、知らなかった――』

知らなかったんです！まさか、死んじやうなんて思わなかった！』

『知らなかったじゃすまない！』

被害者をどうやって殺したか、それを聞いているんだ』

『っ――殺すつもりなかった……』

こんなことになるなんておぼわなかったんですっ……ごめんなざい
っっ！ごべんなざいっ！」

檜柴の剣幕に押され勇樹はボロボロと涙をこぼす

『金欲しさでやったのか？ 害者に目立った傷跡はなかった。どうや
った』

睨みつけている檜柴に勇樹は口を滑らせた。

『お、俺……俺かべんライダーなんですっ！ それでど、ドーパンドを
やっつけで

そうじたら、あの人が死んだんです。』

勇樹は涙で顔を濡らしながら真実を告げたが

檜柴はおでこに血管が見えるくらいに怒り狂った。

『どうしてそんな嘘を吐くんだ！！』

『う、嘘じゃない！ 僕はずっと、今まで街を——街をこの手でツ
』！

『ふざけた事を言うな！ 貴様みたいな犯罪者が仮面ライダーという
のなら犯罪者はみんな仮面ライダーだろうが！

そんな嘘を吐くからこの風都に仮面ライダーが居なくなったんだ！
』！

自分が仮面ライダーを続けたからダブルとアクセルが居なくなった

檜柴にそう言われ勇樹は言葉を失くした。

自分は「仮面ライダー」として街を守ってきた

その間、ダブルやアクセルには会わなかった。

自分はそれを石像ドーパントにやられたのだと自己解決をしていた。

だが、居なくなった時期を考えればそうだった。

『留置所で反省するんだな。照井警視監はそれを望んでる。お前が罪を償うその瞬間を』

『…はい。すみませんでした。』

上手く纏め上げた（？）檜柴にはもう反論はせず勇樹は留置所へ移った。

彼が所謂、豚箱で過ごしたその期間は1か月だった。

だが、そんな彼に救いの手が差し伸べられた。

11月

照井勇樹に面会を申し出た人が居た

『……………』

面会の場所へ顔を突き合わせると

よれよれの鼠色のスーツに白髪交じりの頭

そして、首のツボ押し器

『しばらく見ないと思ったら、お前いったい何やってんだ。』

ガラス越しにそう言うのは

超常犯罪捜査課 刃野幹夫、

そして今や左団扇の警視様。

その弱い者は叩き、強いモノにはついていく

そんな男、真倉 俊だった。

『なんでお前が此処に居るんだよ！お菓子でも万引きしたのか?!』

『俺、人…殺したんです。聞いてませんか？こう…首を絞めたんです。くっ…と。』

檜柴警部にはそれで納得していただいています。』

『ひ、人殺し！？なに、出会ってすぐ心臓に悪い事言ってるんだ！』

真倉は目を見開かんばかりに驚いた。

『動機は、誰でもよかった。なんか肩をぶつけられたような気がしてカッとなって』

『はあ…あのよ。そんな目玉泳がせて語らなくてもいいぜ？解剖結果も絞殺特有の傷跡は無いからよ。』

『は、ハンカチでくっ、って絞めたんです。だから痕はないかと…』

「アホ！指紋残さないためにハンカチ越しだったとしても痕はつくんだよ。凄い力で首を絞めんだから。で、檣柴のヤツはそんなグラグラな証言で調書とってるワケか。で、本当のところどうなんだ？」

そんなバカみたいな証言してたら人生9年は無駄にするかも知れねえぞ。

なんかお前に傷害罪、器物損壊、脅迫罪、なんかいろんな罪状ついてっからな。」

「9年・・・いいと思いますよ。俺が「仮面ライダー」を語って悪戯に街を守ってきたことで仮面ライダーは消えている俺がその間此処に居たらダブルとアクセルは戻ってくるかもしれない。」

「ダブルとアクセルは戻ってこねえよ。二度と...
ちゃんと俺達にはワケ話せ。なんとかしてやつから。」

それから十日後、勇樹は冤罪とみなされ釈放された。

勇樹が殺害したとされていたが上がった新しい女の死亡原因が

「ガイアメモリの毒素による中毒死である。」
と事態が覆されたからである。

事件直後も司法解剖したが外傷は見当たらず、死亡原因は分からずじまいであった。

そこにガイアメモリ犯罪に携わっていたエキスパートが突き出した
新たなる証拠。

檜柴は刃野、真倉らを勇樹の身の回りの人間とし、

「この証拠は庇うために用意されたものだ、認められない」と吠え
たが、

超常犯罪捜査課の15年の積み重ねた実績と信頼が勝った。

『刃野刑事、司法解剖の記録よく中毒死って出ましたね。アレって
何回もやって死因が出なかったってあの檜柴が言ってたのに…
どんな方法使ったんですか？』

荷物をまとめて刃野たちに風都署の前で頭を下げる勇樹を見送りな
がら真倉は聞いた。

『……うるさいよお前は、ほら、こぶちや買ってこい。公園でイモ
食おう。イモ。』

『へ？あ、はい、ってなんで階級俺より下なのに命令してんだ！っ
て…イモ！？』

『あー、もう11月だろ？たき火して上手いイモ食いたいだろ？ミ
スプリとか燃やしてよ。な。』

刃野がそういうと真倉は自分の腹の音を聞いた。

『まあ、そ、そっすね。11月だし、焼き芋！焼き芋食べましょう。
こ、こぶちや買ってきまーす。』

真倉は「焼き芋 焼き芋」と歌いながら風都署を後にした。

一方、釈放された勇樹は事務所に帰るとテレビをつける。

テレビのニュースは勇樹の冤罪の報道が流れていた。

あの時メモリブレイクして死なせてしまったと思ったが司法解剖の結果は中毒死

メモリの毒で死んだと証明されて勇樹の心は救われていた。

俺が殺したんじゃないかった

メモリの毒だった。

勇樹は素直に感謝していた。

これだけ冤罪の報道があれば学校は通える。

その翌日、勇樹は久々にブレザーに腕を通した。

だいぶ授業は進んでいるだろうが教科書を見て復習すればなんてことはない。

そして風都西高校に足を踏み入れるが、学校の掲示板に張り紙がさ
れていた。

【1年A組 出席番号25番の生徒は校則第27条にのっとり退学
処分とする

風都西高校 校長】

『へ……？』

勇樹は目を疑い、張り紙を破って校長の所へ走る

『校長っ！退学ってどういう事ですか！！僕はこの間の事件では冤罪になりました。』

処罰にしても「停学処分」じゃないんですか！？』

机に張り紙を叩きつければ勇樹は身を乗り出し叫ぶ

『……確かに君は「殺人」はやっていなかったようだ。』

本来ならば我が校では冤罪を受けたものに対しては全校集会を開き三日程度の停学処分にするのじゃが

何ぶん君は不真面目なところが目立ち過ぎる。

4月から10月まで仮病の早退、授業の抜けだしが何回あったと思っ
っているんだ？

さらにその理由がサラリーマンのカツアゲや暴行行為目的とあつて
はね。

学校は青少年が規則に則り心身ともに学び成長する場所なんだよ。

鳴海君、君はそんな秩序や風紀を乱している。

だから、認めるワケにはいかない。規則なんだ。』

『俺は……』

仮面ライダーなんです――

勇樹は言葉を言おうとした
こんな言い訳は女々しい。

だが、今度は違う。

ドライバーとメモリがある。

ちゃんと証拠を示せる。

勇樹は校長の前でメモリを取り出した。

ロストドライバーを腰に装着しアクセルメモリを始動させる

【ACCEL】

『変身！』

勇樹の姿は「仮面ライダー」へと――

赤くて目の青い複眼の戦士へと姿を変えた

『俺、実は、「仮面ライダー」なんです。早退してた理由はドーパントが街を

ほ、ほら、最近奇怪な怪物が暴れている事件がありますよね。

それを退治してたからなんです。

さ、サラリーマンのカツアゲは人間を怪物に変えてしまうUSBメモリのようなものを所持してて

それを奪うために――

あ、ちゃんと、沈静化させた後は警察に引き渡してます。

お、お願いします。俺まだ学びたい事があるんです。

たくさん勉強もしたいし友達も作りたいたいです。ですから退学だけ

は――』

勇樹はそのままの姿で頭を下げた。
しばらくし、勇樹は頭をあげる。

だが、あげた先に見えたのはゆでダコのように顔を真っ赤にさせ、
額に血管を浮き上がらせている校長の姿だった

『いったいこれは何の冗談だ!!!』

『じよ、冗談...?』

『ワシは「仮面ライダー」に助けて貰った事があるが、そんな仮面
ライダーは見たときがない!』

『あ、これはですね変身するバツクルが違って『この、仮面ライダ
ーを模造した化け物め!なにがアクセルだ!アクセルはそんな姿を
しておらん!!馬鹿にしているのか!!』

本学に君のような生徒は要らん!!立ち去りたまえ!!』

『…わか、り…まし…た。』

勇樹は震えた声で変身を解くと踵を返した。

校長室の扉の前

一人の男子生徒の野次馬が居た。

『見たぜ、鳴海い〜？お前エセ仮面ライダーなんだってなあ！』

『エセ…？』

勇樹はその男子生徒の方を向く、茶髪の長髪の男子だった。

『なあ、鳴海い〜まさかお前のせいだったとはなあ・・・』

その男子生徒は不敵に笑うと一発、勇樹の頬を殴った。

『ぐっ・・・！！』

そのまま茶髪の男子は男子トイレに連れ込むと個室に連れ込み頬を何発も殴った。

『俺はよ、他校に彼女が居たんだが、先日お前の言うドーパントとかいう怪物に殺されちまったんだよ。
高校卒業したらな、結婚する予定だったんだ。』

『…』

『この街にやよあ・・・そんな怪物と戦う』

『仮面ライダー』って伝説の戦士が居たってのに俺の彼女は怪物に腹を食い破られて死んだんだ。

数年前から仮面ライダーが居なくなっただって街の連中は騒いでた。
お前のせいだったんだな。鳴海。

お前があんなちんちくりんな姿で仮面ライダーの真似事なんてやってっからダブルとアクセルは鳴りを潜めて、俺の彼女は殺された。ふざけてんじゃねえぞ！！偽物野郎！！！！

ダブルかアクセルが助けに来てくれりゃ死なずに済んだんだ！

この街の伝説を…美羽を返せよ鳴海ツツ！！このっ…人殺し！！

茶髪の男は勇樹の胸倉をつかみながら泣き叫んだ

『…う、うめ…』

この男子生徒はトイレを使用しに来た男性教諭によって抑えられた。

勇樹は痛む頬を押さえながら探偵事務所に帰ってくると玄関でひざから崩れた。

自分のやっていた行為はなんだっただろうか、
自分は街をドーパントから救ってきたと思っていた。

けれどその行為は街の人を救ってはいなかった。

『仮面ライダーは何処に、いっちゃったんだろうな…』

11月12日

この日から彼は「仮面ライダー」を辞めた。

IとYOU物語／ヒーローが不在のこの街で（後書き）

勇樹のビギンズナイト、物凄い場面の移り変わりが激しいですが記憶を視ているんだと言う事で許してください。

気を付けた部分は、とりあえず勇樹がウザくならないことです。仮面ライダーになろうとしている勇樹の側でも街の人側でも自然に読者さんが感情移入出来る様にすること。

客観的に見たらどちらの気持ちも分かると思っていただけのこと。（天秤は勇樹に傾いています、）

次回は後篇です。

面白いと思っていただけなら嬉しいです。それでは。

Iとyou 物語/Aはいつもそこにいる(9/7改訂)(前書き)

描写はありませんがR指定に引っかかりそうな描写があります
ご注意ください。

I & You 物語 / Aはいつもそこにいる (9 / 7改訂)

季節は1月になろうとしていた。

勇樹はあの日から変身をする事は無くなった。

仮面ライダーの帰還を皮肉的に願っての事だった。

勇樹が街を守らなくなってから風都の治安は急激に悪化していた。

ガイアメモリは高級品とされていたが、新しい組織作ったマスカレイドと言うメモリは

死なない&低価格が売りらしく

これにより街の不良等が遊び半分でマスカレイドメモリを手にし暴れているのだ。

そして例により、それに便乗して悪さを働く奴ら

警察は異形の怪物とそれに便乗し犯罪を犯す街の住人達にてんてこ舞いだった。

テレビをつけると連日のように事件が起こり、連日のように人が死ぬ。

ニュースキャスターがそれらを沈痛な面持ちで伝えても勇樹には響かなかった。

むしろ、いい気味だと感じていた。

テレビのニュースで怪物殺されたと言うニュースを見ると自然と笑いがこみあげてくる。

ざまあみろ。いい気味だ。

その心の高揚は止まらなかった。

一日中引きこもっていたが、食料の限界が来て買い出しに行く真昼間だと言つのに路地裏ではカツアゲや強姦行為が行われていた。

その光景を素通りしてスーパーに立ち寄りコーンフレークを大量に購入し事務所に帰る。

コーンフレークを買って事務所に帰ろうとしたら男がドーパントに襲われていた。

その男は後ずさって目に止まった勇樹に助けを求める

『ききき、君っ、助けてくれっっ!!』

『なんでお前を助けなきゃいけないんだよ。離せクソリーマン！助けてほしかったらな、仮面ライダーに頼めよ。』

足を掴んできた男の手を乱暴に振り払うと事務所の方向へ歩くその瞬間、「ぎゃあああああああ」と言う断末魔とグシャリと嫌な音がした。

そして、人がまた一人死んだ。

そして彼はニュースを見ながらコーンフレークを口に運んだ。

《おいおい・・・人が死んでるニュース見ながら飯食うってどういう神経…》

記憶を眺めていた翔太郎が勇気を睨みながら言う。

《助けを求めてる人まで踏み躪る事ねえだろ!？》

《彼はもう街の為に戦うのが嫌になったんだよ。年は明けたが、彼は16歳、まだ青少年として心身の成長時期にあり、それに必要なコミュニケーションを失っている。こうなっても仕方がない》

《仕方がないって…言ってもよ》

《それにこれは”過去”だ。現在は違うだろうか？》

そう話していると事務所のカレンダーがめくれた。

2月になった。

2月になり、場面はコンビニに変わる。

あんパンやカレーパンやスナック菓子を購入して勇樹はコンビニを出て路地に差し掛かる

すると路地裏から衣服が破かれたようにポロポロの少女が勇樹にぶつかってきた。

(強姦か――。)

勇樹は一目でその女が何をされそうになっていたかが分かった。

女は泣きながら勇樹に抱きついてきた。

女は自分と同じ年のように見えた。

『た、たすけ、助けて…怪物が。』

(怪物つてドーパント態でやる気かよ。しかも真昼間の外、すっげえ悪趣味)

『怪物なら仮面ライダーに頼めよ。俺には関係ない。離れてくれ。』

力任せにその女を少女をはがすと突き飛ばして立ち上がる。

その少女はその瞬間、絶望にも似たような表情を見せた。

『おねがいだから待って!!』

コーヒーにミルクを落としたような色の髪色に肩までのストレートの少女は叫んだ。

その声に勇樹は足を止める。

『まだなんかようか?そんな暇あったら警察に保護してもらえよ。』

『た、助けてくれたら言う事聞くからッ!貴方の言う事なんでも聞くからッ!お金でも身体でも好きにしていいいからたすけてえ!』

(・・・相当テンパってるな。この女。)

涙目で自然に上目づかいになり、衣服はボロボロで「なんでもすると懇願する少女。

人が人なら言葉巧みに別の路地裏に連れ込んでそのまま別の恐怖を味遭わされるだろう。

(まあ、容姿は悪くないし、俺も漫画とか読んで一回はシテみた
いと思つてたけど…)

顎に手を当てて考えていると少女の背後にタコのような容姿のドー
パントが居た。

『お嬢さん。子作りの時間ですよ〜〜ゲヒヒ』

ピンク色で手に吸盤がついて顔には顎髭のように小さな八本の足が
ついて

キス口な人身のドーパントの出現に勇樹は顔を顰める。

(アレと同類になりたくねえ…。つか、ドーパント態で襲つとか
マジありえねえ。)

タコ・ドーパントはゆっくり少女に近づいた。

『いやっ、こ、来ないで！あ、あたし…ぜ、絶対にいやよ。』

近づいてくるタコドーパントへそう少女が言う

『なんでだ。俺は夫になる男だろう？夫は妻の身体を好きなように
していいんだ。』

なあ、ここでヤろうぜ？』

(っとうーに変なのに巻き込まれたな。)

さっさと逃げればよかった。勇樹は後悔していた。

今、勇樹はその少女側に居てタコドーパントと顔を突き合わせている形になっている。

下手に動けば自分にまで被害が及ぶ。

『あ、あたし、あたしはこんな…こんな運命いや…どうしてこんな…』

下品な笑い声を浮かべながら一歩一歩じわじわ近寄ってくるタコドーパントに怯え、そう少女は呟いた。

(こんな運命…ね。確かにごめんだな。)

そう呟く少女を冷めた感情で眺める。

とりあえず、タコの拳動が自分にとって安全だと感じられるまで此処に居よう。

『ひっ！？いやあああ——ッッ！』

じわじわと迫っていたタコドーパントだったが一方は下がり続ける為、堰を切らし少女の足に自らを絡め引っ張ろうとした。

その引っ張り方も一本釣りのようなものではなく手繰り寄せような厭らしい手つきである。

『いやだ！いやだあ！助けてっ…助けてえ誰かあ！！』

少女はパニックになって絶叫し勇樹がいるほうに手を突き出す。

勇樹はその光景を眺めていた。

『仮面ライダーが居たら、助けてくれたかもなあ。だが仕方がないよな。今この風都には仮面ライダーと呼ばれる英雄はいないんだから。』

お嬢さまはさつきからその男に助けを求めてるみたいだが、誰も助けにはいるうとするワケないだろう
俺は異形の怪物。そしてお前は「仕方がない犠牲」だ。諦めて一つになろう。』

タコ・ドーパントはどうやら自分を見逃してくれるらしい。

まあ、ドーパント的には二人の世界に入りたいわけだ。当たり前と言えは当たり前だろう。

『まあ、そのタコが正しいよ。御嬢さん、助けを呼ぶなら仮面ライダーに頼んでくれ、んじゃあな。そのタコと仲良くやってくれ。』

勇樹は女の悲鳴を背に聞きながら歩き出す。

『ま、待って！お願い！！』

少女の必死の声から遠のいてはふと足を止める。

(まあ、警察は呼んでおくか)

近くに巡回中の警官を発見した勇樹はその現場へ警官を案内しようとする。

自分が仮面ライダーを辞めてから警察を呼んだのはこの日が初めてだった。

警官は無線で応援を呼び、勇樹に引つ張られながら現場に到着する。まだ、その少女とドーパントの抗争は続いていた。

（無事、か。）

その様子を見て勇樹は安堵の息をついた。

せっかく呼んだのに殺されていた。では何とも後味が悪い。

『止まちなさい！その怪物！！』

その警官は勇敢だった。銃を構えタコ・ドーパントに発砲する。

（これで、安心だな。）

ドーパントは突然の銃声とパチンコ玉の当たったような痛みを怯み少女から手を離れた。

その隙に少女は地面を這いずり離れようとする。

勇樹は勇敢な警官の行為に感謝しながら少女の様子を見て今度こそ

「帰ろう」と踵を返す。

その瞬間、勇樹の横を何かが掠めた。

勇樹はそれに反射的に振り返る。

勇樹が振り返ると警官はコンクリートの地面にめり込んでいた。

『お楽しみを邪魔するなよ、ったく…!』

そう呟くとタコ・ドーパントは地面にめり込んだ警官を持ち上げた。ボコリとコンクリートの欠片が落ちる音がしたかと思うと警官は糸の切れた人形のように動かさず、垂れ下がっていた。

『っ——きゃああああああ——ツツ!—!』

ゆっくり離れようとしていた少女だが、勇樹と同じくその行動に足を止めていたらしい。

その警官の姿を見るなり絶叫した。

それと同時にその警官が呼んだ応援がやってくる

『アイツの行為を無駄にするな! 撃てえええ!—!』

パトカー2台に4人ずつ、計8人が応援へ駆けつけた

その8名は勇樹を背にタコ・ドーパントに向かい銃を放つが、次の瞬間に1人がコンクリートに口づけをし絶命していた。

『ひゃっひゃっひゃ! 女犯すよりこっちの方がイキそうだぜえ!—!』

1人、2人…4人。30秒とかからず、7名が死んだ。

『う、うわああっつ!—!』

7名が死に、若い警察官が残された。

若い警官はドーパントに怯え銃を乱射したが、首を持ち上げられる

『ああ・・・ああ・・・』

警官は徐々に高くなっていく高度に悲鳴を上げた。

『ほーら、高い、高い。お巡りさんは泣き虫でちゅね〜？』

タコ・ドーパントは警官をあざ笑うと頭から落とした。

「ぐぐぐ」

その警官はそんなカエルが潰れたような声を出して動かなくなった。

さっきまで動いていた人間、9名が1分と経たないうちに死んだ。

勇樹はその光景に足が竦んで動けなくなっていた。

周りの地面は血だらけで

まるでSFホラー映画のワンシーンのようなグロテスクな光景が広がっている

（動け、ここから逃げなきゃ、俺も殺される…！）

あのドーパントは欲を殺して満たすことに目覚めた。

間違いなく此処に居れば殺される。

勇樹は手に汗を感じた。

（呼吸1つ、鼓動1つが仇になる。

呼吸をするな…音を立てるな。）

あの少女が殺されるのは仕方がない。

タコ・ドーパントは今は快樂の余韻に浸っているのか動かない

(今だ！)

勇樹は駈け出そうとした

悲鳴が聞こえても振り返るな。逃げる、逃げる！

「うわああん！」

踵を返して駈け出した勇樹の耳、あの少女のものじゃない声が聞こえた。

7歳くらいの女の子の泣き声だ。

そう、その道は通学路になっていた。

時刻はまだ正午位であるが、新入生は帰るのが早い。

『う、そ・・・だろ？』

余韻に浸っていたタコは帰宅途中の女の子を引きずりこんだのだ。

「うわああん！ママああー！！！」

『いいねえ！もっと泣いてくだちやい。』

今、ここでもう一度踵を返し走れば完璧に逃げられる。

だが、勇樹の頭にさっきの惨劇が蘇る

あの女の子も…ああなる

自分が戦えばあの子は助かるだろう

自分が護身用に持ってきているロストドライバーとメモリを使えば

簡単に

けれど、自分は街を守りたくないと思っっている。

自分が怪我をしてまで誰かのために戦うのは馬鹿げている。

どうせ復活しても

街は自分にレットルを貼るのだから

でも、目の前で命を失いそうなのはまだ未来ある子供だ。

自分を犠牲にするか

子供を犠牲にするか

『つつ…仮面ライダーのバカやるおお！』

追い詰められた勇樹は空に叫んだ

『なんで、何で助けに来てくれないんだよ！』

いっぱい人が殺されてるのに……

怪物が暴れてるのに何で来ないんだよッ！』

風都のピンチを救う仮面ライダーはこんな状況でも現れない。

『・・・仮面ライダー（おれ）のバカヤロー……』

悩んでる場合じゃないだろ！？

早く変身しないと……

あの子が……あの子が……！あの子を助けなきゃ！』

やるのは自分だ——

勇樹は震えながらポケットからロストドライバーを取り出し腰に巻き付け

最初に手に触れたメモリ、ジョーカーを取り出した。

（早く……早く……！！）

ジョーカーメモリを始動させる

【JOKER】

始動音がなり勇樹はメモリを震える手でスロットに挿し込む

黒い粒子が勇樹の体を包むがそれは電流となり勇樹の身体を襲った。

『がああっ!?!』

スタンガンを当てられたような電流の感覚に勇樹は目を白黒させる

(な、なんだ……!?)

ジョーカーメモリは変身回数こそ少ないがちゃんと変身できていたはず…

不調ならば

とサイクロンメモリを取り出し

同じようにセットするが

仮面ライダーの形状を構成することは無かった

(な、なんでだ!?!は、早くしないと!)

ルナ、ヒート、メタル、 トリガー

すべてを試したが、すべて変身できなかった

(…へ、変身できない？そ、そうだアクセル…)

自分をいつも救ってくれていた

自分の憧れのヒーロー

形状こそ違うものの勇樹はそれにすべての希望を賭けた。

アクセルメモリはそんな勇樹の希望を振り切り

始動音が鳴ると同時に粉々にくだけ散った。

粉々に砕けたメモリは風にさらわれ溶けて消えた

勇樹は戦える力を失った。

運命は仮面ライダーの力で自分の過ち(つみ)を償うを禁じたのだ

そしてそれと同時に

女の子の身体は地面へ叩き落とされた。

『…う…あ…ああ…あああッッ！』

勇樹は目から涙を流した

自分が最初つから少女を救い出していたら

あの女の子は…助かっていた

自分が最初つからあの少女を助けていたら

警官は死ななかった

自分が生身で体当たりしていたら

あの子は……

そしてタコ・ドーパントはあの少女に牙を忍ばせようとしていた

『やめろおおお——ッッ!』

勇樹はアトラスフォンでリボルギャリーを呼び出すと

タコ・ドーパントに全力でタックルし

リボルギャリーに押し込め、鳴海探偵事務所へと目標を設定し蓋を閉じ、発進させた。

リボルギャリーがガレージに到着するとリボルギャリーの中が開く
その中からもつ、立つ気力も無いほどに痛め付けられた勇樹が倒れ
ていた。

リボルギャリーと言う狭い場所にリーチの長いタコ・ドーパントの腕
逃げられるわけがなかった

『あつ…く…』

勇樹は辛うじて意識がある状態で、なおもタコ・ドーパントに痛め
付けられる

ガレージの壁に血が飛び散った

(はっ、そうやって…暴れる…
引き裂かれようが、なに、されようが
此処からは出さ…ないぞ)

勇樹は虚ろな瞳でタコ・ドーパントを見つめる

身体は悲鳴をあげ、骨も何本か折れている

タコ・ドーパントはリボルギャリーに乗り少し経ってから人間の言葉を話さなくなった

グオアアアア！と言う獣のうなり声をあげ、話を通じないタコの化け物になっていた。

ガイアメモリの毒素がここまで人を変える

ガイアメモリの恐怖に
ドーパントに襲われる恐怖を勇樹は知った

何もかもが手遅れになったこの状態で――

やがて自分の首に腕が回され、あらぬ力で絞められる

人間の殺意ではなく

怪物の殺意が込められた力に勇樹の意識はすぐに限界に近づいた

『アク…セル………かあ…さ…』

朦朧とした意識

そう、ぽつり眩く

その瞬間だった

『アギヤアアア！！』

そう雄たけびが聞こえたかと思うと何かは横から激突してきた。

『グギヤアア！！』

その痛みにタコ・ドーパントは勇樹の身体を離す。
げほ、げほ、と喉をおさえ何事か、と確認すると

『アギヤアアア！！』

左手が欠けている恐竜のガジェットが雄叫びをあげ、自分を庇うように立っていた

(なんだ・・・この恐竜…)

どっから湧いたんだ？

そう勇樹が不思議に思っているとその恐竜の目が2、3度真っ赤に
光り

データの処理のような細かい電子音が聞こえた。

するとクワガタ2匹、アトラス含むカブトムシ2匹、コウモリ、蜘蛛、カタツムリ、蛙

のガジェットが姿を現し

蛙から亜樹子の声で

『かかれえー！！』

と言う謎の音声と共に

タコ・ドーパントへ特攻を仕掛けはじめた。

(なんだ・・・これ。なんでこんなにガジェットが…?)

ぼかーんとしていると1本角のカブトムシがこちらに向かって飛んできた

着信のお知らせ、と言うより留守番電話の伝言だった

勇樹はビートルフォンを開きその留守電を聞いた

「この風都から仮面ライダーが消えることがあっても、勇樹のヒーローはずっと傍に居るよ。
だから怖がらなくても大丈夫。」

石像になる前に入れられただろう伝言に勇樹は苦笑した

(なに、言っただよ…アクセルは粉々に砕けたよ。
悪い子にはヒーローは来ないんだ。)

カサカサカサ…

足元、スパイダーショックがスリッパを持ってきた。

売り物のように重ねられたスリッパには

「勇樹LOVE? by 亜樹子&竜」とネームペンで書かれている

『なん、だ?このスリッパ』

重ねられたスリッパは持つてみると重かった。

中に何かが入っているらしい。

振っても音はしない。勇樹はおそろおそろスリッパを外すと

コロんと中からガイアメモリが2本落ちてきた。

一本は「E」と言う表記の灰色（鼠色?）のメモリ

そしてもう一本は「A」の表記の――

アクセルメモリだった。

『あ、アクセルメモリ!?!』

勇樹の脳内が一気に目を覚ます

（ななな、なんでスリッパからアクセルメモリが…）

アクセルメモリは2本あったのか???

などと混乱しているとタコ・ドーパントの手がガジェットらを振り
払う

クワガタ2匹と1本角のカブトムシ、そして恐竜のガジェットは役

いつの間にか手にはエンジンブレードが握られていて、勇樹の身体は誰かに操られているかのように動き始めた。

（なんで、身体が勝手に？てか、どうしてドライバーが違うのにアクセルになってるんだ？）

身体の節々が痛いので体を自分で動かさなくていいのは非常に楽である。

避けて、避けたところでできる隙を狙いエンジンブレードを叩き込む。何一つ無駄のない動きで、勝敗はあっけなくついた。

アクセルメモリをマキシマムスロットにさすと全身が燃え上がりタコ・ドーパントを思い切り蹴り上げた。

「アクセルグランツアー」である。

それが終わると小爆発し、イケメンの若い男と砕けたオクトパスメモリが床に転がる。

（終わった…。）

アクセルはメモリを抜き変身解除する。

変身解除した途端、勇樹は疲労と安堵から意識を手放し床に倒れた。

変身解除後、粒子が1人の赤い服の男の形を取る

「1回だけサービスだ。間に合って…よか、…た」

床に倒れた勇樹の頭を数回、愛しそうに撫でた後、粒子は消えた

この事件は

使者9名

軽傷1名 重傷1名

ほか、

事務所で見つかった重体2名という被害で幕を閉じる

その事件の幕引き後

とある女の子の命を救ったふうとくんランドセルが売り上げを急激に伸ばしたり、

しののめ東雲財閥の花婿が失踪した、と噂になったりもしたが

その後、この少年も変わった。

彼が退院したのちも、スリッパから登場したアクセルメモリは彼に力を貸した

あのあとから赤いアクセルになることは無くなり、黄色い姿だった

人々が助ける求める時がどんな状況か

人の生命は簡単に奪われる事を知って、彼は戦う事を決意した。

だが、彼の街を守りたくないと言う気持ちは消えなかった。それを病室で刃野に打ち明けると刃野は迷ったのちに答えた

『警察になりやいいんじゃないか…?』

警察は市民を守るのが仕事だ――

仮面ライダーとして街を守る為に戦うのが嫌なら警察になればいい――

「理由」出来るだろ？

刃野は明るく言った。

彼はその助言に感謝し、退院してから刃野に協力してもらい

「照井勇樹／鳴海勇樹」の死亡届けをだし

自らを風森勇樹と名乗り当時ボサボサだった頭をきちんと散髪し警察に自分を売り込んだ。

2029年4月

彼は特別捜査官として「仮面ライダー」を始めた

だが、その業務は苦ばかりだった。

榎柴兼光が噂を聞きつけ、彼の管理を買って出た。

そのおかげか

風邪をひいても、怪我をしても、夜中でも、悪天候でも、ドーパントとあらば駆けつけねばならなかった。

被害者を出せば怒られ、被害者を出さずに戦えば、褒められることなく、当たり前だと言われる。身体の痛み、心の痛みを受け、それが癒えないうちに次の戦いが舞い込んでくる。

そう戦ううちに勇樹は変わっていった

街を愛している仮面ライダーは街を守る正義の戦士だが、

ただ機械のようにドーパントを倒す勇樹は自分を兵士のようだと感じるようになった。

自らが望んで進んだ道、後悔はないが、それは勇樹が憧れた仮面ライダーとは程遠かった。

勇樹はエンジンブレードを捨てて戦う事を決意した。

自分は警察の指示で動いている兵隊のようなものだ。

ただそこに小さい願いがあるだけの兵士である。

だから仮面ライダーではない――

勇樹は警察内では感情を表に出さないようにした。

警察官の中には取り調べなどで犯人の表情を読み取ることで偽りか、真実かを受け取れる者が居る。

自分の感情が仇となり、「理由」を失ってしまっただけは今の自分の精神では戦い抜くことは出来ないだろう。

そう、感じたためだ。

何を言われても動じぬ心を作れ

何をされても動じぬ心を作れ

何が起きても動じぬ心を作れ

自分はこの風都を守る兵なのだ。

契約の裏に隠した本当の理由を守る為に
ドーパントと戦い続ける為に――

黄色い姿の兵士は小さな願いを秘めて
街のために拳をふるった。

だから彼には
それが邪魔だった。

その出会いは偶然だった。

夕暮れ、日が傾く頃、勇樹はコンフレクを買って帰る時だった。
前方からウルフカットの黒髪に所々の金髪メッシュの同い年の少年
が通りかかる。

「お、もしかしてその顔、ユウちゃんだったりする？」

いち早く気が付いたのは少年だった。

ドクリと勇樹の心臓が鳴る

4年前、小学校の卒業を境に別れた竹馬の友の姿だった。
どうも頭を見るにかなり自由にやっているらしい。

ニコリと笑みながら「ひっさしぶりだなーw」と声を掛けてくるそ
の男を

勇樹はなんとか退けねばと考えた。

（俺も会いたかったよ！元気にしてた？お前なんでここにいるんだよ。）

感情がこみあげてきた。

（色々あったんだ。バーガーでも食いながら話そうぜ？
お、オレな…仮面ライダー、なんだ。）

喉から出かかった感情。

彼は能天気だから信じてくれるだろう。
彼ならば――

だが、ふと止まる。

もしも、彼が人質とされたら…？

彼には普通の道を歩ませた方が良い。

再会の喜びを存在もしない怒りに変える

友に刃を向けた。

動けなくなるまでいきなり、タコ殴りにし去った。

きつところすれば、嫌な奴だと思いき去るだろう
そう考えたからだった。

そんな友の顔は眉を八の字に曲げて、必死に「どうした」「どうしたんだよ！？」と
気絶するまで話を聞こうとしていた。

それ以降、勇樹はビジネスパートナー以外との交流は避け、忠実な犬のようにドーパントを倒していく。

彼にも照井竜のように仲間が出来ると思っていたシユクラウドは仲間を断ち切りにかかった勇樹の行動に目を疑い、そして嘆いた。

過去、照井家の惨殺を引き起こした彼女は、許された後も罪の意識は奥底にあり彼の息子だけは守ろうと決めた。

身体はライダーシステムで危険だが守ることは叶った。

だが、心が死んでいた。

シユクラウドはそんな彼の心呼び戻そうと

「時渡り」をもう一つ制作した。

少しでも、彼が家族と触れ合えるように
——
そう願って。

記憶の再生はそこで終了する

3人が戻ってくると、そこは白い部屋だった。

『ん・・ここは？』

確か集中治療室だったはず、と3人が驚いてそれぞれの反応をする
と亜樹子がスパンと3人の頭をスリッパで叩いた。

『いつ！？なにすんだ亜樹子オ！！』

頭を擦り翔太郎が後ろを振り返ると亜樹子が鼻を鳴らして仁王立ち
していた。

『なにすんだ、じゃないわよ！』

看護師さんに見つかって大変だったんだから！』

プリプリと怒っている亜樹子を見て3人は互いに顔を突き合わせる

3人、勇樹の記憶を視る為に意識を飛ばしたのだ

看護師は何かの発作で倒れた人間とみて大慌てしたのだから
それを亜樹子が狼狽えながら必死で宥めたのだから

『そ、その悪かった…な。』

『すまない亜樹ちゃん…』

『すまん。』

と各々が亜樹子の苦勞を思い描いて謝れば亜樹子は拗ねたようにフン！と顔をそむける

『それで？勇樹君のビギズナイトはどうだったの。』

この部屋は亜樹子が看護師から1日提供してもらった部屋らしい。誰も来ないから話して、と亜樹子が言う

『じゃあ、僕が話すよ。翔太郎、照井竜、君は勇樹に面会でもしてきたら？』

ビギズナイトを視られることに勇樹は若干の恐怖を感じていた。だから君達二人が感想を言うんだ。とフィリップが小さく促す

『あ、ああ……。そうだな。』

(俺達が話すよりフィリップが話した方が余計な事言わなくていいのかもな。)

と翔太郎らは納得し、部屋を後にした。

集中治療室、記憶を覗かれた勇樹もリクライニング機能で座っていた。

看護師が居ないの見計らって翔太郎らが入れれば、勇樹は一言呟く

『左、殴るのなら反対側にしてな。』

『殴らねーよ。まあ、腹立ったが…今のお前はちゃんと仮面ライダーやってっからな。ちゃんと感情表に出せよ。警察だからって感情押さえることはねえだろ？』

照井は感情剥き出しだぜ？』

と翔太郎が言えば勇樹は毛布を強く握り言う

『押さえるしか、ないだろ…。もう家族が固まって何年経つと思っただよ。俺も7月で19になる。』

最初は150？の背丈で声変わりしてなかったのが、今はもう170？だ。

現代の所長の年齢と大して変わらない年齢になる。

このまま、親の年代に追いつくんじゃないかなって思うと恐怖が止まらない

それに年の近い友達だって彼女だって作りたい

合コンって言うのにも参加してみたいし、デートもしたい

ゲーセンにも行きたいし、釣りとかキャンプとかしてみたい。

街を守りたくない

街の人は怖い。人間は怖い生き物だ。良くも悪くも変わる。

感情はいくらでも湧き上がってくるよ

でも、俺はそれを全部抱えて戦う自信がない。

それを逆にとられて責められたら太刀打ちが出来ない。

だから切り捨てる。戦い抜くために

許してよ。今はこうでしか自分の足を進めることは出来ないんだ。』

『お前、変な所前向きだな。』

『まあね。本音を隠して普段通りに振る舞う所は母親譲りではないかと自負してます』

にひっ、と勇樹は笑う

『じゃあ、いつかは変わるんだな？』

『慈母のような友人や恋人が現れたら変われるかも。まあ、野良犬みたいに抵抗するけどな。』

その後、風森勇樹は一般病棟に移る。

鳴海探偵事務所のメンバーが来てから9日目の出来事だった。

所は変わって病院の屋上、ロストドライバーを手に持っていた燕尾服の男が

集中治療室の様子を黒いコウモリを使い眺め、メガネのずれを直す。

(生きていたのか…風森勇樹。)

『生きていたのか…？私はてつきり貴方が生かしてるものだと思いますよ。』

貴方は心臓を一突きと報告しましたが、刺されていたのはお腹。情でも湧きましたか？』

その燕尾服の男の横、白衣を着たやせ形の男がやってくる

『いいえ、手元が狂っただけです。』

『貴方の任務遂行率は100%でしたが…おかしいですね。』

まあ、貴方の代わりはいくらでもいます。すぐに石にして差し上げても私には何の支障もない』

『ぐ…すみ、ません。蒲原様、すぐに策を考えます。』

『なんにしても、フィリップ君がこの時代に來てるならさっさと捕まえてください。』

私の崇高なる目的のために…ね。』

白衣の男は白衣を翻すと踵を返し歩いて行った

その背後、燕尾服の男、城ノ内 政人は拳を握りしめ睨むようにその背を眺めていた。

Iとyou 物語/Aはいつもそこにいる(9/7改訂)(後書き)

勇樹のビギンズナイト改訂版です。

今後の物語を繋げるために改訂しました。

敵を全然動かしてないので敵を動かしました。

Wが見ていた正体／2年越しの言葉と新たなる脅威！？（前書き）

第2部6章めスタートします

Wが見ていた正体／2年越しの言葉と新たなる脅威！？

風森勇樹が一般病棟に移ってしばらく経過した。

カレンダーは5月上旬に変わり、勇樹は病院側から一時帰宅の許可をされるまでに回復したため、

竜からメモリと新しく作られたドライバーとガジェットらを手に仕事の方を始めた。

およそ3週間あまり休んでいた勇樹には鬼のように仕事が舞い込んでいた。

その鬼のような仕事をこなすうちに翔太郎、フィリップが3日ばかり現在に戻り、莊吉の手によって未来こゝろに戻ってくるころには犯人逮捕の速報がテレビをにぎわせていた。

『すげえなあ・・・勇樹のやつ。』

『うん、一時帰宅許された時からフルで働いてるみたいんだけど、それから犯人逮捕のニュースが止まらないの。』

現在、メンバーはテレビを見ているが、そこは鳴海探偵事務所ではなかった。

風都にある普通より大きめの洋風の家。そこで探偵事務所メンバーは暮らすことになったのだ。

翔太郎、フィリップの2名だけならば事務所暮らしても不自由ないが

今回は竜、亜樹子もいる。

事務所で一泊するなら雑魚寝でよいのだが、

事務所は普通の家のようにお風呂や部屋は少ない。

4人がこれから毎日顔を突き合わせて暮らしていくには事務所は窮屈だった。

ホテルでもとろうか、と悩んでいると勇樹がうってつけの人間が居ると言った。

しばらくしそこに現れたのは

勇樹に身辺の警護を頼んでいる、と言う東雲財閥の令嬢、しのめ東雲 晴せ香いかという勇樹と同年くらいの女性だった。

勇樹がその少女に「人が4人程度暮らせる家を提供してほしい」と告げたところ

4人で暮らしても部屋が有り余る、亜樹子曰く「豪邸」を無償でくれたのだ。

『勇樹君、ってさあ・・・意外と凄い人脈持つてる…よね。』

ふかふかの革製のソファに腰を掛けて亜樹子はぼつり呟いた

『だよな。勇樹の「4人楽に住める家ない？」って言う一言でこんなでっけえ家ポンって貸してくれんだもんね』

天井を見れば豪勢なシャンデリアが光っている。

そのシャンデリアを見つめ翔太郎は頷いた。

『勇樹君、感情は出さない』とか言ってもなんやかんやで楽しそうだったよね。』

病院で部屋を探すときに呼ばれた晴香と話している勇樹は普通の年

代に似合った男の子だった

肩の荷を降ろして、たまにやってくる警察官やほかの仕事で知り合った女性の誰よりも楽そうに話していたのが印象に残っているらしく亜樹子が言う

『彼女は社交界のパーティーなどに紛れているドーパントから身を守ってもらったため勇樹に警護の依頼をしている。

「ガイアメモリ」「ドーパント」「仮面ライダー」すでにそれらを知っているから、彼も必要以上に毛を逆立てる必要がないんだろう。彼が友達や恋人を作らない理由はお礼参りの行為の恐怖から来ている。

彼女は財閥の令嬢と言う立場で常に誰かから狙われてる位置にあるからお礼参りのへったくれも無い。

だから勇樹は普通に話しかけることが出来るんじゃないかな』

フィリップのもっともらしい言葉に亜樹子は「ふおお〜」と感心の声をあげた。

『それより、勇樹はまだ帰ってこないのかい？照井竜も居ないし。』

そういつと

『あ、勇樹君、今日は警察としてのもう一つの活動してくるって朝早く出て行ったよ。

竜君は万が一のためにって後ろから追いかけて行ったけど…』

と答える。

『追いかけたって…アイツ重症だな。』

未来で奥さんや息子が分かるって本来なら定められたレール歩くこととなる。って落ち込むはずなのに「勇樹は俺の息子」って堂々と宣言してるわ、勇樹が善意の行動してたらニヤついてるわ…

ゼリー類が解禁になったら毎日プリンだのヨーグルトだの買ってくるわ

カボチャプリンが食べたいったらコンビニ何件もハシゴして見つけてくるわ

ニヤついてるわ

あゝみつともねえ…

つたく、甘やかすだけが教育じゃねえっての…。』

翔太郎が勇樹が一時帰宅を許可されるまでの竜の様子を思い出しては身震いをする。

『でも翔太郎君も弟子とか子供が出来たら可愛がりそうだよね。」「師匠!」とか呼ばれたりしてさあ』

『はあ!?!「師匠」はねえだろ。俺は弟子はとらない派なんだよ。』

『そういう事言うう人に限って、とっちゃったりするのよ。雨の日にずぶ濡れになった子犬拾ってくるみたいに』

『ぜってえーない。』

『どうだかね。君の性格として誰かに「師匠になってくれ!」と頼まれて引き受ける、なんてこともあるかも知れないよ?』

と豪邸で3人はそんな話に花を咲かせていた。
その頃、勇樹は小学校を訪れていた。

（小学校：？）

後ろから後をつけていた親バ——竜は木の影から勇樹の様子を伺い、
着いた場所に思わず口が開きっぱなしになった。

風都第一小学校

そう書かれたプレートが輝いている門の前で彼は止まる

『き、君が講師かい！？』

門で勇樹の到着を待っていたと思しき、生え際が後退している中年
とお兄さんの境目の年代の男が勇樹を見て驚いていた。

小学校で何かをやるらしいが、教師が驚くのは無理がない

若い少年が訪れたのだから

（母校なのか：？）

恩師でもいるのだろうかとかと竜が考えていると

『げっ！生え際ヤバス！』

と勇樹が声をあげた。

『会った途端に教師にその口の聞き方はなんだ！私は神賀だ。』

『ああ、はいはい、ちゃんとか存知ですよ、知ってますよ。なんで貴方が此処に居るんです？確か先生は風西ふうにしの教師でしたよね。』

勇樹が言つと神賀はポリポリと頭を掻き遠慮がちに呟いた

彼の名前は神賀かみが茂しげる、勇樹の高校時代の担任だった男である
その容姿から勇樹が「生え際ヤバス」とあだ名を付けた人間だ。

『いや、風西は辞めたよ。…私の娘がここの小学校に居るんだ。だからね……』

『自分の娘のために小学校に赴任ですか？』

『ちよつと2年前、妻と喧嘩してしまつてね。』

妻は怒つて家を出てしまつて、今は私一人子供の面倒を見ているんだ。』

呆れたと言つ視線を送ると「情けないが……」と苦笑した。

『オシドリって言われてませんでしたっけ？それがどうしてまたそんな話に？』

『…いや、ちよつといろいろあつてね。それより、本当に鳴海君が…？』

『ええ、本当ですよ。身分証明書です、どうぞ。』

勇樹が警察手帳を見せると神賀は驚いていた

『そ、その・・・なる』 『今は、風森勇樹です。お間違えなく、で詳しいスケジュールは？』

神賀が何か言おうとしていた言葉を遮り勇樹は言う

『あ、ああ・・・。体育館で午前9：00から10：00までの尺で取っているよ。全校生徒だからそれ以上の時間はとれなかったんだ』

『午前9：00から・・・か、もうすぐですね。じゃあ急いで体育館に向かいますよう、案内してください』

『あ、ああ・・・。体育館はこっちだ。』

神賀はぎこちなく言えば勇樹を小学校の中へ案内させた。

竜はビートルフォンをそつと忍ばせ、
バットショットでその様子を確認することに決めた。

風都第一小学校、体育館では1年生から6年生までの生徒らが集まっていた。

教壇には大きなスクリーン
そして

【誘惑に打ち勝つ心を！

講師：風森勇樹先生】

と言う弾幕が立てかけられている

『風都第一小学校の皆さん！おはようございます！風都署からやってきました風森勇樹です。』

今回、お兄さんがみんなに伝えたいことは「ガイアメモリの危険性についてです」

ガイアメモリってのはこの風都を守る伝説の戦士仮面ライダーの変身道具の事を言うんだ。

玩具屋さんで売られているから知ってるかな？

でも、最近、アタツシケースを持った悪い人たちが君達に偽物を売ろうとしてるんだ。』

スクリーンに映し出されたガイアメモリの写真を指さしながら勇樹は講習を始めた。

動作を大げさに、言い方を大げさに説明をしているが、

これは小学生の低学年が飽きない様にするためだ。

小学校6年や大人が聞くと非常に喋り口調はウザいのだが、4年生くらいまではこれがちょうどいいらしい

『悪い人たちを見かけたときの「おはし」を君たちに教えます。怪しい人を見かけたらこれを思い出してください』

じゃあ、いきます！』

「【お】っと！アイツが噂の奴だ

【は】なしかけるなよ？」

【し】らんぷりするんだ！それ逃げる！」

スクリーンに文字がひらがなで映し出される

バットショットで外からビートルフォンの撮ったものを確認していた竜はコケそうになった。

「おはし」にする意味があるのだろうか…

「ちしき

【ち】かづかない

【し】やべらない

【き】かない」

の方がごろ合わせ的にはいいのでは？

と思ったが、4年生までの生徒には大ウケらしい。楽しそうに復唱していた。

『———と言う事で、怪物を見かけた、またはガイアメモリを拾った、そんなお友達は風都署にお電話をする事。』

それが俺に知らせる事。お兄ちゃんはいっつも黄色い服着てます。いいですか？

絶対に拾ったもので遊んじゃダメだよ？

それじゃあ、俺の話はこれで終わります。

ありがとうございました。』

勇樹の講習会はこんな調子で終了した。

この講話は勇樹が独自に行っている活動だった

ニュースで怪物騒ぎは報道されるものの、その原因がガイアメモリであると言う事は報道されていない

仮面ライダーの伝説は桃太郎の昔話のように早い段階から子供たちは知っている

それを逆手にとり子供を巧みにだましガイアメモリを買わせるといふ手法が増えてきた今日。

子供を狙った犯罪を未然に防ぐために勇樹は

小学校、保育園・幼稚園、中学校を対象に電話で交渉して許可を取り講話を開いている

実際のところ引き受けてくれる学校は10件にも満たないのだが、引き受けてくれるところは引き受けてくれる。

その大半が教師が昔、ガイアメモリを使用していたと言う理由だったり
ドーパントと言う存在を知っているから、と言う感じである

勇樹がこの学校で講話を行ったのは初めてだ

職員室に設けられた特別な席に座り、

今後の小学校のスケジュールや雑談などをしている教師陣を見て

(この学校も誰か昔ガイアメモリに関わったのかな)

と考えていた。

その横、神賀がやってきた。

『講話、立派だったよ』

『いずれは保護者の方にも説明したいと思ってます。貰わない限り
買い与えるのは親ですからね。』

『所でいきなりなんです？トラブルでも発生しましたか？』

『風森君…いや、鳴海君——その、妻から聞いたんだが、君はその
…』

『ぎこちなく話す神賀に勇樹は上を指さす』

『屋上行きます？』

『あ、ああ…』

『小学校の屋上の「立ち入り禁止」のテープを乗り越えて勇樹らは屋
上へ向かった』

『神賀はその間、ずっとすぐれない顔をしていた』

『それで神賀先生、お話と——『あの時はすまなかった！』』

『屋上についてすぐ、神賀は風船が破裂するような勢いで言葉を発し
た。』

『勇樹は神賀が何を話したいかうすうす感づいてはいたが謝罪の言葉
が口から出るとは思わなかった』

『何を突然…』

『私はあの時、君の言葉を信じず助けなかった。理事長の決断に異
を唱えることなく頷いた。』

妻に「こんな悪い生徒が居た。」と話したら妻は私をビンタして言ったんだ

「仮面ライダーの偽物？偽物なんかじゃない！その子は嘘ついてないわ

今、仮面ライダーが居ないのはそのせいなんじゃないの？

仮面ライダーを風都から消したのは貴方よ！」って

『はあ・・・なるほど。』

(しょっちゅう父さんとかは俺と違って人の前で迷わず変身してっからな。

それに父さんは警察の身分だから割れやすいけどなんで奥さん俺のことまで知ってるんだ?)

『私は妻のその言葉の意味が分からなかった。分ならず反発し、こうなるに至ってしまった。』

あの時は君の姿を見て何をふざけた事を言ってるんだ。と思った。

けれど私は講話する姿を見て確信した。

君は、あの時嘘の言葉を言ってなかった。

君は仮面ライ―『お言葉ですが今更謝罪を述べられても俺は貴方に何と返せばいいかわかりません。』

申し訳なさそうな顔で謝ろうとする神賀に勇樹は冷たく投げかけた

『だが・・・君は私の所為で―』『正直な話、俺は理事長に酷い言葉を掛けられたんであつて神賀先生、貴方じゃない。』

貴方の奥さんが仮面ライダーと近い人物でそれを踏まえ、猛烈な後

悔に襲われているだけです。

神賀先生、今回のガイアメモリの講習会に賛成したのは貴方ですか？』

勇樹がそう投げかけると神賀は頷いた

『ああ、娘が2年前に怪物に襲われたんだ。娘は背中を強く打ち、重傷を負って何日も目が覚めなかった。その時妻からガイアメモリの存在を聞いた。人を怪物に変えてしまう恐ろしい小箱があると』

『ええ、ガイアメモリは本当に恐ろしい物体です。娘さん、重傷で済んで良かったですね。

これからもこういった講話を増やしてください。俺一人なので範囲は狭いですが、子供への流出を防ぐために全力を尽くしますから』

勇樹はそう言い頭を下げると踵を返す

『娘を助けてくれてありがとう。鳴海君』

踵を返した勇樹に神賀の声が風に乗る耳に届いた

『え……？』

『妻が言ったんだ。仮面ライダーが居なければ娘は死んでいた。娘は仮面ライダーが助けてくれた。』

ダブルでも、アクセルでもない、優しい、お兄ちゃんが――娘を助けたって』

『は、はあ……』

(小学生なんて俺助けたっけ……？なんか生際は凄い感謝してるみたいだけど)

と、言うより神賀先生の妻って何者だ？

シユラウド？そんなはずないよな。あの人アラフォーより年いってそうだし

ヤバスの妻は若妻とかアホの男子が話してたし――

って――俺の正体、もしかして誰かにバレてる！？)

勇樹は急に冷や汗をかく、

『ああ、あのか、神賀先生？お、俺……ちょっと大事な用事が出来たんでかかかか、帰ります！』

勇樹はそう告げると脱兎のごとく階段を下りた

(う、嘘だろ！？なんで俺の姿バレてんだよ！？)

勢いよく学校から出てきた勇樹はあても無く乱暴に走り出す。
勇樹が動き出したことで竜も走って追いかける

(い、いきなりどうしたんだ？)

勇樹と神賀の会話は空気を読み視聴しなかった竜は何事かと驚く
やっとしてきたと思ったら勇樹は目を泳がせ「嘘だろおおおおお！
？」とあらぬ方向に走って行ったのだから

(俺はリボルギャリーン中で変身したり、まあ、物陰に隠れて変身
してんのになんで神賀先生の妻にバレてんの！？)

奥さんは内通者?!はっ、まさか生え際ヤバスは敵の幹部で、だか
ら俺を呼んだ?!
はっ!俺、聞いてない!)

かっ!と目を見開き、誰の目からもコイツは慌てていると見て取れ
る仕草の勇樹を竜が捕まえる

『…ゆ、勇樹、い、いった、い…どお…したんだ?』

ぜえ…ぜえと息を切らしている竜に勇樹は慌てて言う

『お、俺!なんか正体バレてるらしいんだよ!どどどどどどど、どどどし
よう!俺聞いてない!!』お、落ち着け勇樹、一からちゃんと話し
てくれ』

どこかで見ることがある反応だ。

敢えて誰、とは言わないが――

そんな反応を見せる勇樹に竜が言つと勇樹は陸に上がった魚のよう
に足をばたつかせ

『い、一般ピーポーに俺の正体がバレてんだよ!』

との声と共に

勇樹は今あつた事を打ち明けた

『俺達の事も知っていて、さも当たり前のように勇樹が仮面ライダーである、と言う事を指摘した女性がいる？』

『父さんたちの事知ってる様子だった。て、敵の組織かなあ！？』

『それは無いんじゃないか？敵なら娘は危険に合わせないだろう』

『警察の線は無しで、敵の組織でもない、と言う事は——ま、まさか・・・と、父さん、浮気してたんじゃない、』

妻子のいる男、照井竜はある日、美しい黒髪の女性に惹かれる可愛い妻、かわいい息子が居る中で、たまたまであつた謎の美女。

「ねえ…竜いつあの人と別れてくれるの？」

「もうじき話がつく。」

「勇樹君は私たちが育てましょう？素敵な男の子ですもの…」

夜のネオン街、ベットで眠る女性に背を向ける上半身はだ「お前はどこまで話を膨らませるんだ！物騒な事を言うな』

大きなげんこつが勇樹の頭に降り降ろされる

『俺は浮気はしない』

『でもさあ・・・父さん結婚してんのに婦警にモテモテだったんだ。バレンタインデーはチョコ食い放題だったし

あ、でも…父さんは母さんのチョコしか食べなかつたけど

ねえ、他に親密な女性いないの？
仮面ライダーと親密な関係にあった女の人』

『む…』

クイーン、エリザベス、浅川舞、須藤雪絵、リリイ、凧
シユラウド、一園咲若菜（没）一園咲冴子（没）一園咲文音、九条綾
あげられる女性はこれだけだろうか

『わ、分らん…シユラウド？』

『はあああ・俺これからどうすりゃいいんだ。』

肩をがっくり落とした勇樹の肩をぼんと叩く

『知られても今まで何もしてこないならそれでいいんじゃないか？
全市民に知られたわけじゃない。
気を落とすな』

（とはいえ…少し気になるな。俺達に詳しい人物か、過去から未来
を見ると全員が怪しいな。

あの女子高生あたりだと俺達の正体、掴んでそうな気はするし、勇
樹も紹介して居そうだ。

凧も鳥の世話をしているなら勇樹を連れて居きそうだし
リリイも怪しいな。

帰ったらフィリップに検索を頼んでみるとするか）

その日の夜、神賀は携帯を手に取った

携帯をいじり

妻と言う表示のディスプレイを見て通話ボタンを押す
その数秒後、
RRRRR…とベルが鳴り
相手は出た

『もしもし、お前か？』

《なにかしら、私、今忙しいのよ？》

『鳴海君に会ったよ。最後は逃げられてしまったが』

《ちゃんと謝ったの？まあ…そんな気はしてたけど、ね、美々は
？美々は元気してる？》

《もう寝たよ。それより風都にそろそろ帰ってこないか？その…男
と一緒に居ないで》

《あら、妬いてるの？間違ひなんか起きないわよ。彼とはそんな関
係じゃないわ？》

『ふざけないでくれ、本当にその・・・』

《冗談よ、もうそろそろ良い頃だと思うから戻ってあげる。

”彼”のほうが先に飛んじやっただけど

私も後を追いかけるわ。

それじゃあね、し・げ・タン》

電話口の女はくすくす笑って電話を切った

5月上旬、PM9:50

風都駅に一台の電車が停車する

その電車から降りてくるのは1人の少年

柄物のTシャツに後ろに大きくトラの描かれたジャージを羽織り

腰パン姿でガムを噛んでるいかにも「ヤンキー」な格好の少年はウル

フカットの髪を鏡で整え

夜のイルミネーションで鮮やかに光っている風都タワーを見上げる

『やっと着いたな。

相変わらずこの街も変わってへんな…

しっかし、こないな夜遅くに着くはずやなかったんやけどな

仕方がない今日はホテルに泊まって

明日、あのバカに会いに行きまっしやるか』

男は若干違和感のあるイントネーションで関西弁を話すと
闇に消えていった。

Wが見ていた正体／2年越しの言葉と新たなる脅威！？（後書き）

と言う事で勇樹のお仕事です。

ドーパント退治以外にもこういうことやったらいいなあ・・・という願望

そして照井さんは子煩悩なんだろうなあ・・・と言う願望が詰め合わさったおはなしです

はい！ハッキリ言います。お話は行き当たりばったりです

勇樹がねいつまでもね、入院生活続いてたらお話進まない事に気が付いた。

なのでこうなりました。

ぶっちゃけこのお話はコラボの為の伏線を張り巡らせるためのお話でした。

のはずだったんですけどが

何故か「生え際ヤバス」がリターンし、妻がキーを握り変な男まで登場したって言う

私は関西の人間ではないので関西弁知りません

なのになんで関西弁にしたんだろう…

とりあえず、伏線じゃないモノを伏線にして話を書く癖があるので注意したいです

面白いとだけ思っただければとてもうれしいです
それでは。

Wが見ていた正体/仮面ライダーは此処に居る(前書き)

注意：私は関西に詳しくありませんが関西弁を使うキャラが登場します

言い方違う、など多々ありますがご了承ください。

Wが見ていた正体/仮面ライダーは此処に居る

5月7日 PM 18:30

竜が勇樹を連れて帰る頃には勇樹は意気消沈していた。

よほど自分の正体が相手にバレた事がショックだったらしい。

竜はすぐにもフィリップに検索を頼もうとした。

だがフィリップはホワイトボードに何やら一生懸命書いていた。すぐそばにはソファであきれ返っている翔太郎と亜樹子がいる

『今度は何にハマったんだ？』

『んーそれがね、バラエティ番組で魔術師が取り上げられてて興味持っちゃったみたいで』

『魔術師か。』

竜と勇樹が同時に首をかしげ、聞き返す

『魔術師、奇術師、手品師。そこにいったいどんな違いがあるのかを調べているんだよ。』

辞書で調べたら魔術師≠マジシャン、奇術師≠マジシャンと言う結果が出たんだ。

魔術とは魔力を持って行う不思議な術を指す。一方奇術は不思議な技法

双方は違うはずなのになぜ≠マジシャンなのだろう。魔法使いとどう違うのだろうか？

興味深いよこの項目は』

目を輝かせながら語るフィリップに勇樹は意気消沈のまま付き合っ
てられないと二階にある自室に戻り

それを目で追い竜は溜息を吐く

『この様子では当分は検索は無理だな』

『あ？なんかあったのかよ・・・急ぎの用事か？』

『いや、少しフィリップに検索を頼みたいと思っていたことが一
つあってな。』

『検索？何かあったのか？勇樹なんか落ち込んでたが』

翔太郎が聞き返すと竜は口を開く

『ああ、実は勇樹の奴の正体が一般人に漏れているんだ。』

その言葉にフィリップは振り返る

『どうしてその事が問題に上がるんだい？』

僕たちは――一般人の（おもに依頼人）前でも変身することがある。
したがって誰かに正体がバレたとしても仕方がないだろうし
他に広がらないのは市民による暗黙の誓いだよ？』

『俺もそう思うが、勇樹は東雲晴香を除く市民の前では変身はして
いないと言っていた。』

だが、神賀茂と言う男の妻が俺達を知っているらしく、さも当たり前のように「勇樹も仮面ライダーである」と言ったそうさ。

20年の月日だ、俺達が今まで関わってきたクイーンやエリザベスと言った女性らが俺達が仮面ライダーであると言う事を知っているかもしれん。

その妻は俺達の知り合い、大体そうであると思うんだが勇樹が敵の組織ではないか、と怯えているんだ
確信が欲しい。検索してもらえないか？」

竜がそう言うとフィリップは「ふう」と息を吐く

『そういう事なら了解した。』

知りたい項目は「神賀茂の妻の名前」
キーワードは？」

フィリップは地球の本棚へ入る。
すると竜は壁に寄りかかり口を開く

『手始めに「神賀茂」「妻」だな。人物名だから出るんじゃないか？』

項目を入れていると一つの「NAME」と書かれた真っ白な本が浮かび上がる

『そのようだね。ビンゴだ。もうキーワードは必要ない』

フィリップはその本を手に取り読み進める段階でニヤリと笑った

『安心したまえ照井竜、神賀茂の妻は敵の組織の人間ではない。古くから僕らに関わっている人間さ。』

敵の組織ではない

そう伝えられると竜の肩から思い切り力が抜ける

『古くから俺達を知る人物：か。すまないな助かった。』

『どういたしまして、妻の名前はいいのかい？』

そう問いかけると竜は踵を返し居間を出ようとする

『いや、敵の組織でないと分かっただけで十分だ。』

そうホッとした表情を浮かべ竜は二階へ続く階段を昇って行った。

その様子を目で追い翔太郎は分かりやすくワザとらしいため息を吐き

聞こえるか聞こえないかの声で

「重症超えて末期だな。」

と呟いた。

その翌日、竜から事実を聞いた勇樹は気力を取り戻す。

今朝は自身のバイク「モルト・ジラソーレ」を磨いていた

『これがお前のバイクか？』

『ん。そうだよ。』

事務所にあったディアブロッサをこの家の駐車場に持ってきた竜はディアブロッサの細かい整備をしながら訊ねた

竜と同じ型のバイクであり、ボディの部分に向日葵が一厘描かれている黄色いバイクである

そして人がもう一人乗れるようなタンデム使用である

『ん、でどう？ディアブロッさんは動きそう？俺15歳ん時に乗り回してたから動くとは思うけど…』

『なるほど、どつりであちこち傷がついているワケだ。15と言う事は無免許だろう。』

バイクにワックスを塗りながら竜が呟く

『ん。まーね。』

でも照井さんのバイクの型「ディアブロッサ」って言うバイクじゃないんだね

俺、金が貯まってバイク買う時にさ乗り慣れたからコレと同じにしようと思って

「ディアブロッサ」でカタログ探したけどなくて
写真を店に持ち込んだら「ディアブロッサと言うバイクはありません」言われて凄く恥ずかしかったんだけど』

そんな会話をしていると駐車場に翔太郎が現れる

『勇樹、上にお前のお客さん来てるぞ。』

『客？分かった今いく』

警察だろうか？東雲晴香だろうか――
突然の訪問者に頭を掻きながら勇樹は居間に戻る。

『お客さんって誰？』

ボリボリ頭を掻いてドアを開けると
ウルフシヨートの黒髪に金のメッシュ、柄Tシャツの同い年くらいの少年が茶を飲んでいた。

その少年と目があい勇樹は固まる

『お友達、って言うから家にあげたけど大丈夫だった？』

亜樹子が言うと

勇樹は「追い返してくれ！」と言おうとするが「おいか――」と言ったところで

『ユ〜〜ウちゃーーン！！久しぶりやで〜〜！』

満面の笑みで抱きつかれた。

身長は勇樹より少し高め、176？ある少年はそついつと

「元気にしとつたか〜！」と再会を喜ぶ

遅れて居間にあがってきた翔太郎、竜らはそつとフィリップのそばに行く

《誰だアイツ、勇樹の友達か？》

《ビジネスパートナーは尋ねてきたが友人が尋ねて来たのは初めてだな。名前は？》

《ひさびさとだいすけ久里大祐勇樹の幼馴染だよ。4歳の頃から彼が小学校卒業と共に転校するまで一緒に遊んでいた親友だ。

そして――》

とフィリップが説明しようとしていると勇樹が突然怒鳴った。

『お前、どうして此处に居るんだよ！！』

『なんで、ってそら、ニュースでお前が刺された言うニュース見たさかい、心配して此处に来と』『今すぐ自分の家に帰れ。』

大祐はごく当たり前だと言うように話したが勇樹はその言葉を遮り強めに言い放った

その様子にフィリップは両者に聞こえぬようにぼそりと小声で呟く

《彼が2年前、友情の縁を切った男だよ》

フィリップの言葉に翔太郎は言葉にならない声を上げる
亜樹子も竜も同様だった。

《そ、それってヤバいんじゃないか…》

《ヤバいね。》

『俺はお前と2年前に絶交したはずだ。もう二度と話しかけるな。そういつたはずだ。』

タコ殴りにされたの忘れたわけじゃないだろう？』

勇樹が大祐を睨むとそれとは正反対にぬるい視線を送り大祐は言う

『何が絶交や。お前ただ人の意見も聞かんと俺ン顔サンドバックにして「絶交」言うて逃げてっただけやないか。』

告白するドキドキ女子かお前は。

あないなもんで絶交が成立するワケないやろ。』

『…おめでたい頭してるな。脳みそ大丈夫か？会わないうちに関西に染まつてるみたいだし』

『これはしゃーない、勘弁してんか？転校したんは東京やけどその後も親の都合で転校続いて関西にも行ってたんや。』

中学やったし、友達は作らんとおもて練習して染みついてもてん。

まあ…結局は「エセ」言われて笑われて終わりやったけどな。』

『…………ふざけんな。』

『何が？』

勇樹がぼつりと呟いた言葉を大祐は拾い聞いた。

『いや…………』

(調子が狂ったな・直ぐに追い返そうと思ったのに駄目だ。お喋りしたい衝動に駆られる。)

友達を作れば弱みとなるよな。

身を守れないコイツはドーパントに襲われたら)

『なあ、ユウちゃん・ホンマに俺と絶交したいんか？』

『そーだよ、お前の顔なんか見たくない。6年の空白があつて「親友」って…

無理無理、人間関係も新しく塗り替えられるんだよ』

勇樹の言葉に大祐は「そっか・…」と呟いた

『小さい頃言つたのにな……。忘れてしもたなら仕方がないか。』

『転校する前日に拳突き合わせてかわした約束だろ？』

「辛いことがあつたと分かつたら地が裂けても助けに行く俺達は二人で唯一無二の親友であろう」だっけ？』

『俺は守つただけど…な。まあ、いいや。お前が絶交したい言

うならしてもええよ。

お前見かけても話しかけへんし他人として生きていく。せやさかい、一個だけ頼み聞いてくれへんか？』

『なんだよ。』

『明日な、ふうとえんで「ウィンドフェスティバル」ちゅーイベントがあつて

各地域から集められたエンターティナーが芸を見せるんやけど

その目玉にな。リリイ白銀のマジックショーがあんねん。

なんでもそのリリイ白銀言うマジシャンが弟子を風都でデビューさせるんやて。

それみにきません？チケット2枚あるさかい、彼女でも誘って』

胸ポケットから遊園地のチケットを取り出すとテーブルの上に置きしよんぼりと肩を落としたように大祐は帰って行った。

その様子を茶々をいれずに見ていた三人、

『大祐君、寂しそうだったよね。』

と亜樹子が呟いた。

『それで、お前は行くのか？最後の頼みなんだろ？』

翔太郎が聞くと勇樹は首を横に振った

『行かないよ。と言うか、きつといけないよ。そつだ所長。このチ

ケットで左とでも遊んで来たら？ここ3週間、遊んでないでしょ？』

亜樹子の手にも樹はケットを押し付ける

『ちよつと！何考えてんのよ！何で行ってあげないの！？これは大祐君が――』

『俺は忙しいんだよ…』

『忙しいって…一日くらい休んだっていいじゃん！あの大祐君の後ろ姿みたでしょう！？』

『要請が来たらそつち優先なんだって。被害を出したら駆けつけなかつた俺の責任だ』

ダブルやアクセルに代役頼めば？とか考えるだろうけど、組織にバツて攻められたら対処ができない

だから俺にそのチケットは必要ない、自由に使ってくれ』

じゃ、と樹は自室に帰って行つた

『も〜〜！！なんなのよ樹くんのあの態度！竜君！一回竜君の口からガツンと言つてやつてよ！』

素っ気ない樹の態度に怒りをあらわにしている亜樹子だが
竜は涼しい顔をしていた

『何でそんなに涼しい顔なのよ！まさか同じ警察官だからって樹君の事、擁護しようとしてるんじゃないでしょうね！』

今回樹くんがしたことは人の心を裏切る行為なんだよ？だから、

「発ドカンとばつんと!」

亜樹子が感情的に言うつとフィリップは「無駄だよ」と呟く

『亜樹ちゃん、今回も照井竜は叱らないよ?』

確かに勇樹はチケットを渡すと言う行為で久里大祐の心を踏みにじった。

けれど、勇樹の言葉に1つ抜け道を見つけてしまったからね。

そうだろう? 照井竜』

『ああ・・・、勇樹は明日確実にふうとえんに行く。そしてマジックを見る事になる』

『ど、どーしてそう言えるの? チケットは私に渡しちゃってるのに・・・』

亜樹子は興奮しているせいか本当に分からないようだった。そんな亜樹子に翔太郎が言った。

『ま、そりゃ明日ふうとえん行けば分かるって事だな』

翌日、亜樹子と竜、翔太郎は「ふうとえん」へやってきた。

「ウィンドフェスティバル」はふうとえん全体で催される大規模な

ものらしい。

ゲートが二つに分かれていた。

一つは大道芸人や手品師などが単独のブースを持ち見に来た客に芸を見せる

エンターテイメントエリア

もう一つは虎、クマ、犬と言ったサーカスの動物たちが展示されている

ふれあい広場である。

ふうとえんの入場券を翔太郎が買ったために並んでる最中、亜樹子らはパンフレットを従業員から受け取った。

本日の催しとしては

リリイ白銀のマジックショーが14時から行われる予定です

他にはふれあい広場では4か月前に生まれたばかりのホワイトタイガーの赤ん坊が先着で抱っこさせてもらえるという広告がある

パンフレットの虎の写真はとても愛らしかった。

『ねえ、竜くん、勇樹君探すの止めてトラ見に行こうよ』

本日、竜らが此処に居る理由は「遊園地に勇樹が来ているか」である。

これだけ大規模な催しならば

ガイアメモリの売人がこの騒ぎに紛れてガイアメモリを売るかもしれない。

そして浮かれている気分だと口車に乗せられ買う人が出る。さらに、出演者に恨みを持った者達が……

と言う理由で勇樹は警察に呼ばれているはずなのだ。

それが分かっているがゆえ、勇樹はチケットを受け取らなかった。

警察と言う立場でふうとえんに行く事が出来き、

マジックショーとなると当然、その近くの警備をする。

パンフレットにはリリイ白銀の弟子、ダニー白銀なる人物の顔写真が載っていた。

その顔は久里大祐にそっくりだった。

大祐は自分のデビューを友達と言う立場で見つめたかったようだった。

席に座わり客としてみることはないが友人のショーの成功を影から見守る。

大祐が知ったら

どんな反応をするのか――

『所長、俺達の目的は勇樹を……』

ただいまの時刻AM10:00

勇樹は何処のエリアを警備しているのか……
パンフレットを見ながら推理する

大きなイベントはリリーのマジックショー
トラの抱っこ触れ合い

かつて自分はこういう大きな催しの時、どこで警備していただろう
竜が考えていると

『ぶー、私「フレディ」くん抱っこしたいのにい……』

横の亜樹子が拗ねた。

『照井、入場券かって来たぜ、』

そうこうしているうちに翔太郎が合流する
チケットが2枚。

『2枚？』

『マジックショーはフィリップも見たいんだと。だから途中で合流
したいからチケットをよろしく言われた。
んで、勇樹の居場所は分かったのか？』

『これだけ大きいとな…どこに配置されたか…今ビートルを飛ばし
て探してみよう』

『ねえ、ふれあい広場に居るんじゃない？トラの抱っこもう始まっ
ちやってるみたいだし
そこに行ってみない？』

『お前はただ虎を抱っこしたいだけだろ？つたく…』

『いいじゃん別に！！ね？行こう？行こうよ』

さながら小学生の娘と父親である

『たくしゃーねーなあ・・・』

俺がエンターテイメント広場探すからお前ら二人でふれあい広場行つてろ。』

亜樹子の熱意に折れた翔太郎はそういつて右の道を歩いて行った。

『所長、フレディの抱っこだが整理券が配られるみたいだぞ。先着100名だ。』

搜索は左に任せるにしてもふうとえんの開演は9時30分100名ならもうとつくに並んでしまっているんじゃないか？』

亜樹子は目に見えるくらいに落ち込んでしまった

何も言わずに並んであげるべきだっただろうか

左が抜けだしたのはいいが

所長と二人きりな状況は少しだけ気まずかった

（俺がエンターテイメントエリアを探せばよかったか？）

『あ！ふうとくん！』

落ち込んでいた亜樹子が声を上げる。

遊園地名物の着ぐるみが風船を配ると言う光景である。

『20年後もふうとくんがシンボルなんだねあ。アレってふうとく

んの彼女かな』

ふうとくんの横、ピンクのリボンを付けたふうとくんがいる
「ふうこちゃん」と言ったところだろうか

しばらくするとふうとくんがこっちに気が付いた。

所長は嬉しそうに手を振ってふうとくんを呼ぶ

アレは被り物を着たおっさんだ

などと所長に言ったらスリッパ百叩きの刑だろう。

ふうとくんにはどうやら俺達がカップルに見えるらしい

手でハートマークを作っては踊ったかと思うと

カメラの形を作る

『はっ！ひょっとしてカップルに見える？やっだあ・・・私聞いてない』

はい、カメラ』

これ見よがしに所長はバットショットをふうとくんに渡し俺の手を握る

『所長、ふうとくんにそのカメラは使えないんじゃないな…【B A T】

俺の言葉はバットショットのシャッター音にかき消された

ふうとくんはバットショットで写真を取るとびよこびよことどこかに消えていった。

俺は横を向いていて

所長は笑顔で俺の手を握る、そんな写真がバットショットに写し出

されて所長は笑った。

『竜くん、カメラ見てないじゃん』

『それはあの「ふうとくん」がシャッターを…まあ、いい。勇樹を探すか。』

『うん。でも動物もみていい？』

亜樹子がそう言うと竜は頷いた。

『ああ。いこうか、迷子にならない様に気を付けてくれ』

竜は隣を歩いては亜樹子にそう告げた

その後ろ姿を風船をもったふうとくんが見ていたのは内緒の話である。

時刻は正午を回った

広い園内ではあるが、3人+ガジェットで探しているのだ
見つかってもよいはずだったが結局、マジック開始の時間まで見つ
からなかった

それでもこの園内の何処かに居るだろうと主張を譲らないのが竜だ
った。

マジックショーの会場はかなり大きな会場で

すぐに親子連れなどが来場する

竜の斜め前の席に、勇樹の担任神賀が女の子と一緒に座っていた。その手には白いトラのぬいぐるみ

「フレディくんぬいぐるみ」らしい。

『結局、勇樹の奴来なかったなあ・・・』

マジックショーが始まりリリイ白銀がアクロバットと共に姿を現す年齢は40代であろうが、長い髪を揺らし美しいマジシャンとなっていた。

リリイがマジシャンとして手品を行う最中も

合流したのはフィリップだけ。

勇樹は現れなかった。

『はい、私のマジックはここまでにして我が白銀一門の3代目を担うかもしれない私の弟子、

「ダニー白銀」を紹介します

「ダニー」』

リリイがそう呼びかけると

シルクハットをかぶり、黒のタキシードに身を纏った大祐が巨大な箱の中から出現した。

『レディースエーンジェントルマーン！今日はこの俺のデビューステージへようこそ！』

ステージ用なのか、関西の訛は消えていた。

大祐の手品は消失マジックと言ったような大規模なものではなくトランプやハンカチを使ったようなテーブルマジックが主体だった。

（勇樹の姿はない、か。）

きつと顔を出すと思ったのに
居るのは、違う警備員に

近くでショーの入り口を案内している5体くらいのふうとくん。

大祐はちらちらと客席を見る仕草をする。

人の表情を見てやる演目を変えているのか
勇樹を探しているのか

『おっ、お嬢ちゃんがアシスタント？じゃあ、とっておきのマジックを伝授しよう
ハンカチを握るとたてじまが横じまに！？』

『もっと派手なのやって！』

『んーはでなの？』

壇上に挙げた女の子に誰にでもわかりやすい様なマジックを仕掛けたところ

「派手なのをやって」と言われる

はでなの・・・ないがいいのかなあ・・・と

大祐が顎に手を当てた時だった。

突然ステージ側から男が乱入してきた。

その男はピエロのステージ衣装を着て居ることから此処に居た人間らしい

『派手なのが好きなのか、なら、俺が派手なのを見せてやるよ!』

【WIZARD】

男はオレンジ色のメモリを顎にさすと

魔法使いのトンがり帽子に黒いローブ、そして杖を持ったドーパントへと変わった。

ウィザード・ドーパントの出現に誰よりも早くリリイが叫んだ

『みなさん!これは演出じゃないです!逃げてください!』

ウィザード・ドーパントが客を逃がそうとしたリリイの声に逆上した

『客を逃がすな!』

杖を振り上げた瞬間、手の平サイズの炎の球体が客を攻撃する。

その火を見て演出ではないと悟った客たちはいつせいに出口へ向かった。

『おい、照井!こつなりや組織がどうだの言ったらんねえよな。』

『そうだな。 所長！リリイと一緒に』わかってる！』

避難させてくれと言う前に亜樹子はリリイ、そして大祐と合流し避難にあった。

『久しぶりにやるぜ』

『久しぶり？ここでは初めてだろう』

ドライバーをそれぞれが構えた瞬間、その背後から息を切らして汗だくの勇樹がやってきた。

『左！照井さん！その変身待った！！』

『勇樹！お前今まで何処に……』

『いや、ちよつど……一人で脱ぐの戸惑って死ぬかと……はあ……あぢい』

ゼーゼー肩で息をする勇樹はなにかの死地を体験したらしい半分目が死んでいた。

『敵はウィザードだ。この混乱、亜樹ちゃんたちだけでは市民を避難させることは出来ない。』

翔太郎、照井竜、ここは一旦場を勇樹に預けよう』

化け物騒ぎでふうとえん中の人間がパニックを起こしているのだ飼育員が焦りからサーカスの動物たちを逃がして2次災害にある危険性もある

とフィリップが訴えると
竜と翔太郎は頷く

『任せたぞ』

翔太郎、竜がそう言いステージを後にした。

すっかり人気が無くなったステージ、勇樹はロストドライバーを構える

『よくも、俺の親友のデビュー壊してくれたな。派手なマジック、楽しみだったのに…許さないぞ』

【ACCEL】

『変身！』

【ACCEL】

勇樹は黄色いアクセルの姿になる。
自動的にエンジンブレードが転送されるが、それを使わずにアクセルはウィザード・ドーパントへ突っ込んだ。

ウィザード・ドーパントは魔法使いのような帽子を被り長いローブそして杖を手にしていた

そして杖を一振りすると炎が杖から吹き出した

（特殊タイプか。厄介だな…）

ふわりと石を浮かせウィザードローパントはアクセルを遠ざけようと
とする

（…操っている間は動けない。

なら今のうちに攻撃を仕掛けるまでだ！）

アクセルは石を避けながら懐に潜り込みまずは一撃を与えた。

（おっし。これなら…）

行ける。

そう確信した勇樹はそのまま顎を蹴りあげようとする。

だが、寸で杖から発する磁石で同じ磁極を合わせた時に発生する
ような反発力に遭い、押し負ける。

（攻撃…が当たらない！？）

『この力は…念動力も兼ね備えているのか。
いい買い物をしたもんだ…』

これである新参者に誰が真の奇術師か分からせる事が出来る。』

杖をうつとりとした表情で眺める男は猛然と蹴りを食らわすアクセルを謎の反発力「念力で跳ね返していた。

『あぐっ……！し、新参者ってどういう事だ。』

^{アケセル}勇樹はこの男からいつも出勤要請で扱っている犯罪者達とは違う匂いをかぎ取った

カツとしてやった、と言ったと言つような感情ではなく

もっと厄介な——強い——

一方の大祐は大方の避難を終えていた。

各所でマジックを披露してきたが

風都、自分の生まれ故郷でのマジックはこれが初めてだった。

風都の人に自分のマジックは受け入れられるか——

白銀一門の名を汚さずにマジックを行うことが出来るか

それを絶交すると引かない友達に見守ってもらって

再出発するつもりだった。

それを怪物に邪魔された。

そこにあるショックは隠せなかった。

そこに姿を見せたのはリリイ白銀だった

ベンチに頂垂れている大輔を発見したりリリイは笑顔で駆け寄る

『お疲れ様、エライ事に巻き込まれちゃったけど今日のマジック良

かったよ。』

リリイは手のひらから満点と言う旗を取り出した

『でも、お客さんはもう、集まってくれませんか？』

アイツのショーには化け物が出る。

きつとそう言う風評が広がるだろう

白銀の名前はあらゆる方向で汚されてしまった。

大事な、大事なデビューだったのに

と落ち込んだ大祐にリリイがぼつり呟いた。

『ショーに化け物が毎回出るなら、毎回仮面ライダーも出てきて逆に人気になるかもね』

ヒーローマジックショーって豪華だね
とリリイが言う。

そこに大祐は俯いたまま呟いた。

『仮面ライダー…？』

何言ってるんですか師匠。

仮面ライダーは存在しない架空の戦士ですよ。』

風都に伝わる

風都の守護神。その姿を見た者はいない――

『居るわよ！ちゃんと私知ってるのよ？』

真つ 赤な仮面ライダー アクセル

緑と黒の仮面ライダー W

その両方を知っている

ちよつと怖いけど優しい刑事さん

ちよつと冴えないけど格好いい探偵さん

今はその二人は不幸ごとに巻き込まれ亡くなった。

仮面ライダーはもう風都にはいない。

風都市民は絶望した。

でも私はたった一人だけ知っている

仮面ライダーは今も風都に居る。

みんなそれを偽物と言うけれど

『絶対、仮面ライダーが大祐の為に戦ってくれてる！』

リリイは力強く言うとお祐の手を引いてステージ会場へと連れていく

居る訳ない

そんな古い伝説

居たとしても、仮面ライダーはもつこの風人には――

手を引つ張られて大祐は目を見開いた。

『……ほら。居た。』

至極当然というような嬉しそうな顔を浮かべてリリィは言った。

黄色い、黄色いアクセルに似たようなものがウィザード・ドールパン
トに蹴りを食らわせ戦っている姿だった。

『仮面、ライダー……』

大祐の口からぼろりと一つ言葉が漏れた。

Wが見ていた正体/仮面ライダーは此処に居る(後書き)

と言う事です。

リリーの弟子、大祐君が登場しました。

何で関西弁にしたかはわかりません

とりあえずコナンの服部を見て言葉は構成されています
いかがでしたでしょうか。

黄アクセル久々の戦闘です。

ウィザードは魔術師の記憶のガイアメモリです。

電子辞書で魔術師を調べたら手品師と言う解釈もあったので
採用しました。

はてさて、どうなるのか、

面白いと言っていただけなのならばうれしいです。

Wが見ていた正体／真のマジシャンは魔術師か手品師か（前書き）

第2部8章スタートします。

Wが見ていた正体／真のマジシャンは魔術師か手品師か

勇樹は背後の二人には気が付かなかった。

『何故、このステージを狙った？』

ウィザード・ドーパントに問いかけるとウィザード・ドーパントが答えた。

『何故？決まっているだろう。』

白銀一門の三代目に誰が真の奇術師「マジシャンかを知らしめてやるためにだ。』

ウィザード・ドーパントは言う

『真のマジシャン？』

『ああ、そつだ。』

ウィザード・ドーパントが頷いた。

『俺の名前は「田根赤司」立見一門たちみいちもんと言う東京で有名な大御所の6代目だ。』

風都では4年前からマジックをしている』

『立見たちみね。風都では聞いたことが無いな。それで？』

『この「ふうとえん」でも何回も手品を披露したことがある。ブラスを持ってばそれなりに客の入る腕だった。』

だが、ここ数年、白金一門と顔を合わせ、ブースを突き合わせるようになってから俺の客が減りだした。

余ほど凄い手品かと思っただら、ただのトランプ弄りのマジックや鳩を出現させたりと言った有り触れたものだった。

俺は人体切断や剣飲み、空中浮遊、いろんなマジックが出来る。

それなのにどうして俺があんな紙切れを弄るだけのちやちなマジックをやるヤツに客を取られなければならない！

だからさあ…

三代目のデビューを壊してやったんだよ。

今の俺は、火だつて起こせる。雷だつて起こせる

水だつて固形に出来る！

あんなちやちなマジックしか出来ねえ一門に弟子入りしてるような三代目に

本物の手品が何か分からせるためになア！

ウィザード・ドーパントはケタケタと杖の先から雷を発生させ槍状に固形化させアクセルに向かいながら投げる。

その雷槍らいこうをアクセルは左に避けるとキツと睨み返した。

『そんな理由でぶち壊したのか…。』

『ああ、そつだよ。これから俺はこの力で「手品師」「マジシャン」になる。』

メモリを挿した個所を愛おしそうに撫で、うつとりとしたようにウィザード・ドーパントが言つと

アクセルは鼻で笑った。

『違う。アンタは手品師なんかにはなれない。』

『な、なんだと！？貴様、この俺を愚弄す——』
『アンタはマジシャンじゃない。ただの魔術師、ウィザードだ。』

アクセルが言うとうィザード・ドーパントは言葉の意味が分からないと言ったような反応をする。
それにアクセルは言う

『「人の笑顔や驚いた顔を見る為に七転八倒する。それが手品師マジシャンだ」。と昔、喫茶店のお爺ちゃんが言ってた。
ハンカチを手からだして喜んだ俺の顔を見てお爺ちゃんも嬉しそうに笑ってた。』

例え、杖から火が出ようが、水が固形になろうが、予知が出来ようがそれは「凄い」であるだけだ。
何度も続けていれば飽きられる。

だから手品師は違うモノを考える。
お客さんの笑顔や驚く顔が見たいから
三代目はちゃんとそれが分かっている。壇上上げた女の子の対応でわかった

客を怖がらせて、恐怖に顔を歪めてまで何かを披露したいと考えるなら

お前は手品師じゃない。ただの魔術師だ。』

『ド素人が何を抜け抜け喋ってた？分かったような口を叩くなあ！！』

俺のなにが分かる！俺が修業時代どれだけ苦労して脱出マジックを成功させたか分かるか！？

客はそれで喜んでいた。満足していた。

なのに…どうして…俺は…俺はああ…

白銀エエ…アイツの所為で…

にくい…にくい！！…アイツガニクイアアアアア！！』

ウィザード・ドーパントが叫ぶと地の底から魔術書が現れ

ウィザード・ドーパントが立つ場所には魔法陣が描かれていた。

その努力が報われないと知り

絶望し、魔の記憶の小箱を手にした

いつも相手にしているような犯罪者ではない事に勇樹はばつが悪そうな表情をマスクの奥で浮かべる

性格に問題はあるが

更正できるかも知れないのだ。

そのチャンスを与えるならば逮捕するべきではない

そう勇樹が考えているときだった

突如、魔術書が赤い色に光り、ウィザード・ドーパントの口が「フイア」と動く

すると杖の先に火球が生み出される。

『白銀一門これで滅べエエエエエエ！』

は？

勇樹は一瞬、何のことが分からなかったが

火球の軌道が自分から逸れていることに気が付いた。

その軌道を目で追い、その軌道の先に居る物を確かめる

その咲に居たのは此処に居るはずのない、白銀師弟だった。

炎が放たれたのは勇樹が確認して刹那の事だった。

白銀師弟は逃げようとしていたが、火球の勢いは人の走るそれを遙かに超えるスピードで迫り

白銀師弟を一瞬で炎に包みこんだ。

あがる黒煙に

ワイザード・ドーパントは満足したように笑った。

『あつはっは！ざまみろ！これで俺は誰よりも優れたマジシャンだ。

ふ、ふふ、ふはは…あ？』

ワイザード・ドーパントは勝利に酔いしれたが

それもつかの間で終わった。

黒煙が止むと白銀師弟の前に赤い仮面ライダーが居たのだ。

『つぐ…うう…』

その赤い仮面ライダーはうめき声を漏らすと片膝をついた

赤い、赤い真つ赤な…
少し細い仮面ライダー

そう、勇樹がトライアルメモリを使い、火球の前に躍り出たのだ。

『大丈夫…？早く、ここ、から立、ち去っ、て、く…れ。』

そう真つ赤なトライアルは苦しそうに途切れ途切れに言う

その声に真つ先に動いたのはリリイ白銀だった。

呆然と立ち尽くしている大祐の腕を引きリリイはその場から立ち去ろうとする

だが、トライアルの限界時間が来てしまっていた。

トライアルのメモリに適合していない勇樹は20秒しか、変身が保てないのだ。

変身が解けて崩れる勇樹の姿を大祐は見てしまった

『ユウちゃ…ん？』

大祐が遠目で見ているのにも気が付かず、勇樹はフラリと立ち上がり、アクセルメモリを握る

『っ…はあ…はあ…ぐっ…』

背中からは焦げた匂いがし、勇樹は背中に大やけどを負ってしまったようだっ

勇樹は痛みを堪え立ち上がる際に唇を強く噛み溢れた血を床に吐きだす。

そして目の前で

再びアクセルとなりウィザード・ドーパントに立ち向かっていった

『・・・にして、ねん。』

大祐の口からぼつりと声が漏れた。

「なにしてんねん。」

勇樹は今日、姿を現さなかった

自分がマジックをやる最中、どこを見渡しても存在が無かった。

「絶交」を告げるのだから見に来ないのだろう

自身の中でそう言い聞かせた

だが、仮面ライダーは自分が女の子を壇上に上げた事を知っていた。
その仮面ライダーの正体は勇樹だった

あの怪物が出てから園内はパニックに襲われた。

その中で駆けつけると言ったら近くに居たと計算しても30分は掛かる

だが、彼はすぐに戦っていた

つまり、最初から見えたのだ

『なに・・・アホな事しと、んねん...』

堂々と席に座って手を叩けばいいモノを

どうして彼は隠れて様子を伺っていたのか

リリイの手を振り切り大祐はステージ内に向かって走った。

(なにしとんねんあのドアホ！)

ステージに戻る途中、大祐はアタッシユケースを抱えたさえない30代前後のスーツの男とぶつかる

その男のぶつかるのとたくさんのアルファベットの着いたUSBが散らばった

『あたた・・・何するんだ君イ！』

『わわ、すまんおっちゃん！』

大祐は軽く手で謝罪するとそのまま走り去っていった。

『まったく、近頃の若者は礼儀と言うものを知らないのか？これは貴重な情報が入った26本しかない貴重な小箱だと言うのに』

スーツ姿の男はアルファベットのUSBをアタッシユケースにしまつていく。

AとZのうち「W」が抜けた状態で――

だが、男は異変に気が付いた。

『おや・・・？もう6つ足りませんね。何処か隙間に入り込んだん

でしょうか。』

USBは大きいようで小さい。それに近くに自販機があった

『やれやれ・・・、自販機の隙間にも挟まってしまいましたか。この服で取り出すのは非常に面倒だと言っのに』

男は「はあ・・・」とため息をついては自販機の下を覗いた。

一方の大祐はステージに付いた

ステージ内では黄色いアクセルがまだに拳を振るい戦っていた。

『っ・・・ユウちゃん!』

大祐は自身の手品用のステッキを取り出すと大祐は駆け出ししていく
それと同時に翔太郎、竜がステージに戻ってきた。

場が落ち着いたため亜樹子とフィリップを待たせ戻ってきたのだ。

二人は戦況を見て勇樹が劣勢であることを理解した。

竜は即座にアクセルドライバを手に握るが目の前を大祐が通った
ことでその手を収めた。

大祐は手品用のステッキをウィザード・ドーパントにブン投げる。
人間態の時とは違いダメージはないが、ウィザード・ドーパントは
こちらを向いた。

『何でお前が此処にいった!』

ウィザード・ドーパントより早く気が付いたアクセル（勇樹）は大祐を庇う様に立つ

その背後、大祐は思い切り頭を何処からか出したピコピコハンマーで思いつきりぶつ叩いた。

『何しとんねん自分！』

『何してるって見りや分かるだろ？俺はアイツを無力化しなきゃいけないんだよ。』

お前こそ何してんだよ。リリイさんと戻ったんじゃないのか？』

『じゃーかーしいわ！』

「親友」が仮面ライダーやったんやぞ？

あないなモン見せられて大人しく避難してられるかボケ！』

『あの子、もう俺とお前は「親友」じゃない、ただの他人だ。』

俺の仕事は市民を守る一応の警察官。勝手に野次馬行為されて怪我しても俺の責任になる。』

仕事の邪魔だ。帰ってくれ。』

勇樹は冷たく言い放った。

『仕事？はは・・・お前仕事のためにここ来とつたんか…』

つまり、俺のマジック見たんは警備だったから…？

今も仕事でこないな怪物と戦^{たた}こつてんの？』

『そつだよ。お前のマジックは見たくて来たんじゃない。』

ああいう大規模な祭りには怪物が出るかもしれないから警備を頼ま

れた。
だから行った。

分かったならさっさと行けよ。仕事の邪魔だ。』

(嘘だ。――)

『嘘…やる。』

大祐は呟いた。

その瞳が揺らいだのを見て勇樹は言葉を続ける。

『嘘じゃない。何か誤解して感動してたみたいだけど、コレが俺の「仕事」だ。悪かったな

大祐。

こいつは俺が倒しておくから、まあ…さっさと新天地でも頑張れよ』

淡々と言ってウィザード・ドーパントに向き直ったアクセル(勇樹)は再び拳を構える。

その前に大祐はその装甲を力強く殴った。

『なに勝手にまた言い逃げしとんねん！ふざけんな！それで終わらすなよ！』

装甲を殴った手は血に濡れていたがそんなのに構わず大祐は叫んだ

『…手の骨折れるぞ？装甲は人間には硬いよ。』

『骨なんか頭蓋骨でもくれてやるわ！何でそない逃げる！？
なんかお前俺に悪いことしたんか？
なんで俺の意見聞かないんだ…。
なんで勝手に決めるんだよ！』

胸ぐらをお前が掴み掛る勢いで言うと勇樹はそのマスクの奥
言い放つ。

『俺は警察官だ。市民を守って街を怪物から守る為に生きてる。
怪物側は何を仕掛けてくるか分からない。

俺は完璧に街を怪物から守らなきゃならない。
だから友達おまえは要らない。だから帰れ！』

『だからその理由はなんなんだよ！！』

そう大祐がもう一度怒鳴ると
勇樹も怒鳴り返してきた。

『俺はもう、何も失いたくないんだよ！
お前は俺の過去の「唯一残ったもの」なんだ…。
父さん母さんが怪物に襲われて、俺は戦う決意をした。
この4年間ずっとそうだった。
誰も分かってくれなくて友達も出来なかった。

お前はそんな俺の「親友」なんだよ。
お前まで怪物にぶつ殺されたら嫌だ！
だから「絶交」だ！！』

はあはあ・・・とマスクの奥で息を切らす。

『お前、今までそうやって「友達」消してきたんか。』

『そうやって誰でも彼でも友達になりそうになっただらそうやって追い返してきたわけだ。』

大祐はぼつりとつぶやく

その呟きを放つ唇は震えて居た。

『そ———』

勇樹が答えようとした瞬間、大祐はアクセルのシールド部分めがけて頭突きを食らわせる。

「ゴッソ」と音がし、大祐の額からは血が流れた。

『…お前…ふざけんなよ？』

大祐はわなわなとふるえていた。

『俺はお前の学級のクラスメイトや道行く通行人じゃねえ！』

お前の「親友」だ！

『親友相手に勝手に言い逃げてそれで済まされると思ってんのか！？人間関係ナメンじゃねーぞクソつたれエ！！』

『そうやってお前はずっと「友達」作らんのか？』

なに甘えてんだよ！

『そんな感覚で俺の仲まで引き裂こうとするなよ…！！』

俺は引かない。縁も切らない
むしろ…俺も一緒にユウちゃんと戦う

一緒に戦こうて、証明したるわ。俺は死なない言う事を』

大祐は額の血を拭わず最後は笑顔で言った
勇樹はマスクの奥で涙を一つ落とした。

『戦う…って』

『お前のその呪われた運命に俺も相乗りさせてもらう。ま。そうい
…生身で？』

大祐はハツとなった。

『へ？そのベルトにスピア無いんか？』

『ない。』

『それ言うてや早く！俺そんなら…えーと、この刀使こうて…って
重たッ！？』

大祐はエンジンブレードを握るが持ち上げるとは不可能だった。

『…悪かったよ。絶交は取り下げる。けど…初戦がエンジンブレ
ードで生身は危険すぎる。
だから下がってる。』

『いや、俺はマジシャンや。シルクハットにシルク（ハンカチ）被

せたつたらニユツって出るかもしれへん。』

大祐はステージ横の誇りとステージの瓦礫の粉をかぶったシルクハットに赤いハンカチを被せはじめる

そんな様子を見てウィザード・ドーパントが動き出した。

『三代目が来て何を始めるかと興味を持って見てみれば、お涙ちよ
うだいの猿芝居か。』

見ていて感動したな。』

攻撃してこないと思っていたウィザード・ドーパントが皮肉を込めて
そついうと魔術書を開く

『さあ、その胸熱い感動と共にあの世に送ってやる！！』

『大祐！そんなマジックはいいから早く逃げろ！でかいのが来る！』

勇樹が振り返り強く叫ぶと

大祐のボロボロのシルクハットの中から白い鳩が飛び出していた。

まっ白い手のひらサイズの鳩は勇樹と大祐の周りを滑空する。

『こんな時に鳩出すなよ！！』

勇樹は怒鳴った

『そう、怒鳴んな。タネが無いのに鳩が出たんだ。これきつと何かあるって!』

大祐は上空を飛ぶ鳩を見上げ言う

『くくく・・・意気込んで居た割にはダサイじゃないか!さすがは白銀三代目。』

ウィザード・ドーパントの杖の先の雷は次第に大きくなっていく

『やはり、俺が真のマジシャン、と言う事だな。死ねええ!!』

杖の先から雷が放たれる。

竜がアクセルメモリを握りトリアルに変身しかけようとした瞬間、竜の横を何かが霞めた。

雷はその掠めた何かにより防がれる

そう、あの白い鳩だった。

『鳩!?!』

鳩はそのまま、羽を休めるように畳み大祐の手に収まる。

大祐はその鳩を無意識に腰に当てがたう。

するとその鳩からドライバーの灰色の部分が現れ、腰に巻きついた

『嘘お！？』

勇樹はその光景に驚いた。

いや、驚いたのは勇樹だけではない。遠くで様子を見ていた竜、翔太郎も目の前の現象に驚きを隠せなかった

そしてアクセル態の勇樹のドライバーもその白い鳩のドライバーへと変わっていたのだ。

羽をたたんだ羽の部分にメモリを挿すらしい

双方二人に着いたドライバーには、勇樹側の左側にはアクセルそして大祐のドライバーには左にアクセルメモリ、右に紺色の純正化されたメモリが挿し込まれていた。

互いの頭にはコレがどういう事が分かっていた。

『ユウちゃん、俺のアシスタントになってくれる？』

『あちこち筋肉痛になる勇氣があるならな。』

勇樹は仮面の奥で、大祐はともに笑顔になり、再び魔術を唱え始めたウィザード・ドーパントに向き直る

『いくで？』

【ACCEL】

大祐が左側にセットされていたアクセルメモリを挿しこむと勇樹の変身が解け、床に「ゴチン」と派手に頭をぶつけて倒れる。

それを見て大祐は右側の紺色のメモリをセットし、

【MAGICAN】

鳩の羽を広げる様に動かした。

【ACCEL】

【MAGICAN】

『変身!』

鳥が空を渡るように羽を広げた状態になると大量のトランプカードと羽が舞い散るエフェクトの中、左半身は真っ赤な粒子が、右半身は紺色の粒子が大祐の体を包み
黒いマントにその上に赤と青のスカーフを巻いた左半身が赤、右半身が紺色に別れた青い複眼の戦士が誕生した。

『なっ!?!』

翔太郎、竜は目の前の戦士の誕生に驚く
その姿はダブルそっくりだった。

《なんじゃこりゃあああ!》

左側の青い目を点灯させ勇樹が叫んだ。

『なんじゃこりゃああって仮面ライダーになれたんよ』

今度は右側の大祐が言う

《俺がぶっ倒れてんだけど！俺なに？幽体離脱！？何でおれがこっちなんだよ！》

『自分火傷してんねんから大人しゅうせー言う事やる。』

《なんでマントにスカーフなんだよ！カッコ悪くない？》

『いや、これでいいんや。』

シユルリと紺色の手が2色のスカーフを取り、先を結ぶ。

そして空中に放り投げると手用品用のステッキへと姿を変えた。

そしてマントを放り投げるとマントはシルクハットへと姿を変える

『ほな、いきましょか。』

《い、いきましょかってな、何を…？》

『さあ、It's a show time!』

アクセルマジシャンはシルクハットを右手にステッキを左手に持つとそう構え、言い放った

《で、お前…戦闘経験あるの?》

『無い。ってな事でユウちゃん。頼むわ。俺ちよつとやることがある。』

大祐は体の主導権を勇樹へ譲ろうとする

《は、え?ちよつ!?何考えてんだよ!俺は棒術使えないんだよ!肉弾戦主体!》

『はあ!?格闘しかでけへんの?!不便な男やなあ…普通警察言ったら棒術くらい使えて…』

主導権を譲ろうとした大祐に向かい勇樹が言つと大祐はジロリと勇樹を見た。

『ま、それならかまわんけど…あんまり無茶するなよ?コレ俺んから——《来るぞ!》!》

ウィザード・ドーパントが魔術書を捲る仕草を見せたことに勇樹は主導権を奪い思いつきり大きく地面を蹴り顔面を蹴り飛ばす

『ちよつ、待て!待て!痛い!足痛い!』

顔面を蹴り飛ばそうとするもバリアで防がれ

勇樹はそのバリアを蹴り破ろうと蹴りを何発も繰り出した。

《こんくらいで痛がってたら仮面ライダー務まらないっての!だーくそ、キック力無いな。》

『当たり前や！そういう特性ちゃうもん！！つか・・・どんだけ雑に蹴り入れてんねん！ドアホ！！バリアの前に俺の足が割れるわ！』

《んじゃどーすんだよ！このバリア破る方法あんの？》

『はあ・・・なんで初陣でこないな肉弾戦しかできないしょーもないスキルの友人なんやろ。』

ま、しょーもないスキルやから？俺みたいないな手品師がついておるんやけどな。』

《おい・・・それ以上言ったら泣くぞ。》

『そないなもんで泣くんかいな…。ま・・・それは置いて。ただ蹴つてもあかんよ。』

せやなあ・・・バリアが360度か確かめなアカンな。』

ポンポンとステッキで大祐はシルクハットを数回たたいた。するとシルクハットから一羽のハトが現れる

大祐はその鳩を空のかなたに投げ飛ばすとバリアの周辺をガリガリと傷つけながら周り

やがては大祐の手に戻ってきた。

『ふむ。まずまず…おっ。さっそく見つけたで』

大祐は勇樹に指示をする

360度のバリアの左側の一部だけ、バリアの修復が遅い部分があった。

《オルアアア！！》

そこを全力の蹴りで蹴り飛ばすとバリアが破片のようにくだけた。

『なっ!?!? どうしてこの俺のバリアが…お前みたいな三流に!』

勇樹がガンガンと蹴りを入れた事ですっかり力量をなめていたらしいウィザード・ドーパントは動揺が隠せなかった。

『残念やな。今は「二人」おるんや。身体は一つでも脳みそは二つ。せやなあ…こんな文句はいかがでしょ?』

「二人で唯一無二の仮面ライダー」その名も仮面ライダーマジシャン。

心の通ったアシスタントがおれへと大きなマジックは成功せえへんもんでな。

そろそろいくで?』

大祐が構えるとウィザード・ドーパントは魔術書を開く

『ぐううう…俺の方がすぐれた…魔術師…マジシャンだ!』

魔術書を捲り魔術を唱え始める

『それ、雷やろ。この戦いの最中アンタ何回雷出すねん。唇の動きで何を唱えるのかわかってしもたわ。』

『なッ!?!?ち、違う!こ、これは——』その動きは「炎」の「火球」お前ホンマに手品やっと思ったんか?』

手品師なら相手の、仕草、癖、唇の動き、そないなもんを完璧に把握せんといかんよ?』

お前が手品師、言うならなあ？

ただ、一門卒業したから「一人前」そんなのは違う

卒業しても付き従って師匠にいろんなモン教わって、それを次代に受け継ぐ

ただ、自己満足してるうちは、お前は手品師やない。

そろそろファイナーレいくで』

大祐・・否、勇樹と大祐が手を組んだ仮面ライダーマジシャンは紺色のメモリをステッキに挿しこむ

【マジシャン・マキシマムドライブ】

マキシマムドライブ状態のステッキでシルクハットを叩くと中から無数のトランプが出現する

『マジシャントランプ・イリュージョン！』

その無数のトランプを背景にマジシャンはステッキを前に突き出すと紙ふぶきのようにウィザード・ドール・パントへと向かい鎌鼬のようにウィザードを襲いウィザード・ドール・パントは爆発に包まれた。

そして男と割れた「W」のメモリが転がった。

その後、勇樹は大やけどの為病院に逆戻りとなった。

あの男は、逮捕をし数か月間牢に入れることで反省させると言う決断に至った。

あの不思議な鳩はシユラウド製ではないと言う。

「A I」を持ち自立稼働するドライバーなど制作した時は無いんだそう。

あの鳩は面白いことにドライバーであるにも拘らず羽の裏にスロットがあることから、普通のガジェットとしても使用できるんだそう。

その鳩は普段は勇樹の近くに居て

入院中の緊急出勤の際、それを大祐に飛ばす。

大祐はリリイに自身が仮面ライダーになったことを伝えると嬉しそうにしていたと言う

その後、リリイは10日ほど風都に滞在して、新たなる弟子を探しに旅立っていったと言う

大祐は今、「風吹荘」なるアパートを借り、住み始めた。

そして魔術師事件と名づけられたあの事件で中止になった大祐の公演が5月26日にまたあるそうなのだ

その広告を勇樹は病室で眺める
ちなみにこの広告は、前に変身を要求して鳩が帰ってきた時に口に
くわえてきたものである。

『それ、行くんだろ？』

見舞いに来ていた翔太郎が話しかける

『ん。いくよ。今度はちゃんど客席でね。24には一時帰宅許可
されそうだし』

『だがまあ、これでよかったな。入院しても無理せずに行かなくて
良くて

お前、その友達大事にしなきゃ駄目だぜ？』

『お、おう・・・』

勇樹は照れたように頷く

勇樹自身も大祐があそこまで怒るとは思わなかったのだ

『。。どうして勇樹君と大祐君は親友なの？話聞けば大祐君すっごい
勇樹君の事大事にしてるけど』

『ああ・・・それは・・・ん？きっかけはなんだったっけごめん、思い
出せないや』

勇樹はそう苦笑した。

《カッパ！カッパ！お前の名字「久里」きゅうり」って読むんだろ？
だから今日からお前は「カッパ」な。》

《・・・僕は「ひさざと」だよ・・・河童じゃない《ちげえだろ？カ
ッパ！カッパ！尻こだま抜かれるぞお
につげろー！》

『名字の読み方が「きゅうり」だって苛められて泣いてた俺を見て
ユウちゃんがマジギレして
半分に割った胡瓜学校に持ってきて体格も違う上級生のいじめっ子
の口突つ込んで殴り合いの喧嘩になったのがきっかけて覚えて
ないだろうなあ・・・』

「どうして親友になつたんだっけ？」

と言つ勇樹からのメールを見て大祐は一つ溜息を吐いた。

Wが見ていた正体/真のマジシャンは魔術師か手品師か(後書き)

Wが見ていた正体はこれにて完結です

大祐君と言うキャラクターは勇樹の親友と言う事で

照井に関係のある人間の何か、と言う事でリリーの弟子になりました。

一番困ったのは変身シーンだったりします。

勇樹は重傷を追っているので必然的に大祐が戦闘することになる。

ダブル計画を考えていたので勇樹が意識を担当しなければならぬ。ジヨーカーじゃないのに平気かと言う理由は

勇樹のメモリは照井のモノなので

サイクロンアクセルエクストリームを考えていたなら

サイクロンアクセルになるのが必須なワケで

ファンゲアクセルも可能だろう。

と言う理由から大丈夫だったんですが

ドライバーをどうしようかと(笑)

ボツ設定では

1:フィリップ達のダブドラを使う

2:ロストドライバー同士の掛け合わせ(翔太郎のロストドライバ

ー)

でしたが

いつのまにかメモリがファンゲ式になって

最終的にドライバーがファンゲ式になりました。

白い鳩はマジシャンの定番です。

それに羽ばたいた姿は「M」にも「W」にも見えるので
ドライバーにもってこいだと思っただので採用しました。

途中、ウィザード・ドーパントの描写が少なくなったのは
主人公たちに感情移入しすぎたせいです。

描写が熱くなりどこに入れていいか…

本当にすみません

そして最後の方

久里と言う名字はこの過去のエピソードから考え付いた名字でした。
そこから照井のVシネピータンを胡瓜でやると言う暴挙を思いつき
ました

とまあ・・・いろいろアレなものではありませんが
面白いと言ってくだされば嬉しいです
それでは。

データファイル？（前書き）

データファイル？です。

おもに大祐とマジシャンの事を書いています。

データファイル？

ひささとだいすけ
久里大祐

年齢 18

身長 176 体重は秘密

髪型：ウルフのツンツンヘア（ウニヘア）所々の金メッシュ

誕生日：12月3日

勇樹の8年来の親友

親の都合で転校し関西に引っ越し、友達を作るために関西弁を練習し、

口調が関西弁になった。

だが、もともとは風都暮らしの為、イントネーションや言葉の選び方は

テレビドラマ程度の知識。

幼い頃から芸人になるのが夢であり

リリイ白銀に弟子入りし、現在

「ダニー白銀」と言う名をリリイから貰い活動をし始めた
白銀一門の三代目である。

勇樹に絶交を言い渡されていたが、5月25日現在は解消

勇樹と共に仮面ライダーとなり戦う事を決意した。

勇樹をユウちゃん

照井をパパさん or テリーパパさん

亜樹子を所長

左を 左のおじさん

フィリップをフィリップと呼ぶ

【マジシャンドライバー】

略称：Mドライバー

大祐が勇樹を救うため、仮面ライダーになることを決意した時にシルクハットから飛び出した鳩。

ファングのように意志を持ったドライバード

ライブモードは鳩であるが

ガジェットノドライバードモードは

鳥がはばいたような「M」のような形を描く。

そして、形状が「M」の為ダブルドライバードと同じ要領で

二人で一人の仮面ライダーへ変身することが可能である。

おもに大祐、勇樹の両者が変身する

そして体は大祐であり、勇樹は意識体である。

制作者は不明。

マジシャンメモリ

マジシャンドライバーと共にあったメモリであり、
手品師の記憶を秘めた紺色の純化されたメモリ。
大祐とは適合率が高い模様。

仮面ライダーアクセルマジシャン

勇樹のアクセルメモリと大祐のマジシャンメモリを「Mドライバー」
に挿し変身した姿。

基本的な姿はダブルと同じであるが、左側が赤、右側が紺色、そし
て目はアクセルを思わせるような青い複眼である。

変身時、黒いマントと赤と紺の二色のスカーフがついているが、

スカーフは繋ぎ合わせ、手品用のステッキへ変化する

マントを放り投げるとシルクハットへ変化し

トランプやら鳩やらが飛び出し遠距離、中距離の攻撃を得意とする。

マジシャンのメモリで動体視力が強化されて居る為

戦闘スタイルは勇樹が主導権を握り肉弾戦を繰り広げている中
相手の癖や特徴を大祐がみると言った戦法。

決め台詞は

「It's a show time」

二人で唯一無二の仮面ライダー。

Fに平和をノ繰り返し返されるAtozと降り立つエターナル（真っ白怪人）（前書

2部第9章めです。

なな、なんと今回は、ベルト様の作品

「仮面ライダーエターナル〜風都を守る永遠の戦士」
の進也くんと里美ちゃんとのコラボ作品です。

マヒロの初コラボ作品なので緊張しています
楽しんでいただけたら嬉しいです。
では

Fに平和を／繰り返されるAtozと降り立つエターナル（真っ白怪人）

魔術事件から2週間ほどたった5月某日

1人の男がとある洋館へと足を踏み入れた。

『お待ちしていました。』

その男を出迎えたのは蒲原だった。

蒲原は洋館の大広間にその男を招く

男は蒲原に招かれる間、終始緊張気味であった

大広間の名がテーブルに置かれたアンティーク調の椅子に腰かけると同時に

男は口を開く

『あ、あの…いかがでしょうか、例のメモリは』

男の名前は吉崎賢二よしき けんじ30代の冴えない男でガイアメモリの売人である。

売人であるが…なぜか吉崎は今、蒲原と交渉を試みている。

例のメモリの名を口にすれば蒲原が城ノ内を呼び隣にアタッシュケースを広げさせ控えさせる

『ええ、ちゃんと分析を完了しましたよ。』

貴方が銀のカーテンに攫われ神隠しにあった世界で購入したと言うAtoz計26本のメモリ

何故か「M」が無いようですが…それを差し引いても実に素敵なモ

ノでした。』

蒲原は男の表情を伺う様に話す

すると男は語尾を濁すように頭を掻きながら答えた。

『「M」のメモリは無くしてしまいました。すみません。

そして契約の際にお話したドライバーも何処かへ…』

『それは災難でしたね』

『そ、それでわたくしは貴方の幹部として働けますか!?!』

吉崎が跪いて言うと言蒲原は笑った

『ええ、いいでしょう。ただし・貴方が言う「アルファベット」と言う組織から買ったメモリが

我々にとって本当に利益を生むのか

確かめさせていただきます。まだ最終テストが済んでないので。我々だって無駄な投資はしたくありませんからね。』

『ははっ、ではこのわたくしが実験台に』

跪いたまま吉崎が言うと言蒲原を首を横に振る

『貴方がやっては意味がない。城ノ内君、へりをチャーターしてください。』

蒲原の言葉に横に控えていた城ノ内が動く

『い、一体何を…』

蒲原がアタツシユケースを取るとメモリを楽しそうに眺める

『蒲原様、ヘリのチャーターが完了しました。』

『じゃあ行きましょう』

アタツシユケースを抱え蒲原はヘリに乗り

そして上空で安定したところで

A t o z | 計25本のメモリをばら撒いた。

A からZ「M」を除いたメモリは空から街へと落下していく

その過程で「E」のガイアメモリが青く光り弾け飛んだ

(どうやら不良品も入っているみたいですね。

さあ、他の世界のメモリがどの程度の力を有するか見せてもらいましょう

残り24本 |

謎のガイアメモリ組織アルファベットが残したメモリが
この街に降り注ぐ

それから二日後

5月25日、

吉崎と同じように神隠しにあった少年&少女が居た。

ただ、いまは少年だけなのであるが――

少年の髪は黒髪で長さは耳にあたる程度、そして身長は175?と高めである

『「じい、風都?」』

少年が神隠しに遭う前、「風花荘」と言うアパートにその少女と帰ろうとしていた

その直前、少年はドーパントと出会い、戦おうとした。

彼も仮面ライダーなのである。

そうしてロストドライバーを腰に巻きつけメモリを始動させた瞬間青い光がほとばしり、傍に居た少女とこの場所にやって来たのだ。

だがその際、少女とは逸れてしまったようで現在彼はその状況の把握とともに少女を探すためこうして歩いている。

彼の家「風花荘」があった場所に来てみると、そこは彼の住まい風花荘ではなく「風吹荘」と名前が違い

そして大家さんは此方のお婆さんではなく男の人だった。

『どうしたのかしら?私に何か御用?』

『あ、いえ・・・あの・・・ここは風花荘ではないんですか？』

大家さんの家を訪ねると大家さんは口紅を塗っていた。
ちなみに大家さんは男である

『風花荘？風都にそんな名前のアパートなんかないわよ？ここは私の祖父の代からずうとうと風吹荘
なに？アナタひよっとして住む家を探してるの？』

(金城さんで慣れているとはいえ、きよ、強烈な人だ・・・)

『い、いいえ・・・ではそのおれはこれで・・・っと！？』

少年が去ろうとすると大家がその手を握った

『貴方よく見たらとつてもイケメンねえ？勇樹ちゃんとか大祐ちゃんと同じレベルかしら・・・いいえ、もしかしたらそれ以上かも。私
こういう若い男、嫌いじゃないの。中に入りなさい。お姉さんが
んでも教えてあげる。』

『いいえあ、あの・・・おれ松下さんを探しに行かなければ・・・』

『あら奇遇ね 私も松下なの。』

嬉しいわあ・・・私を探して此処まで来てくれるなんて
ハッ！？でも私は男。二人の愛は・・・叶わない・・・

結ばれぬ運命・・・『・・・ちやうやろ？まっちゃんの運命の相手はこの
オレじゃなかった？俺がおれへんうちに浮気なんてひどいなあ・・・松
ちゃんは。』

『はうああ！？大祐ちゃんじゃなあい！何？今練習の帰り？ううん

？松ちゃんいい子にしてたわ
こんな男興味無いわ昔の男よ！』

大祐と名乗る男が階段を昇ってきては
大家さん「松下」を誘惑する

その様子を少年はぼかーんと眺めていた。

(なにしてるん、はよういきーや。)

大祐の唇が動く

つまり逃がしてくれるらしい。

少年はそのご厚意にありがたく従い、もう一つのアテの鳴海探偵事
務所へと急ぐ

《まつちゃん。

勇樹の着替え写真やるから今月の家賃タダにしてくれへん？

営業入らんくて今月の家賃払えんのか

ダメか……？》

《そ、そんな・・・そんな子犬のような目で私を見つめないでちよ
うだいッッ！！

家賃なんてそんなちっぽけなもの永久にタダにしてあげるから！

負けないで大祐ちゃん！ガンバ！》

《ありがと松ちゃん

松ちゃんは俺の風都でのオカンやあ！》

《恋人関係もいいけれどこの関係も嫌いじゃないわ！

今日は肉じゃがを食べさせてあ・げ・る》

(ここは風都であり風都じゃないのか。なんだか変な風都に来てしまったなあ・・

でもここが風花荘と同じ場所にあるなら鳴海探偵事務所はあっちの方向だ。

松下さんの居場所を探すにはやっぱりこの世界の師匠を頼るしかない。)

足を運ぶごとに離れていく風吹荘から洩れて聞こえる会話を耳にしながら道を歩きはじめる。

この少年、手段は違うが毎回のように自分の世界へと違う世界へと神隠しに遭っている

だからなのか、飛ばされたことについてはなんら驚きが無い。

自分の世界の風都とは様子が違うが地理は変わらぬようで少年はてくてくと鳴海探偵事務所がある方向を目指して進む。

しばらく道なりに進んだ時、

マスカレイドの集団がバイクに乗り女性のカバンをひったくった光景が目映った。

『ど、どろばー！ー！』

『だ、大丈夫ですか！？』

少年は突き飛ばされカバンを奪われた女性に手を貸し助け起こす

『あ、あの・・私のカバンが』

『ええ、大丈夫です。』

(仕方がない。今はこの人のカバンが先だな)

少年はポケットからスタックフォン、クワガタをモチーフにした携帯を取り出すと

マスカレイド軍団の後を追わせた

マスカレイド軍団は近くの廃校にアジトを取っているようで

少年は歩いて向かう

『こんな所になにようか?』

廃校の中では5人のマスカレイド、そして頭領と思われる

ちよんまげのような頭に着物をモチーフにしたようなデザインの上に右腕に刀を持ったドーパントがドラム缶の上に座っていた。

『なんだ、じゃない。それはあの女の人のカバンだろ?』

少年は頭領を見据えながら静かに言う

『某はその様なことは知らぬなあ……?部下達が某の知らぬ所でやったものでござるっ?』

妙な時代劇口調で喋るドーパント。

このメモリの使用者がそういう口調なのかメモリの特性なのか
ドラム缶に座り何処からか取り出したか分からない扇で自身を扇ぎ
ながらドーパンは惚ける

『とにかく返してもらおう。』

少年はロストドライバーを腰に巻き

そして白っぽいクリア色で「E」と書かれたメモリを取り出す

『それはガイアメモリ…、なんだお前も化け物になるのか？』

最近の若者は怖いのとサムライ（と言うより悪代官？）・ドーパ
ントが笑い飛ばすと少年はそれを冷静に否定する

『違う、おれは——
仮面ライダーだ。』

少年がメモリを始動させる

【ETERNAL】

『変身！』

【ETERNAL】

メモリをセットさせると始動音が鳴り

白い粒子が少年の身体を包み、黒いマントをつけた白い身体の黄色い複眼の戦士が青い炎のエフェクトと共に姿を現した

『さあ、お前に罰を与えよう』

仮面ライダーエターナル

メモリ名を名前とするならば少年の今の名前はこつである。

『仮面ライダーだ！？こけおどしめ！であえ！であえい！！』

そんな仮面ライダーの出現にサムライ・ドーパントは悪代官のように控えの下つ端マスカレイドを呼び寄せ

ざっと20名くらいのマスカレイドにエターナルを囲むように命じた。

『なる・・ほど』

エターナルは変身と同時に現れた自身の武器「エターナルエッジ」を持ち

最も効率のいい倒し方を考えていた

あのボスの命令で四方八方から一斉に攻めるのだろう

四方八方の敵をどう蹴散らすかエターナルは考えて【GENE】のメモリを取り出す

彼の戦闘スタイルはこのように自身が今ドライバーに挿しているものではないメモリを使い臨機応変に状況を見て戦うと言つものである

此処で取り出したGENE―ジーンのほかにもまだ種類はあるが、今回はこのGENE―遺伝子の記憶のメモリを使用する

自身のエターナルエッジにジーンメモリを挿しこみ、マキシマムドライブを発動させ

武器の形状を変えるのだ

【ジーンマキシマムドライブ】

彼はこれまでに銃であったりその武器の形状を変えたが、今回、エターナルエッジは小さな釘のようなものに変化した。それをエターナルは地面にばら撒いた。

『なんだ？それで終わりか？俺達を馬鹿にしてんじゃねえぞ！』

『いや、まだ終わりじゃない』

地面にたまたま落ちていた枯葉を拾うとまたジーンを使いエターナルは自身の左手を西洋の短剣へと変えた。

そしてマスカレイド軍団の懐に潜り、マスカレイド達の腹を蹴飛ばし腕の短剣で斬っていく

その動きは単調であり、相手方にも動きの読めるものだったエターナルは即座に廃校の壁に追いつめられる

『っ・・・はあはあ・・・くそ』

追い詰められたエターナルは荒々しく息を吐く。そしてマスカレイド

ドに両脇を抱えられサムライ・ドーパントの前に連れてこられた。

『はっはっは！所詮はその程度よ。』

仮面ライダーと聞いて驚いたがやはり嘘であったな…』

『嘘？』

エターナルは聞き返す。

『そうだ。この風都には仮面ライダーは数年前から居ない。』

(仮面ライダーが居ない…？と言うことは師匠も照井さんも居ない？)

エターナルは頭のなかで情報进行处理する

(じゃあ…この風都はドーパントだらけの…？)

『声もでないか？だが、御主は幸運よ。』

某が直々に葬ってやるのだから先の世を知る必要はない。

今の世は自分が怪物に殺されぬようにガイアメモリが必要だからな
ア
『

サムライ・ドーパントが日本刀のような長い刀を腰から抜く。

実物と同じようにキラリと銀に刃が光り、エターナルの肩を捕らえようとした

その瞬間、

エターナルはゾーンメモリを取り出しマキシマムスロットに挿し込む。

【ゾーンマキシマムドライブ】

ゾーン

そのメモリが発動した瞬間、床にばらまいていたエターナルエッジを釘に変えたものが一斉に持ち主のもとへ帰るように矢のように向かってきては囲んでいたマスカレイドへ刺さった。

『ぐあ…！？』

無数の釘がマスカレイドに刺さり

エターナルを囲んでいたマスカレイド達がいつせいに倒れ伏した。

役目を終えた「釘」はエターナルの腕と共にジーンの変化が解けエターナルエッジへと姿を戻す。

『くっ…』

サムライ・ドーパントはその光景に驚きを隠せなかった。

『どんな理由があるにせよ。ガイアメモリには手を出してはいけない！』

次は…お前だ！』

エターナルエッジに再びジーンを挿し、

エターナルエッジを日本刀のような長い刀へ変えていく。

白い柄に青銀に輝く刃のエターナルソードを構える。

『某に刀で挑むか。』

サムライ・ドーパントが刀を構える
その構えは剣道の構えに似ていた。

エターナルは肩膝をつき刀にエターナルメモリを挿しマキシマムドライブを発動させる

【エターナルマキシマムドライブ】

『てやああああ!!!』

サムライ・ドーパントが剣道の構えのまま頭を攻撃しようと振りかぶり足を一步動かした瞬間、

エターナルは一気に刀を振る

『エターナルウェイブ!』

振った衝撃波が青い波のようにサムライ・ドーパントを斬りつけ、サムライ・ドーパントは爆発した。

エターナルは刀をぶんと振るいエッジに戻し、

自らの変身を解く。

かしゅん――

マキシマムドライブに成功した折、エターナルは変身を解き、メモリを回収しようとした。

彼の時代ではメモリはマキシマムドライブ後も残る。

そのため彼はメモリを得ることが出来たのだ。

だが、使用者の男から排出されたメモリは砕けていた。

『え・・・？』

メモリがくだけた？

少年は自分の目を疑った

今まで、相手をしていたメモリは砕けない性質のメモリだったからだ。

『これはどういう事・・・』

少年は砕けたメモリを覗き込むように見つめる
すると突然

『はいはい、そこまで』

急に右腕を誰かに捕まれ乱暴に背中にひねりあげられた。

『痛たた！い、いきなり何す・・・！』

『はいはい、暴れんじやないよ。暴れなきゃ何にもしないから』

『いきなり何するんですか！貴方一体…』

少年は怒鳴るが自分を捻った男は少年の言葉を無視し、腕時計を見る

『俺は「こつこつ」の「こつ」です。』

男が見せたのは警察手帳だった。

(け、警察！？警察って…)

少年は目を疑った。

目の前の男は自分と同年くらいであり、警官と言うにはふさわしくない黄色いメッシュのライダージャケットを着ているのだ

『13時24分、ガイアメモリ不法所持の容疑でお前を現行犯逮捕する』

『ガイアメモリ不法所持！？ってちょ、離してください！おれは犯罪者じゃな』 『はいはい。話なら署で聞くから、』

警察官の男は手錠を取り出し有無を言わずに手にはめる

『ちょ、ちょっと待って！ひったくり犯が居てそれでおれは――』

『ひったくり犯を捕らえてくれた事には感謝するよ。』

俺の仕事一つ減ったし。本当なら感謝状の一つでも送りたいんだけどでもお前真つ白怪人になっただろ？」

すっかりノビている男にも手錠を掛けては警官が言う

『ま、真つ白怪人！？』

少年は目を見開いた。

この姿をそんな風に例えられたのは初めてだった。

『真つ黒いマントの真つ白怪人。俺はそう思ったけど違うの？』

お前が人襲ったか襲わないかは差して問題じゃな…ってどうした？』

(真つ白怪人…初めて言われた。)

落ち込む少年を見て警官の少年は続ける

『まあ、とりあえず俺はこのままお前を連行するから、上着被る？』

警官はそう笑いながら自分のジャケットを脱いで少年の頭に被せ手を引き始めた。

それから30分後、少年は風都署の取調室に居た。

自分を逮捕したこの男は「風森勇樹」と言う警察官らしい

『あ、あの…喋ったら帰してくれます?』

そう少年が不安げに問いかけると勇樹が言う

『発言に問題が無ければ帰れると思うよ。』

んじゃ、まず名前ね』

勇樹はペンと紙を用意し少年の向かい側に座る

『う、上野進也です…』

『上野進也、年齢と学校名』

『17歳、あと学校は通っていません』

『やっぱり仮面ライダーやってると学校は無理…か。んじゃ、職業』

カリカリとペンを進めながら勇樹は呟く

『職業?今のところはその仮面ライ』無職ね。んじゃご両親とか家族とかと暮らしてるの?』

『い、一応父さんと…って無職って強調しないでください。』

一応傷つきますと呟く進也、

『なるほど…んで、友達居るの?』

勇樹の質問はあらぬ方向へと飛んでいた

『と、友達！？今はおれの周辺の事聞いているんじゃないんですか！？どうしてメモリを手にしたとか、』

『ま、交友関係も立派な身辺だ。んで？』

『友達、というか、おれの住んでるアパートには親しい人が数名います』

『ふーん。』

勇樹の顔があからさまに不機嫌になった

『と、言ってもその人たちの前では変身した時は…あ、二人除いてはありません。』

『その人達は受け入れた…と。んで？真っ白怪人になった経緯は？』

『あ…それはおれがエターナルのメモリを受け取ったからで…』

『エターナル、ね。エターナルと言えば20年前風都を震撼させたと言われる事件の首謀者が握っていたメモリだと聞くけど』

お前はその事知ってるの？』

『あ…おれは風都に最近来たばかりで…』

『んじゃ、まったく知らないわけだ。かつてその所持者が何をしたか…は。なるほどな。』

まあ・・・事件は20年前に起こった出来事だから、余ほど恨みが積もってなけりや雨風に晒されないだろうけどいつから活動続けてたの？俺はそんな真っ白怪人の活躍の話なんて聞いた時ないけど』

頬杖を付いてはもはや取り調べではなく与太話感覚になっている勇樹、
のらりくらりと怠そうに喋る勇樹だがその言葉は進也の耳に衝撃を与えた。

『じ、事件って・・・20年前なんですか！？』

(それじゃあ・・・青山さんが言ったあの言葉は？)

以前、青山と言うアパートの住人の近くで変身した時に進也は青山に告げられた

「あまり人前で戦わない方が良い・・・」と

進也の表情は険しくなっていた
それを見た勇樹が口を開く

『もしかして何処かからか攫われてきた？』

『どつという事ですか？』

『まあ・・・ぶつちやけ言つと、ここは2031年だつてことだ。
年代出してから妙に焦りだしたからそう思っただけ。』

進也は勇樹の言葉にドキリとしたが安心も同時に生まれた。

『はい・・・その信じて貰えないかもしれないかもしれませんが・・・そう、です。俺は2011年の風都からやってきました。貴方の風都ではない別の世界、パラレルの風都から。』

メモリを始動させたらなぜかこの世界に居たんです。

それでおれのほかにもう一人・・・

「松下 里美」っていう女性と来たんですが逸れてしまってます」

『デート中に大変だったな。』

勇樹がぼつりと言うと進也の頬が赤くなる

『デ、デートとかそんなんじゃないです！ふ、二人で歩いてたらドパーパントに出会って』

『ふーん・・・まあ、お前はあの松下さんっての探さないと帰れないわけだね』

よし、んじゃ取り調べはここまでにして、鳴海探偵事務所に行こうか。』

勇樹はパンつと手を叩いては立ち上がる。

『探偵事務所に・・・ですか？』

いきなりの話に戸惑っていると言葉は淡々と話す。

『人を探すなら探偵事務所だろ？』

まあ…「異世界」からやって来た人間なら「こっち」の情報も必要だと思っし。』

「いこ、いこ」と話す勇樹だがぴたりとその足を止める

『ところで、その松下里美って。』「さっちゃん」は可愛いのか？

『さ、ささ、さっちゃん！？ い、いきなり貴方は何を…！』

『いやぁ…俺のドストライクならお近づきになりたいなぁ…と。』

『ふ、ふざけないくださいー！』

指でハートマークを作ってはニヤニヤしている勇樹に進也は真っ赤になりながらも言っ

『でも真面目に、写真ある？左達に心当たりあるかどうか先に携帯で確かめたいからさ』

『写真ですか…写真は…』

と進也は再び真っ赤になる

『え、なに！？持ってないのか？』

『こんな事態になるとは思ってたなくて…ってどうしてそんなに驚く必要があるんですか』

『いやあ・・・気になる女性の写真は盗撮してでも入手するでしょ。ほら、俺なんてコレ撮ったんだ。』

勇樹は自身の携帯画面を進也に突き付ける

そこには照井と見知らぬ女性が並んでいる写真だった
しかも照井はカメラを見ていない。

『これ一枚しか撮れなかったけど素敵な写真だろ?』

『警察官が盗撮なんかしていいと思ってるんですか!?!』

『大丈夫。バレそうになった時、「重要なんです」とか言っておけば市民なんて簡単にだませるから。』

案外警察手帳って使えるよ?取得してみたら?』

お気楽に話している勇樹に進也はがっくりと肩を落とす

『貴方のような人が警察だなんて...どうなってるんです?この時代』

『結構大変なことになってる。とだけ今は答えておくよ。』

んじゃ、「釈放」と言う形で行こうか。

えーとなんて呼ぶ?候補は「進也」「進君」「進ちゃん」あるよ』

『普通に進也でお願いします。』

進也はきっぱりそういうと

手錠を外され探偵事務所へと向かう

その途中の自販機で勇樹は進也に350mlの缶ジュースを渡す

『ほい。いろいろ失礼した詫び。受け取ってくれよ』

可愛らしい「ふうとくん」が描かれた缶を進也は開ける

此処に来てから水物を取っておらず、そして驚きの連続で、喉がカラカラだった。

缶に口をつける甘さ控えめのソーダー水が口の中に広がった。

『美味しい・・・』

『ふうとくんサイダーのソーダ味だ。ほかにグレープ、オレンジ、メロンがある。』

事務所の冷蔵庫にもあると思うから気に入ったなら例の松下さんと飲めばいいよ』

勇樹はそういつと自分の分を買い喉に流しいれた。

今回進也が下りてきた場所は

ちよつとした世界観と時代が違った風都だった。

この世界には名前が無い

外部から神隠しに遭いこの世界に入り込んだ人間はこの上野進也が

初めてだからである

先ほどであったドーパントの話では
仮面ライダーが居ないと言った
けれども彼は探偵事務所に自分を案内すると言っ

それがどういう事なのか
進也はまだ知らない

ここは

仮面ライダーが消えた風都
そこに居るのは妙な明るさを持つ少年警察官

そこで彼は何を見るのか

Fに平和を

その物語が静かに始まりを告げたのだった。

いかがでしたでしょうか？
進也君は大丈夫ですか？

コラボの話を受け取ってくださった時に、出会いはどうしようかと考えていて

当初考えていたのはライダーバトルでしたが
進也君を現行犯逮捕してみました。

そして、本当なら別のテーマがあっただんですが
せっかくエターナルが来てくれたので
ヘリチャーターして蒲原がやらかしました。

いえね？

実は前の章の26本のメモリの男はマジシャンメモリを出したくて
そのメモリの出所としてのただの売人、使い捨てだったんですが
ベルト様の世界のメモリが紛れ込むのも面白いな、と言う事で、再
出演

名前までつきました（笑）
出せおめでとう吉崎君。

この章では実は前の章の伏線を回収しています。

そして次回も伏線を回収していきます。

それがどこなのか
私にもわかりません

ただ話に詰まったら前の話を読んで

伏線じゃない部分を伏線にして描写するという感じですが

今回の話、ぶつちやけベルト様の作品を読んではいるが
此方の作品を読んではいない
と言う方のために
進也視点？で進んできます。

登場人物設定とか

データとか更新してませんから見るともありません。
なので簡単にご説明をしました。

ベルト様の作品からいらしたでもなんとなく世界観を掴んでいただ
けたら
嬉しいなあと思ったりしております。

最後にベルト様へ

今回のコラボを承諾していただきありがとうございます。

進也君との共演は物凄く楽しみにしていました^^

私の腕は未熟なのでベルト様が自由に動かしている進也君とはかけ
離れてるかもしれません

手直し等の要求有りましたら

気軽に言ってください。

ありがとうございました。

Fに平和を／永遠の傷跡とdancing honey(前書き)

コラボ2章めです。

ちよっとシリアスかな

Fに平和を／永遠の傷跡とdancing honey

進也と勇樹が風都署を出て数十分、
鳴海探偵事務所に着いた。

(ここが20年後の鳴海探偵事務所…)

進也は無意識にドキドキとしていた。
自分が翔太郎達の先を見るのである。

勇樹が扉のドアノブを開くと

『ただいまあ。』

自分の家のような感覚で声を上げた。

勇樹がただいまあと言つと「おかえり〜」と4種類の声が返ってくる。

その主は1人の女性、そして髪をクリップで止めている不思議な雰囲気を持つ、進也と勇樹と同一年くらいの少年、翔太郎、照井竜であつた。

『あら・・・お友達?』

髪をポニーテールにしている女性が進也を見て勇樹に問いかける

『そんなワケねえだろ?コイツ大祐以外友達居ないんだし、
またビジネスパートナーか警護対象じゃねえのか?』

と翔太郎がいつものデスクに座りながら少し投げやりになつて、その横のベッド、不思議なオーラを持つ少年が人差し指で唇を撫で進也を見つめながら言った。

『確かに彼の交友関係に関する情報は「久里大祐」の本のみだ。興味深いねえ…』

勇樹が同じ年の男の子を連れてくるとは、君はいったい何者なんだい？』

異世界からやってきた進也を此処の事務所のメンバーが知るわけがない。

と言うより進也もこの少年が気になっていた。

何はともあれ自己紹介をしよう、

そう口を開きかけたとき

『こいつは俺の友達だよ！「友達が出来ない可哀想な奴」みたいな言い方じゃがって、失礼な奴だな。』

先ほどの翔太郎、不思議なオーラの少年が呟いた言葉にムツとした勇気が唇を尖らせながら言う

『だってそーだろうが。大祐以外の交友関係ないんだろ？』

『なっ…ないけど！』

コイツはさつき知り合っただよ。

「上野進也」って言う男だ。

さつきそこでガイアメモリ不法所持容疑で逮捕して事情聴取した仲間なんだ

コイツは異世界からなんか神隠しにあつて来たらしくて、別の風都

から来たみたいなんだ。

別の風都で戦うエタノールとかいう真つ白怪人さんだ。』

『う、上野進也です。よろしく願いします。』

勇樹が進也の紹介を終えると進也はぺこりと頭を下げる。そんな進也を見て、翔太郎、竜は固まっていた。

『な、なんだよ・・・俺だって最近はコミュニケーションも...』エタノール...ってまさかエタノールの事を言ってるのかい?』

不思議オーラの少年が言う

『そうだけど・・・三人ともいきなりどうしたんだ?』

エタノールの名を出した瞬間から三人の進也を見る目が変わっていた。

『勇樹、エタノールって本気で言ってるのか?』

翔太郎が警戒を露にしている勇樹も目付きが変わる

『言った。だからどうしたんだよ。』

『どうしたんだ？じゃねえよ
何でお前がエターナルメモリ保持者と仲良くしてんだ？』

お前は知らないだろうがエターナルは風都を地獄に叩き落とそうとした悪魔が使っていたメモリだ。

そんなメモリ使ってるやつが友達だと？信用ならねえな。
何をたくらんでやる。』

『どうして君はエターナルメモリを持っている。翔太郎じゃないけれど君はどうしてこの場所にこれたんだい？』

『勇樹に近づいて何をしようとしている。異世界からやって来たなどと嘯いて「松下」と言う仲間の所で
勇樹を殺すのか？』

三人は風都タワー襲撃のあのA t o zの事件を思い出していた。

あの悪魔に何人もの命が奪われた事か・・・

メモリを封じ

フィリップを連れ去り

風都の住人をN E V E Rにしようとした人物

大道克己が使っていた

エターナル

その名を聞いて

身構えるのは仕方がないことだった。

悪魔と呼ばれた男のビギンズナイトを

彼らはまだ知らないのだ

警戒心を露骨に出す3名を見ては進也は少しばかり俯いていた。

先日、青山というアパートの住人の前でエターナルへと変身した時がある

そのとき、

1年前の事件の首謀者がエターナルを使い風都を震撼させたと言っ話を聞いた。

1年前の事件……

自分は風都を離れていたため、その事件は知らない。

エターナル

その保持者が風都に残した爪痕は大きいのだ

進也は翔太郎らの視線から感じ取っていた

『やっぱりおれ、自分で松下さんを探します。』

進也は一言呟く。

落ち込んでいるような声色ではなく、しっかりとした口調で芯を持ち言えばくるりと踵を返そうとする。

『待てよ進也！アンタ今、浦島太郎状態だろ！？どこ探すつてんだよ！』

その手を勇樹が掴む

今の進也は親しい人もおらず、探すアテがない

進也の存在を知る者はこの風都には「松下里美」以外いない。

「場所や建物が違うだけで基本的な地理構造は同じでした。松下さんもきつとおれと同じように所縁のある場所に足を運んでいると思います。」

「ま、待つてくれよ。女の子なんだろ？この風都は治安が悪いから犯罪に巻き込まれてるかもしれない俺も協力する！って言うかささせてくれ。」

とりあえず、その松下さんってのの人相を教えてくれ」

メモを取り出しでは勇樹はメモ帳に特徴を書こうとしていた。

勇樹が「仕事」と言わずに協力する姿勢を見せたのは翔太郎の前では初めてだった。

「髪は腰まで、黒髪、乳がでかい。そして風花高校の制服を着用。制服姿なら夕方までに探さないといけないな。」

今は14:56分だから…約3時間のうちに見つけないとヤバいな。」

「ヤバイ？」

勇樹が焦りだした姿を見て進也が聞き返す。

「今の風都は自慢じゃないけどドーパント犯罪が多いんだ。特に「学生」を狙った犯罪が多い。」

大半がマスカレイドだけれど、時たま違うのが居るんだ。

怪人相手じゃ催涙スプレーや軽い護身用のスタンガンを持っていた

としても意味がない。

松下さんはドーパントに出会ったらどんな反応するの?』

『ま、松下さんは、以前は怯えてました。学校にドーパントが乗り込んできて襲われそうになってから足が震えて動けない、そんな感じで。

最近、少し平気になったようなんですが…』

『足が震えるのか、と言う事は変態の餌食になりやすいな。ただでさえ学生服なのに…。』

出会った瞬間マスカレイドの股間蹴り上げるような度胸あればいいんだけど…。

さっさと探さないと、トラウマ掘り起こす結果につながるかも知れない。』

勇樹はアトラスを取り出し

何処かへと電話をかけていた。

その姿は先ほど盗撮を正当化しようとしていたバカの顔ではなくちゃんとした警察官である。そう進也は感じた。

ピッ

勇樹は電話を切った。

タイムリミットは3時間――

『準備は整った。じゃ、「松下里美」を探すぞ?』

勇樹はアトラスを窓から飛ばしヘッドホン、シエルスピーカーを耳へとつけ、

先頭を切って事務所を出ようとする

『勇樹さん、あの・・・どうして、おれを？』

進也がそう後ろから投げかけると

勇樹は振り向き様に言う

『俺の知り合いによく似てるからだよ。』

どんなに主張しても、どんなに傷ついて街を守っても「偽物」と言われた俺の知り合いに』

とげとげしく、ワザとらしく三人に言えば
くるりと踵を返し出て行った。

《俺は――俺は仮面ライダーなんです！街を守ってきた……だからっ！》

《仮面ライダーはダブルとアクセルだけだ。そんな着ぐるみを着て私を馬鹿にしているのか！

君のような生徒は本学には要らん！！》

それは勇樹の知り合いの話である

『とりあえず・・・風花高校とかは？』

事務所を出た勇樹は進也に提案するが進也は俯いたままだった。

『…………エターナルは、本当に皆の心に深い爪痕を残していたんですね。』

師匠「翔太郎さんがおれをあそこまで睨んだの初めてでした。』

『らしいよ。俺は資料でしか見てないけれど、』

『おれの世界もそう・・・なんでしょうか。』

『だろうね。その姿で戦闘を繰り返していればいずれはぶち当たるんじゃない？』

エターナルを恨む人間とかに。』

『…おれがみんなの前で変身したらみんなも翔太郎さんみたいに…』

『そうかも・・・な。』

『親父はどうして、おれにこのメモリを…』

そう進也が呟いた瞬間

勇樹のアトラスに通信が入った

『はい、はい・・・ええっ！？あ・・・はい、わかりました！今いきま
す』

電話を切ると勇樹は焦りに焦っていた

『進也、大変だ。風都に多数のドーパントが出現したらしい。俺、ちよつと行かないと!』

勇樹はアトラスを手に電話を掛ける

『大祐! 風都南区三丁目に向かつてくれ! はあ! ? そっちにもドーパントが居る! ?
どういふ事だよ! 』

勇樹が声を荒げると受話器の向こう側、大祐は倉庫に隠れていた。

『俺だつて何がなんだかさっぱりワケ分からん!
松ちゃんのお使いこなそ思つたら、道に女子高生が倒れとつて助け起こそ思つたらその子に空からメモリが降つてきて刺さつてもたんや! 』

《はあああ! ? なんで空からメモリが降つてくるんだよ! ! 》

『せやからこつち先でええか? ! 』

《わ、わかつた。6分以内にケリつけるぞ。》

倉庫に隠れていた大祐の腰元に鳩が飛んでくる
鳩はそのまま大祐の腰に定着した。

定着すると左側にアクセルメモリが転送されている。

それを確認すると大祐は特注のジャージの胸ポケットから紺色のマジシャンメモリを取り出す

【ACCEL】

【MAGICAN】

『変身！』

大祐がそういうと

大祐の姿は左半身が赤、右半身が紺、そして黒いマントの上に紺と赤の二色のスカーフを巻いた複眼が青のダブルが現れる

大祐が変身した直後、倉庫の扉が碎け、白鳥の羽とバレリーナのステージ衣装をモチーフにし、頭に黄色い輪っかのようなリングのついたドーパントが現れる

《なんだあのドーパント》

赤い側の青い目が光る

『なんか「鳥＋天使＋バレリーナ」みたいなモンくつついてるから空飛ぶか身軽ちゅーことは予想できた。特殊系統やなさそつや。ほんならユウちゃんの出番やで。』

《犯罪者が相手じゃないならやりにくいな……。意識はありそつ？》

『せやなあ……。刺さった瞬間、ヴオオオオオオ言うってた。でもそのあとに……。』

「たす——て——うえ——くん」言つてた。」

《助けて？うえ——くん？》

そう勇樹が聞き返した瞬間

真っ白なドーパントはうめき声をあげた

「——けて——たす——うえ、のアアアア、アア——！！！」

真っ白いドーパントは頭の輪を外し、フラフープのように持ち構える

《助けて……うえの、くん。上野……って！もしかして進也のガールフレンド!?!?》

『深夜のガールフレンド？ゆ、ユウちゃん、まさか自分モテるから言つて朝昼晩夜中で彼女を分けとるんか?!』

勇樹の発言に大祐はビックリ仰天と言つ表情をした。

《んなワケあるか！なんで俺が4股しなきゃいけないんだよ！それより……やるしかない……よな。》

コレ、》

「……うえ……」

そう呟くドーパントに物凄く気が進まないと言つ顔をしながらも勇樹は覚悟を決める

アクセルマジシャンが勇樹の主導権で動き出すと真っ白なドーパントが輪を華麗に手で躍らせる

勇樹の主導権により

アクセルマジシャンはその輪を見切りまっ白いドーパントの腹にケリを入れる

まっ白いドーパントはいとも簡単に転んだ。

使用者は戦闘経験がない普通の女の子。

メモリに操られていようと力は弱いようだった。

まっ白いドーパントはすぐに起き上がり華麗に飛びあがる

トーシューズのような足先は鋭利にとがっており上からアクセルマジシャンを突き刺そうとする

アクセルマジシャンはマントを脱ぎ捨て、バク転でそれを避けるが、相手は身軽なのだろう

その速さについていき

アクセルマジシャンを壁際に追いつめる

壁の横に真っ白なドーパントの足が突き刺さる

《っはぁ・・・はぁ・・・白くて翼生えてるから天使「ANGEL」とかいうメモリとか思ってたけど、

俺について来れるなんて

打たれ弱い割に身体能力すげえ・・・つか足が怖い!》

『恐らくアレは、使こうたらメチャクチャ身軽なる言っ感じのメモリやな。』

おまけにあの輪っか、天使の輪やのうて』

《ふおおお!?トーシューズのリボン外れたぞ!?
それにあの輪っか棒になってリボンくっついた。』

『そうか、ホンマにあれは…身軽や！』

気いつけやユウちゃん！そいつのメモリは

「Dancer/ダンサー」―舞踊の記憶や。』

《だ、ダンサー！？ダンサーってよりバレリーナに近い様なっつととお！？

どうすんだコレ！リボンが》

アクセルマジシャンは波のように押し寄せるリボンに防戦を強いられる

『ダンスが指すんはミュージックビデオのPVのようなカジュアルなもんだけやないぞ！』

くそ・・・ぴよこぴよこ動き回られたらリーチがあわへんな…。

そうだ！シユラウド言うもんからもう一つメモリ送られてきたんやっつた。

ユウちゃん。それ挿すからまっとき。』

大祐はオレンジの強い純正の「A」のメモリを取り出し
マジシャンメモリを抜いて挿しこむ

【ACCEL】

【ACROBATIC】

その瞬間、マジシャンの紺色はオレンジ色の粒子に包まれ
左側が赤、右側が橙、目が青の姿になる

アクセルアクロバティック

メモリから名前を取るのならば今の彼の姿はこうである。

『アクロバットメモリは防御力低下する代わりに跳躍力、バランス力が著しくあがるメモリや。』

《なるほど・道理で体が軽いわけだ。でも大祐、筋肉痛大丈夫『んな事言ってる場合ちゃうやろ？さっさとあの子戻したらなあ…可哀想やって。』

《お、おう・・・》

勇樹は主導権を握ったまま倉庫の細いロープに捕まり、細いロープの上に立ち片足をあげりポンを避けたり、移動したりを繰り返しりポンがロープに完全に絡まったところでドーパントの腹を思い切り蹴り上げた。

《今、戻してあげるから待っててな。進也にちゃんと会わせてやるから》

【アクロバットマキシマムドライブ】

勇樹はメモリをマキシマムスロットに挿し込むと倉庫の天井の限界まで飛び上がり上から蹴りを降らせた。

『アクセルアクロバッカー!!』

「あっ・・・あああああ!!」

真っ白いドーパント、ダンスドーパントはアクセルクロバティック

の攻撃を受けて爆発した。

《んじゃあ、その子を頼んだよ。俺次に行かないと・・・》

変身を解く際に勇樹がそういつと大祐が止める

黒髪の美しい可愛らしい女子高生が横たわる横、そこにピンク色で

「D」と書かれたメモリが

メモリブレイクされないまま存在していた

『これ、メモリブレイク失敗したんか？』

いつもメモリブレイク後にはメモリは砕けていた

なのだが、「D」と書かれたメモリは砕けてはいない。

アクセルアクロバティクは倒れている「松下里美」と思わしき少女の首筋に手を触れ、脈を確かめる

《いや、成功したみたいだ。もしかしたら新しいタイプのメモリかも知れない。

まあ・・・よく分からないから、進也を此処に連れてくる。

それまでその女の子の傍に居てくれ。》

『分かった。』

勇樹の言葉に大祐がドライバーからメモリを抜き取ると変身が解除され

大祐がそこに立っていた。

その数分後、1人の少年がこちらに向かって走ってきた。

『松下さんッ！』

少女に向かって少年は声を上げる

勇樹は傍に居ないが、言っていた「進也」なのだろう

大祐はそう思いながら説明をするために近寄った。

『お前が「進也」ちゅー男か？』

『は、はい・・・勇樹さんから聞いてます。大祐さんですよ？』

『ほお、俺んこと話してあるなら自己紹介はいらへんな。』

ソレ、アンタの「松下さん」でおうてるか？』

『はい、俺の探してた人です。でもどうして松下さんがこんな場所
で...？』

勇樹さんも物陰から現れた途端に焦ってバイクに乗って出かけてし
まいましたし』

(なんやコイツ、ユウちゃんが仮面ライダーってこと知らへんのか
い。)

まあ・・・一般人相手に変身してしもたらエライ騒ぎなるからしゃー
ないか)

『その松下さん結構ドエライ目に遭ってたで？』

せやから病院行きたいんやけど色々面倒やさかい、ユウちゃんの家
にいこか。

俺の部屋でもええけど、そないな姫さん寝せられるような清潔なベ
ットが無いさかい。』

そういえば大祐は北側を指さす。

それと同時に進也は眠るように力のない里美の体を背負う。

(勇樹さんの家、かぁ・・・)

警察の宿舎なんだろうか

と進也は考えながら先頭を歩く大祐の後ろをついていった。

倉庫から北に進んで23分

目の前に普通の家のような外観をしているが規模がでかい家が見えた。

『ここがユウちゃんが今住んでる家。』

『えっ……!?!』

『風都で一番の金持ちお嬢様からプレゼントされたものらしいで。此処なら空き部屋が何十とあるし、ふかふかのベットもある。その姫さんもゆっくり休めると思う。』

待っててな、今鍵を開けるさかい』

扉を開けようとして鍵の音がし、それを見た大祐は大祐は鍵穴にハンカチを被せる。

豪邸であるが鍵はオートロックとか凄いモノではなく一般のモノらしい。

それよりも目の前の少年は何をしているのだろうか
鍵穴に鍵ではなくハンカチを被せて爪でこすっている。

『1、2、3！』

かちや——

大祐がハンカチを取るとかちやりと鍵が開いた音がした。

『ほな、開いたで。』

大祐は玄関の扉を開けて進也を招く

『ええっ！？い、今…貴方一体何を…』

『ん。俺マジシャンだからこつこの得意なんや。
ビックリした？』

『ま、マジシャンだからって鍵も使わずにハンカチだけで鍵を開けるなんて

す、すごいですね。』

（ハンカチの裏に合い鍵隠して回しただけやけど、案外驚くもんなんやな。

次の手品のネタに取り入れてみよ。）

深夜の驚く顔に少し満足した大祐は適当な部屋を貸す

『ここに姫さん寝かしたって。』

『あ、はい。分かりました。』

進也は真っ白な清潔なベットに里美を寝かせる

『ごめんさい、松下さん…おれが逸れたばかりに…』

すー、すーと規則正しい息を吐きながら目を閉じている里美の髪を触りながら進也は一言そう呟く

『少しここで待ってて。大祐さんとお話するから…』

そして部屋を出た。

Fに平和を／永遠の傷跡とdancing honey（後書き）

と言う事で第2章めです。

鳴海探偵事務所の三人には少しだけ悪役を買ってもらいました。

Vシネエターナルの冒頭で「風都をく傷つけた悪魔野郎」みたいな台詞言ってたんで大丈夫かな？

勇樹にとっては20年前の事件ですが

翔太郎らにとっては1年前の事件なんです。

当然そこにはジエネレーションギャップがあります。

ジエネレーションギャップからくる考えの差からくるすれ違いと受け取っていただければ嬉しいです。

そして、今回の松下さんがなった真つ白ドーパント

最初は思いつき「エンジェルメモリ」でした。

電王のジーク的な神々しいイメージです。

ですが、これじゃあ、つまらないなあ・・・と考え

天使の輪っかをフラフープのように扱うドーパントはどうだろう

じゃあ、新体操的な攻撃方法にしよう。

でも新体操の服って表しにくいなあ・・・

んじゃバレリーナにしよう。

で完成したドーパントです。

ダンサーのメモリのダンサー・ドーパント

名前が少々ダサいですが許してください。

当初、バレエドーパントにするつもりでした。

でもダブルは「ウィルス ヴァイラス」と英語表記なのがお決まりでバレエはイタリア語だと言うことが辞書を見て発覚し

ダンサー・ドーパントになりました。

そしてアクロバットメモリ

軽業師／曲芸師の記憶のメモリ

最初はクラウンとかサーカスとか考えてましたが、アクロバット＝空中ブランコや綱渡り、少々危険な身体を使った戦いと考えたので勇樹に合ってるかなあ・・・と

裏設定として、このメモリを使うと大祐は3日の筋肉痛に苛まれます（爆笑）

以上です。

今回は謎の碎けないメモリと進也くんの世界の説明とそれに対する勇樹の反応がメインです。

面白いと言っただけじゃうれいす
それでは、

Fに平和を／EXEの計画、そして男は踊る（前書き）

「Fに平和を／EXEの計画と永久の戦士の誕生」の訂正バージョンです。

誤字脱字や一部台詞の改訂、それに伴う話の変更を行いました。

ベルト様には大変なご迷惑をおかけしました。
すみません。

Fに平和を／EXEの計画、そして男は踊る

それから勇樹の家に翔太郎らが集まった。
勇樹が電話で連絡を入れたらしい。

亜樹子は寝間着を持って里美が寝ている部屋に入る
制服姿ではゆっくり休めないであろうと言う配慮から着替えさせる
ためである

里美の部屋に案内された亜樹子は布団をゆっくりとると
翔太郎らが出るか出ないうちに

『ほわあゝ…胸がでつかい…』

と呟いた。

亜樹子と里美の胸の大きさはマシユマロと肉まんの差である。

亜樹子のこの言葉を聞いては進也は顔を赤らめつつも亜樹子の里美
に対する反応がやさしかったので
安心して里美を亜樹子に任せることにした。

未だにこの女性が何者なのか分からないのであるが…

大きな大広間に進也が移動すると勇樹が帰っていた。

椅子に座っているのは翔太郎、フィリップ、大祐
そして傍の壁に不思議と腕を組み同じポーズで寄りかかっている勇
樹と竜の姿があった。

『松下さんは？』

と勇樹が訊ねる

『ええ、あの亜樹子さんと言う方が介抱してくれるみたいです。ありがとうございます。』

そう進也は言いながら竜、翔太郎の方向を見る
相変わらず態度は変わらないようだった。

『それでさ、進也。1つ聞きたいんだけど。進也がエターナル持つてるって事は

そっちにもガイアメモリ組織が復活している。って事だよな。
どんなメモリ？』

進也が少し落ち込んでいる表情を見るなり勇樹は単刀直入に言葉を
発した

『おれの世界のメモリ、ですか？』

質問内容に若干、言うべきか迷ったが、進也は口を開いた。

『おれの世界のメモリは「T×メモリ」と言つて、それをバラ撒いているのが「アルファベット」と言う組織です。』

『T×メモリ…か。それでそのメモリの特徴は？』

『はい、特徴と言えば此処のメモリと違うのが
「メモリブレイクしても砕けない」と言う点でしょうか。』

あと、コネクタ処置をしていなくても人体に挿す事が可能でコネクタ処置をしていない場合でドーパントになった時はドーパントになった時の記憶がありません。

それがおれの風都のメモリです。』

進也が説明すると、勇樹はポケットから「W」「B」「X」のメモリを取り出す

『これはさつき俺が電話を受け向かった先でのドーパントが所持していたメモリだ。』

どれもこれもメモリブレイクはして、人間が生存しているのにメモリは砕けなかった。

進也、お前の世界のメモリで間違いないか？』

進也はその三つのメモリを覗くと首を縦に振った

『そうです。間違いありません。で、でもどうしてこれがこの風都に…？』

進也は驚きが隠せなかった。

何故この世界に自分の世界のメモリが存在しているのか・

『きっとそれは君がこの世界に紛れ込んだと同時に紛れ込んだ、と考えるのが鉄板だね』

驚きが隠せない進也へとフィリップが投げかける

『このメモリはメモリブレイクができるT1方式でマスカレイド

メモリでは人は死なず、暴走により巨大化はしないと云うのが特徴だ。

「philip type first Memory」の略でP1メモリとこっちの組織、「EXE」は言っているらしいが

トンでもないものを招いてくれたね。

敵の組織がこのメモリを拾い研究し、量産したらどうするつもりだ
い？」

フィリップは敵意のまなざしを進也に向ける

『そ、そうしたら倒せばいいだろ！？ただメモリの特性が違うものが街にバラ撒かれるだけなんだ。

何も変わらない。』

進也はフィリップのまなざしに黙ってしまった。

この世界に無いメモリ「TXメモリ」の存在により進也は完全に「
災いの招き猫」として見られていた

それに不満を持った勇樹が言葉を発するとフィリップが言う

『「何も変わらない」だって？

一体何が変わらないんだい？

「TXメモリ」と言うのは以前僕たちが扱った事がある砕けないメモリ「T2方式」だ。

今までこっちのメモリはメモリブレイクをすると砕けた。

それが砕けない、

そして「TXメモリ」は僕らにとっては未知のメモリだ。

使用者への安全、暴走の傾向僕らはそれをなにも知らない。

それなのにソレを量産されたら手に終えると思うのかい？

確実に状況は「変わる」んだよ？勇樹…君はもう少し…」

考えたまえ

そうフィリップが告げようとしては

勇樹は咳く

『なんで進也をそんな目でしか見ないんだよ…』

『そうですよ…』

と声がした。

声が出た方向を見るとピンクのパジャマに身を包んだ里美が
亜樹子に支えられ部屋にやってきていた。

『う、上野君は、悪者じゃありません！』

そう里美は言った。

『上野君は翔太郎さんたちが「アルファベット」に捕らえられてか
らたった一人でこの街を守って来たんです。

無理矢理ドーパントにさせられた翔太郎さんを救ったのも上野君で
す。

わたしはちゃんとこの目で見ています。

上野君は悪者なんかじゃない！

この風都の仮面ライダー…。

仮面ライダーエターナルです！」

凜とした声は部屋の隅々まで行き渡る

(松下さん…)

里美の言葉は強かった。

鈴のように清らかに響いたその声は

翔太郎達の先入観と言ったものや、熱を冷ましていった。

その証拠に里美の言葉を「嘘である」と誰も言わなかった。

『……』

里美はそのあと立ちくらみに似た症状を起こす

話し声が聞こえて

居ても経っても居られず来たのだろう。

『もう……いい？お部屋戻ろう？』

立ちくらみを起こした里美に亜樹子が声を掛け、元来た道を帰って
いく

その後ろ姿を見て進也は心に温かいものを感じた。

——わたしはこの目でみています。

上野君はこの街の仮面ライダーです——！

その後ろ姿をいつまでも見ていた進也へ、頭の冷えた翔太郎が口を開く

『今の里美ちゃんの話は本当なのか？』

『本当です。「アルファベット」と言う組織が翔太郎さん、フィリップさん、名前は忘れましたが照井さんの奥さんを「TXメモリ」の実験台として連れ去り、ドーパントにしました。

今は翔太郎さんを救いだして翔太郎さんと照井さんと一緒にアルファベットを追っています。』

進也が告げると翔太郎はピクリと眉を動かす

『照井の奴、結婚してるのか。』

『らしいです。新婚旅行中に襲われて奥さんを目の前でドーパントにされて連れ去られたと

本人の口から直接聞きました。

おれも敵に攫った犯人はエターナルである。みたいな事を吹き込まれた照井さんに攻撃されましたし

』

奥さん、と言うのはきつと亜樹子であろう

向こうでは亜樹子がドーパントになっている…

それを聞いて翔太郎は胸を痛めた。

『それで、1つ質問ですが、此処は20年後なんですよ？
どうして翔太郎さんたちは若いんですか？』

進也が鳴海探偵事務所に来て思った事である。

20年経ったのであればどんなに少なく見積もろうと年齢は40代。
それなのに目の前にいる3人は20代なのである。

本当はもっと早く聞いたかったことなのであるが、三人が警戒を露
わにしたため

質問は叶わなかった

『ああ、俺達とはある事情があつて20年前から来たんだ。』

と翔太郎が答える

『に、20年前…ってどうしてまたそんなところから。

…此処の世界の翔太郎さんたちは何処へ行ったんですか？』

その問いには勇樹が答える

『此処の世界の照井さんたちはこの風都には存在してないよ。
もう5年も前に組織に襲撃されて石像になつてる。

だからこの世界には仮面ライダーは居ないんだ。』

勇樹は淡々とした口調で述べた。

『仮面ライダーが居ない?』

『そうだよ。5年前に組織に襲撃されたからね。その時に照井竜も一緒だったから』

風都署は超常犯罪における要を失いドーパントに対応できなくなり、街の治安は一気に悪くなった。』

サムライ・ドーパントが言っていた言葉は本当だった
そう進也が悟る

『じゃあ・・・この街は誰が・・・? 松下さんは誰が』

『：さあ、そこは俺も知らないんだよ。ただ、非通知で通報があったら行ってみると
犯罪者が倒れてる。』

「仮面ライダー」ってのは死んでないのかもね』

軽くごまかしを入れる。

マジシャン変身の時は勇樹は進也のそばを離れた
したがって進也は勇樹の正体を知らない。

そして勇樹は

自らを仮面ライダーと名乗る事はない

『それより・・・』

そうへらへらと誤魔化しを入れて話していた勇樹の表情が途端に変わる

『はい?』

『照井さんの奥さんがドーパントになっているって本当？』

この話から進也を遠ざけたかったのか変えた話題だが

やっぱりそこに食いつくのか・・・

翔太郎らはそんな感情を抱いた

『敵は麻薬とか薬を左に投与していた形跡はあるのか？

照井さんの奥さん…所長さんの情報は何も入っていないのか！？
敵は何のために所長さんをドーパントに？』

勇樹は進也に息もつかせないくらいに質問を浴びせた。

その勢いに押されつつ進也は答える。

『わ、分かりません。ただ・・・強いメモリなどを投与されて

メモリブレイクをしたら命の危険もあるかと
でもおれのエタ—— 『い、命の危険だって！？』

進也が全部言い切る前に勇樹が声を荒げ叫んだ。

目はまん丸く見開かれ顔色は青白くなっている。

勇樹はその事実にもごもご動かした後

『お、おれも、俺もその人を助ける為に協力したい！！』

といきなり言いだした。

その言葉に翔太郎、竜、フィリップ、進也は驚く

『進也！お前の世界に俺も連れていってくれ！』

目の色を困惑に変えて絶る様に勇樹は言葉を放つ

『な、何かあつたんですか？い、いきなり…』

進也は大変困惑した。

冷静だった勇樹がいきなり冷静さを失ったのだ。

『俺、その人を助けたいんだ！だから頼むよ！』

頼むよ――

そう言われても無理な話である。

興奮し勢いが止まらない勇樹を翔太郎が諫めようとする

『頼むって言ってもよ、進也のケースは特例なんだろ？

俺達は進也の世界にはいけねえよ。諦める。

それにお前、他人の世界に干渉しないのが信条じゃなかったか？』

翔太郎がさういうと勇樹は翔太郎へ身体を向け口を開く。

『だって、母さんが無理矢理ドーパントになつてゐるって！

命が危険かもしれないって言うんだ！』

『はあ！？母さんが…って進也んとこの亜樹子はお前の母親じゃねえだろ？』

勇樹の理由に翔太郎は言う。

『は、母親じゃないのは知ってるよ！で、でも・・あ、会いたいんだよ！』

進也の所の照井さんにも…！』

勇樹は興奮したまま言った。

興奮した様子の勇樹はそう続け、それにまた翔太郎は言葉を返す。

『進也の所の照井を見てなにすんだ？そっちの照井も親父じゃねえだろ？』

『で、でも！俺、進也の所の照井さんに会いたい！そして一緒に所長さんを助けたいんだ！』

なあ、進也、俺も一緒に連れてってくれ！』

頼むよ、と勇樹は縋る様に頼み込んでいた

そんな勇樹に翔太郎は腹を立てた。

世界を超えるなんてものは

奇跡以外の何物でもない

進也は偶然、訪れたのだ。

帰りの手段も何もわからないから進也はこうして此处に居る。

それなのに連れて行け！を懇願する勇樹は言う事を効かない子供のようだ

そう思ったのだ。

『おい、勇樹…、お前さっきから自分が何言ってるのかわかってん

のか？』

翔太郎の目つきが変わったのを見て竜が大きく溜息をつく。

『わ、分かってるよ！でも俺…会いたいんだ！

一緒に戦いたい！「父さん」と一緒に母さんを助けたいんだ！』

その言葉は翔太郎にとって起爆剤だった。

後ろに父親、照井竜の姿があるのに勇樹は気にもせずそう言い放ったのだ。

此処に居る照井竜は父親ではない

そう言うように――

『てめえ！今の言葉もう一度行ってみやがれ！

何が進也とこの照井に会いに行きたいだ

どの面下げて言ってるんだ！

あア！？もう一辺言ってみるコラ！』

翔太郎は勇樹の胸倉をつかみその左ほほを殴り怒鳴った。

現状が分からない進也にとってはただ縮こまり黙ってその様子を見るしかなかった。

竜、フィリップも同じらしい。

もっとも、当事者である竜がキレないで黙って話を聞いていると言うのは進也にとっては新鮮なものだった。

『俺は、進也の世界に行きたい！進也の世界の照井さんに出会って
所長さんを助けたいんだよ！』

胸ぐらをつかまれても勇樹は動じずに言う

『どうして・・・会いたいと思ったんだい？』

そうフィリップが横から訊ねた。

『……「父さん」「母さん」に会いたい』

その言葉にぽつりと勇樹は呟いた。

翔太郎の堪忍袋が細くなつたようだが、フィリップが目で抑え、問
いかける

『父さん、母さんに会いたい？』

君のお父さんとお母さんは僕たちであつて

未来はどうか知らないけれど上野進也の風都の亜樹ちゃんたちでは
無い。

それなのに君は会いたいのかい？』

『会いたいよ……。だって俺の父さんと母さんが危険な目に遭つて
るんだから

助けたい。』

竜を目の前にして勇樹はハッキリと言った。

『てめえ……その言葉、俺達の時代の照井に向かって言う話かよ！！』

その言葉に今度こそ翔太郎が逆上した。

『照井はな…お前のために、これから好きな人が出来ても愛する人が出来ても』

亜樹子と結婚しなきゃなんねえんだぞ!?

お前を誕生させるために亜樹子と結婚すんだ。

婚約者を先に知って

1年以内に結婚するような運命背負って子供まで居る。

しかも籍入れんのが1年以内

恋も愛も知らねえまま照井は亜樹子の夫になるんだ。

照井はな、そんな決められたレールでも歩くって言うてんだぞ!?
照井はお前のためにこれからの人生を棒に振って生きていく決断をした。

そんな親ほつといて何が進也の世界の照井に遭いに行くだ!?

照井の息子ならな、目の前の照井の…自分の親父の背中を見やがれ

『!』

翔太郎はそう言つと乱暴に胸ぐらを離した。

その瞬間、

勇樹の表情がゆがみ、俯いては震えた。

『何も知らないくせに…よく言つよ。』

俯いたまま勇樹は言った。

『一般論並べてんじゃねえよ……。勝手に俺の過去を見て知ったくせに、鬼の首獲った気が!？』

生まれたときから直視できないくらいにラブラブだった二人を見て育ってきた俺にとって今の状況がどんなふうに見えろと思ってるんだよ。

どん、なに…みしいと思ってるんだ。』

勇樹は震えながら言う

竜は「はあ…」とため息を吐き翔太郎を睨んだ。

『俺だつてわかってるよッ！』

いくら言つたつて進也の世界に行けないことぐらい！

父さんが俺の為に頑張ろうとしてることぐらい分かってる！俺は子供じゃないんだ！

でも！

ただ…

進也の方が結婚してラブラブだつて言うのなら

俺は…俺は、やっぱりそっちに会いたい。

俺の記憶の「父さん」「母さん」に――

俺は二人の子供だからっ…!』

勇樹はそういつて家を飛び出して行った。

勇樹が去った家では竜が思い切り溜息を吐いては口を開いた

『左、俺の名誉を守ってくれるのはありがたいが
もう少し言葉にオブラートを被せたらどうだ？』

此処には上野がいるんだぞ？肩身が狭い思いをしたと思うぞ？』

『オブラートも何もねえだろ？アイツは何も考えちゃいねえんだ。
逆にどうしてお前は口を出さなかったんだ？』

『何故出す必要がある？言って何か解決するのか？』

俺と所長はまだ婚約はおろか関係すら進んでないんだ。
進んでいる方に傾くのは当然の話だろう。

ましてや、所長が・・・自分の母親が違う場所でも危険な目に遭っ
て居ると知ったら
取り乱しても仕方がない。

勇樹はまだ18歳だぞ。

大祐や俺達が来るまでは一人ぼっちだったんだ。
高校を退学させられた所為で同年代とのコミュニケーションも断ち
切られ、

唯一のそれは自分よりも年齢が上の要人であり警察は「上司」だ。いろいろ押し殺している部分もあるだけに実際のところ精神は実年齢よりも幼い。』

『けどよ・・・』

『それよりどうしてくれる。勇樹が家出したぞ。俺は勇樹の好きな場所をまだ知らないんだ

見つからずにTXメモリが刺さりドーパントになっていたらどう責任を取るつもりだ?』

竜は時計を見ては外へと出る準備を始める

『上野、』

ビートルフォンを外へと飛ばしながら進也は竜へ呼ばれた

『は、はい!』

いきなり名を呼ばれてビクリとする。

以前、勘違いで襲われてからほんの少しだけ苦手になっているいや、苦手ではないのだが・・・まあ・・・身構えてしまつのである。

『俺はTXメモリの事を良く知らない。勇樹を探すのを手伝ってもられないか?』

そう訊ねられては進也は頷いた

『わかりました。同行します。』

その頃勇樹は「G」「T」のメモリを手にしていた。

(っ・・・)

家を飛び出したのはいいが行くあてもなく彷徨っていたところにドーパントが出現したのだ。

自分の心情も関係なく現れるドーパントにイラだちも隠さずに向かったところ
やはり普段より冷静な判断を失っていたためか、肩に擦り傷を負ってしまった。

(…家に帰れない、よなあ……)

今宵は月の出ない夜

星々だけが勇樹を照らしている。

肩をハンカチで止血した箇所を押さえては星を見上げる。

今夜は公園で野宿しようか――

そんな事を考えていると路地から二人の男の会話が聞こえた。

『…何故、蒲原様はわたくしが買い集めた「TXメモリ」を街へとバラまいて

回収を命じたんだ？

まあ…あとは「W」「B」「X」「G」「T」「D」「M」のメ

モリがそろえばいいんだが・

城ノ内さん・蒲原様は何をお考えに？」

勇樹は咄嗟にその声に耳を近づける。

聞き捨てならない単語を耳にしたのだ。

そしてその声の方へ歩み寄ると二人の男が会話をしていた。

(城ノ内：！？)

勇樹は男が発した名前に息を呑んだ。

竜たちがここへ来る理由を作った敵の幹部である

(これはEXEも絡んでいたのか…。)

『吉崎さんは疑り深いんですね。蒲原様は最終テストをしているだけですよ。』

人体に挿しどんな効力を得られるか、TXメモリはコネクタ処置が要らないメモリだ。

どうなるのか全くの未知だね。』

『なるほど・・・それでどうですか、わたくしは幹部になれそうですか？』

『それは蒲原様が決めることだが、僕の掴んだ情報によるとその「アルファベット」の世界から2人、此処に訪問客が来ているらしい。』

「上野進也」「松下里美」「男女一名ずつの計2名
吉崎さん、EXEの幹部になりたいのなら、上野進也と言う男を捕
まえてきてください。』

城ノ内は眼鏡をくいりと弄る

『どついう事ですか？』

『彼は「アルファベット」の世界の住人だとさっきも話したはずだ
そして、仮面ライダーエターナルだと言う情報が我々が保有するガ
イアメモリ製造機の特異能力
地球の回線ほしのかいせんにより判明した。』

エターナルメモリは20年前に風都を震撼させた悪魔の男―大道克
己が持っていたメモリ。
それを使っている少年が居るとしたら
調べてみない手はない。』

城ノ内はくすりと笑い
ロストドライバーと「F」のメモリを吉崎に渡した。

『これをお前にやろう。
僕たちは風都の廃校でお前を待つ。「上野進也」を捕らえる。
そのための力はお前が収集したガイアメモリと…』

城ノ内がゾーンメモリを発動させる

すると吉崎の手元に四方からメモリが集まってきた

もちろん、勇樹の手からもメモリが飛んだ。
その事に勇樹が焦り身を引こうとする

（まずい…、長居しすぎた。早く進也に伝えないと…
って俺…進也の連絡先聞いてないっ！）

EXEは進也と里美を狙っている―

その事を進也自身に伝えなくてはと勇樹はその場から離れようとする
その瞬間、ふと背後の気配に気が付いた。

『久しぶりだな勇樹君。お腹の傷の調子はどうだい？』

城ノ内が背後に立っていた

『城ノ内…、お前はフィリップが狙いじゃないのか？
なんで進也を狙う。』

『彼については興味深いデータがある。そう蒲原様は言っていた。
だから捕らえる。』

『さっき話してた吉崎と言う男、アイツが今回の件の犯人なのか？』

勇樹が問いかけるとくつくつと城ノ内は笑った

『ああ、そうだよ。吉崎と言う男はもともとガイアメモリの売人で
ね。

吉崎は神隠しに遭いTXメモリに出会ったらしい。
それを使って蒲原様に自分を幹部にしてほしい、そう頼んだそうだ
よ？

勇樹君、吉崎と言う男は非常に哀れで滑稽だ。』

『さつき何か渡したな、アレはなんだ？』

勇樹は警戒をしたまま城ノ内に言う
すると城ノ内は答える

『ガイアメモリとドライバーさ。』

お前から奪ったドライバーを分解して研究しつくったものと、
「F」のメモリを与えた。』

『俺のドライバー…と「F」のメモリだと？いったいどういふ事だ
』！』

『それはこれからお前が体験するんだ。
仮面ライダーとしてね。』

いい結果を待っているよ。』

城ノ内はそういつと闇に消えていった。

(…盗み聞きした俺を殺さないのか?)

『城ノ内君、作業は終わりましたか？』

勇樹を置いて城ノ内が歩くと
闇から声が響いた。

その声に城ノ内は答える

『ええ、昼間のA t o Zのバラまきで大方のデータはとれました。
なのであとは

「彼ら」がもたらす結果でT Xメモリの採用かを決めていただきたく
と思います。』

『そうですね。しかし城ノ内君、君は何故こうまでして「風森勇樹」
の暗殺を拒むのです？

ロストドライバーを手に入れた私達ならばいくらでも出来るでしょ
う』

『：我々には彼はまだ必要です。
少なくとも今の段階では。』

『よく分かりませんがいいでしょう。
「風森勇樹」の件は貴方に一任します。
ではいきましょうか。』

『はい。蒲原様』

二人は闇へと消えた。

Fに平和を／EXEの計画、そして男は踊る（後書き）

前回の話の勇樹と親をめぐる辺りの翔太郎のぶつかり合いの台詞を直したくて

改訂しました。

そして、EXEのお話…

ぶっちゃけて言うと、吉崎さんとの戦闘は全員が見てる前でやった方がいいと考えたので、後半部分を消しました。

ベルト様、色々と申し訳ありませんでした。

それでは。

Fに平和を／永久なる忠誠の名のもとに（前書き）

コロボ4章めスタート

Fに平和を／永久なる忠誠の名のもとに

竜と進也は家を飛び出した勇樹を探すため街を走っていた。

2時間、街中を探したが勇樹どころかドーパントも見当たらず、竜が連絡を入れても返事が無いことから

二人は一旦、家に戻ることを決めた。

そのことを提案したのは竜自身であるが、付き従う進也から竜の表情を見れば、「まだ探したい」と言う気持ちは見えていた。

『すみません、おれの為に…』

『いや、別にかまわない。戻ってきている様子が無ければ今度は俺だけで行く。』

俺の方こそすまなかったな。疲れているだろうに引つ張り出して』

『いえ、そんな事ないですよ。』

この街の風都の建物の位置とか正確な地理を知ることが出来たんで大丈夫です。』

それより、勇樹さんは貴方の息子だったんですね。』

この二時間、竜は手帳と写真を片手に人に聞きこんでいたため進也は質問・話題を遠慮していた。

「帰る」と言う事で落ち着いた竜にやっとこの話題をぶつけることができる

『ああ・・・、2013年に生まれるらしいな。』

誕生日がいつなのかは分からないが、俺と所長の間にも生まれた子供

だ。
間違いない。』

『性格、照井さんに似てませんね。母親似ですか？』

進也は率直な感想を述べた。

そんな感想を述べた進也に竜は「ふっ」と笑みをこぼす

『いや、俺に似ている。』

『…』

進也はそう言われると脳内で二人の比較をする

勇樹

話を聞いてくれる

やる気がなさそう

職権乱用

竜

話を聞かない

問答無用

振り切るぜ！

俺に質問をするな

『どっこが似てるんですか！！』

つい、大きな声で主張してしまった。

（あ・・・しまった。）

『そんなに声を大きくして言うほど似てないか？

まあ・・・どちらかと言うと所長の方に似ているが…

どちらにしる、血をひいてることには変わりはない。

色々と手を焼く問題児だがアイツは優しい良い子だ。』

竜はそう言い終わると口元を緩め、幸せそうな目を進也に向けた

『ちゃんと分かっていますよ。勇樹さんが優しい人だってことぐらい。』

もしも勇樹に連れて行かれなかったら里美にも会えず

鳴海探偵事務所の中でも、偏見からの罵倒を受け続け、気持ちが悪
れていたかも知れない

自分が知り、相手が知らないとはいえ自分の師匠、翔太郎やこれか
らともに戦おうと剣をとった竜に疑いの言葉を掛けられるのは心苦
しい。

話を聞いてくれたきっかけを作ってくれたのは里美であるが、真っ
先に信じたのは勇樹である

『とても感謝してます。

だからおれ、戻れる機会があったとしてもこの風都にTXメモリの
脅威があるなら

その脅威が去るまで帰りません。

照井さんたちのお手伝いをします。』

進也の言葉に竜は嬉しそうな顔をしたがすぐに表情を戻す

『……その言葉は嬉しいが、『何言つてんだよ進也！』

帰路について5分、公園付近を通りかかると勇樹が背後の電柱から姿を見せた。

『何言つてんだよ、進也！帰れる方法見つかったら松下さんと帰れよ！』

TXだのP1だのそんなメモリは壊せば一緒なんだよ！

アレがバラまかれたのは進也の所為じゃなくて「吉崎」って言う売人なんだよ

だから無理に責任感じる必要ないって！』

『ゆ、勇樹さん！！今まで一体どこに行つてたんですか！おれ達、すごく心配しー』俺が何処に行つてたとか何処から来たとか、どの辺から聞いてたとかそんなものどうでもいい。

とにかく、帰れる兆しがあるならそれに乗っからないと進也の父さん心配すんだろ？

松下さんの家族とかさ！』

勇樹は進也の言葉を遮り言う

『いや、あの……松下さんスタイル良くて良い胸してるんだから、松下さんのお父さんが帰りが遅いことに誘拐かもしれないって警察に電話して大事になつてるかも知れないだろ？！』

勇樹の口はさらに回る

『それに進也のお父さんだって「息子が突然いなくなった」ってなったら心配じゃねえか

とにかく！俺の風都の事は俺が何とかするから進也は帰れる兆しがあるなら帰ッたほうがいい。

以上！』

勇樹はそついつと竜と目を合わせず帰ろうとする

『何勝手に出てきて言い放って消えようとしてるんですか！おれの話聞いてください！』

踵を返した勇樹はくるりと進也に向き直る

『いいや、聞かないよ。聞いたって俺の予想した通りの答えが返ってくるだけだから』

『予想した答えってなんですか！おれは貴方を助けたいんですよ！松下さんが見つかったのは貴方のおかげなんです
そんなあなたの住む街がおれの世界のガイアメモリに侵されようとしている。

それを助けるのはおれの―― 『俺の…？使命？義務？やっぱり想像した通りの答えだ。左が言いそうな感じの答え』

勇樹は歩み寄ると進也に言い放つ

『ちゃんとよく周りを見たほうがいい。俺の為に拳を振るうくらいなら

松下さんの傍に居てあげる方が先決だ。

今、松下さんを助けられるのは進也、お前だけだ。

松下さんは帰りたいかもしれないだろ？

此処の世界で戦わなくてもいい戦いで怪我をする

大事な人が怪我をする姿なんて女の子は見たくないもんなんだ。

帰れる機会があるなら機を逃さず帰れ

じゃあな。』

今度こそ勇樹は去ろうとする

『ちよつ、また言い逃げするつもりですか!』

進也は声を上げると竜が歩き出す後ろに投げかける

『勇樹、お前の言う言葉はもっともだが、大事な人が傷ついて悲しくなるのは女だけじゃないぞ。

…何か情報を掴んだな?』

歩いていた勇樹がビクリと震える

(凶星なんだ。分かりやすいなあ…)

『今、お前は「吉崎と言う男がメモリをバラ撒いた犯人だ」そう言っただけだ。』

潜伏先を知ってるのか?』

竜が言うと勇樹は振り返る

『…俺のアトラスがさっき不審人物を見つけてきた。』

この件にはEXEも絡んでるんだ。だから俺は進也に…」

竜の問いかけに進也は素直に答えた。

その事に竜はまた質問をなげる

『松下里美がターゲットにされているのか？』

『えっ！？松下さんが！？』

進也は目を見開き驚く。

目の前の勇樹はまだ口を割る気配はない

それを見て竜は口を開く

『お前は何度も上野に「松下さん、松下さんが」と繰り返し、最後に守れるのはお前だけだと言った。

経験上、お前が人の話を聞かずに自分の主張を押し付ける時、そこにはお前の私情の何かが隠されている。

大方、その吉崎と言う男はEXEの幹部に命令され、上野をおびき出すために松下里美を狙っている

違うか？

そしてお前は潜伏先に一人単独で向かうつもりだろう。』

竜がそう言い終わると勇樹は目を丸く点にしていた

そして竜の横に居る進也もまた、二つの意味で驚いていた。

一つはその組織の狙いが自分でありそのエサとして松下里美を狙っていること

一つは凄まじい勢いで吐かれた言葉を、受け流さずに彼の主張と捉え覚えて証言を引き出すのに利用したと言う

竜の警察官としての姿だった。

(か、かつこいい・・・、あの話全部聞いてたんだ。)

『隠し立てしても意味はないぞ？俺達が居ない間にドーパントと戦っただろう？肩に怪我をしているな。』

その怪我でそいつに出くわしたとしても、仲間を呼ばれる危険性がある。

いくらお前が仮面ライダーとは言え、多勢に無勢では勝てない

どうだ勇樹、此処は一旦帰って明日出直さないか？出動要請もないんだらう？』

『...そう...する。』

ぼそりと勇樹は呟き竜の方へと歩み寄り、同じ方向を向き歩き始めた素直に従った一(従うしかないと思うのだが)勇樹をみては三人で歩き出す中、竜はそつと三回ほど頭を撫でていた

600

『いきなり頭撫でて何のつもりだよ。俺の計画を台無しに』 『計画を立てるならワンパターン戦法は止めるべきだ。』

左は逆上し毎度面白い位にハマるが、俺はそうはいかないそれより傷は切り傷か？擦り傷か？』

『んー刺傷？爪でグサリと、まあ・・・装甲だったから浅いんだけど』

『気をつける。所長にスリッパで叩かれるぞ。』

『んだよ、父さ、...照井さんだって戦うたびに怪我してるくせに人の事言えるの？』

進也は途中から一步後ろに下がり二人の様子を見ていた。

(親子…か、確かによくよく見てみれば似てるなあ…勇樹さんの方が少し捻くれてるけど。

俺も帰ったら親父の肩でも揉んであげようかな)

その夜、帰ってきたのは23時だった。

家の鍵は不用心にも開いていて、その事に勇樹は「泥棒に所長が襲われる」と騒いだが、
入った先の玄関に亜樹子が待っていた。

片手に緑色のスリッパを持ち、仁王立ちで
そしてその亜樹子からは赤い怒りのオーラが見える

『た、ただいま…所長さん』

恐る恐る勇樹が声を掛けると

『じるああああ!!』

勇樹のほっぺたに緑色のスリッパがさく裂した。

『え……あ、しよ、所長さん?』

『今、何時だと思ってるのよ!!こんな夜遅くまで帰ってこないで一体どこに行ってたの?!』
『フィリップ君の検索で引っかけた「好きな場所」に翔太郎君と言ったけど見つからないし』
今はT×メモリって言う危ないメモリがあるのに!
翔太郎君、変身して出会ったドーパントを片端から倒したおかげで怪我しちゃったんだから!』

そう一息に言つと、「フン」と鼻を鳴らす

『じ、ごめんなさい。・所長さん、えつとその。・左は?』

『疲れて寝ちゃった。だから静かにね。』

そう亜樹子が言う

そう言いつつ、亜樹子の怒声が一番うるさいのでは?と言つ事には二人は触れなかった

『勇樹君お腹空いてるでしょ?里美ちゃんと二人でおにぎり作ったから、一緒に食べよう?』

進也君も竜くんも夜ごはんまだだったよね?』

『あ、ああ』

『は、はい…まだです。って松下さんも作ってたんですか?』

進也が言つと亜樹子は苦笑しながら言つ

『わ、私、料理苦手だから手伝ってもらったの。あ、具の味付けは里美ちゃんだよ?』

案内された居間は電灯の明かりが一つ落とされていた。

居間には革製の白いソファがあり、向かい側にある長テーブルには、海苔を巻いた美味しそうなおにぎりが10個、ただの塩むすびが10個並んだ皿が置いてあった。

『おかえりなさい上野君、勇樹さん、刑事さん』

案内された居間で眠ったことにより体力が回復したであろう里美が亜樹子の替えのショートパンツにTシャツ、その上に可愛らしいウサギのアップリケのついたエプロンを着て満面の笑みで迎える

『っ…』

その事に三人の男は頬を染める
進也はその場で硬直し、勇樹は鼻を押さえ、竜に至っては呆然としていた。

戦闘後ではないが疲れている三人にとってこの里美の「天使の笑顔」はクリティカルヒットをかましたようだった。

それをジローっと見ているのが、同じくピンクエプロンで狸のアップリケの亜樹子である

『もしも〜し、お三方〜?おにぎり食べないの?』

『あ、ああ・・・い、今、席に付く』

『は、はい！い、今いきます！』

『・・・』

(ヤバい、俺の何かがマキシマムドライブしそうだ。し、静まれ...)
勇樹は無言で席に座った。

『うーんとね、分かりやすいけど塩むすびが私のだからね？』

『所長は作らなかつたのか？』

『最初に言ったでしょ？私は料理下手だって。
実は翔太郎君に具材入り無理矢理食べさせたら、
ドーパントと戦ってる最中にお腹が痛くなつたみたいで...』

『それで怪我をしたのか、左は。』

『っ！？ち、ちちち、ちがうって、ダブルがお腹押さえたときにドーパントが電撃浴びせて火傷負っただけで
って...私の所為かな？』

あ、ここ、この事聞いて嫌になったら食べなくてもいいからね？』

ご、ご勘弁を！

と泣きそうになってる亜樹子のよこ、いただきますも言わずに勇樹が先に塩むすびに手を付けていた

『 所長さん、これ、塩じゃなくて砂糖入ってるよ 』

口をモゴモゴとさせながら勇樹が言う

『 えええっ!?! って勇樹君! いただきます 』 はどうしたの? 何勝手に食べてるのよ! 』

『 いただいています。 』

勇樹はそういつては里美に出された茶を啜る

そんな勇樹の反応を見て亜樹子が一つ塩むすびを手を取った。

『 甘っ!?! 』

そのあとで里美の作った、しょうゆ味の卵焼きを中に居れたおにぎりをつまみ

『 美味しい! 』

と言った後、床によよよ・・・と座り込み「の」を書き始めた

『 里美ちゃんはスタイル抜群で胸も大きくて一瞬で男の子の心が落ちちり掴んでる

一方の私は胸も無い、料理の腕も無い…

里美ちゃんは良い妻になれるけど

塩むすび一つ作れないんじゃないかあ・・・お嫁にもらってくれる人なんて居ないよね 』

『 ぞ、そんな事ないですよ! 亜樹子さんには亜樹子さんのいいところ

るがあります』

慌てて里美が励まそうと試みるが、逆効果だった

(何か言ったほうがいいんだろっか・・・)

里美のおにぎりを食べながら竜は考える

関係を始めるのであれば、自分に気持ちを惹きつけるのが得策だろう
以前の遊園地ではソレを逃してしまった。

勇樹が気持ちを吐露してきた今、関係を縮める必要があると思っ
ているのであるが
掛ける言葉が見つからなかった。

聞こえのいいキザな台詞

「その時は俺が貰ってやろう」などもあるにはあるが

それでは、あまりにも唐突過ぎる。そう感じたからだ。

『そういえば前に、翔太郎君に「婚期逃したら俺が貰ってやる」っ
て言われたけど

そうするしかないのかなぁ・・・』

「んぶっ!」

横に座っていた勇樹が口に含んでいたおにぎりを噴射した。

食べ物も噴射するのが芸当ではなく

ただ、タイミングが悪かった。

そこは理解してもらいたい所ではあるが、その隣で茶を啜っていた

竜は茶が気管に入ったらしい
同じく咽っていた

(∴ 師匠、そんな約束してたんだ。師匠らしいと言えらしいけれど・・・)

勇樹さん反応良すぎだよ。

確かにおれも心臓ひっくり返る思いだったけど)

『わわっ！大丈夫！？』

竜が咽た事に亜樹子は竜のもとに駆け寄る

そして一番状態が酷い勇樹には里美がタオルを持ち駆け寄る

真正面に立ち里美が勇樹の口の周りを拭く

その間不可抗力で勇樹の目は、胸へといく。

(マシユマ口食べたくなってきた)

そんな事を想う

捻くれ不良息子の右隣、進也は

(・・・おれも咽たかったな)

と思ったと言う

『 所長、左にそんな事言われたのか？ 』

むせ返りが回復してから竜は亜樹子に問いかけた

『 うん、フィリップ君が「どうして亜樹ちゃんはモテないのか。」 』

について検索した時に

その結果が酷くて泣いてたらウイスキーのコップ片手に言った。酔ってたからあまり気にしてなかったけど』

（酒の勢いで・・・だと？左はいつたい何を考えているんだ？酒の勢いに任せると言う行為は左らしいと言えはらしいが、所長は妹分だったと思っただが、違うのか？

いや、妹分として見ているからこそ…か。）

『それで？その検索結果は？』

『これだけ依頼人に当たれば依頼人の1人くらいは亜樹ちゃんに恋愛の好意を寄せてもいいだろうに

そういう色が無いのは

女っ気が足りない。謙虚な心が足りない。可愛げがない、の三つだつて。

そんなに無いかなあ…』

『…フィリップの検索は的確だな。

君は確かに女っ気が足りない

里美に比べると雲泥の差がある』

（二、告白ですか！？刑事さん、）

（と、トライアルだ。展開がトライアル過ぎるよ父さん。）

（松下さんの事呼び捨てにした…。照井さんは女性は呼び捨てなんだな。

じゃあ、なんで亜樹子さん呼び捨てしないんだろう。）

竜は三人の注目を集めていた

『これだけ依頼人と接していれば普通は好意を寄せる依頼人が現れてもいいと思うのにな』

だが、フィリップは一つ忘れている

依頼人は大抵、一期一会だ。君の事を深く知る機会が無いだろう？

君は「するめ」だ。

一度や二度あった程度の依頼人に君の良さ（あじ）は分からない
何度も出会っている依頼人なら別だろうがな』

その言葉に亜樹子の頬が赤くなる

（ふおお…おおお、つ、遂に…マキシマムドライブが…）

（け、刑事さん…だ、大胆です）

（すごい…、女性に「するめ」って言って、顔を赤らめさせるなんて）

『所長、明日デパートに行かないか？』

（うつつ…宇宙キターーーーッッ！）

デパートの単語で勇樹のテンションはMAXに達したらしい。
思わず立ち上がったのは両腕を天に伸ばした。

『で、デパート？』

『ああ、里美と上野の分の衣服が無いだろう
特に里美と君は下着のサイズが違う、買に行った方が良いんじゃない
いか?』

『そういえばそうだね。本当に下着のサイズが合わないんだよ
里美ちゃん胸が大きいから。って・・・それだけ?』

『ああ・・・』

(こうして外出すれば「吉崎」と言う男が動くかも知れないな。
左も連れて行きたかったが…
まあ・・・大丈夫だろう。)

(なんだ、デートじゃないのか。思いっきり口説いてたからそうだ
と思っただのに)

この話の展開の結末に勇樹は大いにガツカリし

(刑事さん、思わせぶり過ぎです)

里美の心証が下がったとか下がらなかったとかいう

翌日、そんなこんなで勇樹、竜、進也、里美、亜樹子はデパートに
出かける。

翔太郎は昨日の腹痛と火傷を引きずっていたせいでお留守番である
デパートについてから女性陣のテンションは凄かった。

あつちの店に行き、こつちの店に行き
そしてまたあの商品がよかったね、と店を戻る

そんな具合に引つ張りまわされる

『女性って凄いですね。おれ、足、パンパンですよ。』

『俺達男でさ、周りに女の子居ないんだよね。』

所長さんも年代が近い女の子と一緒に買い物できるから嬉しいんだ
よ。

大目に見てよ。松下さんをもっと可愛くしてあげる代わりに。』

勇樹が店の前の椅子に座ると進也に言う

『さ、さらに可愛く！？や、止めてくださいよ！』

『それって、倍率高くなっちゃうから？松下さんはモテモテそうだ
もんなあ。』

よし、もっと可愛くしてあげよう！

男と言う男が進也のライバル。それを守る進也。なんかヒーローも
のみたいでカッコいいなあ

「おれ、里美の事が好きなんだ。

君の為なら、俺は世界を敵に回しても構わない」なぐんつって。』

勇樹が進也の肩をばしばし叩きながら言う

進也は少し落ち込んだ顔になる

『そう、なるかも知れませんか。』

自分がエターナルを使っている限り
風都が敵になるかもしれない

『ま、そんな落ち込む事ないんじゃない？この俺、風森勇樹は絶対
味方だよ。』

松下さんの恋路に対してもな。』

普通のトーンで勇樹は言う

『恋路…？勇樹さんひょっとして松下さんの事…』

『んにや、確かに、松下さんはいい子だよ。可愛いし…
でも、俺の好みのタイプには一歩足りないんだなあ』

足りない？

進也がそう首をかしげていると

大量に紙袋を持った竜と満げな亜樹子、里美が店から出てくる

『お待たせ ごめんね？すごい可愛い服がたくさんあったからつ
い。』

『いいや、別に待ってないよ。んじゃ次はどこ行く？』

竜の買い物袋を持っては勇樹が言うが、はた、と勇樹の動きが止まる

『…の前に俺、ちょっとトイレ。さっき松下さんの事について話し
てたら、』

立ち上がったちゃったもんで、収めに行ってくる。』

勇樹は股間を指さしそういった。

当然、指が向いてるほうに亜樹子や里美たちの視線は向く

『なっ……！？なに最低な事言ってるのよ！勇樹君のバカ！』

『ゆ、勇樹さん……』

その言葉に進也ですら顔が真っ赤になった。
デパートで堂々と下ネタを発言したのだから。

『いやあ・・・松下さんが現れたから、立ち上がったんだと思うよ？
俺の――』 『わわ、分かったから！早くトイレ行ってきなよ！――』

亜樹子にセクハラ男！と言われながら
進也とさすがの竜も白い目を向ける。

『じゃ、先帰ってて？立ち上がったヤツをゆっくりたっぷり鎮める
からな』

ニコニコとして勇樹は言う

男の生理現象とは言え…

と進也、竜は真っ赤になってる里美と、下ネタ発言により憤慨して
いる亜樹子を連れエスカレーターを下る

その光景を勇樹はトイレの近くで見っていた。

その後ろ、黒いスーツを纏いアタッシユケースを持った男が1人、

エスカレーターを降りようとしていた。
勇樹はその男に歩み寄ると声を掛ける

『お前、家から俺達の跡、着けてたよね？』

アタツシケースを持った男は勇樹の問いかけに
知らぬ顔をする。

『何の事でしょうか。』

『店を所長さんと一緒に回らなくて正解だったよ。お前、俺達がベ
ンチに座ってる時、後ろ側に座ってたな。』

そして移動時、ずっと俺達と同じタイミングで動いていた。

急いでる風なビジネスマンが同じタイミングで座り、立ち上がるを
繰り返していたら怪しむよ。

そして今、確証が付いた。

これで6回目だからな』

勇樹がそう言い放つと男は笑った

『貴方が蒲原様に楯突く仮面ライダーの少年、ですか。気づかれな
いように尾行してたんですが』

駄目でしたね。

そう、わたくしはEXEの幹部になる男、「吉崎健二」です。』

『お前が進也の世界からメモリを此処へ持ち込んだ人間、張本人か。
お前からはいろいろ聞きたい事がある。』

勇樹はビジネスマン、吉崎へとこぶしを構え、向かっていく

『っ・・・いいんですか？ここは店内ですよ。』

『俺は警察官だ。お前がガイアメモリ流通組織とかかわりがあるなら鉄槌は下せる覚悟しろ！』

勇樹の言葉に吉崎は懐からメモリを取り出す。
クリアグレーの純正化された「F」のメモリだ。

勇樹はその行動に拳を止める

（まずい、店内でドーパントに変身されたらひとたまりもない。
あゝせつかく、巻き込まないようにしたけど…戻って来そうだな。
いや…、混乱して戻ってこれないだろうな。おっし！）

勇樹は傍にあったマネキンから女性もののカーディガンを引っ掴むと
亜樹子が不在時、雑貨屋で買った「加速」と白地に黒の明朝体で大きく書かれたライターを引っ張り出し、火をつけ床に置く

そして

火事だーーーーっ！！

と叫び、非常ベルを鳴らした。

服の火は店内のスプリンクラーによって消し止められる
だが、客の混乱は火の手が収まっても続いていた

『なるほど、店内をパニックにして客を逃がすか。』

『まあな。俺一人で此処に居る客、全員の命なんて守りきれない。大ぜいを守るなら、騒ぎを起こせばいい。』

勇樹の周りから人が引いていく

『まあ・・・良い判断ですが、まだ甘いですよ。』

吉崎が指さした先には店員が呼んだ警備員が警棒を持って勇樹を捕らえようとしていた。

『た、助けてください！この人が店に放火したんです！！』

そう吉崎が言うと警備員は勇樹の腕をつかんだ

『痛っ…！？』

勇樹の格好はジャージ、対する吉崎の格好はビジネスマン
どちらを信じるかは、風体のしっかりしたビジネスマンを信じるだろう

『大丈夫ですか！？外までご案内いたします！』

『本当ですか・お願いいたします。』

警備員の1人が吉崎を外へと案内しようとしていた。

警備員に腕を掴まれている勇樹はその光景を齒がゆい気持ちで見なければならなかった

(ちっ・・・、この人たち警察じゃないのかよ。…ってコレ最終的に突き出されるの警察だよな。
ならー！)

勇樹は警備員の顎を頭突きで打ち、緩んだ隙に横にケリを食らわせる。

『ぐああー！』

背後、仲間の声を聴いて案内しようとしていた警備員が振り返る

『な、貴様っ・・・！』

警備員は応援を呼び、なおも吉崎を逃がそうとする。
応援で駆けつけた警備員の壁に勇樹は悪態をついた。

『俺の美味しいところ持つてくなよ！俺が吉崎仕留めて、情報集めてな

何事もなかったように振る舞って進也を帰そうと思っただけに！！

このままじゃただの変態で終わっちゃうじゃねーか！』

押さえられては蹴り上げ、拳を繰り出し、警備員の壁を越えた時は吉崎の影は無かった

『っ、くそ！アイツ、3階まで降りてる！』

ふと、一階まで吹き抜けになってる場所を発見し、そこから吉崎らしい男が悠々と階段を使い降りている姿が目に入った。

(馬鹿にしゃがって…見てるよ?)

『風森勇樹、この街を守る正義の仮面ライダーか。策は廻るようだがツメが甘いな。』

さて…松下里美と上野進也を…

んなっ!?!?』

もう出口に出た事だろうか

と言う事を考え吉崎は非常口へと向かうが、そこにはわんさか人が集中し、里美たちが探せない状態にあった

(しまった…これじゃあ上野進也を探せない。)

吉崎はその事に焦り、吹き抜けの真ん中、人気のない場所へとやってくる

(ど、どうすればいい?あの人中、特定の人物を探せるようなメモリをわたくしは持っていない。)

吉崎が悩んでいると上から声がした

『誰が接触させるかああああっ!』

吉崎はだんだん大きくなる叫び声に上を見る。

そこに居たのは

腰に女性用の衣類を何重にも巻いて他にもそこから衣類を繋げて命綱にして飛び降り、着地した勇樹が居た。

『っ・・・はあ・・・はあ・・・吉崎、健二、ガイアメモリ流通、そして俺の名誉を傷つけたとして名誉棄損の罪でお前を逮捕する！！』

決まった——！

勇樹は心の中でガッツポーズをした。

『…………驚くべき気力ですね。上野進也にはおそらく逃げられたことでしょう。』

ですから、少しだけ相手をしてあげよう

光栄に思いなさい

もうじきEXEの幹部になるわたくしの最初の餌食になるんですからね

吉崎はロストドライバーを腰に巻くと「F」のメモリを押しした。

【FOREVER】

『変身』

【FOREVER】

フォーエバー

その音声が告げると吉崎は黒に近いグレーの粒子に身を包まれ、姿がグレーの体に黄色い複眼、そして金色の炎の装飾に白いマント、勇樹が一度見たエターナルに似た姿に変わった。

『さあ、今こそ永久^{とわ}なる忠誠を掲げよう』

仮面ライダーフォーエバー

エターナルを模造した仮面ライダーはそう言い、フェンシングで使うような剣を構える

『なにが、永久だよ。エターナルのパクリが。進也に土下座しろ。』

勇樹はアクセルメモリを取り出し、構える

『なるほど。フォーエバーにはそういう力があるのか。』

勇樹君、君はエターナルが何故悪魔と呼ばれたか知ってますか』

『…俺は直接会った事が無いから分からない。ただ資料にはメモリの無力化ができ…』

ま、まさか…お前!』

『エターナルのパクリ、と言ってくれたが、「永久」フォーエバーの能力は、わたくしの蒲原様への忠誠心をくみ取ったのか、能力が変化したようだ。パクリじゃない』

仮面ライダーフォーエバーはフォーエバーメモリをマキシマムスロットに挿し込んだ。

どんな能力が来るのか、と身構えた勇樹はアクセルへと変身する。

【フォーエヴァーマキシマムドライブ！】

その瞬間、勇樹の体に強い電流が走った

『ぐがああああッッ！』

変身が解けては勇樹は目を見開かんばかりに驚いた。

勇樹はフラリと立ち上がりアクセルメモリで気を取り直して変身しようとする。

記憶を呼び出し、ロストドライバーにメモリを挿しこむ

だが、勇樹の身体が黄色い粒子を帯びることはなく、代わりに電撃が体を貫いた

『ぐああああっっ！』

その電流の意味を勇樹は知っていた。

（アクセルメモリが俺を…拒絶した?!）

『じゃあ、これは貰っていいっつ。』

仮面ライダーフォーエバーは勇樹の手にあるアクセルメモリを奪い取る。

『ま、待て!!俺のメモリを返せ!吉崎っ!!!』

勇樹は床に這いつくばったままフォーエバーの足に手を掴む
必死の形相で迫る勇樹にフォーエバーは言った。

『俺のメモリ？いいえ、今日からこのメモリはわたくしのアクセル
メモリです。』

フォーエバーはフォーエバーメモリを抜き取るとアクセルメモリを
押しこむ

するとフォーエバーの姿が真っ赤なアクセルへと姿を変え、エンジ
ンブレードまで転送された。

『う、そ・・だろ・・・？エンジンブレードが転送されるなんて、
そんな・・そんな！』

『フォーエバーの能力、TXメモリ以外のガイアメモリは永久に私
に忠誠を誓い、前の主には従わなくなる。』

蒲原様のメモリと城ノ内のメモリは「命令に従うように」と命令を
出しておきましょう。』

『っ・・返せ！よ・・！俺のアクセルメモ・・』うるさいなあ・・・。
もう、これは貴方のメモリじゃありませんよ？』

振り返ったアクセルは

勇樹の憧れとはかけ離れていた。

『ば、化け物・・』

『化け物・・違います。わたくしは永久なる忠誠の仮面ライダーフォ
ーエバーです。』

店に放火する悪い男を抹殺する正義の味方…、仮面ライダーフォーエバーアクセルフォームですよ。』

アクセルフォームはエンジンブレードにエンジンメモリを挿しこみ、マキシマムドライブを発動させる

『こんなありがよ！嫌だ…。こんな、ふざけんなっ！！こんな偽物に…』

エンジンブレードが電流を帯びさく裂しようとしたさなか、

【エターナルマキシマムドライブ】

と言う音声と共にエンジンブレードの電流を青みを帯びた炎の蹴りが相殺した。

『……勇樹さん！大丈夫ですか！？ってアクセル…！？』

勇樹の目の前、少年の音がする。

『し、進也…！』

『貴方がエターナル…』

『よくもおれの友達をこんなにボロボロにしてくれたな。お前はおれが絶対に許さない』

さあ、お前に罰を与えよう』

仮面ライダーエターナルはそういつとマントを翻し
這いつくばり苦しそうな勇樹を庇う様に立ち、自身の武器エターナ
ルエッジを構えた。

Fに平和を／永久なる忠誠の名のもとに（後書き）

と、言う事です。

今回はギャグとラブを詰めこみました。

内容的に次回がシリアスになりそうなのでちょうどいいかな？

マヒロ的に大勢の客を動かすなら非常ベルを鳴らせばいい

そんな感じの事を考えたのでこの方法にしました。

どうやって放火しようかなあ

と考えた結果、雑貨屋で買った事にしました

雑貨屋にはたまに変な趣向のライターが置いてあるんですよ

しかし、毎度のごとく計画性が無いです。

フォーエバーの能力はエターナルのパクリ（無力化）に設定してたはずなんです

物凄いバカみたいなチート能力になりました。

ガイアメモリの能力は持ち主により少し変化する

COREのマツのスパイダーがそうだったなら出来るかなあ…と思い

吉崎の忠誠心により

マキシマムドライブが永久なる忠誠、

TX以前のメモリが発動主に忠誠を誓う能力

と言つものに変更されました。

鍵を握る救世主はTXを持つエターナル、進也
果たしてこの先どうなるか
計画を立てても計画通りに執筆したことが無いので私にもわかりま
せん！

面白いと言ってくださったらうれしいです
それでは！

Fに平和を／隣の芝生は青い

『どうしてここに…！』

エターナルの背後、勇樹が言う
するとエターナルは振り返らずに言う

『照井さんに見てこいと言われたんです。

非常ベルが鳴って客が混乱した時に、

「勇樹が先頭に立って導いていないのはおかしい。様子を見て来てくれないか？ドーパントかも知れない」って言われてきたんですよ。

考え過ぎじゃないか？って思いながら来てみたらなんですかこの惨状は

本当にドーパント…いや、仮面ライダーアクセルの偽物が居て痛めつけられてるなんて…』

何があつたんですか？とエターナルのマスクの奥であきれ返っている進也は呟く

『照井さん、俺が…客、導いてるって思ってたの…？
それで、何かあった…って進也を？』

『一体どういう状況にあるのか説明してください。』

進也／エターナルがそういうと目の前のアクセルが口を開く

『なに、難しい話じゃありませんよ。ちょっと尾行がバレたので

メモリを奪い使用させていたただいただけです。
この世界じゃ珍しい貴方の世界のメモリを使って奪ったんです。』

アクセルは自身のメモリを抜き取るとグレーのエターナルに似たような姿へと変わった。

その姿にエターナルは驚いた。

26個のメモリの挿し口こそ見当たらないがマント、そしてフォルム、黄色い複眼

所々に走る炎の模様。そのすべてが自分の姿と酷似していたのだ。

『お前は…なんだ？』

その姿にエターナルは警戒の声を発する

すると目の前のグレーのエターナルは静かに言う

『わたくしは、仮面ライダーフォーエバー
永久なる忠誠を胸に秘めた戦士です。』

その仮面は自らをフォーエバーと名乗った。

『…仮面ライダーフォーエバー…』

エターナルはその名前を繰り返す

『わたくしの能力はTX以前のメモリの適合率を無力化しわたくし自身に従わせることです。

この風都におけるEXEの監視下にある「T1方式のメモリ」すべてとアタッシュケースのTXメモリを25本。

全てのメモリを使いこなす事が出来る。

仮面ライダーエターナル

貴方はTXメモリだからその少年のように無力化は出来ませんがもう勝敗は決まっています。

怪我をしたくなければわたくしと一緒に来てください。』

この街のメモリはメモリブレイクを行えば碎け散る「T1方式」

TXフォーエバーはそんなT1方式のP1メモリをも従えると言うのだ。

つまり、目の前に居る仮面ライダーはフォーエバーメモリをマキシマムドライブをしない限りは

この世界の風都のすべてのメモリを使える。

勝敗は見えていた。

あつちは無限大でこっちは25にも満たない。

『どうしますか？上野進也君』

エターナルは後ろを振り返る。

後ろの勇樹は喋れるものの出血がひどい。

しきりに口を「にげろ」と動かしているがもはや、枯れた蚊のような声になっっていなかった。

『…分かったよ。』

エターナル／進也から出た言葉に、勇樹がむせ返った。

『お利口ですね。ではこちらへ・・・』

来ていただけますね？

そうフォーエバーが紳士的に招き入れる。

エターナルは無言で近づくと、そして――

【ユニコーンマキシマムドライブ】

『たああ！』

マントでマキシマムスロットに挿していたのを隠していたユニコーンメモリを発動させ
ドリルのように硬くなった拳をフォーエバーへ叩き込もうとした。

『なっ…！？』

メモリの数への圧倒的な戦力差に恐れをなしたであろうと想像していたフォーエバーはその行動に驚く。
拳はなんとか避けたもののアタッシュケースが宙を舞う。
すかさずエターナルはそれを奪い、中を開いた。

アームズ

ビリーブ

サイクロン

ダンサー

ジーン

ヒーロー

アイスエイジ

ジョーカー

キラー

ルナ

マジシャン

ニンジャ

オクトパス

パーティー
キューピッド
レイン
スナイパー
テラー
ユニコーン
ヴァイオレンス
ウエスタン
エクストリーム
イエスタデイ
ズー

これがアタツシケースに用意されていたメモリだった。

(…珍しいメモリがたくさんだ。よし、これを何本か使って)

『抵抗：するんですね?』

アタツシケースの中、メモリを厳選するエターナルヘフォーエバーが語りかける
エターナルは言う

『させてもらうよ。最初におれが言った言葉、もう忘れたのか?』

おれは、友達をこんな目に遭わせたお前を許さない
そうだった。

だからおれは——』

【ジーンマキシマムドライブ】

エターナルエッジにジーンメモリを挿しこみ、エッジをマグナムに変えると銃口をフォーエバーに向ける

『…やる、おつもりですか。』

その銃口を見てフォーエバーは構える。

互いに向かい合う中、エターナルは銃口を下げて勇樹の方を見やる。安全な場所へ運ぼうとしたが、エターナルは勇樹をその左肩に米俵のように担いだ。

(勇樹さんの体力がもう限界に近いか。

あのドーパントの相手をしようと思ったけど、照井さんもまだ連絡が付きそうにない。

このまま長引いたら危ない。)

エターナルはそのまま、勇樹を担ぎユニコーンメモリで拳を強化し壁に穴をあけ逃げようとする

『っ——！逃げるつもりか！来なさい！トリアルメモリ！』

そうフォーエバーがいうと何処からともなくトリアルメモリが彼の手に飛んでくる

信号機のようなパーツがついていることから未だにデパート内の混乱を鎮めている竜のものと思われた。

フォーエバーはアクセルメモリを挿しアクセルに変化してからトリアルメモリを挿しこむ。

海より薄い鮮やかな青の粒子に包まれたフォーエバーは

フォーエバートライアルフォームとしてエターナルの前に立ちふさがった。

『逃がしませんよ!』

『っ!? うわっ・・・!』

エターナルはトライアルの右足の蹴りを食らい壁に激突した。

『っ・・・速い! なら・・・こっちも速さで勝負だ!』

エターナルはニンジャメモリをマキシマムスロットに挿し込み、ウエスタンメモリをマグナムに挿し込んだ。

【ウエスタン／ニンジャマキシマムドライブ!】

忍の記憶を秘めたニンジャメモリはトライアルとまではいかないがそこそこ速く走ることが出来る、壁も歩くことが可能になっていた。

そこにウエスタン―西部劇の記憶が加わり、その速度に合わせマグナムの早撃ちが出来る
そういった能力を得ることが出来た。

(試しでやってみただけ、相性がいいな。このメモリ…。この二つ、貰ってもいいか交渉しようかな)

マグナムの早撃ちで柱を一つぶち抜き砂煙を起こす。
そしてそのうちに壁を歩き、エターナルはデパートを脱出した。

いくら足が速かろうとも、見えなくては意味がないのだ。

『逃げられた。まあ・・・いい。上野進也と松下里美の顔は確認した。』

あとは探索の記憶のメモリを操り奇襲を仕掛けるだけだ。』

フォーエバーはトライアルメモリを抜き取ると煙に紛れて消えた。

進也の活躍により助けられた勇樹は病院で手当てを受け、3週間ほどの入院を強いられることとなった。

だが、病室は幸いにも一般病棟そして例により個室だった為、亜樹子、竜、進也、里美、翔太郎、フィリップが手当てが終わり面会が許された直後から見舞いに来ていた。

『...ごめん。』

入室して最初に聞いたのは勇樹の進也への謝罪の言葉だった。

自分の身勝手な行動で、進也が絶対的にこの風都で戦わなければならぬような状況になってしまった。

その事を勇樹は悔いていた。

『ごめんじゃすまないよ。』

勇樹の謝罪をフィリップがバツサリと斬る

『君は久里大祐と戦う事で「仲間との協力」に歩み寄ったんじゃ無かったのかい？

巻き込みたくない働いた事でも結局は上野進也を巻き込んでしまっている。

ごめん、だけじゃすまされない。』

『……』

フィリップの言葉はメモリを自身起こした行動で失ってしまった勇樹にとって傷口に塩を塗りたいようなものだった。俯いたまま何も話さなくなって全体の空気が重くなる。

『とにかく、僕は「フォーエバー」について検索を掛けてみる。また襲ってきたら上野進也が不利になるからね。』

フィリップはそういうと病室を後にする。

『…フィリップさんが対策を考えてくれるならおれもおれなりに対策考えようかな。』

懐に入っている砂漠の砂をイメージした薄い茶色の純正化された「W」
そして、群青の純正化された「N」のメモリを手に取りながら進也は空気に負けないように普通に言った。

そんな進也の態度に竜、翔太郎は前日の自分たちの言動を改めて反省した。

エターナルを使って居ようが、進也は大道克己とは違い仮面ライダーである。

それが二人に証明された瞬間だった。

だが、その横で勇樹が進也を睨んでいた。

『……理解できないんだけど。』

ぼつりと勇樹が進也に向かって言い放つ。

『…何がですか？』

自分の言動に非があったのだろうか…

そう思いつつ進也は聞き返す。

すると勇樹は言う

『フォーエバーは今やこの風都に出回ってるすべてのメモリが使える。』

そこにたった一人で20年もそらのメモリで立ち向かって無謀にも程があるんじゃないの？

進也、お前なんでそういう決断下せるワケ？』

この風都には今戦える仮面ライダーは上野進也ただ一人しか居なくなってしまうた。

アクセルメモリを勇樹が取り戻すには進也がフォーエバーのメモリをマキシマムドライブするしかない。

今ここで神隠しの原因が現れたとしても進也は残らなければならない
風森勇樹の風都を救わなければならない

『…なあ、進也、お前の頭の中身どうなってんだ？』

この風都に仮面ライダーは貴方だけです。って言われてなんで何も言わず立ち上がるワケ？

「貴方の所為で松下さんが危険な目に遭うんだ」

とか責める権利はいくらでもあるのに…なんですぐにこの街を救おうって決断ができるんだよ。』

俯いては唇をアヒルにしばそばそと愚痴たれる勇樹

『その答え、知りたいんですか？』

ぼそばそもごもこと発言した勇樹に対し進也は普通に答える

『……知りたいって言うか…理解不能。』

俺は同じ状態に置かれたら戦う決意するにしたってそんな爽やかに前を向いて戦えない。』

『勇樹さんはおれを責めるんですか？』

『へ！？ち、違う！俺がさっき言ったのはこの街の住人が引き起こした場合の話で、』

お前がそんな状態起こしたなら話は別だ！』

勇樹は進也の言葉に慌てて反応し弁解する。

『進也はこの街の住人と違うから、俺は助けたいと思うけど、街の住人に対しては半減なんだよなあ・・・』

勇樹が普通に言った言葉に翔太郎が目をぱちんと叩いては重いため息を吐く

弁解しようと思死だったあまり余計な事まで言ってしまったらしい。

『どづいつこと…ですか？』

進也の声は震えていた。

その声色がどんな感情を示しているか、勇樹は理解していた。

『どづいつ事って、まんまだけど？』

『貴方は…勇樹さんはこの街が嫌いなんですか…？』

進也は拳を震わせながら問いかける
すると勇樹は頷いた。

『そーだよ。』

『じゃあ・・・何故、仮面ライダーを？』

自身はこの街を愛し守る為に仮面ライダーとなった。

それゆえ進也の心には仮面ライダーは人々を守る正義の味方だと思っていた。

今も師匠の翔太郎のもと、仮面ライダーとは？を学んでいる

その師はこの街を愛していた。

そして自分が此処以外に神隠しに遭い出会った仮面ライダーも自分の守りたいものの為、そこに住む人々の為に戦っていた。

この街を守りたい

それが仮面ライダーの条件

無意識にそう感じていた進也は勇樹の言葉が信じられなかった。

『俺はとある男の人の勧めで父さんと母さんを解放するために仮面ライダーになった。

街を守るためじゃない。

街なんか守ったってなんのメリットも無いのに何で守らなきゃいけないんだよ。』

勇樹から吐き出される言葉に進也は傷ついた。

無茶ばかりする男であるが、それなりに優しいところはある

警察官として働いているのも父親の遺志を継いでだと思っていた。

『おれはおれの風都が好きだから仮面ライダーになりました。

そして、此処の風都も素敵だなんて思いました。

知らなかったこともいっぱい知ることが出来たし、今まで見れなかった翔太郎さんや照井さんの笑ってる顔が見れて嬉しかった。亜樹子さんやフィリップさんに会えてうれしかった。

だからおれは貴方が守ってきた風都を心から守りたいと思いました。

治安が悪いのに街の人が笑顔になっているこの風都を…

おれが守りたいって思うくらい素敵な風都なのにどうして貴方が否定するんですか！

仮面ライダーでしょう！？」

進也がそう叫ぶと

勇樹は動じずに口を開く

『俺にとっての「仮面ライダー」はアクセルとダブルだよ。』

『そうじゃない！貴方の…アンタにとっての「仮面ライダー」は何か？
って聞いているんだ！』

『だから、アクセルとダブルだってば。』

『っ———！』

勇樹は瞳も揺るがさずに再び動じずに答える。

進也はその言葉の意味が理解できなかつた。

理解できずに失墜のまま進也は病室を飛び出した。

『あ！上野君待ってください！』

飛び出した進也を里美が追い、病室は翔太郎、亜樹子、竜の三人と勇樹だけとなる。残った三名からは溜息しか出て居なかった。

「…あゝあ、やつちやったあ…
大祐君以外の初めてのお友達なのに」

走り去った進也とそのあとを追いかける里美の後ろ姿を見て
亜樹子が呟く

「べらべら話すのもいいけどちつたあ自重しろよ。
これから「フォーエバー」と戦^やり合うって時に何、仲違い引き起こしてんだよ。」

翔太郎が勇樹の頭を小突く
小突かれては勇樹は翔太郎を不機嫌そうに見上げた。

「…うるさいなあ…つい言っちゃったんだから仕方ないだろ？
俺の意見に納得できなかったからこうなったただけだよ。」

「どう考えたって、照井の息子が街を守ってたら意志を受け継いだって考えるのが普通だろ？
照井はアクセルなんだからよ。」

「やっぱり他人からはそう見られるか。まあ、どうでもいいや
左、照井さん、進也探して来てくれない？
里美ちゃんだけでも保護しないとマズイと思うから。」

ふあああ…と勇樹は欠伸をしベットに横になる。

分かりやすいふて寝をした勇樹を見て竜と翔太郎は溜息を吐く。

(反省の色は無し…か。)

『亜樹子、俺達は進也を探してくる。』

『あ…うん。気を付けてね。こっちに戻ってきたら連絡入れるよ』

亜樹子と翔太郎らの言葉を半分聞いて

勇樹は枕に顔を埋めた。

(…進也は俺と似た境遇なのに、何でこの風都が好きなんだ？

まあ…どうでもいいけど

進也はまんま、「風都の仮面ライダー」って感じだなあ…

左と同じ匂いがする。)

『きつと進也が父さんの息子だったら

正義感溢れる熱い心があるから風都の住人にしてもあの性格なら左と同じく人気者になれそうだし

息子があんな性格なら父さんも鼻高々で嬉しいんだろつな。

ドーパント犯罪検挙率90%の英雄照井竜の息子照井進也かあ…』

ぽつりと呟くと

勇樹は突然上の空になる。

《進也、ドーパントだ。いくぞ。》

《はい、父さん！》

二人で戦う姿をイメージしては結構サマになっていると感じたらしく「はぁ・・・」と1つ重いため息を吐いた。

亜樹子はその言葉を聞いていたのか突然、口を弧にしてニヤニヤと笑顔を浮かべて勇樹に近づく

『ふうん、勇樹君は進也君に嫉妬しちゃってるんだあ〜？』

亜樹子の発言に勇樹は現実に戻され心臓が飛び出るほど驚いた。

(しまった！まだ所長さんが居たんだ…)

『し、嫉妬！？ば、…俺はそんな嫉妬なんて見苦しい感情はし、してないよ。』

わたわたと慌てて噛みながらも発言するが、亜樹子の表情は変わらない。

『してるんでしょ〜？聞いちゃったよおー？』

進也が竜君の息子なら人気者になれるうって』

『っ……っ！っっ』

笑顔で言う亜樹子に勇樹は目を白黒させてテンパっていた。

(思った以上にテンパってるって事はアタリかな。

うう〜ん・スリッパ使いづらい状況になっちゃったよ…

こつなつたら鞭じゃなく飴ちゃんをあげるべきよね。(

亜樹子は目の前にあった丸椅子をベットの近くに持ってくる。亜樹子の頭に手を置き、そつと動かした。

いわゆる「撫で撫で」をしている。

『つ・・やめろよ！』

俺は18歳だぞ！子供じゃな———そうやって溜め込むからボロが出ちやうのよ！』

撫で撫での状況に耐えきれなかつた勇樹が抵抗を見せると亜樹子はぴしゃりと言う。

その言葉に勇樹はぐうの音も出なかつた。

『ほれ！素直になってみれ！今はあの二人いないよ？』

『……………』

頭を撫でられては亜樹子の顔を見上げると亜樹子の笑顔は意地の悪い笑顔から普通の笑顔になっていた。

『……………』

勇樹はその笑顔を見つめていた

『ほれほれ、心の扉開いてみれ！』

カモーン！

とニコニコする亜樹子に勇樹は亜樹子に身を寄せようとする
その動作に気が付いた亜樹子は撫で撫でするのを止めて腕を広げる

『……………』

勇樹は扉が閉まっているのを確認して

窓から誰もいなくていいこと、ガジェットが自分を監視してないことをよく確認する

そして、身を預けようとした。

その瞬間、

病院内の扉が粉々に吹き飛んだ。

『な、なに!?!』

『所長さん下がって!?!』

ぐりっ…と勇樹は亜樹子手を引き自分の胸元へ引き寄せる。

(まったく、勘弁してくれよ!)

そして空いてる手でアトラスガジェットを発動させる。

【アトラス】

アトラスはメモリを挿しこむと来訪者へ突き進んでいく

「ぎゃあああ」

と遠巻きで声が聞こえた。

数秒後マスカレイドを手に碎けた扉から姿を現したのは赤いアクセルだった。

『勇樹！無事か！？』

『えっ・・・りゅ、竜くん！？』

真っ赤なアクセルの突然の来訪に亜樹子は目を見開く
だが、勇樹は警戒の色を解かなかった

『…部屋を訪問するときはノックするのが常識だけど、いささかダイナミック過ぎない？』

『・・・どうしたんだ？勇樹。』

声色は照井竜そのものだった。

一説には竜がTXアクセルを手にしたのだろう
そんな考えも出来る。

『ゆ、勇樹君？』

『お前は吉崎？それとも利用されて無理矢理利用されてる人？』

だが、彼の腰にはドライバーは無かった。

警戒心をあらわにしたまま勇樹が言つと目の前のアクセルは竜の声で甲高い声で笑い始めた。

『さすがだな、長年メモリを使っていた奴には分かるって事か。
そうだ、俺は照井竜じゃないし操られても居ない。』

ただ、幹部になった吉崎に金で雇われた売人さ。

吉崎に上野進也を倒すうえで邪魔な存在のお前を倒せと言われてきた。

けどこんな手負いだったなんてな、ビックリだ。』

腹を抱えて笑っているアクセルに勇樹はさっきよりも不機嫌そうな顔をする

『まったくだね。』

ドライバー無しで仮面ライダーアクセルの姿になって照井さんの声で喋れるなんてビックリしたよ。

凄く不愉快だ。

その姿でドーパントだって事が』

勇樹は枕の下からホタテガイのガジェットを取り出し、そしてアトラスフォンを構える

『そんなんで相手しようって?』

『吉崎がメモリを封じちゃったからだよ。さて・・・と。』

所長さん、今、窓から飛び降りてこの事、左か照井さんに知らせてくれない?』

『知らせるって...ま、窓から飛び降り...ってちょ、勇樹君！一体何考えてんの！あぎゃあああ！』

勇樹はアトラスの角に亜樹子の服の襟をひっかけて窓へと安全に運び、

アトラスを窓から亜樹子ごと逃がした。

その途中、聞こえるか聞こえないかの声で勇樹は喋った。

「…俺は何も考えてないよ。前しか見えてない。

やつぱり・照井さんの息子には相応しくないよな。こんな阿呆。進也みたいに正義感のある男の方が良いに決まってる。

進也は左みたいに街の人に愛されて街に愛されるそんな仮面ライダーになれる気がする。

…俺も街を好きになれば街の人に認めてもらえるかな。いや、無いね。

ダブルとアクセルがこの街の仮面ライダーとして人々の心に長く在りすぎた。」

「なに独り言言ってるんだ？」

「…その姿で悪行をさせるもんかよ。って言ったんだ。耳悪いのか？ドーパントになったのに」

「んな…っ!?!?」

「その声で大きさに驚くのやめろ。マジ不愉快だ。」

勇樹は座ったまま、はっきりと告げると亜樹子を無事に降ろしたアトラスが帰ってくる

「無事に逃がしたな…。よくやったな、アトラス。それじゃ、もう

「一仕事しますか。」

勇樹はアトラスを構えた

『上野君！』

飛び出し、街をうろついていた進也に里美が追いつく

『いきなり飛び出したら心配しちゃいます。』

『ごめん…。少し熱くなっちゃって。師匠や照井さんや亜樹子さんに迷惑かけてるだろうな』

『上野君があんなに怒るの初めてみました。』

里美がそういうと進也は首を横に振る

『うっん、アレは怒ってないよ。ただ、おれが会って来た仮面ライダーは街の人や人々を守りたいって言うのがほとんどだったから、勇樹さんの行動見ると、普通に「仮面ライダー」なのに街が嫌いだって言うからビックリしちゃって。』

（でも勇樹さんの中で仮面ライダーはどうしてあの二人なんだろう…
どうして自分を仮面ライダーって言わないんだ？自分だって仮面ライダーのはずじゃ…）

進也は首をかしげるも理解できなかった。

そんな中、進也は誰かに呼び止められる

『進也！』

『上野！』

翔太郎と竜だった。

『あ、ししよ——翔太郎さんに照井さん、』

『なんだ里美ちゃんも一緒に良かった。探したぜ？』

『すみません、ご迷惑をおかけしました。って照井さんも来たんですか？』

おれ、てっきり勇樹さんの傍に居ると思ってました。』

『そついやそつだな、良かったのか？照井、愛しの息子様んとこに居なくて』

茶化すように翔太郎が言つては

竜は不機嫌になつたらしい、

『俺だつて空気は読む。今は所長と二人きりにさせておいたほうがいい。お前もそのつもりで所長を残したんじゃないのか？』

『いや、俺はただ亜樹子に世話させようと思っただけだぜ？』

アイツは電話一本ありゃ、怪我しようが飛び出していくからな。』

『確かに、そのせいで入院が長引いても困る。所長ならスリッパで止めてくれるだろうし』

勇樹は所長には勝てないだろう。

それで、進也、お前はもう怒ってないのか？』

『いや、怒ってないです。理由に驚いただけですよ。』

苦笑しながら進也は弁解をした。

そして謝りを入れた後、

『だから、分からないんです。』

と続ける

『勇樹さんは街の人間を守ってるのに平和な風都を作ってるのに街が嫌いで街の人が嫌いだっていう。』

街が本当に嫌いなら、デパートで人を逃がしませんよね？

人が死んでもドーパントの所為にすればいいんですから

どうして勇樹さんはそんな事を言うんですか？』

『勇樹は街から「偽物」と言われているんだ。それに心を痛めて一度、ストライキをした。』

その結果、人が大量にドーパントに殺された。そして自分も殺されそうになって

自分が戦うしかないのだ、と悟った

街の人は嫌いだが自分の行いの怠慢により人の命が失われる事実を
…な。

勇樹の記憶を視て俺達が推測できるのはそのくらいだ。

アレは一度も本音を語った時が無い
まだ何か隠している。

知りたい事は分かったか？』

『すみません、よく分かりません。勇樹さんの気持ち』

竜が言った言葉に進也は素直に首を横に振った

『当たり前だ。』

竜は言った。

『ただ・・・すごく怖いですね』

この街に仮面ライダーが1人になるって事は
そういう事なんだ

辛いことがあって逃げ出しようものなら
自分ではない誰かが犠牲になる

もしもおれが

師匠に出会わなかったら――

おれは

逃げ出したいと思ったとき、逃げてその事実を知ったら
きつと――

『すごく・・・こわいです。』

進也は再度告げた。

『怖がる必要はない。』

アイツはこれからがスタートなんだ。

これから色々な事を学んで「仮面ライダー」になる

俺のようにな。』

竜は翔太郎を見る

目を向けられた翔太郎は

『確かになあ・・・照井の奴、よく成長したよ。最初はこの街が大嫌
いだ！とか、ドーパントじゃない人間斬り殺そうとするわ、俺に牙
をむくわ

本当によく成長したな。

まあ、これもあれも、この俺が先輩として――『所長のおかげだ。

お前が変えたんじゃない。』

『んだと！？亜樹子のおかげだあ？！テメー、もう一辺言ってみろ

！！』

これからがスタート

その言葉を聞き、進也は勇樹の言動のモヤモヤが吹き飛んだ。

『おれと一緒にですね。おれも翔太郎さんに弟子入りして色々と学んでると・・・ちゅ・・・う』

『だから、君が俺を救ったんじゃないと言っているんだ。君だって所長が居なければ俺に斬り殺されていたんだぞ？覚えてないのか？』

『亜樹子、亜樹子うつせーな！しめて俺が変えたでいいじゃねえーか、進也も居ることだしよ』

『貴様の弟子が見て居ようがいまいが、事実を捻じ曲げていいと思っっているのか？』

女の功績を奪うとは見下げた男だな。』

『つてめえ・・・いつも以上にベラベラ喋りやがって』

翔太郎が怒り、それを軽くあしらう竜
これが本来の姿なんだろうか。

なんにしても二人とも楽しそうなのは変わりはなかった

（照井さん、師匠、おれこんな楽しい会話取り戻せるように頑張りますから。）

そんな二人を見て進也は小さく胸に誓った。

やがて竜と翔太郎の楽しい口喧嘩も終わり
進也は里美と共に病院へ帰ろうとした。

その帰路を1人の男が塞ぐ

「楽しそうですね、御一行様。」

「なんだ貴様、俺達に何か用か」

進也と里美を背に庇い翔太郎、竜が前に出る

「ご用事です。その二人に、
では単刀直入に言いましょう。」

上野進也君、わたくしは貴方のお友達を攫う事に成功しました。
取り戻したくば、3日後の15:00分に風都タワーにおいてなさい。

でなければ、お友達が命を失う事になりますよ?」

何処にでもあるような脅迫をする吉崎

「友達…?友達つてまさか!」

「…まあ、そのお友達はすでに手負いの状態で捕まえられたんですが
何を血迷ったかわたくしの部下が「倒せ」と勘違いしたらしく今に

も死にそうですけどね。

あ、そうそう、ついでに傍に居た女性もついでに捕まえて起きましたから

その女性の命も惜しくば、どうぞ風都タワーに』

『貴様、それは勇樹と所長のことを言っているのか』

食いついたのは竜だった。

『さあ、誰の事でしょう？ ただ、上野進也の友達、とその友達を守るうとわたくしの部下をスリッパで叩いた女性と言っただけで風森勇樹とその母親とは言ってますね。せつかちですね。』

それでは』

スーツ姿の男は

サイクロンメモリを発動させて風と共に消えた。

『っ・・・吉崎のやろう亜樹子まで攫いやがった。畜生！！』

すぐにフリリッパに連絡を！

と翔太郎がスタッグを握る

その横、照井竜は怒りを堪えていたが、その瞳からは殺気が溢れていて進也は真正面からみることが出来なかった。

(3日後：それで決着がつくのか)

進也は気を引き締め

3日後の来たるべき日に備えた。

Fに平和を／隣の芝生は青い（後書き）

はい、2週間ほどお待たせしました。

なかなかお話のまとまりが上手くいかなくて
やっといい方向で纏めることが出来ました。

今回の話は

タイトル通りです。

隣の芝生は青い。

勇樹が嫌いな風都も進也から見れば素敵な風都
ということだね。

分かりやすい例として

師匠たちの笑顔を適用しました。

互いに竜も翔太郎も進也君SIDEでは囚われてる人が居て
それを救うために必死になってることから
あまり笑ってないんじゃないかなあ…と思った次第であります！

亜樹子がいてフィリップが居るからあの二人も笑ってる

そんな笑顔が進也君は嬉しい、とかね。

それで、マヒ口版AttoZ考えました。

お気に入りなのはニンジャメモリです。

何にしようか考えてる最中「N」がナスカが候補だったんですが
ナスカだとつまらないなあって事で

「N」を探してたんです。

「N」は自然「ナチュラル」とかでもよかったんですが

突然、ゴークイジャーの

「ゴークイオー殿、合体でござる！ 海賊と忍者一つとなりて、天下御免の手裏剣装備！ ハリケンゴークイオー、推参！」

風神丸のセリフが頭に通り

忍者になりました。

本当に勇樹は怪我をするなあ

けど謝りません。

45話あたりから

テラードラゴンに噛みつかれたり

焼かれたり

Vシネでは足がヤバいことになって生傷絶えない照井さんの息子ですから

刺されても焼かれても死にません（笑）

はてさて、吉崎の部下が出てきましたが

後半

アクセルフォームフォーエバーとやっている

二人で戦う展開は分が悪いと思ったので出ました

名無しです。名前がありません

彼は吉崎よりも出世しません。

純正化されたメモリがドーパントになるのか？
しかもアクセセル似のドーパントはありか？

細かいことは振り切るぜ！お願いします。

次回、対決しますが

どうやってアクセセルメモリを取り戻そうかなあ…

面白いと思っていただければ嬉しいです。

それでは！

Fに平和を／永久はそれを知り剣を振るい道となる

吉崎が竜たちとコンタクトを取っている頃、勇樹は風都タワーの柱にあるとある椅子に座らせられていた。

その装置には一本のマキシマムスロットがついている事から目を覚ました自分がこれから何をされるのか理解した。

(人体実験するつもりかよ。)

装置に繋がれている勇樹の目の前には白い電球をイメージしたようなドーパントが立っていた。

『お目覚めのようだな。』

電球のような頭を持つドーパントは自身の体にはっぱを当てがたと照井竜の姿に変わり、挨拶をする

『…なるほど、ドライバーのないアクセルの正体は変身能力か。電球みたいな頭しやがって。俺を此処に連れてなにする気だよ。』

『正しくは組換えだけだね。』

まあいい、改めて自己紹介をしよう。

僕の名前は七枝ななえだだ。幹部になる吉崎の部下、吉崎は言った。邪魔なおまえを倒せと。』

『じゃあ、なんで俺は装置に繋がれてるわけ?』

勇樹は疲れたと言うように問いかける
すると七枝は竜の姿のまま答えた。

『それは簡単だ。吉崎が幹部になるためには上野進也を捕らえなければならぬ。』

上野進也を捕らえる為にはお前が必要だった。

そして吉崎は3日後の5月29日15:00に風都タワーへ来るように命じた。

つまり、三日後に交渉は成立する。』

『なら、それまで人質の俺は生かしておくべきなんじゃないの？こないかにもな装置に括り付けたら交渉もクソもないんじゃない？』

『いや、自慢じゃないがこう見えて僕は舞台の演出家でもあるんだ。』

ただの再会ではつまらない。』

七枝と呼ばれる男は「T」のメモリを何処からか取り出す

『演出…か。俺をドーパントにするって言うの？』

『いや、20年前ここでエターナルが暴れた時、我々が探し求めているデータ人間が囚われの身となりメモリのマキシマムに苦しんだようだ。』

『……つまり、新手の拷問？』

勇樹は一気に白けたような表情を浮かべる

『嫌とは言わせない。ほら…君の大好きなお母さんだ。』

パチンと七枝が指を鳴らせば頬を青白く腫らし、唇に血の跡がある。亜樹子がマスカレイドの手により運ばれてきた。電球ドーパントは竜の姿でぐったりしている。亜樹子の髪を乱暴につきみ見せる。

『…………お前…』

自信たつぷりに目の前で行った行為を見て七枝は勇樹が泣き叫ぶであろつと想像したらしい。だが、実際の反応は呆れたと言わんばかりの表情だった。

『…………何を白けてるんだ？この様子が見えないのかい？最高の演出だろう。』

竜の姿で髪を引っ張り乱暴に頬を引っ叩いては再び反応を伺う。

勇樹は目の前で起こることに目の色を変えなかった。

『…………狙いすぎて逆に萎える。』

『…冷たい男だな。自分の母親が父親の顔を借りた男に暴行されているのにそんな反応しか出来ないのか？』

『…………それが最高の演出だった？
それならUMAを追う胡散臭い冒険番組の演出の方が面白いよ。』

『何を言ってるのかさっぱりだな。そんな余裕でいいのか？お前は

これから恐怖のメモリを挿されて恐怖を味わうんだぞ?』

七枝は「T」のメモリを押す

【TELLER】

『あいにく俺は人よりそういう系統には強いんだ。メモリで増幅される恐怖なんて、今お前がその女ひとにしてる行為に比べたらただの静電気だよ。』

逆にアンタの方が覚悟しておいた方が良くない?』

勇樹はマスカレードに抱えられる亜樹子の顔につけられた傷を見ながら呟く。

『覚悟?』

『…3日後お前はテラーの能力よりも恐ろしい恐怖を体験することになるよ。』

『戯言：だな。君はこのメモリの恐怖を知らないらしい。何処まで耐えきれるか見物だな。』

上野進也が来るまでに君が失禁するほど震えて居る姿が待ち遠しいよ。』

『するのはお前だよ。まあ・・・どうでもいいけど。3日耐えればいいんだろ?』
分かったよ。』

(まだ、余裕なのか…!)

七枝は勇樹の余裕の表情が崩れないことにイラ立ちを覚えた。

(まあ・・・いい。効かないとはいえ「テラー」に勝てる奴はいない
せいぜい苦しめ！)

七枝はテラーメモリを押し、マキシマムスロットに挿し込んだ。

5月29日14:30分

約束の日はやってきた。

勇樹の家の玄関では里美がフィリップと共に待機をし、現場に向かうのは翔太郎、進也、竜の三名だった。

フィリップは君達のサポートするといい、部屋に籠りきりになったので見送りは里美だけだった。

三人は横に並び見送る里美を見る。

里美の表情は不安そうな顔をしていた。

『……………』

里美は何も言えなかった。

(……………いつ時、なんて言ったらいいんでしょう…)

これがどれだけ大きな戦いなのか、戦いに赴いた時が無い里美にも

なんとなく理解できていた。
だからこそ進也に行ってほしくはなかった。

今戦える仮面ライダーは上野進也たった1人
サポートとして向かう決意をした翔太郎達の助力もあるだろうが、
湧き上がる不安は抑えきれなかった。

(亜樹子さんなら…なんて言うんでしょう。)

『う、上野君！ちゃ、ちゃんと戻ってきますよね？』

考え込んでいるうちに里美の口からは言葉が漏れていた。

そんな言葉から里美の不安を読み取った翔太郎は竜と共に一歩踏み
出し進也と里美を二人きりにした。

進也は横目でそのことを確認すると里美の頭に手を触れようと手を
伸ばす。

進也が伸ばしてきた手に里美は一瞬ビクリと肩を震わせる。
だが、自分の頭に触れた手はとても暖かった。

『夜までには必ず帰ってくる。だからおにぎりを作って待ってて。
一緒に食べよう？』

進也は笑顔を向け里美にそう告げると頭を2、3度撫でた。

『…は、はい！具は…具は卵焼きでいいですか？』

里美の言葉に進也は小さく頷く

そして手を離しくるりと背を向けた。

『いつてきます。』

進也は振り向かず翔太郎、竜のもとへと歩き出す。
進也が来たことを確認しては翔太郎は口を開いた。

『もういいのか…?』

『駄目ですね。おれ、

…松下さんが一番怖いはずなのに、戻ってくるって言葉しか言えなかった。』

苦笑を浮かべ、進也がそう呟く

『立派だったと思うぜ、里美ちゃんの気持ち汲んでよ。里美ちゃんも少しは安心できたんじゃないか？
さすがだな。』

翔太郎がそういうと竜も小さく頷いた。

『じゃあ、行きましょう。』

三人の男は風都タワーに向けて足を運び始めた。
その様子を彼らが米粒になるまで見送っていた里美は踵を返す。

(一緒に食べよう…?)

ふと脳裏に進也の言葉が浮かんで「ふ…」と笑みをこぼし里美は家に戻るとピンク地に白いウサギのアップリケの付いたエプロンに身を包む。

そして腕をまくり、高級そうな冷蔵庫の中から卵を取り出した。

その様子を部屋から覗いていたフィリップがのそのそと出てくる

『あ、フィリップさん。どうかしましたか？』

『…君は着いていけないんだね。』

『わたしが今やるべきことはお腹をすかせて帰ってくる3人にご飯を作ってあげることです。』

真面目な顔で帰ってくる答えにフィリップは笑みをこぼした。

『ははっ、違うない。ただ、正確には5人だよ？具は卵だけ？』

『あ、勇樹さんの分忘れてました。って…具は卵だけですけど』

『なら、それぞれの好みに合わせた具を入れてみるってのはどうかな？』

上野進也の好みは分からないが、勇樹の具の好みは「ツナマヨ」だ。そして翔太郎は「鮭」照井竜は筋子、と言ったようにね？

そして、今考え付いたことなんだが、1つワサビを練りこんでみてもはどうだろうか？

今、ロシアンルーレットというものを検索したんだが、唐辛子やワサビといったものを忍ばせそれに当たった人物の苦悶の表情を浮かべる姿を見て楽しむと言うものなんだが、いかにバレずに忍ばせるかが重要なんだ。』

『ロシアンルーレット、ですか？でも…傷ついて帰ってくるのに、そんな…ワサビを練りこんだお握りなんていいんでしょうか』

『？』

里美が疑問を投げるとフィリップは笑顔で返す

『傷ついて帰ってくるから必要な事、なのかもしれないよ？とにかく僕はロシアンルーレットがやりたいんだ。1個だけ僕に作らせてくれ。』

そう、フィリップは言うつと緑のエプロンを着込み、ご飯を掴もうと炊飯ジャーの中を開ける

『ちよつと！駄目ですよ、手を濡らさなきゃご飯が…』

『大丈夫、僕は「おにぎり」については閲覧済みさ。お握りにおけるご飯の炊き方から塩加減、具の味付けの具合、それらをすべて知っている』

だから問題はな― 『ありますよ！見るのと作るのでは違うんですから！わたしが、1つお手本を見せますからフィリップさんはその通りに』

『僕の閲覧したものにケチをつけるのかい？なら松下里美、5人が帰ってきたら、どっちのおにぎりが美味しいか上野進也に判定してもらおうじゃないか。』

『の、臨むところです！上野君の胃袋は渡しませんから！』

『誤解しないでくれるかな。僕は人の胃袋を抉り取って飾る趣味はない。』

『も、ものの例えですよ！もう、始めますよ？』

里美は下げていた髪の毛をゴムできゅっ…っつと結ぶとキリリとした表情になる

まるで時代劇に出てくるような雑刀を持った武士の妻のようなオーラの里美を見てはフィリップも腕をまくった。

14時58分、3人は風都タワーへと着いた。

風都タワーは現在工事中の看板があり人はよりついておらず中に入ると警備員が傷だらけで倒れていた。

『ひどい…。』

進也は呟く

しばらく進んでいると一人のマスカレイドが姿を現す。

『…来てやったぜ。勇樹と亜樹子はどこにいった？』

翔太郎がマスカレイドへ告げるとマスカレイドは何も言わずに着いてこいと合図をする。

勇樹達の居場所が分からない以上、3人はそのマスカレイドに従って歩いていくしかなかった。

階段を下りて地下2階にそのマスカレイドは降りていく

そして「関係者以外立ち入り禁止」と書かれた扉へと招かれる

『ここは？』

招かれた部屋は制御室らしき部屋だった
大きな液晶があり、そこには風都タワーの部屋色んな角度から映し
た映像が映し出されていた。

『俺達をここに連れてきて何を企んでんだ？』

翔太郎がマスカレイドに問いかけるとそのマスカレイドは無言のま
まパチンと指を鳴らす。

するとどこからともなくマスカレイドが現れる。

周囲を囲むように現れたマスカレイド達に3人は身構える。

するとたくさん映像の中から映像の一部が変わった。

《…ようこそおいでくださいました。》

映像の中にいるのはグレーのエターナル、フォーエバーであった。

《ちゃんと上野進也を連れてくるなんて驚きました。これでわたく
しの幹部昇進は決まったも同然ですね。》

『勇樹と所長は無事、なんだろうな…』

竜が画面に向かいいうとフォーエバーは「さあ？」と言うような素
振りをする

《それについては分かりません。七枝とは連絡を取っていないので
生きてるかどうかわたくしは把握していませんので。》

『ふざけるなよ?』

《ふざけてなどいけませんよ。さて、上野進也君、貴方が来てくれて本当に助かった。》

さあ、早く展望室へと来てください。

だれか、案内を…》

フォーエバーが言うとマスカレイドは進也を案内する

進也は翔太郎とアイコンタクトを交わした後おとなしくそのマスカレイドに着いていく。

進也が扉を潜ろうと歩き出す。

竜と翔太郎は周りに配置されたマスカレイドの役割について理解し始めていた。

『勇樹を返すつもりはない、らしいな…』

パキパキと翔太郎は指を鳴らす

『そつらしいな。左、上野にこつそり着いていけ』

『何言つてんだ。この量一人で裁いて勇樹と亜樹子を助けに行くなんて死に行くようなモンだろうが』

『ここは協力して行くのが普通じゃねえのか?』

『これは、俺の戦いだ。手を出すな。それに忘れたわけじゃないだろう?』

俺は死なない…。いや、死ねない。

まだやらなければならいことがあるからな。』

竜は拳を構えた。

『やらなきゃいけないことって亜樹』もつと大事なことだ。もつとも俺に出来るか分からないがな。分かったら行け！』

『はっ・・・不良息子を持つと親は苦労するな。ここは任せたぜ照井
』！』

翔太郎は自分に迫ってくるマスカレイドを掻い潜り進也の後を追った。

その直後、脱走に気づいたマスカレイドが扉をゆっくり閉める

翔太郎は扉の閉まる重い音を耳で聞きながら振り返らず進也の後ろを追いかけた。

ここは展望室

風都が見渡せる景色のよい場所、アンティーク調の椅子に座り仮面ライダーフォーエバーはそこにいた。

この風都における全てのT1方式メモリを適合率関係なしに扱える男は自らが忠誠を誓う男、蒲原と話をしていた。

『吉崎君、思っていたより貴方はやる男でしたね。』

蒲原は骨ばった顔の口角をあげる。

その顔は骸骨が笑ったような笑顔である。

『このまま上野進也のデータを手に入れることが出来るならば、君に幹部の証のゴールドメモリを与えましょう。』

『蒲原様はなぜ、その上野進也に拘るのですか？』

吉崎の疑問だった。

蒲原の上野進也についての執着は異世界の住人だから気になって調べる。という類ではないと思ったからである。

そんな吉崎の疑問に蒲原は答える

『風都に仮面ライダーが現れて早22年が経ちます。かつてガイアメモリを製造していたミュージアムと闘ってきた男も含めると32年ですが。』

その長い歴史、様々な人間が誕生しました。

我々のガイアメモリ製造器にも使われているデータ人間、超能力を扱えるクオークス

20年前風都を震撼させた死者軍団NEVER、科学の過ちによって生み出されたこれらの人間の記録は今や風化している。

ですが、上野進也はこれら風化した科学の化け物を凌駕する存在であることを耳にしたのです。

ですから上野進也を調べ上げれば、私の目指す風都へ踏み出す一歩となるのです。

吉崎君、貴方も幹部になったのです。これ以上の質問は必要ありませんね？』

『は、はい！分かりました！！、わたくしは永久に貴方に仕えます』

『
』
フォーエバーは蒲原に跪いた。

『…どうやらい駒^{ぶか}を私は持ったようですね。気が変わりました。貴方にゴールドメモリを差し上げましょう。貴方の忠誠に相応しいこのメモリを、ね。』

蒲原はコトンと懐からメモリを1つ取り出すと机の上に置く

『このメモリは――』

ふとフォーエバーが顔を上げると蒲原は消えていた。

『わたくしと共に歩んでくださるのですね。蒲原様。』

忠誠^{ちゅうせい}に心打たれた蒲原から受け取ったメモリをフォーエバーメモリを抜き取り、変身を解き抱きしめた。

それから数分後、マスカレイドが扉をノックし、入ってきた。上野進也^{かみのしんや}を連れて

(この男が…、蒲原様の目指すべき風都を作れる鍵)

『ようこそ、わたくしの風都タワーへ』

『…勇樹さんと亜樹子さんはどこですか』

進也は真っ先にそれを口にする。

『だから、わたくしは知らない。七枝が勝手に行動を起こしているからね』

『部下も治められないのか。』

自分の部下の事も把握できないなら人の上に立つ資格なんてありませんね。』

貴方もそのBossに使われてるだけなんじゃないんですか？』

進也の言葉に吉崎は「ふふっ……」と笑った。

『おかしなことを言うな、わたくしはついさっき、蒲原様に認められたんだ。』

例えそうだとしても別に気にはしない。

わたくしは蒲原様と共に新しい風都を創りあげる為に力を尽くす！
あのお方の道のために』

【FOREVER】

吉崎はロストドライバーにフォーエバーメモリを挿し込む

『変身』

【FOREVER】

吉崎の体を黒に近いグレーの粒子が包み込み、グレーのエターナルへと変化する

『さあ、永久なる忠誠を捧げよう』

『…お前みたいなのが仮面ライダー？お前が誰に仕えていようが関係ない。闘う理由は人それぞれです。でも！お前みたいなのが仮面ライダーだとは認めたくない。』

おれは仮面ライダー修行中だから何を指して仮面ライダーって言うかの定義はよくわからない。でもお前は違う。』

【ETERNAL】

進也はクリアホワイトのメモリを自らのロストドライバーに挿し込む

『変身！』

【ETERNAL】

進也の体を白い粒子が包み込み白いエターナルへと変身する。

『お前がしたことは許せない。』

さあ、お前に罰を与えよう！』

『できるものならやってみるがいい！』

フォーエバーは自身の武器、フォーエバーフルーレを構えた。西洋のフェンシングにも似たような細い剣の鞘はマキシマムスロットになっていた。

王を守るうとする騎士が使つような武器、まさに「忠誠」を表すには相応しい武器である
そう言えよう。

進也ノエターナルは自身のエターナルエッジを構える

長い剣の方が有利であろう、
そう悟つたエターナルはジーンメモリを取出しエターナルエッジの刃を引き延ばす

その形は日本刀にも近い形だった。

『日本刀…ですか？』

『おれはフェンシングの動きがよく分からない。だから具体的な対策が出来るまでこれで相手をさせてもらおうよ。』

『そうか、情報が入って来ないんだね？じゃあ、行かせてもらおう
！！』

フォーエバーとエターナル

永久と永遠が今再び刃をまみえようとしていた。

照井竜は拳と拳銃でマスカレイドに立ち向かい、死闘を繰り広げていた。

P1 マスカレイドは普通のメモリの扱いとなるため、鳩尾を殴り、足で蹴飛ばし、拳銃で足を撃つなどをし全員を無力化させる事に成功した。

けほり、と咳を一つし赤くなった拳で頬の血をぬぐう。

(勇樹と所長はどこだ…?)

拳銃に新しい弾を込め、人間に戻ったマスカレイドのうち、銃で足を撃つた者への簡単な応急処置を終えた後、制御室のモニターに目を通す。

(左達は無事に着いたようだな。・・っ!?)

モニターを眺める竜の背後、竜は人の気配を感じ、飛びのいた。残党だろうか、と構えると一人の男がそこにいた。

『そんなに構えなくとも、大丈夫ですよ。』

その男は眼鏡をかけ長髪を結び、燕尾服に身を包んだ執事のような恰好をした男だった。

ここにいる以上、一般の警備員ではないことは明らかだった。竜は警戒をしたままその男に問いかける

『なんだ、貴様は』

『申し遅れました。僕は城ノ内といいます。』

『城ノ内…？』

『EXEの幹部をしていて、貴方の大事な息子の腹を刺した男、とても言いましようか』

EXEの幹部、その言葉を聞いて竜は銃を構えた

『勇樹を連れ去ったのは貴様の差し金か？』

竜の低い声に城ノ内は動揺をする事無く答える

『僕はあるな滑稽な男のやる事には興味はない。蒲原洋一という男に異常なまでに執着している靴の裏のガムのような男が僕の同僚だなんて反吐が出る。』

『随分な物言いだな。それで何をしにここへ来た。』

『蒲原様、EXEのトップの護衛をしがてらに来たんだ。』

蒲原様は最近、上野進也にご執心だね。なんでも彼はこの風都の仮面ライダーの歴史において、今まで存在しなかった人間だ、という噂に踊らされてる。

僕にしたら風森勇樹のほうがとてもいい研究材料になると思うんだが、殺せ、殺せとうるさくて参ってしまう。』

『……勇樹に手を出すな。』

竜は銃を向けたまま言い放つ

『過去から来たというのに立派な父親だな。』

さて、君を勇樹のところへ案内しよう。モニターを見てても映りはしないよ』

『…城ノ内と言ったな。貴様はいつたい何を企んでいる？
EXEの目的と同じ、風都をドーパントの樂園にすることか？』

竜は城ノ内の背後を着いていきながら話しかける
すると、城ノ内は一言洩らした

『答える義理はない。』

ここだ―
と城ノ内は一つの扉を指さす

風都タワーの外にある資材置き場の倉庫だった。

『…すまなかつたな。礼を言う。』

『礼は要らない。じゃあな。』

城ノ内は返事も聞かぬままに立ち去って行った。

竜は重い扉に手をかけて思いきり横に引つ張った
すると扉は「ずずずず・・」と埃を巻き上げながら開く

そこには、何かの装置に縛られ、青い液体に周りを囲まれて気絶している勇樹の姿と
車に轢かれた動物のように傷だらけでうつ伏せに床に投げ捨てられていた亜樹子の姿である。

『所長!』

竜は真つ先に亜樹子に駆け寄る。

掬い上げ、抱き留めた亜樹子の顔は唇の横に真つ青な痣があり目元も赤く腫れ上がって、すり傷や切り傷がついていた。

そして、抱き留めて分かったが

彼女の特徴?であるポニーテールが出来るほどの長さの髪が無残にも周りに散らばり、シヨートヘアになっていた。

『……………』

竜は亜樹子を壁に優しくもたれさせると遠くにあつた彼女の「ほわちやー!」と書かれたスリッパを拾い彼女の手の付近に置くそれから勇樹の装置に近づき、メモリを外し、銃のグリップで破壊した。

勇樹を装置から降ろしては亜樹子の隣へと運ぶ

その途中、白い電球のようなドーパントが倉庫の奥の扉から出てきた

『よくここがわかったな。』

ジーン・ドーパント、七枝は目の前の竜の行動にケタケタ笑いながら言う

だが、竜はそれを無視し、隣に寄せた後、亜樹子に自分の上着をかける。

『どうだ?僕の演出は…最高だろう?舞台演出家として華があるだろう?素敵だろう?』

ジーンは主役が揃ったことにテンションがあがりべらべらとしゃべる

『……………』

『この姿で、あの女をボコボコにしてやった。くりそつだろ?』

ジーンは自らの体を照井竜に組み替える

声も容姿も一緒のままケタケタと意地の悪い笑みを浮かべたままなおもしゃべり続ける

『まあ……ここまでボコる必要はなかったんだが、少タイラついでね。フェニミストの僕としたことが』

ピッ

とボタンを押せばモニターに暴行の様子が映し出されていた。

《…いくら竜君の姿使って家族同然の私を殴ったって意味ないよ。

貴方は竜君とは違、い過ぎる。

だから、勇樹君の心は絶対に折れないし、私も、貴方の姿を竜君だとは思わない。》

《…貴様、僕の演出を汚したな?お前はただ、「痛いよ、竜君!」と喚けばいいんだよ!》

《絶対に無理!実際の竜君より不細工なくせにどう思えっというのよ!これで心折れるって言う方が難しいわよ!ねえ?勇樹君》

《所長さ…煽っちゃダメだよ。本当の事だけど》

《なにがジーンドーパントよ。才能ないくせに!透君に謝りなさい

よ！この不細工ドーパント！！」

《誰が・・・不細工だと？もぉ・・・怒ったぞ。殺してやるうっうっうっうー！！》

・・・

『ふははは、どうだ？』

そこから髪を切られ、擦り傷や切り傷が増えていく。

映像は暴行の最後までであったが

その最後まで勇樹はメモリを挿されてはいたが放置気味であり外傷はなかった。

それを最後まで見た後で竜は深い溜息を吐き、眠っている亜樹子を見る

『どうだ？素晴らしいだろう、この映像はCGを使わない生の映像

——』

「だ」という前に竜は銃口をジーン・竜に向けて放った。

横を掠めとんだ弾丸はジーン竜の横の壁に穴をあける

その音に目を覚ました勇樹は竜が来たことと、横の亜樹子の姿を見て七枝へ一言、かすれた声で呟いた。

「絶望がお前のゴールだ。」

竜はジーン竜の喉を腕で打ち、ジーンメモリを排出させる。

派手に喉をやられたジーン、七枝はさらに追い打ちと言わんばかりにラリアットを仕掛けられ
声が出ないまま竜に馬乗りになられた

『ひっ・・・』

目の前の竜の表情は言語では表現できず、敢えて言うならば「鬼」
否「閻魔」と言った方がいいほどに恐ろしかった。

『ま、ま…まて！』

竜は七枝に馬乗りになった状態でその頬を真つ赤になっていた拳で
殴る。

強烈な一撃が七枝の頬を襲い歯が折れ、血と共に何本か床に散らば
った。

『ほ前ひよ顔を使っひゃほとは・・・あひやまる・・・だか、らほう・・・
ひゃめ…ひゃめてふれええ！』

竜は銃口を七枝の眼前に向ける

『…無理だな。』

ズガン――

と銃を放った竜はもうピクリとも動かなくなった七枝から退き埃を
払う。

竜の放った弾丸は七枝の顔すぐ横の床に撃ち込まれていた。

七枝は本当に撃たれたと思ひ込んだのか白目をむいて気絶している
だけである

至近距離から撃つた為か竜は手を痛めたらしいが、七枝の体を引きずり縄で外の電柱に縛りつけた後
竜は次にはモニターに映る映像を消去しようとして動いていた。

「全部消去しますか？」

の文字が画面から現れると
竜の手が止まる

全体的に不愉快な映像であるが、消すのを躊躇ってしまい、結局、それを近くにあったUSBに落とし
消した。

(…後で編集をするか。)

そのあとで竜は近くにあったホースを外の水道の蛇口につなげ、水を流すと自分のハンカチを濡らして
亜樹子の口元の血をぬぐう

『煽りすぎだぞ、所長。あれでは自分から攻撃してくださいと言ってるようなものだ。』

『ん・・お腹すいた。』

『お腹がすいた、ではなくて…分かっているのか？』

『むむ、まだいたのね？勇樹君から離れなさいよ！この不細工ドーパントお！』

かみ合わない会話に一気に張りつめた緊張が解けたのか竜に眩暈が

走る。

一気に疲れが身体を巡ったらしい。亜樹子の右隣に陣取り座れば左隣の勇樹は眠っているようだった。

『おによれ〜！まだいじめるか。竜君アクセルメモリ貸して！私が変身する！』

『君は一体何の夢を見てるんだ？』

そう呟くと竜もうつら、うつらと微睡まどろみやがて目を閉じた。

Fに平和を／永久はそれを知り剣を振るい道となる（後書き）

と、いうことで、今回の話いかがだったでしょうか。

やりたいことを詰め込みました。

今回は全体的にうまくまとめられたかなあ・・・と思っています。

フィリップ君は里美ちゃんと面識あるかないか、分からないのであやふやにしておいて

絡むならこんな感じがいいなあ・・・と（笑）

そして、蒲原さんが一応幹部として認めましたが、果たしてどうなることやら

この蒲原さんがなぜ進也君を求めるか、の理由はベルトさんの最新話を参考にしました

具体的な理由をつけることが出来て話に重みが出てきたのでマヒロ的にはうれしいです。

ただ、蒲原と正体を明かしたストームさんと違うのは

噂を聞く　なんだこいつはニュータイプか！？　知りたいiiiiii

調べたいiiiiii！！

つてな感じです。

そして、演出大好き七枝さん。

「ななし」に適当な感じを当てはめて苗字にしたもの

アクセルの形をしたドーパントってなくね？

どう説明するよ

あ！ジーンがある。

で、ジーン・ドーパントになりました。
元のオリジーンが映画監督なので演出家に行ってみましたよ。

当初、勇樹が所長をボコられてやめてくれえええ——！って叫ぶシーンを書いてましたが

読み返したところ、所長が攫われて暴行されるのは「狙いすぎ、気持ち悪い」になるだろうなあ・・・と思い、直そうとしましたが所長ピンチはやりたかったです。

で、どうしようかなあ…と考えると勇樹の反応を変えてそのまま採用そのまま、七枝の人格につながりちよつとしたラブにもつながったので良かったです！

竜くん、今回カッコよく書けてたらしいなあ

あの人を怒らせれば何するか分からない

ピータンで学んだことです。

本当にマジギレした照井はテラーより怖いと思う。

本当に今日はやりたいこと詰め込んで上手く形にまとまったので嬉しいです。

それでは！

ps

亜樹子アクセルは多分、ピンクでアクセルの目の青い部分がハートマークだと思います。

エンジンスリッパとか、アクセルスリッパとか

語呂がいいからいつか使いたいな。

Fに平和を／行き着く先の理想郷（前書き）

コラボ、最終決戦

Fに平和を／行き着く先の理想郷

照井竜が勇樹と亜樹子を救い出した頃、エターナル、上野進也とフオーエバー吉崎賢二との激突は続いていた。

『はあああっ！』

エターナルは自ら組み換え作り出した日本刀、エターナルソードを振りかぶる。

相手の攻撃の型はフェンシングに近いモノだった。

(っ・くそ、相手の動きがまったく読めない。
フェンシングの事勉強しておくべきだったかな)

フオーエバーの持つ細剣は真正面からの刃を交わしてもしなり、軌道を逸らされてしまう。

『どうしました？フェンシングは初めてですか？』

フオーエバーはマントでフルーレの切っ先の軌道を極限まで隠し、エターナルの胸を突く

(ここはもうマグナムで行くか？いいや、駄目だ。マグナムで行っても銃弾の軌道を逸らされる。

対処方法は二つ。一つは武器を捨てて肉体で挑む、もう一つは、メモリで道を作り出す。)

『ほら、どうしました？足が疎かですよ！』

フォーエバーはフルーレの切っ先を足に向けそつとなぞる様にエターナルの足を掬った。

『うわっ!?!?』

エターナルは避けようとしたが自らのマントに足を掬われ後ろに派手に倒れる。

倒れる拍子に自身が持つてるメモリが散らばり、エターナルは手身近にあったものを掴もうとしたがその手を踏まれた。

『うあああつ!?!?』

手を踏まれ、それを退けようともがくがフルーレの切っ先が眼前に突き付けられる

『勝負ありましたね。上野進也。このエターナルメモリは回収させてもらいますよ?』

フォーエバーは切っ先を向けたままそう言うと刃を収めて進也の口ストライバーにあるエターナルメモリを握り、引き抜こうとする。

その瞬間、

フォーエバーの手に何かが体当たりをかました。

『この・・・やかましい、なんだこれは!』

フォーエバーに向かってきたのは良く見慣れたガジェットだった。翔太郎のスタックフォンである。

『し、師匠!?!?』

エターナルはそう思わず口をついて言葉を発した。
この世界では言わない様にしていたのだが、思わず出してしまった。

スタッグフォンが飛び交いフォーエバーの手元を飛び回り翻弄させている中、翔太郎はアタッシュケースの中を開きメモリを一つ進也に向かって放り投げた。

『こいつを使いな！』

翔太郎がエターナルに向かい投げたのはT×ルナメモリだった。

『は、はい！』

エターナルは翔太郎からメモリを受け取るとルナメモリをエターナルソードに挿した。

【ルナマキシマムドライブ】

そう音声が響くと

まだスタッグの軌道に翻弄されているフォーエバーの首にエターナルソードの切っ先が鞭のように伸び、巻きついた。

どの方向に引っ張っても水飴のように柔軟に伸びることを悟ったエターナルは刀を一本釣りのように上にあげ、その反動で浮き上がるフォーエバーの腹に両膝を打ち当て、巴投げをし、その腹の下をすり抜け立ち上がる。

（危なかった…）

エターナルは未だにドキドキとしている自分の胸を抑え、翔太郎のもとに駆け寄る

『し、師匠、来てくれたんですか！？』

『まあな。間に合って何よりだ。それより気を引き締める。まだだ。』

翔太郎はフォーエバーを奔走させる役目を終え、戻ってきたスタックを懐にしまい、巴投げをされては床に転がっているフォーエバーに目を向けては言う

『は、はい。』

マントを翻しエターナルは倒れているフォーエバーの方を注目する。

『…やりますね。やはりメモリをたくさん持っていると言うのは闘い方に苦労しませんね。ではわたくしも使わせていただきますしょう』

ゆっくり立ち上がったフォーエバーは手に赤いメモリを握る

『それは…！』

フォーエバーは赤いメモリを始動させる

【ACCEL】

その手にあるのは勇樹のアクセルメモリだった。

『変身』

フォーエバーは自身のメモリをマキシマムスロットに移動させ、ロストドライバーのスロットにアクセルメモリを挿しこむ。

するとグレーの粒子が割れ、赤い粒子を纏い、アクセルの姿へ変わった。

フォーエバーアクセルフォームである。

(以下Fアクセル)

『さあ、いきますよ』

吉崎はFアクセルとなり、アクセルメモリ挿入時に転送されてきたエンジンブレードを手に取る

Fアクセルはアクセルメモリから戦闘スタイルの情報を得ているのかフォーエバー時のフェンシングの型ではなくエンジンブレードを大きく振り回す力強い剣の型へと変わっていた。

『っ…!』

エターナルソードでエンジンブレードの斬撃を何度か受け止めてはエターナルはこの武器の形状では不利だと悟る

(これじゃあ、刃が折れる。形を変えないと…)

エターナルはジーンメモリを手にし、エターナルソードをマグナム、銃の形へと変化させる。

『形を変えても無駄です！武器を壊してあげますよ！』

『壊されるものか!』

エターナルマグナムのグリップでエンジンブレードの重みのある打撃を受け止め、押し戻すと空いてる手でマントを手で大きく広げ猫だましを相手に仕掛ける。

Fアクセルは押し戻された反動からエンジンブレードを振りかぶっていた最中だったため、突然目の前に黒い布地が広がり一瞬視界を奪われる

『そこだ!』

『な・・!?!』

黒い視界が開けた瞬間、Fアクセルの目に映ったのはマグナムの銃口だった。

『勇樹さんのメモリ返してもらおう!』

マキシマムを放つてはメモリブレイクしてしまう為、エターナルメモリを挿入せずエターナルは銃を撃った。

だが、Fアクセルはトリアルメモリを手にしており、挿入するとFトリアルへと姿を変えてマグナムから放たれる銃弾をすれすれで避けた。

刃を合わせた距離からの発砲だったため、銃弾は確実に当たるものだと思っていたエターナルは虚を突かれた。

(あの距離から銃弾を避けた!?)

『どうしましたか?わたくしのこの姿は初めてではないはずですが

？
『

このアクセルトリアルと会うのは実質二回目である。
銃弾を避けたフトリアルはその青い体で目の前のエターナルを見据える。

エターナルは軽くその仮面の奥で冷や汗を掻いた。

銃弾が避けられる速さであれば銃を撃っても意味がない、かといって肉弾戦で挑むも攻撃の手は避けられ

その速さで繰り出される高速の蹴りや拳にやられてしまうだろう。

フトリアルが動き出す前に先手を打たなければならぬ。

フトリアルと西部劇のガンマンの様に睨みあい、先に動いたのはフトリアルであった。

音速にも思える速さで繰り出される蹴りを何発もエターナルはその腹に食らった。

『ぐっ…』

フトリアルが悠然と立つ中、エターナルは膝をつく
圧倒的な強さだった。

(くそ…動きが見えない)

腹を押さえてエターナルはフトリアルを見る。

速いならその動きを止めればいい。子供でも分かる様な考えである。
だが今のエターナルにはその方法が思いつかなかった。
ふと後ろで見守っている翔太郎を見る。

(師匠、助けてください…)

エターナルの見つめに翔太郎は自身のポケットを指さし、その後、言葉を発せずに空の「太陽」を指さし銃を撃つような手つきをした。

（師匠！）

エターナルは翔太郎が、フトライアルに気づかれない為にジェスチャーをした事を理解した。

エターナルはすぐにその意味を解説しようとする

翔太郎が指さしたポケットは翔太郎が普段メモリを入れてる方のポケットである

||メモリを挿す

これは理解した。

続いては空の「太陽」を指さして銃を撃つ仕草

（た、太陽を撃つ？）

『どうしました？』

フトライアルが膝を着いたまま動かないことを疑問に思い問いかけるその問いにエターナルは答えることはなかった。

『諦めたのでしたら、捕らえさせていただきますよ？』

こつ、こつとフトライアルの足音がエターナルへと近づく

（これでわたくしは貴方の傍に居られる。）

トライアル態のまま吉崎はいよいよと言うその時を迎え、気分が高揚していた。

永久に仕える夢が目の前に現実になろうとしていたのだ。

だが、その男の夢に一つのヒビが入ろうとしていた。

勿体ぶり一歩ずつ歩むフトライアルは小さな立ち眩みを引き起こした。

(…おや?…わたくしは貧血にはなった事は無かったですか…)

Fトライアルは突然起こった立ち眩みに首を傾げつつも大したことはないと流す。

一方のエターナルは翔太郎の助言の意味が分からずにいた。

太陽を撃つ

太陽に向けて指で銃の形を作り上げ撃つ真似をした。

一体それは何を表すのか……

太陽を撃てば当然、陽光は無くなる

陽光が届かなくなれば昼であろうと辺りは夜と化ける

夜となれば

当然辺りは暗くなり

『そうか!「月が昇る!」つまり、これを使ってみる。そう言うことか!』

しばらく悩んでいたエターナルはそう明るい声を出すなり銃にTXルナメモリを差し込む。

現在、吉崎が使うメモリはTXメモリではない。その為エターナルはマキシマムドライブは発動せずにただ、引き金を引いた。

ルナの特性から伸びる弾丸でも飛び出すのでは無かるうか？

そう思われたがルナの弾丸はFトリアルを追いかけ追尾する金に輝きし弾丸だった。

Fトリアルは自慢の加速でその弾の追尾を振りきった。

『追尾弾とは…なかなか、この能力でなければ避けられませんでしたよ。』

声色ひとつ変えず間一髪を言い表した吉崎、

『ダメか…』

(でも、これが追尾弾なら…なんとか勝てそうだ。)

エターナルはルナメモリに確かな勝機を見いだしていた。

エターナルの脳内にルナメモリから発せられる情報。

エターナルはその情報に従い二本メモリを取り出す。

一つは忍の記憶を秘めた

ニンジャメモリ

エターナルはまず、ニンジャメモリをマキシマムスロットに挿し込む

【ニンジャマキシマムドライブ！】

ニンジャメモリが始動しエターナルは瞬発力や跳躍が格段にあがる。

『何をしようと無駄です!』

Fトライアルが身構えるなか
エターナルはFトライアルの懐に潜り込む。

『早いな。ですがわたくしのスピードには勝てませんよ。』

Fトライアルは次のエターナルの攻撃を避けようとした。
だが、エターナルは言う

『この攻撃は避けられない。』

Fトライアルの眼前に銃を構えてはルナメモリのマキシマムを発動
させる

【ニンジャノルナノマキシマムドライブ】

二つの音声が響き、エターナルが引き金を引くと 1つ、警察が所持するような弾丸が銃口から飛び出す。
それは真っ直ぐ壁にぶち当たると破裂し目映い閃光を辺りに散らした。

『うわ…っ!目が…』

Fトライアルは部屋中広がる閃光に膝を付き目を押さえる。

そのようすに間髪入れずエターナルは次のメモリを組み合わせる

【ニンジャノコールノルナノマキシマムドライブ】

エターナルの胸についている一つのスロットに彼自身が持つ召喚の記憶を挿し込み
常人ではなし得ないトリプルマキシマムドライブを発動させる。

『…！』

Fトライアルは閃光が晴れて目がなれた直後に目の前に大きな虎をみた。

鋭利な爪、猛る咆哮

それはどれを取っても虎そのものである。

その虎はFトライアルをに飛びかかると爪で引き裂いた。

『なんだこれはああッ！！』

Fトライアルは悲鳴をあげた。

だが、Fトライアルの前にはなにもいない。

(…ルナは月の記憶じゃないんだ。)

ルナメモリは幻想の記憶を秘めたメモリである

その幻想が生み出した「幻術・口寄せ」彼の前には何も無いが彼の瞳には虎が見える。

召喚と幻と忍が織りなす技だった。

『…ハア・・・ハア…』

Fトライアルの前から虎が姿を消し、Fトライアルは疲労感を露わ

にする。

その機会をエターナルは見逃さなかった。

忍の能力のまま懐に再度もぐりこみトリアルメモリをスロットから抜き取る。

その瞬間から青い粒子は解け、フォーエバーが姿を再びあらわした。

『勝負、ありだ！』

アクセルメモリもトリアルメモリも救い出すことに成功したエターナルはマグナムの銃口を疲弊しているフォーエバーへ向ける。

フォーエバーはマグナムに動じず立ち上がりフルーレを構える。

これが最後の立ち合いである。

両者はどちらともなくこの戦いに決着が着くと言う事を感じ取っていた。

そう、この最後の一振りで――

だが、その決着の行方は簡単にあまりにも残酷な形で迎えられることになる。

『つつつ…！？』

フォーエバー、吉崎賢二は急に変身を解いたかと思うといきなりその口から血を大量に吐いたのだ。

げほ、げほっ…

吉崎は立つ力も無くし膝をついて口から血を吐く。

その出来事に臨戦態勢を敷いていたエターナル／進也は驚き、変身を解き駆け寄った

『だ、大丈夫ですか！？し、師匠！きゅ、救急車を！』

進也は吉崎の背を擦ると後ろで様子を見ていた翔太郎へと呼びかける。

翔太郎も慌ててスタッグを手にし救急車を呼んだが、呼び鈴が鳴る中で血を吐く吉崎を見つめ、

この男の人生が終わろうとしている事を悟っていた。

一方の吉崎は自らを口からあふれ出る血液に目を丸くしていた。

自分はこの方大きな病気を経験した事が無い。

これはいったいなんなのか――

口に広がる鉄の味、そして身体の芯が冷めていくような感覚

それを感じ取り吉崎は自分が死んでいくと言う事を悟り始めていた。

自分は永久の忠誠を誓いし騎士だったはずではないのか

横で慌てている進也の声を聞きながら吉崎は手のひらのフォーエバーメモリに自問する。

だが、フォーエバーは主である自分が辿る道を示すように砕け散っていた。

『彼は、メモリを過剰に使用しすぎました。』

風都にあるとある洋館、蒲原はモニターに移る吉崎を見ながら一言そう呟いた。

『過剰なる力はドライバーを通していても使用者を蝕む。それに気が付かず他人のメモリを使用し続けたツケが来たのでしよう。』

永久なんて言葉は永遠に有りえない。

貴方の言う理想郷へは貴方1人で逝ってください？
それでは、さようなら』

蒲原はそう言いモニターの電源を閉じた。

フォーエバーが砕けた中、進也はその手が赤に染まるかと吉崎の体を支え続けた。

「あと少しで救急車がくる」

敵だと言うのに、さっきまで実験動物扱いをしていたというのに、進也の言葉は慌てて早口になっているが優しかった。

それを噛み締め、吉崎は吐血が落ち着くも次第に小さくなっていく命の灯を見つめ
1つ、道を決めた。

（蒲原様、永久に共にお傍に居れないことをお許してください。
わたくしの命はここまでのようです。）

わたくしはもし失敗したら貴方の手にかかり死ぬことが幸せである
と思つて居ました。

ですが、わたくしは貴方を守る忠誠の騎士「仮面ライダーフォーエ
バー」

この身が朽ち果てようと、最期まで忠誠のために――
貴方の理想郷を作るために役立てたい。（

吉崎は静かに涙を落としながら懐にあるゴールドメモリを手に取っ
た。

『さあ、勝負です。上野進也！』

足に力を入れて吉崎は立ち上がり進也に向けて宣戦布告をした。

『え…！？』

進也はその行動に驚いた。

吉崎は足元もおぼつかないほどに弱っているのだ。

『な、何言ってるんですか！今はそれどころじゃありません！

救急車が到着するまで待つててください！』

『救急車？そんなのはわたくしには必要ない！さあ、メモリを取り
今一度勝負を！』

吉崎の言葉に進也は一喝する

『勝負なんてそんなふざけた事言わないでくださいよ！死んじゃい

「ますよ！？どうして助かるかもしれない命を投げ捨てようとする――」
「進也、戦ってやれ」

進也の一喝を止めたのは翔太郎だった。

「な、し、師匠まで！」

「ハードボイルドな男なら理由は聞かずに乗ってやるもんだ」

翔太郎がそういうと進也は理解できないと言うように反論した。

「この人は救急車に乗れば助かるんです！」

どうして助かる命を見捨てなきゃいけないんですか！
人を殺すことが仮面ライダーじゃないでしょう！？」

進也の言葉に翔太郎は苦笑した。

翔太郎には何故、吉崎が再戦を挑むかの理由が分かっていた。

だがその理由を口走ってしまうワケにはいかなかった。

どう説明しようかと悩んでいると遠くに銃を構えた男がこちらに近づいてくるのが見えた。

男は翔太郎より少し離れた距離で吉崎に向かい一発銃を放った。

その銃声は重々しい空気を無理やり引き裂き

弾丸は吉崎が居る方向に撃ったはずなのだが展望室にあるふつと君のポスターをぶち抜いた。

その男の顔を見て翔太郎は一つ呆れたように溜息を吐くが、進也を諭すと言う役から降りる事にした。

一発の銃声になった方向を進也が何事かと振り返る

その男は赤いジャケットに入院着、そして現在進行形で右腕の肩に近い部分から血を流している勇樹であった。

勇樹は銃を吉崎へと向けたまま進也を見る

『ゆ、勇樹さん！いきなり何するんですか！』

『風森、勇樹：か。わた、くしを殺しにきたのか？』

勇樹は銃を構えながら青白くなりすっかり生気が薄れ、口の端に血がこびりつき、床にも血が着いていることから
1つ溜息を吐いた

『あい、にくだが、わたくしは、貴方の手に掛かって死にたくない。
最期まで…わた、く、しのみまで…！？がはっ…！！』

『吉崎さん…』

進也は再び吐血した吉崎の背を擦る

『…今、救急車が来ます。そうしたら——』『どうなるって？』

背中をさすり必死で励ましていた進也の横で勇樹の冷たい言葉が響いた。

『どうしてソイツを助ける必要があるの？そいつもう助からないよ？』

ここまで酷い症状みたのは初めてだけど、そいつは「メモリの過剰使用」によりメモリの毒素によって死ぬ。わざわざ死ぬ運命の奴を狙われたお前が助けようなんて考えられないんだけど」

勇樹の言葉に進也はピクリと反応した。

『メモリの毒素！？な、なら…おれのエターナルのマキシマムドライブでなら救えるかも、おれのメモリは使用者への効力を永遠に無力化できる。どうして気が付かなかったんだろう、い、今助けます！』

進也は吉崎を救うためにエターナルメモリを手には掛けた。それに伴い吉崎もメモリを握る。

『…無理だよ。』

だがそれを勇樹が打ち砕いた。

『随分と幸せな能力だな。過剰適合者も助けられる「死」を見る事のないメモリか。』

確かにお前が言う方法でマキシマムドライブしたら助かったかもしれないけど

どのみち無理だよ。そいつの体調不良を引き起こしたメモリは自身の力を制御できなくなり砕け、壊れた。

つまり、原因を引き起こしたメモリは無いから、何も変わらない。そいつは死ぬよ。

助かったとしても俺が殺すし。』

勇樹は茶化すように進也に問いかけた。

その様子を見て翔太郎はぱちんと手で自分の顔を覆い、呆れたように溜息を吐く

(まったく、なんでそういう言い方しかできねんだよ！)

『んなつ!?!』

進也は目を見開いた。

翔太郎の言葉の何倍も酷い言葉だ。そう感じた。

『助かるかも知れない人を殺すなんて貴方それでもかめ』俺は仮面ライダーである前に警察官だよ。警察官は犯罪者には発砲していいことになってる。

誘拐、暴行、脅迫。ガイアメモリの不法所持、罪はいろいろあるしよっ引くのが正しいやり方なんだろうけど

下手に入院させてもEXEの置き人に処刑されそうだし、やむおえないよ。これは』

『勇樹さんは人を殺せるんですか…いや、そうやって殺して来たんですか？』

『そうやって…仮面ライダーなのに、』

進也は腹の底からつらそうな声を出した。

それに対し、勇樹は茶化したような声色を止め、ゆっくりと真面目に言う

『俺だつてなりふり構わず射殺してるワケじゃないよ？そうしないとならないから殺してる。』

ドーパントに大切な人を殺された遺族とかね
大切な人のところに逝きたいと懇願してくるから俺は殺してる。』

『生きてくださいって言うのが普通なんじゃないですか？』

進也の言葉に勇樹は続ける

『励ましたって何にもならないよ。俺が励ました人はその後、病院でナースコールを首に巻いて首を絞めてた。

どうしてこんな事を！って聞いたら「貴方にはこの悲しみは到底分からないでしょう、素直にあそこで殺してくれたら私は幸せだった。あの人に会いたい。」って言われたよ。

今考えればその時の俺はバカだったって思う。

大切な人を殺したのは「人間」じゃなく「化け物」なんだ。
傷口もただナイフで刺しただけの傷じゃない

爪で引き裂かれたり

身体の一部が欠損してたり、メモリを破壊しても症状が治らないものだったり。

だから、俺はその人が心から望むなら命を絶つて決めた。

人道から外れてるかも知れないけど

俺はそれで「救える」と思ってる

ただ、命を延命させるよりだったら

死を選びたいなら俺は殺す。

死に顔は笑顔が一番だよ』

そういつと勇樹は銃を吉崎に向かい再度構える。

勇樹の言葉は進也の腹に重く押し掛かる

『吉崎はここで延命しようが組織に「裏切り者」として処断される。そして、お前がやらないなら、俺がここで「犯罪者」として射殺する。』

お前が戦えばこいつは望んだ死を迎えられる

「裏切り者」か「犯罪者」か「忠誠の騎士」として死なせてやるかそれはお前の自由だよ。

どうする・・・？』

そう問いかけた勇樹に進也はぽつりと言う

『…随分と簡単に言いますね。慣れてるんですね
おれは、貴方の話を聞いて震えが止まりませんよ
人を殺めておいて「笑顔」を振りまくなんて』

『…それが左翔太郎の目指す、そして俺の爺ちゃんが生きた道
ハードボイルドの道、ハードボイルド道ってやつだよ。そうだろう？左』

『……………』

(そついやおやつさんの孫だったな。あんにやろ、俺よりもガキな
くせにハードボイルド決めやがって

、せめて魂だけでも救うか—— おやつさんも多分、殺すだろうな)

進也はそれを聞いても黙っていた。

(言い過ぎたか？でも俺の言葉じゃコレが精いっぱいだしなあ…)

ふさぎ込んだ進也に翔太郎が声をかける

強い一言だった。

『男の八割は決断だ。進也、後の二割はおまけだ。その不良息子は決断をした。人道にはずれてようと心を救う道をお前はどうする？』

翔太郎の言葉が胸に響いた。

目の前の吉崎は進也の決断を待っている。

『っ、おれは、やり、ます。』

進也の口が動き、メモリを取り出す。

『待ってたよ。上野…しん、や。』

吉崎は飛び切り嬉しそうに言った。

【UTOPIA】

吉崎はロストドライバーに金色のメモリを挿しこむ

「理想郷」の記憶が働き吉崎の体を金色の粒子が包み、金色の西洋の甲冑を描き金色のマントを靡びかせ

手には銀に輝くフェンシングの剣と金色の十字を切る盾が姿を現す

誰の姿にも似ない

理想郷の為に忠誠に剣を取る戦士

吉崎が「ユートピア」に認められた瞬間だった

(理想郷。わたくしに力をくれるのですね。ああ…なんて綺麗な

甲冑だ。
)

進也はその姿を見た途端、迷いが吹っ切れた

【ETERNAL】

『変身』

【ETERNAL】

進也はエターナルに変身を遂げるとエッジを構える。
小細工は必要ない。
純粋なエターナルで勝負を――

吉崎はユートピアメモリをフルーレに挿し込む

【ユートピアマキシマムドライブ】

ユートピアのフルーレに金色の光が収束する

それに合わせ進也はマキシマムスロットにエターナルメモリを挿し
こみ

青い炎を足に込める

そして――

『はあああああああッ！』

『たあああああああッ！！』

金色と青い炎が激突し、展望室の窓ガラスを吹き飛ばす。

吉崎は展望室の割れた窓から風都タワーの外へと投げ出される
その瞳に見えたのは砕けた金色と、自分を救おうと手を伸ばした青
だった。

(ああ、綺麗な青空だ。)

吉崎賢二は死んだ。

その遺体は金色の粒子となり風都の風に攫われた。

事態が終息した風都タワーでは翔太郎が読んだ救急車に照井親子が
手当てを受けている。

吉崎の体調不良から、翔太郎、進也はそう怪我はなかったので手当
ては受けなかった。

『 師匠 』

進也は風都タワーの展望室の時からそう呼び始め、それが定着しつ
つあった。

無理に変えるよりこの方がいいだろう
そう思い話しかける

『 なんだ？ 』

『 これで、良かったんですか？ 』

『 さあな。ただ、奴は後悔してないと思うぜ。 』

『…勇樹さんの言ってる言葉、とても冷たいって思っていました。終わった今は、疑問はあるけど後悔はないです。だけど辛いです。とつても…痛いです。』

進也は自分の手を見つめる

翔太郎の隣だからこそ、こうして素直に不安を打ち明けられるのだ。翔太郎はどう答えようか考えていた

するとその前の救急車

怒りモードの竜が勇樹に説教している風景が映る。

『お前は警察に銃の所持を認められていないんじゃないか？ どうして俺のジャケットごと銃を持ち出した。弾が二発無いが撃つたのか？』

『あ…いや、撃てなかったよ！？銃に安全装置付いててねその外し方分からなくて

思い切つて床に叩き付いたら一発飛び出した。

それから、弾出るようになったから威嚇に一発。』

安全装置どうやって外すの？

と銃口を覗き込む真似をしては竜は思い切り頭を小突いた

『あだっ！？ただ、安全装置の外し方聞いただけだろ？なんでそんなに怒るのさ！！』

『銃を覗き込むな馬鹿者！子供でも分かるような基礎だぞ！』

こつちの気持ちお構いなしに繰り広げられる会話に翔太郎は溜息を

吐き、進也はそれを眺めた。
頭を叩かれながらもケタケタと笑う勇樹は
自分が出来ないといったものを実行できているのだ。

『…ゆ、勇樹さん、』

進也は竜によつて増えた頭のたんこぶを擦りながら謝り倒している
勇樹に近づき問いかけた

『どうして、そんなに笑えるんですか？ 仮にも人を――』

勇樹はそう問われては
にっこり言う

『ん？別に意識してないよ。あ、ひょっとして俺の言ったことに
してる？』

あの話は嘘だよ。俺、警察だけどモノホンの銃を撃ったときないん
だ。

だから銃では殺した時はない。

お前を立ち上がらせるために咄嗟に出た嘘。

俺は先輩だからね。後輩を育て上げるのも――ってあれ？『もう、
いいです。余計に分からなくなりました。答えになってない。』

『何の話だ？』

『いや？俺の忘れたい思い出だよ。』

問いかけてくる竜に勇樹はさらりと言った。

進也はもやもやを抱えたまま勇樹の家に翔太郎と竜と車椅子の勇樹と共に歩き始める

亜樹子は衰弱もありこの日は入院となったのだ。

車椅子で流れる風景を見ながら呑気に鼻歌を歌っている勇樹を見て進也は疑問が晴れなかった

『上野の元気がないがどうかしたのか？』

竜は翔太郎に問いかける

翔太郎は躊躇うがすべてを話した

『……お前の弟子だろう。お前が何か言うべきじゃないのか？』

『言葉を言えたら苦勞しねえよ。勇樹の奴、とんでもねえ激励ぶちかましてくれやがって』

『勇樹の所為にするな。だが、…そんな決断をしてるとはな。お前は勇樹の考えをどう見るんだ』

『あの場合はいやーねーけど、悩むな。お前はどうなんだよ』

『俺に質問するな。ともかく、お前の弟子の悩みはお前が解決してやるべきだ。』

俺の息子の考えは俺が受け止める』

そう話していると

突然、勇樹がしゃべりだす

『そんなに気になるのか、なら、教えてやるよ。』

「笑ってなきや前に進めない」
自分自身がなんとか消化しなきや駄目なんだ。俺の場合、
そうしないとドーパントから街を守れないし、また犠牲者を増やす
からね

でも、お前の場合、そういう時には素直に言ったらいいんじゃない
の？

「怖かった」ってこれから会いに行く人に。
ぶっっちゃけ男が女に涙を流すのはカッコ悪いけど、支えて貰えばい
いじゃん。

そんなのも受け止められないような酷い女じゃないでしょ？」

勇樹が言うともう玄関で

勇樹は車椅子から立ち上がり呼び鈴を鳴らす

《はい、あ。勇樹さん！》

呼び鈴に答えたのは里美だった。
里美はすぐさま扉を開く。

『あ、みなさん、おかえりなさい。』

ウサギのピンクのエプロンを着てフライ返しを持ちながら里美は笑
顔をみんなに向ける

『美味しいおにぎりが出来てますよ』

その横で緑のエプロンのフィリップは卵焼きをつまみ食いしながら
出迎える

『ああ、みんなふあ・おふあえふい（ああみんなおかえり）』

そのギャップに翔太郎、竜、勇樹は笑い
進也は里美に抱きついた

『っ……！』

『ど、どうしたんですか上野君！』

里美は突然の進也の行動に動揺するも、しっかりと抱きしめた
その様子にフィリップが卵焼きを飲み込み

《亜樹ちゃんが入院したって？僕お見舞いに行きたいんだけど案内
してくれるかな》

とフィリップがいい進也を残した翔太郎、竜、勇樹はそっと踵を返
した。

『おかえりなさい、上野君。』

二人だけとなった家の玄関
再度里美は進也へ告げる

『うん・た、ただいま、松下さん』

進也はいつもなら赤くなるその抱き返しを拒みはせず
何も語らないが、抱きしめる手は緩まなかった。

Fに平和を／行き着く先の理想郷（後書き）

2週間とちよつと、お待たせしました。

これは2週間前に一時投稿してたネタです。

吉崎の大出世と進也君の成長

吉崎が散る場面は「Eの暗号」聞きながら書いてました。

ニンジャメモリ、我ながら考えたと思っています。

忍者＋幻想＝幻術

そこに召喚がはいることで口寄せ！なーんて考えです。

思いつきりNARUTOみたいですが気にしない

没設定では

ニンジャ＋コールで分身の術

ニンジャ＋ダークで隠れ蓑の術

ニンジャ＋チェスで暗器がめっさ出てくる

ちなみにアレは

マグナム状態での使用でしたが

マグナムでなく

自分の体のスロットにニンジャ＋ルナで変化の術とか考えてました

ニンジャって無限の可能性があるなあ

それはおいといて進也君ですが

やっぱり行動を起こしたとしても割り切れない自分がある。

と言うことでこんな終わり方になりました。

最後の里美ちゃんは

前、ベルトさんがどこかのボタンで言っていた

里美ちゃんは「下」から支えるという言葉を思い出し急ぎよ付け加えたお話です

亜樹子にケガをさせていた事とフィリップが里美側に残っていてくれたことでいいフェードアウトが出来ましたね。

何も語らず

泣き叫ばず

ただ、抱きしめる

ここはセリフは書きませんでした。

セリフは要らないと思います。

次回、コラボ最終章です。

最後までよろしくお願ひします。

Fに平和を／永遠の絆（前書き）

コラボ最終回

Fに平和を／永遠の絆

進也が里美のもとで休息を得ている頃、翔太郎達は亜樹子の病室に居た。

顔も看護師に拭いてもらい綺麗になったが、唇の端の傷と頬の青あざが残っていた。

そのあざに翔太郎達は亜樹子が目を覚ました途端いつせいに頭を下げた。

竜に至っては、ある一定距離を保ち、亜樹子の反応を伺っているようであった。

当然である。

敵は竜の姿を借り、彼女を暴行したのだ。

彼女がいくら「姿を借りた偽物」と分かっているても近づきにくかった。

そして勇樹は黄門様に遭ったかのように土下座をし呪文のように「ごめんなさい」を連発し

そしてそれに続くように竜もまた土下座ではないが「もう少し早く来れば君は怪我をしなかった。すまない」を繰り返しはじめ

その様子にブチ切れた亜樹子は手元にあった「いい加減にせんかい！」と言うスリッパで親子共々を叩いた。

『もういいって言うてるでしょ？』

『だ、だが…』

『だが、じゃない…！』

『で、でも…』

『でも、でもな——！——いッッ！私は無事だし、傷だって残らないって先生言ってたじゃん！』

『もう終わったんだよ？シヤキツとする！』

そう叱咤激励するも二人は立ち直る気配はない。

傷は残らない、そう医師から伝えられ罪悪感は消えたが、彼女の特徴である長い髪は今や無残にも短くなっている。

髪の毛は女の命

それを切られてしまった罪悪感がいまだに残っている。

『もー何が不満なのよ』

口を尖らせ煮え切らない二人の様子に亜樹子はぶつぶつと文句を言うするとそこへ扉をノックする音が聞こえた。

一番扉の近くに居た翔太郎が扉を開けると進也、そして里美がやってきていた。

『あ、進也くん！里美ちゃん、お見舞いに来てくれたの？』

亜樹子は突然の訪問者に歓喜の声を上げる。

勇樹に丸椅子を用意させ、自分の隣に里美を招く

一方、翔太郎は一連の事があつたため進也の肩を叩く

『もう、いいのか？』

こそりと小さい声で言った翔太郎に進也は一つコクリと頷く、そして

『すつきりしました。有難うございます。』

あの時、気が付いたら翔太郎達は消えていて
そのお蔭で進也は里美に「何が」と理由を告げる訳でもなく縋れ、
立ち直れた。

もしもそこに翔太郎達が居たら恥ずかしさがこみ上げて来ただろう。
翔太郎が礼を言つと軽く里美を指さした。

『礼を言つのは俺じゃないだろ？ま、受け取つとくが。』

『ちゃんと分かってますよ。そ、その…今思い出すととても恥ずかしいですけど。』

と、とにかくそれで亜樹子さんの容体はどうなんですか？』

さつと頬を赤らめてさらりと進也は話題を切り替える

『見たまんま元気だ。』

『逆に照井竜が元気を失くしてしまっている。』

亜樹ちゃんの髪の毛が短くなってしまった事が相当ショックらしい。』

『は、はあ……』

『ねえ、進也君、翔太郎君、里美ちゃんがおにぎり持ってきたみたいだよ。』

一緒に食べようよ』

扉付近で話している三人に亜樹子が呼び掛ける

『そついや、昼からなんも食ってなかったな。』

亜樹子に促されればぐっつと翔太郎の腹が鳴る。

それを合図にみな丸椅子を並べ、

竜が自販機でペットボトルのお茶を買い手渡し、丸椅子が足りない
ので壁際に立つ

ちなみに椅子はもう一つ足りないのだが勇樹は車椅子に座っている
ので問題は無かった。

バケツトから取り出された30個はあるおにぎりをキャスター付き
の長テーブルに広げ

里美が具材の説明をする。

『えっと三角は卵、丸いアルミホイルに包んであるのがツナマヨ、
ラップに包んであるのが鮭です。

どうぞ召し上がってください』

『そして、このたくさんのおにぎりの中に、「ワサビ」が入ったも
のが2つあるから気を付けてくれたまえ。』

里美の説明にフィリップは笑顔で付け足した。

『え…？』

フィリップの言葉に手を伸ばしていた進也、翔太郎、亜樹子が止まる

『普通に食べるだけじゃつまらない。松下里美には止められたけど
どうしても諦めきれなかったんだ。』

なに、心配はいらない。僕自身もどれに入れたか分からない。だから僕も引つかかる可能性がある。どうかかな?」

そう話した当人の目はキラキラ輝いていた。

緊張した戦いの中から帰って安心してご飯が食べられると思ったのだが

一転して緊張に包まれる

『ね、ねえフィリップ君…中身見ちゃダメ?』

亜樹子が言えばフィリップは顎に手を当てる真似をする
そして口を開いた。

『そうしたらゲームの楽しみが無い。』

『げ、ゲームって亜樹子さんは口元怪我してるんですよ?!
口元の傷にわさびが着いたらどうするんですか!』

フィリップの言葉に里美と進也が反論すれば
壁際で皺を寄せている竜を見ながら言う

『それなら亜樹ちゃんはペアを組むと言うのはどうだい?
亜樹ちゃんが食べるものはペアが半分に割り中身を確かめ、ワサビならそのペアが何も言わずに食べきる。』

これならば、亜樹ちゃんは食べることは無い。』

「どう?」とフィリップが言うと竜が亜樹子のベットの端っこに座り
三角のおにぎりのアルミホイルを剥いては半分に割り亜樹子に手渡

した。

『美味しそうなたまごだ。
食べづらかったら言ってくれ、もう一つ小さく割る。』

『あ、う、うん・・じゃ、4分の一でお願いできるかな。
口、大きく開くと痛くて』

『分かった。』

ごく自然とペアになった二人を見て進也と里美をはじめとするその場に居た者たちは
フィリップの言葉が竜を促す嘘であると分かりいつせいに手を付け始める。

（まったくフィリップの奴、いい働きしやがって。勇樹にはラブラブしてるところを見せて、照井には亜樹子への罪悪感の払拭。そして里美ちゃんに気を使わずに亜樹子が食べやすいようにするってー石三鳥か。
さすが相棒だな）

翔太郎は鮭のおにぎりを一口齧りながら
お茶のペットボトルを開けてストローを挿し亜樹子の傍に置くフィリップをみる。

だ。
（フィリップさんは亜樹子さんの為におにぎりを食べやすくしたんだ。
それに勇樹さんにも両親の面影を見せることが出来る
さすがは師匠の相棒）

凄い・・・
と進也は感心していた。

（懐かしいな。小さい頃よく俺がおにぎり食べてると「お米がついてるわよ」って口元の米粒指で搦って食べてたっけ
それでたまに、「君もだ所長」って父さんが同じように食べて笑ってたんだよなあ

進也んとこの所長さんは今どんな想いしてんだろつ。
新婚旅行邪魔されて無理矢理ドーパントにされて
あつちの父さんは罪悪感感じてるのかな
敵に憎しみを抱いてるのかな

やっぱり、寂しいなあ）

勇樹のおにぎりを食べる手が自然に止まっていた。

『…どうしたんですか？』

その様子に気が付いたのは進也だった。

『いいや、別に・・・。ただちよつと、あ、そうだ。』

風都タワーで回収したTXメモリの事で話があるから
屋上行かない？』

事件後、密かに回収された25本のTXメモリの入ったアタッシュ
ケース。

その事を切りだされ進也は静かに頷いた。

進也が勇樹の車椅子を押しエレベーターで病院の屋上へ行くと白い白銀の月が輝いていた。

少しだけ肌寒い風が月を見上げる二人を撫でる。そんな中、最初に口を開いたのは進也だった。

『月が綺麗ですね』

『…金色じゃないってのが珍しいよな。こんなに綺麗なら里美ちゃんともみたかった？』

『…TXメモリの件で話があるんでしょ？おれ、まだ一個しか食べてないんです。』

早くしてくれませんか？』

そうやんわりと投げると勇樹は目を丸くするも頷く

『…あれ、敵にわたらない様に全部壊すから。』

単刀直入に言ってくれ、と言われたので単刀直入に言えば（本当に単刀直入だな）と進也は思った。

『その前に、エターナルはTXを使うんだろ？何か欲しいの無い？』

さすがに全部は上げられないけど1、2本ならと勇樹が言う

『それじゃあ、「ニンジャ」のメモリをください。相性が良かったので』

『ニンジャ？なら進也が持つてるから明日とか用意する必要ないな。』

分かった。その他のメモリは壊す。』

『…ありがとうございます。大事に使いますから』

進也がそう返事を返すと沈黙になる。

その沈黙、勇樹は車椅子から立ち上がり目線を合わせながら口を開く。

唇をかみ、拳を作り

まるで何かを奮い立たせるような様子で呟かれた言葉はいつもより弱弱しかった

『…なあ、あ、あのさ、だから—だからってワケじゃないけどメモリをあげるからお願いがあるんだ。』

お前の気持ちを考えずに色々エラそうな言葉言った男が「何を」って思つかもしれないけど

お願いしたい事があるんだ。』

『…なんですか？』

進也が聞き返すと勇樹はニンジャメモリを渡せと言ってきた。

勿体ぶって何を、と思ったが素直に渡すと勇樹はニンジャメモリを握ったまま言う

『元の風都に戻ったら、所長さんを助けてほしい。照井さんの力になってあげて欲しいんだ。』

世界が違うからお前の両親じゃないし！とか思うだろうけど
凄く、不安なんだ。

無理矢理ドーパントにされた所長さんが敵にヤバい薬でも打たれてるんじゃないのか、とか

父さんも父さんで前が見えなくなってないか、とか

色々あつて忘れてたけど、思い出したら怖くなって。

でもそれをいつまでも抱えてたつて仕方がない
今までは無理やり納得させて振り切つたけど……まあ、そういう事だから』

勇樹はニンジャメモリの端子を進也側に向け差し出す

『どついつ事ですか、一番肝心の部分言わないって。

確かに勇樹さんはエラそうでしたね。

やつてることは仮面ライダーなのに自分を仮面ライダーじゃないつて言う割に

先輩ぶつておれのやる事に口を出して悩ませる。

でも、いろいろ学びました。

助からない人が戦いを望んだ場合は、そして師匠が頷いたときはおれも戦います。そして心を助けるんだ。つて決めました。

そんな決断を下せたのは、おれ自身だけどきっかけは勇樹さんのエラそうな一言です。

ありがとう。

ちゃんと受け取りました。』

進也はそういつとニンジャメモリを受け取つた。

『だからおれからもお願いで——いいや、お願いする。

おれはおれの大切な人たちが笑っているこの風都喜欢い。だから守つてほしい。

勇樹くん、君が大嫌いでも。』

『…分かった。色々これからも揺らぐだろうけど頑張るよ。』

勇樹はにっこりとほほ笑んだ。

二人が再び病室に戻ると、病室内が何やら騒がしかった。みればなんと里美が泣いていた。

『ま、まつ、松下さん!?!』

進也はその様子に勇樹を扉にほうっておいて近づくと

『上野君?!?!』

里美は進也を見つめるなりその胸に身を預けた。

『い、一体何があったの?!』

ふえええん

と泣き出した里美の傍には食べかけのおにぎりに空になったお茶のペットボトルがあり

その食べかけのおにぎりからは緑の何かを練った物体が覗いていた。

『ま、まさか?!?!』

その緑のモノに進也は青ざめる。

『やあ、上野進也、勇樹と一緒に何の話してたんだい?!』

誰もが口を噤んでいるのにフィリップがいつもの調子で話しかけるが、
進也は驚き大声を上げた

『本当にワサビ仕込んだんですか!?!』

コクリとフィリップは頷いた。

『てつきりおれ、口実だと思ってたのに!』

ぎゅっ、と抱きしめながら進也はフィリップに言う

『口実? そんなワケないだろう。僕はただロシアンルーレットを試してみたかっただけだ。』

君は知っているかい? ロシアンルーレットは昔、『そんなうちくどうでもいいですよ!』と、とにかく松下さん、大丈夫?』

『は、はい…今は落ち着きました。で、でも…涙、とまりません』

鼻が真つ赤な里美を抱きしめながら気遣う進也。

進也はそれ以上追求しなかったが自分の世界でフィリップに遭ったときは注意しなければならぬ

そう思ったと言う

それから二日後、亜樹子が退院し、亜樹子は里美に髪を伸ばすよう

に整えて貰った。

亜樹子曰く「短くてもいいけど、竜君なんだか長い髪の方が好きみたい」だそうである。

そしてこの日は鳴海探偵事務所に不思議なことが起きた。

ガレージに向かう為の扉を開くと銀色のオーロラのようなカーテンがあったのだ。

進也にコレを見せるとこれが神隠しの原因のモノであると言う事が分かり急ぎよさよならとなった。

『…本当にいきなり現れんな、コレ』

勇樹、竜は初めて見るが翔太郎達はこのカーテンを見たことがあるらしい

ディケイドがなんたら、と訳の分からないことを呟いていた。

『…いろいろお世話になりました。』

銀に蠢くオーロラの前、里美と進也は並び同じように頭を下げる

『いや、世話になったのはこっちだ。ありがとうな。』

と翔太郎が言う

『元気でね。髪の毛ありがとう。』

こちらは里美に向けて亜樹子と言う

そして――

『進也、頼んだよ。俺、がんばるから』

『うん、おれも負けないよ勇樹くん』

勇樹と進也は笑顔で拳を突き合わせ

進也と里美はカーテンの向こうに消えていった。

カーテンもまた進也と里美が潜った瞬間消えた

『いい友達をもったな。』

「うわ〜本当に居ないのね」

と元のガレージに戻った空間を覗き込み亜樹子が言うなか
竜が勇樹に向けて言う

『まあ、何処を探しても見つからないよね。あの真つ白怪人。
素敵な出会いだっと思ったと思うよ。』

『いや、永遠に会えないと割り切るのは速いんじゃないか？
こんなことがあるんだ。また来るかもしれない』

『ならいいな。今度はおれの仮面ライダーすが、……………も
どきの姿をみせて

一緒にドーパント蹴散らしたいね。』

ガレージを見つめながら勇樹は微笑んでそう言った。

銀色のカーテンをくぐればそこは風花荘だった。
時刻はなぜか夜で

筋肉隆々の一人の男が空き地でバーベキューの準備をしていた

『よお！お前ら、やっと帰って来たか』

と筋肉隆々の男は進也と里美の姿を見るなり
近づいて人なつつこい笑顔を浮かべる

『へ？バーベキューやるんですか、今日』

進也が驚いているとプロポーションのいい女が口を開く

『なんでも徹子お婆ちゃんが野菜大量にもらってきたらしくておす
そ分けてきてやってんのよ。』

ほら、アンタたちも手伝いなさい』

と女は野菜を切る為の包丁を握る

そのまた横では

『ああ・・・具を串にさすのってカ・イ・カ・ン
こう、ぶすって挿す感覚にどーしてこんなにも憧れるのかしらん？
ハッ、まさか私の前世は蜂？！』

ぶんぶんぶんぶん〜言っつてえ？蝶のように舞い蜂の様にイケメンを
刺す…嫌いじゃないわ！いいえむしろスキッ！』

と男性・・・

『なによ！私は男じゃない！両生類の無脊椎動物よ！間違えないでちよっうだいッッ！』

いや、オカマさんが串に具をさしていた

『おい、おまえら、見ていないで…早く、手伝え』

戻ってきたんだ

そう思つて二人でボーっとしていると

1人の男が言う

その男は普段は無口らしいが、今日はたくさん喋った。

男に促されてはそれじゃあ何か手伝おうかと動き出すとお婆さんが近づいてきた。

『ほっほっほっ、二人とも、帰りが遅かったのう

今日はいい月がでるのじゃ。

だからバーベキューじゃ。

月が出た日には団子と言うのも趣があるがこれもいいじゃろ？』

ニコリとお婆さんが笑うと二人は月を見上げる

(ちゃんと見れたよ勇樹くん。松下さんと、おれがんばります。だからずっと友達で居ましよう)

ずっと、ずっと

永遠に

(END)

とある屋敷

『結局、上野進也には逃げられましたか。まあいい。彼の情報はこちらにも入ってくる。それよりも、城ノ内君、準備は出来ましたか？』

『はい、整っております。』

とある屋敷、二人は話していた

『なら、すぐに実行してください。お願いしますよ？今度こそ。』

風森勇樹を抹殺してください——

Fに平和を／永遠の絆（後書き）

と、言う事でコラボはこれでおしまいです。
次回から再び本編に取り掛かりたいと思います。

とりあえず伏線は全部回収したと思いたい。
（できてないだろうけれど）

今回、あんまし悩みませんでした。

BGMを聞きながらカタカタ打ってました

ニンジャメモリに

自分の想いを忍ばせて渡したって言うくだりも
辞書で忍びを調べたらまたまた違う意味として出てきたのでいいか
もと思い採用しました。

そして最後の風花メンバー

書きたかったので書きました。得に意味はありません！（笑）

次回、城ノ内が動きます。

うん、EXEのキャラ増やさなきゃいけない。

幹部二人。

面白いと言ってくだされれば嬉しいです
それでは

Pがもたらしたモノ／お嬢様とSP（前書き）

コラボが終わって本編へ
そして今作待望の人物が！

Pがもたらしたモノ／お嬢様とSP

上野進也と言う男がこの風都に迷い込み去ってからカレンダーは6月へと突入した。

月が替わり上野進也到来以来特に大きな事件は無く平和な日常を送っていた。

だが、平和と言うものはそう長くは続かないものである。

6月2日この日は小雨が降る天気だった。

ファングの様に自律稼働が可能なダブルドライバー、通称マジシャンドライバーをフィリップが改めて調べたいと言い出したので久里大祐が営業を休み風森邸にやってきていた。

大祐は竜からコーヒーを受け取り勇樹の部屋に行き、勇樹と共に他愛もない世間話をしながら時間を潰す。

『ほくそんならその進也つちゅーヤツはホンマに害が無かったんやな』

『ん。まあな。まあ…久しぶりにそこそこ楽しめたよ。』

『お前も営業無かったら一緒に話せたのにな』

上野進也が訪問している時、大祐はマジックの営業が入っていた。三代目として駆け出しの大祐はその名を売るため休むわけには行かなかったのだ。

勇樹の話聞いては「へえ…」とか「ほお…」とか相槌を打つ。そして頃合いを見計らい話題を変えた。

『男の友達出来たんなら次は女の友達も作ったらどうや？』

『女の友達？』

そう聞き返す勇樹の表情は分かりやすく曇る

『せやで？俺も人の事言えんけど、18言うたら彼女の1人や2人作って青春を謳歌せんとおつという間にジジイになってしまっぞ。ユウちゃんが結婚するかしないかは分からんけど、少しくらい遊んでもええんとちゃうの？』

『馬鹿言つなよ。女は遊び道具じゃないんだよ。つーか、俺、女の子苦手だし』

勇樹はコーヒークップ片手にカミングアウトした。

女の子が苦手？そのカミングアウトに大祐はコーヒークップを落としかけた。

『はあ！？ユウちゃん女の子嫌いなん？』

『嫌いじゃないよ。苦手なだけ。』

エスカレーターでポーっと前見ただけで「私のスカートの中撮ったでしょ！？」って疑うわ

職務質問したら痴漢って叫ぶわ

護衛してたら酒が入った女性に襲われかけて仕方がないから一緒に部屋に居たら翌日酔いが醒めた瞬間に

「ケダモノ！」って報酬は払わずに追い出されるわ。

だから俺は苦手だ。』

『ちよ、マニアックやなあ…。そないなマニアックな体験談聞かさ

れてもどう反応せーちゅーねん。

ま、お前のパパさんも所長さん以外の女性は苦手だったからしゃーないっちゃんしゃーないけど
ホンマに寂しい青春なるよ?」

『俺はそれで満足してるから問題はない。』

『せやけど生きてればやっぱり恋はするやろ?』

『どういふ女が好みなん。』

参考までにと大祐が聞くと勇樹はコーヒークップのコーヒーを見つめ「そうだなあ…」と遠い目をする。

『俺は——』

勇樹が口を開きかけた時、勇樹のアトラスに通信が入った。

勇樹は吐きだそうとしていた言葉を飲み込みアトラスの通信に応じる。

通信の主は亜樹子であった。

《勇樹君、お客さんがきたからリビングに来て》

『警察関係者?』

勇樹がそう訊ねると亜樹子は「ううん、手帳はみせなかったよ」と返した。

『ああ、分かった。今いくよ』

そう言い通信を切り、大祐と共に勇樹は階段を下りリビングに向かう。

友達との会話を打ち切られ少し不機嫌になりながら勇樹が大祐と共にリビングに姿を現す。

『所長さん、俺にお客様って?』

そう言えば亜樹子は手で白いソファを指さした。

そこには青いジャージに白いスカートにヒールの高くないブーツを着用し、甘栗色の肩までのミディアムショートの子の髪の子と同年くらいの少女が座っていたのだった。

勇樹はその少女の顔を見ると目の前に座る

『何かあった?』

そういう勇樹の口調は先ほどの不機嫌が無くなり、穏やかだった。

口調で言うなら「知り合い」らしい。

彼女を出迎えた亜樹子や、仕事の話ではないかと隣の部屋に自主避難した翔太郎、俺らは少女の様子を伺っていた。

大祐もまた自主避難した翔太郎達が扉の隙間から様子伺っていることに気が付きそこへ気配を悟られない様にそっと移動する。

そんな中、少女は口を開いた。

『また、いつものよ。よろしくお願いできる?』

いつもの――？

扉に隠れた男たち、そして亜樹子は互いに顔を見合わせる。どうやら避難して正解だったらしい。

悲しい話だが「仕事」であるようだ。

《お仕事の依頼かあ…勇樹君のお友達だと思ったのにな、残念。》

《警察以外からでも依頼が来るんだな。常連さんか？》

様子を伺っている翔太郎は小声で呟く

《だろうな。勇樹の声色から不機嫌や警戒は見当たらない。今さっき窓を見たがベンツが止まっていた。

おそらく要人だろう。》

と竜が返していると勇樹は手で丸を作り少女に見せる

『いつものアレか、好きだなあ…お前の父さんも。んじゃ、今回の報酬は50でどう？』

『50？そんな少ななくていいの？望んだらいくらでもあげるのに』

『いやいや、50で十分だよ。』

その取引はまるでドラマのようだった。

大事な言葉はすべて「アレ」「コレ」で表され、報酬も表される。

(護衛任務で報酬が50万…)

誰が言わなくともそんな取引なのだと言われる。

『それで、報酬は後が良い？今が良い？』

少女が聞くと勇樹は「今が良いかな」と言った。

すると少女はハートのシールでデコられた白い携帯を取り出し誰かを呼び寄せる。

しばらくすると要請を受けたであろう黒服の50代くらいのお爺さんがスーツケースを持ってきた。

『ちょ、ちょっと！げ、現金だよ！現金50万！！』

亜樹子は謎のテンションに包まれる。

まだスーツケースは開いていないと言うのに鼻息が荒かった。

『現金で前払ってマジかよ、さすがは要人だな。』

『どうりで勇樹の奴が今まで入院してても暮らしていけたわけだ。』

『ユウちゃん25万で良いから俺にくれんかな…。25万あったら』

『松ちゃんに恩返しできるんやけど』

少女が男からスーツケースを受け取り少女は中を開けて勇樹に見せる

『確かに50だな、受け取った。それでアレはいつ？』

『6月5日の午後2時だけど本当に大丈夫なんでしょうね。』

『ん、大丈夫だよ。』

最近は落ち着いてきてるし風都1の財閥の令嬢の頼みとあらば警察もそっちを優先させるだろうから。

んで、最近はどうよ、してるんだろ？見合い』

勇樹がそう語りかけると少女は白いソファにもたれ掛り思いっきり表情を崩した

『全然ダメ、ピンとこない。写真見て経歴見てこの人だつて決めて会っても

全然ダメ。』

『相変わらず男運悪いんだな。』

コーヒをオレンジ色のコップに注ぎながら勇樹が言う。
その様子を見ながら少女はわざとらしく口を開いた

『まったく、ホントよね。』

目の前でこうしてコーヒ注いでくれるボディーガードさんは風都の仮面ライダーを奪ったと言われるあの黄色いアクセルだし、男運ないわ。

それで勇樹の方はどうなのよ。お母さんとお父さんとお兄さんたちとり戻せそう？』

頬杖をついて少女が言うとお勇樹は静かに首を横に振った

『敵には遭ったよ。けど、勝てなかった。ソイツを倒せば取り戻せたのにさ。』

結局負けて刺されて目が覚めたら過去に訪問してた時代の父さん達がやってきて、「俺を助けるんだ」って今も住みついてる
それで、幼馴染の親友も戦いに巻き込んだ。』

はあ、と一つ溜息を吐けば少女はむうと膨れる

『どうしてそこで溜息つくのよ。勇樹の周りは敵だらけじゃないって事じゃない。この調子でどんどん勇樹の事分かってもらって味方が増えれば、いつか風都の仮面ライダーになれるかもね。』

『無理じゃないか？』

今年の8月で5年になるけど「仮面ライダー」って言われた試しないよ？

父さんには届かなくなったけど未だに左翔太郎様宛てに風都中から年賀状届くし、街の顔は変わらないって』

『あら？随分、ネガティブなこと言ってくれてるけど時代は日々変化してるって事、忘れてない？』

技術しかり、人間の流行しかり、止まることなく時代は流れるの。

5年も経ったなら1人くらい黄色いアクセルは街を守ってきた「仮面ライダー」だって思ってくれる人居るんじゃない？

仮面ライダーアクセルはここに居た、って』

『むう・・・それじゃあ、困るんだよ。アクセルは照井竜って事は守りたいからさ。だって俺みたいなへばい腕前のが伝説のアクセルだ、って思ってたほしくない。』

本当にアクセルカッコいいんだぞ！？』

勇樹はソファから立ち上がり身振り手振りで話し始める

『はいはい、真っ赤な真紅の装甲がカッコいいんでしょ？よくもまあ自分のお父さんが変身したって正体がわかったのにテンションが変わらないわね。頭おかしんじゃないの？』

普通、家族が「仮面ライダー」だったら気が動転したり、夢がぶっ壊れるものでしょう？それなのにアクセルアクセルアクセル。写真

みせてもらった事ないけど、そんなに憧れるお父さんなの？』

『俺は憧れてるよ。尊敬してる。』

『あそ。んじや、』

そのお父さんは今何処に居るの？過去の人だろうけどお父さんなんだしご挨拶しなきゃ。』

『ああ、する？多分どっかに隠れてると思う。』

照井竜は死んだことになってるから仕事の時は身を隠すようにお願
いしてあるんだ。

呼ぼうか？

あまりアレコレ詮索しないでくれよ？』

勇樹はアトラスを取り出すと、それを合図に隣の部屋の扉が開く。
隣の扉が開かれ、ぞろぞろとメンバーが姿を現す。その様子を見て
勇樹は小さな舌打ちをした。

(隣の部屋にいたのかよ…。)

『はあくやつと出てこれたあ…。』

扉から出てぐぐつ・・・と亜樹子は背伸びをする。

それに続き翔太郎、竜、大祐が横に並ぶ。

みな口々に言いたいようだが勇樹からの紹介を待っているようだった。

『じゃあ、まず左の帽子の奴から説明するな。左翔太郎、口のうる
さい叔父さん。』

で、その隣が、久里大祐、俺の親友でマジシャンの卵。で、その隣

が——『勇樹のお父さんね!』

少女は勇樹の説明を遮って竜の手を取った。

『え・・・分かるの? まあ、此処にはあと一人しか居ないから必然的にそうなるけど』

『分かるわよ! 色は違っけど特徴的な革ジャン着てるし、雰囲気もそっくりだし! 一目見た時からピンときた。

初めまして、

あた：私、東雲晴香しのめせいかって言います。

貴方のご子息、勇樹には2年前の2029年6月から周辺の警護・護身術の講師を頼んでいます。
優秀な私の専属ボディガードです。』

東雲晴香

少女はそう名乗った。

東雲、と聞いて竜、そして翔太郎は勇樹の過去の記憶を思い出していた。

(東雲ってあの時のお嬢さんか。)

あの時。

勇樹が絶望しストライキを決行した時にドーパントに追われていた少女。

勇樹が再び仮面ライダーとしての道を歩もうと決意し、最初に助けた人物

『ああ、君の事は以前から知っていた。色々勇樹が世話になってい

るみたいで、とても助かる。』

握手を求められたため竜は握手をしそう言う

『いいえ、世話になってるのは私です。』

今、こうして私が生きてるのはみんな勇樹のおかげなんです。』

ね？と勇樹の方を晴香が伺えば勇樹は目をそむける

『仕事だからだよ。警護対象にけがを負わせるボディーガードって最悪だろ？』

1回守ってやったら本気になりやがって。』

けっ、と勇樹は顔をそむけたままそう呟いた。

『ちよつと、勇樹君、今の言葉――』

亜樹子が勇樹の発言に「待った」を掛けようとするが晴香がニマリと笑った。

『その1回目で、「結婚は愛する人とするもんなんだ。だから無理矢理婚姻結ばされそうなきは俺に助けを求めろ』

お前が本当に愛して本当にお前を愛してくれる人が現れるまで、俺が一生守ってやる」って言ったくせに。』

晴香がそう呟くと亜樹子、翔太郎、大祐、そして竜の視線が集まる

『へえ〜勇樹君そんな事、言ったんだあ…』

『ユウちゃんも隅におけんなあ？女の子にそないなこと言ったら、』

本気にさせてしまっくんは当たり前なのに』

『…だ、だって、こいつ…彼氏自宅に呼んできて手作りの料理もつてきたらその彼氏が高級料理が良いとかで作った料理床にぶちまけたんだぜ？

そんな事された女、可哀想だろ！？』

『はいはい！可哀想だけでそんな言葉でないと思います！』

『同感だ。つたく、彼女が居るならどーして言わなかったんだ？天涯孤独みたいな格好の割にやいい恋愛してんじゃねえか。』

『な、ち、違うよ！コイツはただの警護対象だって！』

『ただの警護対象のご飯が乱暴にされたからその言葉吐くんだあ？』

どうやらどう回答してもこの目は消えてくれないらしい

ポリポリと頬をかいては勇樹は困ったように俯く、そんな勇樹に晴香は耳打ちをする

《あれがお母さん？なんかすごい明るい人だね。》

《ん。まだ結婚してないから、俺が息子だっていう事は母さんには言っなよ？

普通に恋愛して貰う為に必要だから》

《うん。分かった。でも、改めて見るといい人たちだね。親友とかいう人も利用してるかなあって思ってたけど、そんな心配なさそう》

そう耳打ちをやめ晴香は嬉しそうに微笑んだ。

自己紹介が終わった後、晴香は「当日はお願いね」と黒服の男に付き添われ風森邸を後にした。

晴香が帰り話は勇樹の護衛任務の話へと変わる。

勇樹の話では、東雲晴香は2年前、財閥の経営の為とある男と政略結婚を結んだそうだ。

だが、その男がドーパントだった為、婚約は解消された。

この一件により東雲財閥が長、晴香の父、大五郎は政略結婚は二度と行わないと言う事を決めたが、余計に婚約者を求めるようになった。

娘を愛し、怪物からも救ってくれるような頼もしい男が娘には必要なのだ…と。

『へえ、つい事は、婚活パーティーって事か。』

勇樹の話聞いて翔太郎が言う

『まあ、分かりやすく言えばそんな感じ、その事件があつたから責任感じて焦っちゃってるんだ』

会社の利益のためとはいえ厳選し選んだ男は怪物であり、あろうことか自分の娘を傷つけた。

大五郎はその責任を感じ、一般人でもいいから娘を心の底から愛し、怪物からも守ってくれる婚約者が今すぐ欲しいのだ。

「…そつか。悪気はないんだね。晴香ちゃんのお父さんは、それで勇樹君は何の仕事をするの？」

亜樹子が訊ねると勇樹は言う

「その婚活パーティーの中に、「腕自慢」って言う催しがあって、東雲の選りすぐりの優秀なSPと戦って言う組手があるんだ。そのSPと戦って勝てたらお見合いが出来るって言う話で、剣道とかフェンシングとか得意分野で勝負するって言う意味合いも込めて武器も持ち込みOKなんだけど…」
「ガイアメモリを持ってくるヤツが居るのか。」

竜が遮り言うと勇樹は頷いた

「そういう事。一般人が使うのはマスカレイドだから屋敷のSPでも倒せるんだけど、たまに違うのが居るから、俺が出動するワケ。ま、今回は丁度良かったよ。最近怪我ずくめできちんとしたトレーニングもしてなかったし」

「前払いで50万円もらっちゃったしね」

ソファの横にあるスーツケースを持ち上げながら亜樹子が言う

「しかし、たかが護衛で50万ってすげえよな。」

スーツケースを見ながら翔太郎も言う。

だが勇樹はきよんとしていた。

「へ？50万？50万って何？」

きよとんとして訊ねれば亜樹子が言う

『な、なについて勇樹君が貰った依頼料に決まってるじゃない！50
つて』

スイーツケースを見せながら亜樹子が言うと言樹はくすくす笑った。

『その中身、お金じゃないよ。』

『え・・・っ!?!』

『なんだと!?!』

亜樹子、翔太郎が同時に声を発した。

今の今までお金だと言う観念から逃れて居なかった二人は時が止ま
ったように静止していた。

『なははは、悪いけど俺は晴香からお金は受け取らない様にして
るんだ。

お金持ちの家だからお金を要求すればいいんだろっけど俺は警察官
になってからはお金に困ってない。
だからね』

勇樹は亜樹子からスイーツケースを受け取るとテーブルの上に置き中
身を開いた。

そこには白い粉の袋が3袋入っていた。

『これを要求したんだ。じゃーん!』

勇樹は楽しそうに微笑みながら言うが目の前の白い粉の出現に二人

の、
そして横に居る竜の表情が険しくなった。

『ん？ど、どうしてそんな怖い顔してん…ってこ、これ麻薬じゃないよ！？』

その原因がなんなのか理解した勇樹は慌てて付け加える。

『ほ、ほれ！照井さん舐めてみてよ。』

袋を破き竜の前に差し出せば竜はその白い粉を少しなめてみる

『……たこ焼き粉だ。たこ焼きの味がする』

竜の反応を伺っていた三人は竜の答えに目を丸くした。

『正確にはたこ焼き50個分の粉。悪かったよ。ラベル貼ってなかったし。』

『た、たこ焼き？たこ焼き50個分で護衛引き受けたの？』

『そうだよ。今回はたこ焼き粉だったけど毎回晴香にはお金以外のモノを報酬としてもらってる。』

大抵の雇われSPとか見合い相手とかは金を強請るけど、俺は金よりも高いものを報酬として受け取ることにしてるんだ。』

『お金よりも高いもの…』

『そ、俺のその時の気分で欲しいもの！』

俺の黄色い革ジャケを特注で作ってもらったり、バイクの点検を東

雲財閥の運営しているバイク屋に口利きしてもらって普通より低額にしてもらったり、

俺が欲しい漫画を発売前にGETしてもらったりとか!』

満面の笑みを浮かべながら勇樹は話聞かせる

『た、確かに…お金より高いね。』

『みんな、頭悪いんだよ。金持ち見たら金を強請る？報酬が何でもいいなら俺は俺の欲望をかなえるよ!』

そう堂々と言った勇樹の顔は曇らず輝いていた。

勇樹の発言は問題ではあるが話を詳しく聞くと、

金ばかり強請られてうんざりしていた晴香の心に響いたんだそうだ。

(でも、それだけじゃないんだろうなあ…)

勇樹の話しぶりに亜樹子はたこ焼き粉の入ったスーツケースを見る。袋を退かすと小さいレジャー用のたこ焼きソースとマヨネーズとかつぶしが入っていた。

中身がお金でないことにはがっかりしたが、これはこれで少し微笑ましくなったらしく

たこ焼きの材料を見つめる

(肝心のタコが無いけどタコは買えて事かな。なら…久しぶりに)

『ねえ、勇樹君!せっかくだからたこ焼きパーティーしようか!』

『えっ…?』

勇樹は突然の言葉にまぬけな声を出す

『せっかくだこ焼きの材料があるんだし、夕飯の献立も決まって無いから久々に腕を振るおうかなって思ってるの。』

大祐君もどう？』

『あ、ああ・・・いいと思うけど・・・』

大祐は腕まくりをし出した亜樹子を見てチラリと勇樹を見ると勇樹は固まっていた。

この粉はとりあえず保存して自分の非常食にしようと考えていたため、まさかの言葉だったのだ

そう、勇樹は5年ぶりにおふくろの味を食べることになる。

『...あ、あのさ、晴香も呼んでいい？』

勇樹は亜樹子の目を見ないまま呟いた。

『うん！みんなでパーティーしよ』

亜樹子はどびきりの笑顔でそう答えた。

その夜は大祐も踏まえてタコをスーパーで買ってきて亜樹子がたこ焼きを振る舞った。

晴香は道に戻ると言う事になったが、そのパーティーに参加するこ

とが出来き、本日は泊まる事となった。

PM11時

勇樹と晴香の部屋は隣同士であり、勇樹は晴香の部屋に訪問している。

晴香は部屋のオレンジ色のレッサーパンダのアップリケのついたパジャマを着てベットに腰掛けていた。

『隣、いい？』

『いいよ。』

断りを入れてから隣に座れば晴香が口を開いた

『お母さんの手料理、美味しかったよ、タコ苦手だけどそんなの関係ない位美味しかった。』

『あ、そっかお前タコ嫌いだったっけ。』

『正確には勇樹の作ったタコ焼きは以外のタコはイヤ。でも勇樹のお母さんのたこ焼き、美味しかったからそこに所長さんのたこ焼きも追加するね』

晴香は微笑み、満足そうに答える

『……今日はありがとう。偶然が重なったけど、俺…母さんのおふくろの味食べられた。すっごく、懐かしかった。』

料理が苦手な粉ものしか得意分野じゃないけど、頬っぺたが落ちそ

うになるくらい美味しいんだ。
本当に、ありがとう。』

勇樹はそう晴香に礼を言った。

『なんであたしに礼を言うの？
あたしは勇樹に要求された物を持ってきただけだよ。作ろうって
思ったのは所長さん、貴方のお母さんでしょ。礼を言うのはお母さ
んじゃない？』

『……そ、そうなんだけど。お前が来てくれなかったら、叶わなか
ったし』

『ふーん、なんか勝手に夢かなえた事にされてる。まあいいけど。
5日はしっかりと働いてよ？』

あ、お母さんとお父さん、パーティーに呼ぼうか？
あの関西弁のマジシャンの卵も。』

『ええっ！？や、やめろよ！俺の仕事風景みられるだろ！？』

『いいじゃない。ちゃんと仕事してますよ。って事見せてあげれば
それにあたしももつと勇樹の家族と仲良くなりたいたいし
ね、どう？パーティードレスとスーツは貸すわよ？』

『ば、馬鹿！ドーパントが出るかもしれないのに、母さんを危
険な目になんて』アクセルなお父さんが付いてるんでしょ？大丈夫
じゃない？』

それに結婚してないならお互いに、いい機会なんじゃない？』

『……た、確かにドーパントが出てお父さんと一緒なら大丈夫だと

は思う、けど
父さんうっかり離れたりしないかな。』

『その心配はないわ勇樹、良い？よく聞きなさい？。
パーティーには女性も呼んでるし

あれだけレベルが高い男が1人で居たら確実に熟女は寄マダムってくる。
大人だしきちんと対応はすると思うけど、竜さんもまだ若いからこ
ういう場所って慣れてないと思うの。

そんな初心な竜さんを熟女は一度捕獲したら離さない。

化粧が濃いだろうし、香水もきついだろうし・・・そんなマダムに
迫られるのが嫌だと思ったら

天が裂けようが海が割れようが槍が降ろうが所長さんから離れる訳
ないの。

当日、所長さんの化粧はあたしの専属メイクさんに頼んでやっても
らうわ

そうしたら絶対竜さんは所長さんから離れないわよ！』

晴香はベット上に立ち上がり熱弁をした。

その熱に圧倒され勇樹は思わず拍手をする

『お嬢様の力をみせてあげる！だから安心して？』

『ご、後光が…。ってか、そんないきなり立つたら転ぶぞ！？』

『へ？あ——わつとつと…！』

ベットに腰掛けているのだから床に立てばいいものを親切丁寧にベ
ット上に立ったが為、勇樹側と重さのバランスが取れなくなり不安

定になる。

それに気が付いたときには晴香は窓の枠に額をぶつけそうになっていた。

【ACCEL】

勇樹はアクセルメモリをセットし
変身し、加速の力で間に割って入った。

結果、晴香は窓の枠に額をぶつけずに済んだが、黄色いアクセルに
体を預けるような形になり、アクセルの銀色のAの部分に思い切り
額をぶつけた。

『っ・っ・っ、いったあゝ、どうして変身するのよ、痛いじゃん！』

『そうしなかったら間に合わないだろ！？』

『…っ、で、でも…』

『でもじゃない！まったく、ってもう0時か。晴香、明日はどうす
んだ？』

変身を解き勇樹はそう投げかける。

晴香は口元に指を当て「うん」と考え込んだ

『勇樹が泊まっていけ、って言うなら傍に居てあげるよ？パーティ
ーのお誘いとかしなきゃいけないし』

その返答しだいにもよるけどスーツとかパーティードレスとか選ん
でもらわなきゃいけないから

勇樹はそのままで大丈夫？』

『ん。背丈も大丈夫だよ。ありがと。それじゃあな。何かあったら俺を起こしてくれ

部屋が変わって眠れないって言うなら話し相手になるし、でもまあ…とりあえず、おやすみ』

勇樹はそう言い踵を返す

『へ！？あ、うん…ちゃ、ちゃんと呼ぶよ？お、おやすみ…また明日ね？』

そして晴香の声を聞いてから自室へと戻っていった。

Pがもたらしたモノ／お嬢様とSP（後書き）

と言う事で、今作のヒロインである東雲晴香ちゃん3話にして登場でございます！！

財閥の令嬢でございます。

何故、ヒロインをお嬢様設定にしたか。
それは、コナンが原因です。

ヒロインは亜樹ちゃん系統が良いなあ
と考えて練っていたら、園子が思い浮かびました。

彼女は元気で友達思い

そして彼氏が最強…（笑）

それと、設定的にも魅力でした。

怪盗キッドにお宝を狙われている時は警察が動いてたので。
勇樹は仕事として彼女と触れ合うことができ、親愛を深めることが可能になる。

そして生活費とかも苦しいけどいざとなった時、使える。

それが詰まったのが東雲晴香です。

そして勇樹は照井同様、天然で女にそれっぽい言葉を吐きます。
今回のセリフがやり過ぎじゃないかと思われそうですしょうが

照井はVシネで出会ったゲストヒロインに「俺が支える」言いまし

たからね

問題ないでしょう！

そして、たこ焼きのお話。

アレは単なる偶然です。ベラベラ書いていたらそうになりました。でも結果上手くいって良かったです。

次回は久々に戦闘です。頑張りたいと思います。

今回、フィリップが出て来てないのは振り切ってください出すの忘れてました。

それでは！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1049v/>

仮面ライダーW/Eの復活 / 二人のA

2011年11月27日00時52分発行